

韓国映画にみる韓国人と韓国社会  
**Koreans and Their Society in Korean Movies**

広島女学院大学大学院 人間生活学研究科 生活文化学専攻

2007 年度 修士論文

石田 裕子

*ISHIDA Yuko*

## 目次

はじめに .....	5
第1章 韓国映画の歴史と規制 .....	7
第1節 韓国の映画法と韓国映画審議制度 .....	7
1. 映画法制定以前の時期 .....	7
2. 映画法 .....	8
3. 映画振興法 .....	10
第2節 韓国映画の歴史 .....	11
第2章 対象作品の概要 .....	19
第1節 対象となる作品 .....	19
第2節 1996年の韓国映画 .....	19
1. 『銀杏のベッド』(1996) カン・ジェギョ .....	20
2. 『パク・ポンゴンの家出事件』(1996) キム・テギョン .....	22
3. 『ボーン・トゥ・キル』(1996) チャン・ヒョンス .....	24
第3節 1997年の韓国映画 .....	26
1. 『ゴースト・ママ』(1996) ハン・ジスン .....	26
2. 『オルガミ〜畏〜』(1997) キム・ソンホン .....	28
3. 『敗者復活戦』(1997) イ・グァンフン .....	30
第4節 1998年の韓国映画 .....	31
1. 『八月のクリスマス』(1998) ホ・ジノ .....	32
2. 『情事』(1998) イ・ジェヨン .....	33
3. 『チム〜あこがれの人〜』(1998) ハン・ジスン .....	35
4. 『男の香り』(1998) チャン・ヒョンス .....	37
5. 『陽が西から昇ったら』(1998) イ・ウン .....	38
第5節 1999年の韓国映画 .....	40
1. 『ハッピーエンド』(1999) チョン・ジウ .....	40
2. 『愛のゴースト』(1999) イ・グァンフン .....	42
3. 『我が心のオルガン』(1999) イ・ヨンジェ .....	43

第6節	2000年の韓国映画	44
1.	『リメンバー・ミー』(2000) キム・ジョングオン	45
2.	『LISE/嘘』(2000) チャン・ソヌ	46
3.	『イルマーレ』(2000) イ・ヒョンスン	48
4.	『寵愛』(2000) ヨ・ギュンドン	50
5.	『Interview』(2000) ピョン・ヒョク	51
第7節	2001年の韓国映画	53
1.	『猟奇的な彼女』(2001) クァク・ジェヨン	53
2.	『花嫁はギャングスター』(2001) チョ・ジンギユ	56
3.	『バンジージャンプする』(2001) キム・デスン	58
4.	『ラスト・プレゼント』(2001) オ・ギファン	60
第8節	2002年の韓国映画	61
1.	『大変な結婚』(2002) チョン・フンスン	62
2.	『セックス・イズ・ゼロ』(2002) ユン・ジェギユン	63
3.	『永遠の片想い』(2002) イ・ハン	65
4.	『オアシス』(2002) イ・チャンドン	67
第9節	2003年の韓国映画	68
1.	『同じ年の家庭教師』(2003) キム・ギョンヒョン	69
2.	『スキャンダル』(2003) イ・ジェヨン	70
3.	『シングلز』(2003) クォン・チリン	71
4.	『君に捧げる初恋』(2003) オ・ジョンノク	73
5.	『浮気な家族』(2003) イム・サンス	74
第10節	2004年の韓国映画	75
1.	『マイ・リトル・ブライド』(2004) キム・ホジュン	76
2.	『私の頭の中の消しゴム』(2004) イ・ジェハン	77
3.	『僕の彼女を紹介します』(2004) クァク・ジェヨン	79
4.	『オオカミの誘惑』(2004) キム・テギユン	81
第11節	2005年の韓国映画	83
1.	『家門の危機』(2005) チョン・ヨンギ	83
2.	『ユア・マイ・サンシャイン』(2005) パク・チンピョ	85

3. 『ダンサーの純情』(2005) パク・ヨンフン .....	86
第3章 映画に描かれる人間関係と価値観 .....	88
第1節 メロドラマ映画・ラブコメディの嗜好 .....	88
1. ストーリー .....	88
2. 好みの条件 .....	100
第2節 恋愛における男女逆転 .....	106
1. 相手の条件 .....	106
2. 男性の「弱さ」と女性の強さ .....	116
3. 女性の弱さ .....	124
第3節 家と結婚 .....	142
1. お見合い .....	148
2. 結婚生活と夫婦 .....	149
3. 「家」での人間関係 .....	156
4. 家よりも恋 .....	160
第4節 タブーと社会 .....	185
1. 表現と規制 .....	185
2. 社会の「タブー」と映画 .....	188
おわりに .....	197
注 .....	203
図表リスト .....	216
参考文献 .....	218

## はじめに

これまでの日本における韓国研究は、「過去の日韓関係を過度に悲観・批判する態度、およびその反動とも思える日韓特別親密論というものは、いずれも、歴史に対する正当な評価と世界史レベルで両国を見ようとする態度を欠如していると言わざるを得ない」<sup>1</sup>との指摘の通り、戦前は植民地支配に奉仕する研究、戦後は植民地支配に関する視角からの研究が中心に置かれ、その他にも様々な文化研究が行われてきた。

韓国の大衆文化の中で、映画は大きな意味を持つようになってきた。韓国のメロドラマ映画について、数は少ないがいくつかの研究がある。キム・チソク「韓国映画におけるメロドラマの過去と現在」<sup>2</sup>においては、メロドラマ映画の流れの整理とメロドラマ映画の分類がされている。その中で、「メロドラマ映画構成の背景には、女性を服従させる家族制度、父権制度、忠実さ、親を敬うことを強いる全体主義が存在する。儒教的家族制度によって、女性に不幸が集中し、息子に対する優遇がみられる」とし、「陰陽の原理によって、女性に対する男性の優越性が言われ、女性の服従や自己犠牲を要求している」と指摘されている。

その他のメロドラマ映画研究<sup>3</sup>は、そのほとんどがフェミニズムの観点によっている。また、そこでは「女性は抑圧された弱い存在である」「母は弱いもの、虐げられる存在」などの女性像や「女性解放」の問題が多く取り上げられている。これらの見方においては、メロドラマ映画の中に存在すると考えられる、文化の姿は一面的である。

本論で取り上げる映画は、1996年から2005年までの10年間で、興行成績15位以内に入った韓国映画の内、恋愛や結婚を中心に描くメロドラマ映画やラブコメディなどである。これらの条件と、更に入手不可能であったものも存在するため、各年の映画本数にはばらつきがある。また、入手可能であったもののみを対象としているため、対象作品限りの分析である。

この期間は、1995年に映画振興法が制定された後、検閲、事前審議制が廃止されていき、『シュリ』（1999）をきっかけとした韓国型ブロックバスター映画<sup>4</sup>が生まれるなど、韓国映画界が大きく変化した。また政治的には、民主化後10年が経ち、IMF危機を経験し、南北首脳会談が行われるなど、韓国社会の変化も大きな期間であった。

対象となる映画は、戦争、南北分断、ヒューマンドラマ、家族愛を中心とした映画以外である。何か特定のテーマに偏ったものよりも、恋愛が中心テーマになっている作品は、観客がより娯楽として楽しみやすく、興行的にヒットを狙いやすい。メロドラマやラブコ

メディアを対象とすることは、韓国人が意識していない文化的特徴を捉えるためのきっかけになると考える。

本論では、上記の対象作品となる 39 作品の韓国映画を統計データや新聞記事などの現状と合わせて分析し、韓国映画の中に描かれる、韓国人や韓国社会の文化について、映画を通じて考えることを目的とする。

韓国のメロドラマ映画は、韓国人が自ら「韓国のメロドラマ映画はいつでも主流中の主流であり、代表ジャンルであった」とするほど、韓国で最もポピュラーで、ヒットするジャンルとされてきた<sup>5</sup>。

メロドラマとは、ギリシャ語の「音楽=melo」に、「筋書き=drama」を語源とする。この形式は、17 世紀イタリアで歌芝居として始まった舞台劇の一種であり、18 世紀フランスでは、伴奏音楽やマイムを伴ったモノローグのドラマがメロドラマと呼ばれた。メロドラマは歴史的に確かな一貫性を持たず、その形式もジャンル横断的である。

19 世紀ヨーロッパでは、通俗的な舞台演劇として幅広い階層の観客に人気を博した。フランスのブルヴァール演劇、ロンドンのコヴェント・ガーデン、アメリカではブロードウェイなど、各地にメロドラマ専門の劇場が作られている。ただしドイツでは、市民悲劇や運命劇などのジャンルが流布していたため、メロドラマという名称は定着しなかった。また、いわゆるメロドラマ的なモチーフは、高尚な演劇作品やオペラ、そしてゴシック小説など様々なジャンルにわたっている<sup>6</sup>。

第 1 章では、韓国映画と映画に対する規制についての歴史と現状を追い、これまでの韓国映画と現在の状況を把握する。第 2 章では、対象となる映画の内容を概説し、各作品の傾向について把握する。

第 3 章では、第 2 章の分析を基に、統計データや新聞記事などを用いて韓国社会の現状と文化的特徴を考察する。第 1 節では、対象作品のストーリーと内容に対する韓国人の嗜好について考察する。第 2 節では、相手の理想や恋愛における男女がどのように表現されているか考察する。第 3 節では、結婚と家庭の関係性について分析する。第 4 節では、社会のタブーと映画の表現について考察する。

なお、本文中で初出の映画については、『映画邦題（原題／邦題と異なる場合に訳）』（公開年、監督）と表記し、それ以後は『映画邦題』（公開年）とする。また、韓国語の論文、新聞記事、著書などは、特に記さない限り筆者が日本語訳を行っている。

## 第1章 韓国映画の歴史と規制<sup>7</sup>

### 第1節 韓国の映画法と韓国映画審議制度

#### 1. 映画法制定以前の時期

韓国に映画が初めて導入されたのは、大韓帝国末期であった。初期の映画に対して政府は、思想に対する統制手段というよりも、薄暗い場所に多くの人が集まるという点から、一般警察活動（火災予防、盗難防止など）として対応していた。

その後、韓国で映画が本格的に制作され始めたが、1910年代韓国が日本に植民地化されたため、初めて映画に対する思想的統制が現れた。興行及び興行場取締規則（1922）を改定し、活動写真フィルム検閲規則（1926）が制定され、事前検閲形式の統制が始まった。この当時の検閲基準は、主に民族主義的色彩や政治的内容に対してのものだった。

それ以降、第2次世界大戦が激化し、日本は戦争を遂行するための宣伝媒体と同時に、思想統制の道具として映画を認識するようになった。映画に対する検閲が強化され、このような目的のために朝鮮映画令（1940）が制定された。朝鮮映画令が定めた検閲基準は「皇室の尊厳を冒瀆することや、帝国の威信を損傷する憂慮」などとして、戦争遂行の目的に障害となる映画や、戦争対象国（アメリカなど）を美化する映画が主な検閲対象だった。

1945年の終戦と同時に、それまで韓国映画を規制してきた朝鮮総督府の朝鮮映画令は廃止されるが、引き続き米軍の司令部による映画統制が行われた。1948年に大韓民国政府が樹立され、公演物検閲細則（1948）が制定されたことで、映画規制が韓国政府により行われるようになった。映画は、新政国家のイデオロギー広報手段として認識された。戦争などの社会混乱で、1950年中ごろまでは、映画制作活動は停滞していた。

その後、イ・スンマン政府の映画育成策によって制作本数が急激に増え、映画会社が乱立するようになった。政府は、国産映画に対して入場税を免除する措置により韓国映画の制作を助け、国産映画優秀制作会社に映画輸入権を委ね、映画制作の活性化を図った。政府は、1950年代に様々な映画政策を実施し、量的な発展をもたらしたが、質的な面を向上することはできなかった。朝鮮戦争以後、自由民主主義を守るという名目で、イデオロギー的に映画を統制したためである。

1960年の4.19革命以後、韓国最初の民間自立機構である、映画倫理委員会が組織された。しかし、1961年5.16軍事クーデターが起これ、本格的活動を始める前に、わずか9ヶ月で解散となった。パク・チョンヒ政権が成立した後、軍事政権の強力な統治を背景に、各種国家体系が整備され始めた。

## 2. 映画法

1962年に乱立していた映画会社を統合し、映画企業を育成するという目的で、映画に対する最初の基本法である映画法が制定された。この映画法により、1950年代の後半には71社あった映画会社が、16社に統合された。映画業登録制、映画制作申告制、合作映画制作に対する許可制、輸入・輸出に対する推薦制、映画上映の許可制、文化映画同時制作制、上映停止処分などが盛り込まれている。

また、この映画法は映画産業の育成発展を推進し、映画文化の質的向上を図るために新規制定された。しかし、国産映画の育成というよりは規制に重点が置かれ、映画は主に反共イデオロギーを念頭においた、国民の思想統制手段、政権の維持と公報手段としてとして使用され始めた。

1963年に行われた1次改定は、映画制作会社の施設を制定化する一方、登録取り消しに対する規制を新設し、輸入クォータ制と優秀映画補償制度を実施するという内容であった。輸入クォータ制度は、韓国映画と外国映画の上映本数を3対1に制限すると共に、各映画会社の国産映画制作本数と優秀映画の制作に対して、外国映画輸入枠を割り当てる制度である。この制度下での優秀映画とは、国策に迎合する映画であった。そのため、各映画会社は利権が大きい外国映画クォータ獲得のために、映画を粗製濫造しつつ、国産映画を競って制作するという風潮に拍車がかかった。

1966年の2次改定で映画法は、映画制作会社の登録に必要な施設条件を緩和した。登録取り消しに関する規定も、年間劇映画制作本数15本以上としていたものが、2本以上に緩和された。

しかし、1962年12月26日改定された憲法によって、効果の直接性などを理由に映画に対する検閲を認証したことで、公報部長官の制作前申告制と事前検閲制が採択された。また、シナリオに対する事前検閲制を新設し、二重検閲体制を敷いた。これに応じない場合、制作中止命令を出すことができるようにした。映画法は、検閲に関する一般的基準を法律に初めて規定した。

1970年に3次改定が行われた。その主要内容は、国産映画の輸出および外国映画の輸入をしようとするものは、文化広報部に登録するようにし、その条件として年間5本以上の映画制作実績が必要であるとした。

1972年に維新憲法を制定すると、政治体制の強化策を断行した。映画統制の面では、映画法改正を行い、映画会社を登録制から許可制に変えると共に、映画会社の第2次改編を



行った。この直後、映画産業の不況が重なった。

1973年に行われた4次改定では、映画制作業に対する許可基準が厳しくなり、検閲基準も強化された。維新憲法により、映画ばかりでなく言論、出版など全般的な文化・芸術活動を規制し始めた。4次映画法改定後、政府は毎年始めに映画施策を公表して映画業界を取り締まった。外国映画は、理念の達成する助けになるものを輸入せねばならず、国産映画の輸出は、民族文化の優秀性と韓国を宣伝するもののみが選ばれた。

その後、1975年12月31日公演法が改定され、公演倫理委員会が新設された。公演倫理委員会は民間機構の形式をとったが、実質的には文化部の指揮・監督と支援を受け運営された。国民総和と国家安保阻害要因の排除、社会秩序を乱し、退廃風潮を作り出す内容の排除、暴力映画の規制など、曖昧な検閲の基準により、映画内容を政府の意図どおりに厳しく規制した。この時期から、検閲を通った劇映画の場合、フィルム最初に「検閲済み」の字幕が入るようになり、この字幕がなければ上映が不可能になった。完成した映画のみでなく、映画化するシナリオも制作申告前に韓国芸術文化倫理委員会の審議を経ねばならなかった。公演倫理委員会の創設は、本格的政府主導の検閲を意味した。

1970年代半ば頃からは、映画産業の質的向上を目指すという目的から、優秀映画制度が設けられる。優秀映画を制作した映画会社には、外国映画輸入権を与えた。しかし、当時の優秀映画とは、政府の政策方向にあった映画でなければならず、映画制作会社は反共映画や理念にかなう制作映画を作らねばならなかった。

政府は映画施策を通じて、国産映画を奨励するという意味で、映画制作会社に国産映画の制作本数を義務化した。毎年制作本数が決められたが、1977年に制定された映画施策では、劇映画会社は上・下半期に分けて、各4本以上の劇映画を制作し、検閲に合格しなければならないとした。義務本数を履行できない映画制作会社は、優秀映画審査対象から除外され、政府からのいかなる支援も受けられなかった。義務本数を埋めるために、当時制作された映画の中には完成度が低く、映画館で上映されない映画も多かった。

パク・チョンヒ政権の映画施策による映画規制政策は、1980年に誕生したチョン・ドゥファン政権以後も続いた。1982年の映画施策では、反共産主義映画への支援として、映画振興公社を通じての反共映画シナリオの公募や、専門作家養成などの反共映画振興策を実施した。そればかりではなく、反共映画と啓蒙映画（宣伝映画）の比重を高めるため、毎年実施される韓国映画のアカデミー賞と言われる、大鍾賞の最優秀作品賞を啓蒙部門、文芸部門、反共部門に分けて授賞した。1980年代半ばまでは、大鍾賞受賞作にも優秀映画に

与えられている外国映画輸入権が保障されたため、反共映画や啓蒙映画が数多く制作された。

チョン・ドゥファン政権によって憲法改定が行われ、検閲制は禁止された。それに続いて映画法の5次改定は、1984年12月31日行われた。5次改定の内容は、映画制作と輸入業を自由化、検閲制を廃止し、事前審議制を確立であった。従来は許可制であった映画会社の設立が、5次改定以後は登録さえすれば会社設立が可能になった。また、独立映画制作制度も導入され、映画制作の自由化が図られた。植民地時代から続いた映画検閲制度は、公演倫理委員会の映画事前審議制度に変化した。

しかし、憲法上の検閲禁止原則を反映しただけであり、映画に対する審議の主体や基準、手続きなど内容は従来の検閲制の内容とほとんど同一であった。この当時は、反共イデオロギーに反対する映画や、その他政権の維持に障害となる映画の制作と上映は、意欲さえ見せられない状況であった。反面、社会に民主化の雰囲気と性開放の風潮を反映し、一部の成人映画上映が許可され始めたが、成人映画は社会的論争を引き起こし、司法当局は、周期的な淫乱物取締を行った。

1986年の6次改定を通じて、韓国の映画業界は国内外に完全に開放されることになった。1987年6月、民主化運動から始まった民主化への欲求は映画にも反映され、社会性のある映画が登場し始めた。しかし、このような映画は政府の強力な統制を受けた。

### 3. 映画振興法

従来の映画法に代わり、1995年に映画振興法が新しく制定された。映画振興法は、公演倫理委員会の事前審議制を規定していたが、その内容は、以前の映画法の事前審議制とほとんど同一内容であった。しかし、大統領令が規定する短編映画(フィルムの規格に関係なく上映時間が40分を超えない映画)、小型映画(16mm以下のフィルムで制作した映画)及び映画祭で上映された映画に対しては、審議を免除するという規定が新設された。

公演倫理委員会の事前審議制は、1996年宣告された憲法裁判所の違憲判決によって、画期的変化をもたらした。憲法裁判所判決の要旨は、「公演倫理委員会は行政機関であり、公演倫理委員会による事前審議は憲法が禁止する事前検閲に該当し、憲法に違反する」というものであった。

憲法裁判所の違憲判決によって、政府は映画振興法を改定し、上映等級制を導入した。また、等級審査機関を韓国公演芸術振興協議会に改定し、突然の等級制度の導入による副

作用をなくすためという理由で、6ヶ月以内は等級決定を保留できる等級保留制を新設した。しかし、等級制度は未公開作にしか適用されなかった。結局、1999年に憲法裁判所は、「韓国公演芸術振興協議会も行政権によって、審議機関の構成に持続的影響を与えることができ、行政権が主体になる検閲手続きを形成している点で、憲法が禁止している検閲機関に該当し、憲法に違反する」とした。

このような憲法裁判所の違憲決定の前である1999年、政府は映画振興法を全面改定し、映画振興公社を廃止した。さらに映画振興委員会新設し、韓国映画産業を総合的に管理するようになった。等級審査機関は、韓国公演芸術振興協議会から映像物等級委員会に変更された。また、等級保留の期間を3ヶ月に縮小し、映像物等級委員会の決定に不服の場合は30日以内に再審を請求できるようにした。

しかし、映画振興法の規定は、2001年宣告された憲法裁判所違憲判決によって、再度変更されることになる。憲法裁判所の違憲判決の要旨は、映像物等級委員会も行政部の指揮と支援を受ける検閲機関に該当するとし、等級保留制は回数の制限がなく実質的には保留となった映画の上映が無制限に禁止されるとして、憲法が禁止する検閲に該当するとしていた。この判決により、2002年1月26日、改定された映画振興法は、等級保留制を廃止した。代わりに制限上映可規定を新設し、これを上映することができる制限上映館に対する根拠規定を新設した。

## 第2節 韓国映画の歴史

韓国における本格的な映画制作は、1923年が初めてとされている<sup>8</sup>。最初の完全な劇映画『月下の誓い（ ）』が制作された。ユン・ペクナムが朝鮮総督府通信局の依頼によって作った、貯蓄キャンペーンのための啓蒙映画である。

韓国映画史において、第1の黄金時代とされているのは、1920年代後半から1930年代初頭にかけての時期である。きっかけとなる作品は、ナ・ウンギュの『アリラン（ ）』（1926）である。『アリラン』（1926）は、朝鮮総督府の厳しい検閲をすり抜け、植民地支配下での抗日民族抵抗精神をテーマとした内容により、民衆に大きな衝撃を与え、大ヒットにつながった。この時期は、制作本数こそ少なかったものの、日本の植民地支配に抵抗する民族主義的色彩の強い作品が生み出された。

1920年代末から1930年代にかけて、日本の植民地支配はいっそう過酷さを増していった。そのため、映画界の人材が海外に流出し、映画界は荒廃した。国内に残った映画人は、

日本の弾圧を受けながらも活動を続けたが、厳しい検閲にあっていた。

韓国映画界に初めてトーキーが登場したのは、イ・ミョンウが制作した『春香伝( )』(1935)である。これを契機として、ホン・ゲミョンの『アラン岬( )』(1935)、『薔花紅蓮伝( )』(1936)、アン・ソギョンの『沈清伝( )』(1937)、ナ・ウンギユの『五夢女( )』(1937)、イ・ギュファンの『旅路( )』(1937)などの映画が発表され、関心を集めた。

1930年代も、日本による植民地支配が厳しく、取締りや検閲がさらに強化された。朝鮮総督府の圧力は、映画制作を許可制に変え、植民地の宣伝文化映画上映が義務化され、さらに欧米映画輸入も許可制となった。このような状況下で、1930年代前半までの映画とは異なり、民族啓蒙主義を主題とした映画の制作が主流を成した。

1940年代に入ると、映画界は完全に日本の支配下となる。日本は朝鮮映画令を制定し、映画を戦争の宣伝手段として利用しようとした。映画会社は朝鮮総督府の許可制となったが、新しく朝鮮総督府が設立した会社以外をすべて閉鎖した。これにより、権力に迎合した映画の制作環境を助成し、皇国臣民化運動と志願兵制度を賞賛する、宣伝映画のみ作られるようになった。

1945年の終戦時期に際立った作品は、植民地支配からの解放と、愛国心を高めるものであった。終戦直後、最初に登場したチェ・インギユの『自由万歳( )』(1946)は、独立闘争の地下運動を描き、人気を得た。この時期の代表作として、ユン・ボンチュンの『3.1革命期(3・1 )』(1947)、イ・ギュファンの『民族の夜明け( )』(1947)、チョン・チャングンの『解放されたわが故郷( )』(1947)、チェ・インギユの『独立前夜( )』(1949)などが挙げられる。

政府樹立と共に、映画界も落ち着きを取り戻し、芸術性を重んじた傾向の映画へと移った。イ・ギュファンの『かもめ( )』(1948)、ユン・ヨンギユの『心の故郷( )』(1949)、チェ・インギユの『波市( )』(1949)など、情緒と生活のリアリティーや芸術性をもつ作品が生み出された。

この時期の映画は、制作機材や施設の不備、技術不足などで、当初期待したとおりの成果を得られなかった。大部分の作品が10mmの無声であったのもこのためである。しかし、このような状況の中でも、ホン・ソングの『女性日記( )』(1949)のような最初のカラー映画が試みられた。

1950年に朝鮮戦争が起こり、終戦を迎えて本格的に動き出そうとしていた映画界にとっ

て、損失をもたらした。3年間続いた戦争の結果、韓国映画の草創期から解放後までに制作された映画のほとんどが焼失、または紛失した。朝鮮戦争を前後して反共映画が生まれた。この時期に出たハン・ヒョンモの『城壁を乗り越えて（ ）』（1949）は、初めての反共映画である。また、戦乱に巻き込まれながらも、従軍ドキュメンタリー、または広報用文化映画など、記録映画は盛んに制作された。映画人達は、避難地の釜山や大邱などの地で従軍ドキュメンタリーなどを制作した。

戦況が落ち着いた1952年になると、芸術性や娯楽性の高い作品も出始め、シン・サンオクはデビュー作『悪夜（ ）』（1952）を発表した。この作品は、戦争を経験した洋公主（欧米人相手の娼婦を皮肉った言葉）を描き、リアリズムの技法で社会の断面を浮かび上がらせた。

朝鮮戦争が休戦した後、1950年代中盤になると、韓国映画界はいくつかの発展を遂げた。まず、1955年の国産映画に対する免税措置が挙げられる。このような変化の中で、イ・ギョファンの『春香伝（ ）』（1955）が10万人の観客を動員し、発展の基盤を作った。

この頃には、イ・ビョンイルの風刺劇『嫁入りの日（ ）』（1956）、チョン・チャングの伝統史劇『端宗哀史（ ）』（1956）、キム・ソンミンの『マンナニ悲史（ ）』（1956）、イ・ガンチョンによって極限状態におかれたパルチザンとヒューマニティを描いた『ピアゴル（ ）』（1955）と口のきけない女性の切ない愛を描いた『アダダ（ ）』（1957）などが作られた。

また、韓国映画史上で、1950年代後半から1960年代前半にかけては『自由夫人（ ）』（1956）を始めとした、メロドラマの全盛期だった。『自由夫人』（1956）は、当時の自由な風潮の中で贅沢と虚栄、密輸品と異性の誘惑に負けて家庭を破綻させてしまうことを描いている。この作品は、伝統的な家庭倫理の危機を描いて、興行的成功を収めた<sup>9</sup>。

1950年代後半のメロドラマは、史劇映画と共に興行的なブームとなった。メロドラマは、戦後社会の恋愛や結婚に対する新しい風潮、社会的挫折と成功などの社会相、個人・家庭・世代間・古いものと新しいものとの亀裂と葛藤を描いた。

1950年代から1960年代には、史劇映画やメロドラマだけではなく、芸術性の高い作品または問題作も多く作られた。重要な映画作家としてユ・ヒョンモク、キム・ギヨン、シン・サンオクの三人があげられる。

ユ・ヒョンモクは、苦痛と不条理に満ちた現実を前において、人間存在と両親の立場を

表現した。キム・ギョンは人間の本性・エゴイズムを通して人間存在や文明社会の赤裸々な姿を描き出し、個人的・集団的な人間の本能、権力の狂信、歴史的な風習に見られる暴虐を過酷なまでに描いた。シン・サンオクは、儒教の国－韓国の家族制度における倫理的規範を、美しい映像で批判的に描いた。

植民地時代の武断統治の圧迫から、解放後の朝鮮戦争に至るまで、韓国映画は、笑いよりも涙の美学を追及してきた。しかし、1950年代以後から社会的背景の変化に伴って、断続的にはあるが喜劇が制作されるようになった<sup>10</sup>。

1960年の秋夕(チュソク・旧暦の盆連休)商戦を狙い、ホン・ソングの『春香伝( )』とシン・サンオクの『成春香( )』が競争を繰り広げた。結果、『成春香』(1960)が72日間の上映で40余万人の観客を動員した。また、1960年代に入ると、喜劇映画は棘のない庶民生活を描く喜劇から、痛烈な社会風刺の色彩を帯びたものになっていった。

1960年の4.19革命の結果として現れたのが、民間の「映倫」であった。これまでの検閲に比べると大幅に自由化され、特に戦後の暗い現実を描写するリアリズム映画が作られるようになった。しかし、翌年1961年5月16日に軍事クーデターがおきたため、多くの映画に定着させることはできなかった<sup>11</sup>。

軍事政権樹立後、検閲と規制が強まり、社会の不条理や政治暴力の生態を描いた嫌疑、反共法違反嫌疑、猥褻・淫画製造嫌疑などにより、映画監督が次々と逮捕された。ユ・ヒョンモクの『誤発弾( )』(1961)は、内容が暗いという理由で上映が中断される事態に直面した。

1955年から1965年頃まで韓国映画は勢いよく成長してきたが、芸術的作品は減少し、活劇物・反共物・軍事物・探偵物が大量に制作されるという現象を招いた。

しかし、その中でもシン・サンオクは『離れの客とお母さん( )』(1961)によって耽美主義、キム・ギョンは『高麗葬( )』(1963)を通じてサディズム、イ・マニとキム・スヨンと徹底した映像美と詩的感受性を表現した。

1950年代のテーマは、軽い時代風潮・贅沢・流行・家庭倫理の危機などであったが、5.16クーデター後の社会に対する弾圧、儉約・節約を促す風潮の中で大きく変貌した。1960年代に現れたホームドラマと青春映画は、1950年代後半期の自由奔放な恋愛中心主義のメロドラマとは違い、家庭の垣根を守るという倫理観に根ざしたものであった。

一般的に、韓国は儒教的な家父長制度の国として、父親の権利が強い傾向があるとされている。当時の一連のホームドラマは、家族のために一生涯苦勞してきた父親のことを家

族がやっと理解し、その労をねぎらうという庶民的な人情を描いているのが特徴である。民主的な家族会議の場面などでは、権威の権化としての父親ということは強調されず、理解と同情の対象になるというシチュエーションの変化が見られるようになった<sup>12</sup>。

1970年代の韓国映画は、産業的な面で衰退した。原因として、主に2点を上げることができる。まず1つは、テレビの普及である。1972年から1973年頃、テレビの普及台数は100万台を超えた。テレビは、スポーツや演芸物・ショーばかりでなく、映画の売り物だったメロドラマ・ホームドラマ・歴史劇をシリーズで放映したため、映画は一気に人気を失った。テレビ以外にも、スポーツ・観光旅行・各種の大衆レジャー産業が拡大し、映画観客は一層減少した。映画が大衆娯楽の王座を占めた時代は、1960年代末までであった。

もう1つの原因は、映画そのもののあり方にもあった。統制政策により、1970年代の韓国映画は本来の芸術的な魅力を失った。その結果、1970年代の映画は、政策的映画と興業的映画の2つの傾向に分けられるようになった。政策的映画は、政策推進を目的とした映画であり、社会啓蒙映画・国策的な広報映画・反共映画・文芸映画などである。

また、1970年代に流行したのは、主に暴力・スパイ・武術活動や喜劇などである。これらは流行言葉など奇抜で風俗的な流行現象を取り入れ、揶揄的に社会を風刺したものであった。このような喜劇は観客に絶大な支持を受けたが、政策的に規制され、たびたび上映を禁止された。

この時に台頭したのは、「ホステス物」である。ホステス物というのは、主にヒロインの20歳前後の女性が家を飛び出し、バーやカフェなどの夜の職場で働くという映画である。若い女性が自らの心と体をためらいもなく、華麗な都市の日陰に投じる姿を映像化することは、それまでのメロドラマにはなかった。

1970年代後半には、堅苦しく体制化された映画界に抵抗する新人たちも現れた。男女の乱交、同性愛者の葛藤を描いたハ・ギルチョンの『花粉（ ）』（1972）、ホステスが3人の男を渡り歩いた後、不幸な死を選択するイ・チャンホの『（ ）（星たちの故郷）』（1974）、社会に押しつぶされた娼婦が富める者に対して抵抗するという姿を描いたキム・ホソンの『英子の全盛時代（ ）』（1975）などが挙げられる<sup>13</sup>。

1980年にはチョン・ドゥファン大統領が就任した。政治的には多くの問題を抱えていたが、社会・経済・文化の分野においては1970年代とは異なる開放政策がとられた。国内だけでなく、国際的にも開放政策の方向を鮮明に打ち出した。映画政策では、「政府の理念を具現しなければならない」といった言葉を取り除き、「映画芸術の発展」を強調し、映画検

閱を大幅に緩和する態度を示した。

閉鎖的な社会で映画が解放され、韓国では 1980 年代に、性的表現を取り入れた映画が多く作られた。特にメロドラマ映画は、テレビでは見られない大胆な性表現によって、発展した産業社会における個人と家庭の倫理的变化を描いた。これらの映画は、性的なものを直接描写するポルノではなく、時間の余裕ができた妻たちが、夫に対する性的欲求不満を他の男を通して解消するという映画で、価値観の変化を描いた。それに追従した同種の映画が多数作られ、男女の性愛を描いた映画は、大衆の興味に合ったものであった。そのような中、本格的メロドラマの制作や、青春映画も作られた。青春映画は健康な若者を描くことによって、社会の汚染に抵抗するという立場であった。

1980 年代のもう 1 つの特徴として、宗教映画や史劇映画の出現である。以前は宗教史、伝説などを娯楽本位に作ったものであったが、1980 年代は、宗教と社会の問題、宗教的心理、殉教、歴史制度と慣習の矛盾と対立、民衆意識の変容、新しい美意識に焦点を当てている<sup>14</sup>。

映画検閲は、1970 年代に比べ緩和され素材と表現面で変貌を遂げたが、表現や検閲をめぐる事件があった。『都市に行った娘（ ）』（1981、キム・スヨン）上映中止事件（1981 年 10 月）、『比丘尼（ ）』（イム・グォンテク）の制作中止事件（1984 年 4 月）、『空言（ ）』（1986、キム・スヨン）に対する検閲事件（1986 年 8 月）などである。

『都市に行った娘』（1981）の上映中止事件とは、バス案内嬢の乗車料金横領場面や、運転手と案内嬢の情事の描写場面が冒瀆的な表現であるとし、自動車労組が集団行動に出たものである。結果は制作側が譲歩し、上映中の看板を下ろして中止に至った。

『比丘尼』は、全国比丘尼会と仏教宗教団体の反対によって制作中止となる。仏教側は、作品中の比丘尼の性行為などを仏教の神聖さを冒瀆するものだとして抗議し、制作中止仮処分の提訴を行った。一方、映画会社側は『比丘尼』がまだ制作中だという点、女性の生き方を真摯に描く作品であるという点、完成後のプリントで問題になる箇所は修正するという点を明らかにし、芸術創作は憲法上の自由と権利であると主張した。しかし、仏教側は連日特別法会を開き、社会問題に拡大していったのである。

『都市に行った娘』（1981）は、公倫のフィルム検閲を通過したものであり、『比丘尼』もまた、シナリオ審議を通過したものであった。しかし、映画創作の憲法上の権利は守れないまま、一部の社会団体の圧力で上映中止・制作中止ということになった。



1987年に国民直接選挙による投票結果、ノ・テウ大統領が就任した。個人の基本的人権と共に国民の政治的・社会的活動の自由を保障するという民主体制がスタートし、公倫は1988年に改変された。これまで政府や社会に批判的だった学者・批判家・芸術家が迎え入れられ、公倫の体質は変化した。また、従来の審議規定を改正し、審議に関与してきた政府機関の干渉を排除することにした。これまでタブー視されてきた体制批判や人権問題・街頭デモ・社会の不条理を扱った映画が、ノーカットで映画審議を通過するようになった<sup>15</sup>。

1980年代後半から1990年代にかけて、韓国映画産業に影響を与えたのは、ハリウッド映画の直接配給、ビデオ産業の発達、ケーブルテレビの登場（1995）である。1985年には10%に過ぎなかったビデオデッキが、1994年には世帯あたりの保有率が80%（829万台）に増えた。輸入クォータ制が廃止されたことも重なり、映画館で上映された映画よりも、多くの外国映画がビデオとして直接入るようになった。映画社設立が自由になり、韓国映画制作編数は一時的に増えたが、外国映画の優勢に押され、停滞状態となった。しかし、その一方で成人映画を中心としたビデオ映画の制作は活発化した。

1980年代後半、社会批判的意識と表現に対する意識を兼ね備えた新しい映画が登場するようになり、欧米の論壇では「Korean New Wave」と言われた。先駆けとなったのは、パク・グァンスの『チルスとマンス（ ）』（1988）である。

また、チャン・ソヌもその1人である。デビュー作の『成功時代（ ）』（1988）では、資本主義の事物化された関係を風刺した。チョン・ジヨンは『霧は女のように囁く（ ）』（1982）でデビュー以来、メロドラマとミステリーを主流とした作品を撮ってきたが、『南部軍（ ）』（1990）以後、社会性の強い映画で自身の全盛期を迎えた。まだ検閲の慣行が消えていなかった時期に、パルチザンを客観的に描写しようとしたこの作品は、新鮮な衝撃を与えた。

1990年代始めから、映画制作社が企画し、投資者を集めた後、監督と交渉する方法で作品が生産される企画映画が登場し始めた。プロデューサー集団が登場し、映画産業は勘ではなく、調査や統計によって決定されるようになった。彼らは、大衆が好むジャンルをリサーチし、特定ジャンルと一番強力な効果を結びつけるスターの配役を考え、大企業から投資資本を手に入れる。若いスタッフによって既存の制作慣行から抜け出し、各パートが分業して役割を担当する映画産業の現代化が計られた。

ロマンティックコメディ『結婚物語（ ）』（1992、キム・イソク）は、韓国映画界に影響を与えた。当時まで、韓国映画の一番主流であったジャンルはメロドラマであ

り、コメディは長い間低質な娯楽という認識から抜け出せなかった。

この作品は、夫婦の日常を軽快に提示しつつ、結婚、別れ、再婚というロマンティックコメディの中に、これまで成人映画を通して描写されてきた性風俗をプロットの前面に押し出す大胆な感覚を見せつけた。この映画の成功は、大衆の好みに無関心であった韓国映画界が、大衆に合わせた感性を持ったことを証明した。

また、『風の丘を越えて—西便制（ ）』（1993、イム・グォンテク）は、民族的自尊心を引き起こし、社会的シンドロームまで拡散させ、興行的成功を収めた。この映画は、国家と民族を犠牲共同体として、保護が必要な集団としてみる当時の民族性を現し、IMF危機と2000年代以後、加速化されるブロックバスター映画での民族性とは対照的である。また、この映画は韓国映画が集団的過去の記憶を通して、民族性を形成する役割を担う可能性を現した。以後、集団的民族スペクタクルは、国家の危機ごとに、過去という名前の商品として、反復的に流行する商品となった<sup>16</sup>。

1980年代末から1990年代の初めにかけて登場した「Korean New Wave」として期待された監督たちは、期待にそぐわない結果となり、新しい世代が登場し始める。ポストニューウェイブの監督たちは、現実とジャンルの結合に対する複合的な感覚を持つ。1990年代中盤以後、韓国映画界の主流は、過去と比べてより多様なジャンルを革新する能力が要求されている<sup>17</sup>。

## 第2章 対象作品の概要

### 第1節 対象となる作品

この章では、各作品のストーリーの詳細と作品背景について取り上げている。各年代の傾向と、各作品の特徴を把握することを目的とする。はじめに述べたとおり、本論で使用する映画は、1996年から2005年までの10年間で、興行成績15位以内に入った韓国映画である。対象となる映画は、戦争、南北分断、ヒューマンドラマ、家族愛を中心とした映画以外で、恋愛や結婚を中心に描くメロドラマやラブコメディなどである。

対象となる映画は10年間の15位までであるが、上記の条件によって選んでいるため、各年の映画本数にはばらつきがある。条件によって選ばれた作品は、各年で3作品から5作品を対象とし、合計39作品となる。6人の監督が、対象作品のうち2作品を制作しているが、残りの作品は全て違う監督が制作している。また、基本的に日本で発売されている作品を使用しており、韓国で興行成績がよくても日本で未発売のもの、廃盤で入手できないものがあった。

韓国映画に関するデータは各年の『韓国映画年鑑』<sup>18</sup>と韓国映画振興委員会のホームページを参考にしている。作品や監督に関する情報は、DVDジャケット、映画の公式サイトをはじめ、ホームページでは韓国の「Cine21」<sup>19</sup>「Daum映画」<sup>20</sup>「FILM2.0」<sup>21</sup>「Movist」<sup>22</sup>「韓国映画データベース」<sup>23</sup>、日本の「シネマコリア」<sup>24</sup>「輝国山人」<sup>25</sup>を主に参考としている。

### 第2節 1996年の韓国映画

1996年の観客数は、韓国映画が976万人、外国映画が3,240万人と全体で4,200万人ほどであった。外国映画が観客のほとんどを占め、韓国映画の割合は、約23%ほどであった。興行収入も同様であり、韓国映画が455億ウォン、外国映画が1,573億ウォンと全体で2,028億ウォンであり、韓国映画史上初めて2,000億ウォンを突破した。前年の1995年には1,900億ウォンを超えていたが、惜しくも2,000億ウォンの大台には乗らなかった。この時期は、観客数が伸び悩んでいた時期であったが、興行収入は、徐々に伸びつつあった。この年に制作された韓国映画は65本であった。

韓国映画の観客動員数1位は、刑事映画の『トゥー・カップス2( )』、2位は『銀杏のベッド( )』、3位は『つぼみ( /花びら)』であった。

1996年の条件に当てはまる作品は、2位の『銀杏のベッド』、5位の『パク・ボンゴン家

出事件』（            ）、7位の『actress アクトレス～官能のリハーサル（            、リハーサル）』、8位の『ボーン・トゥ・キル（            ）』、9位の『コルセット（            、日本未発売）』、11位の『激しい恋（            、日本未発売）』、15位の『ゴースト・ママ（            ）』である。

7位の『actress アクトレス～官能のリハーサル』は、入手できず未見である。9位の『コルセット』と11位の『激しい恋』は、日本未発売で入手不可能のため、未見である。また、15位の『ゴースト・ママ』は、1997年の7位でもあるため、高い順位である1997年で扱うこととする。

### 1. 『銀杏のベッド』(1996) カン・ジェギユ

『銀杏のベッド』(1996)は、観客動員数2位の作品である。この作品は、1000年前と、現在をつなげる時空を超えた恋愛ストーリーとなっている。監督のカン・ジェギユは、1962年生まれである。1985年に中央大学演劇映画科を卒業した。1984年、チョン・イニョブ監督の演出部で映画界に入る。監督としてデビューするまでに、助監督、シナリオ作家、放送プログラム、CM、文化映画制作、映画輸入会社職員など多様な経験をした。映画監督デビュー前にシナリオ作家としても賞を受賞している。

映画発電所を設立し、代表に就任した後、この会社で中国の女性作家の原案を元に、自らシナリオを執筆したこの作品で監督デビューを果たした。この作品は、第17回(1996)青龍賞新人監督賞を受賞した。1998年に、姜帝圭(カン・ジェギユ)フィルムを設立し、代表に就任する。この会社で作った『シュリ(            )』(1999)は、韓国映画史上記録的な大ヒットとなり、第35回(1999)百想芸術大賞監督賞と、第20回(1999)青龍賞監督賞を受賞した。『ブラザーフッド(            /太極旗を翻して)』(2004)も制作している<sup>26</sup>。

ストーリーは「パパは生前、その女性の肖像画ばかりを描いていました。パパもママも、誰なのか教えてくれませんでした」という主人公の娘の語りから始まる。美術教師でもある画家の男性スヒョンは、恋人で医者ソニョンにプロポーズするが、ソニョンは今の関係が好きだと返事をしない。ここでは、結婚を断る女性が自然に描かれており、結婚しないことに否定的な雰囲気は無い。

最近、スヒョンは夢の中で街をさまよい女性を見かける。スヒョンはカヤグム(韓国式

の琴のような楽器)の音が聞こえてきたので、音のするほうへ向かった。そこは夢に見た場所であり、木製のベッドを見つけ持ち帰った。

スヒョンはミダンという女性の肖像画を描いているが、ミダンが誰なのかわからない。その肖像画に描かれた女性が、スヒョンの前に現れた。しかしミダンが必死に話しかけてもスヒョンには見えない。女性は何とかしてスヒョンに自分の存在を気付かせようとしながら、家に帰るスヒョンについていった。

スヒョンが家に帰ると、ベッドの脇に立っていた男性が追いかけてきた。ミダンはスヒョンをつれて逃げ出した。姿が見えるようになったのは、他人の命を少し借りてきたためである。ミダンは「殺されるから部屋には戻らないで」と言う。

一方、病院では不思議な事件が起こっていた。患者が突然意識を失い、亡くなったと思っていたが生き返ったのだ。ソニョンが患者を診察した際、確かに患者は死亡していたが、一連の診断を行い、問題を起こしたソニョンは、病院から出て行けと言われた。ソニョンは結婚の話を避けてきたが、年をとったのかしらと結婚を考える。ここでは、仕事が上手く行かない女性が結婚したほうがよいと考えることが描かれており、はじめの場面で描かれていた結婚しないという選択が否定されている。

スヒョンは夢で見た街の中で、笛の音が聞こえてきた。音を追いかけると夢に出てきた老人に出会う。老人はミダンやベッドのことについて語り始める。スヒョンのベッドはミダンとチョンムンという2人の叶わぬ愛を嘆いてこの老人の先祖が作ったものである。スヒョンを追ってきた男はファン將軍といいミダンを愛している。

スヒョンの前世は、宮廷音楽師のチョンムンである。ミダンは姫であり、身分の差があったものの2人は恋をした。しかし、ミダンに思いを寄せるファン將軍がミダンを連れ去った。ミダンはファン將軍に一向に心を開かなかった。スヒョンはミダンを助けに行き、2人で逃げることにした。しかし、ミダンは連れ戻され、スヒョンは宮廷から追放されてしまう。隙を見て逃げ出したミダンは、チョンムンの姿を見つけた。2人は再会を喜んだが、一瞬のうちにチョンムンはミダンの目の前で首をはねられた。

その後、2人は2本の銀杏の木として生まれ変わり、1000年間を共に過ごした。しかし、ファン將軍の呪いで、銀杏の木が1本倒された。ベッドは、倒された銀杏の木でできている。スヒョンは家に戻り、どうしたらミダンに会えるのかを考えた。その頃ソニョンは、原因究明に努力を重ねてきたが、会議でくびになることが決定してしまう。

ミダンはファン將軍に追い詰められ、一緒に来いと迫られる。ミダンは、チョンムンに

会わせてくれたらファン將軍の言うとおりにすると約束する。ファン將軍はスヒョンと一緒にいるソニョンに乗り移り、月食の間だけミダンに会わせてやると言う。約束を破れば、この女は死ぬと言ひ残し、ファン將軍は姿を消す。ミダンはチョンムンに会うためにソニョンの命を借りることになる。

それを知ったソニョンは、患者が一瞬のうちに生き返ったことを証明できると考え、病院で月食を待つことを決心する。スヒョンは引き止めるが、ソニョンは「ここまで苦勞してきたのに、こんな事で終わりたくない。私の家は貧乏だから、みんなが予備校に通っている時も、私は家庭教師のアルバイトをしていた。父親が倒れて、妹は大学をあきらめることになった。私はこんなところで死なない。最後の姿を見届けてきて」といい、病院へ出発した。女性が苦勞して職業に就いていることが描かれている。

月食が始まった頃、スヒョンはミダンの姿を見つけた。2人は再開を果たした。やがてミダンは銀杏のベッドの中に消えてしまうが、約束の時間を過ぎてしまった。ファン將軍は怒り、銀杏のベッドのある部屋へ向かった。

ファン將軍はミダンのいる銀杏のベッドを奪おうとするが、部屋に来たソニョンが、ベッドを燃やしてしまう。このままだとミダンは完全に死んでしまうため、ベッドから出てくるように言うがミダンは出てこない。ファン將軍はベッドの中に吸い込まれるように消えて行った。

最後に子供の声で、「父が亡くなった日の夜に母から本当のことを聞いた」「母は『父は行くべきところへ言ったのだ』と話してくれた」と言い、ストーリーは終わる。現世で付き合っていた人と結婚したものの、その後男性は死亡しており、完全なハッピーエンドではない。現世よりも1000年前の最初の恋が大事にされている。

## 2. 『パク・ボンゴンの家出事件』(1996) キム・テギョン

5位の『パク・ボンゴンの家出事件』(1996)は、キム・テギョン監督の作品である。1960年にソウルで生まれた監督は、韓国外国語大学政治外交学科を卒業した。韓国映画アカデミーを修了し、何編かの作品を制作したが、興行で失敗してしまった。この時に得た借金を返すために、映画企画および制作者として活動し始めた。彼はイ・ミョンセ監督の『私の愛、私の花嫁( )』(1990)、カン・ウソク監督の『二十歳までだけでも生きたい( )』(1992)などの作品に関わった後、この作品で監督デビューを果たした。

この映画は、自身の夢を探して暴力的家庭から飛び出したパク・ポンゴンという主婦の自分探しを新鮮でコミカルな視覚で描写し、よい評価を受けた。第1回（1996）釜山国際映画祭オープン・シネマ部門に出品された作品である。

『ファースト・キス（ ）／キスしましょうか』（1998）を演出したが不評に終わり、2001年チャン・ヒョクを主人公とした学園アクション『火山高（ ）』で再起に成功した。2004年に、クィヨニのインターネット原作小説を映画化した『オオカミの誘惑（ ）』を演出した。その他の監督作品として『百万長者の初恋（ ）』（2006）のようなコメディ系長編映画に加え、『暫く立ち止まって（ ）』（1987）、『列並び（ ）』（1999）などの短編映画も撮っている。

小学校で父親の職業を聞かれたクラスの男子ソックは、父親が2人いると言ったため先生に呼び出され、「僕には父が2人いる」と説明し始めた。

ソックの母ポンゴンは、幼い頃から歌が大好きであった。高校生の頃、両親が亡くなり、祖父母の元で育った。大学生の頃出会った同級生の男性ヒジェと付き合い、妊娠し、結婚した。その時の子がソックである。ここでは、結婚前の妊娠が、否定的でもなく、肯定的でもないが自然に描かれている。また、女性の両親は不在であり、家族の不幸が挿入されている。現在ヒジェは、野球チームの監督、ポンゴンは専業主婦をしており、1965年生まれの31歳である。男性が年上ではなく、同い年の夫婦である。

両親が言い争っている時は、母親が黙らないと喧嘩に発展するので、母親はいつも父親の言うとおりにしている。家庭内の言い争いは、子どもの目から見て夫のほうが強いと描かれている。横暴な夫に愛想をつかし、ポンゴンは家出してしまう。夫に愛想をつかしても、いきなり離婚に発展しない。家出した妻が悪いというよりは、夫に非があるという描かれ方をしており、この場合の妻の家出に対しては肯定的である。探すあてがなく、妻からの連絡が来ない日々が続きいらいらしていると、野球チームの選手が探偵Xを紹介してくれた。Xは腕に覚えのある探偵である。

ソックは、Xが気に入ったので、母親の日記を見せることにした。ポンゴンの日記には、両親がいなくて結婚式が寂しいこと、夫を殴ってやりたいと思ったこと、父親が恋しいことなどが綴られていた。同時に自分とプライドを取り戻したいとも書かれていた。

その頃ポンゴンは、夢であった歌手を目指すため、クラブで歌のレッスンを受けていた。Xはソックに言われた店の前で張り込みを続け、ポンゴンを発見した。しかし、夫に報告

せずにしばらく様子をうかがっていた。

ある日、Xはポンゴンが男に絡まれているのを助けた。2人は屋台で語り合い、夫は始めから自分を愛していなかったと思ったこと、夢を思い出したこと、離婚したいのに離婚せずに家出したのは、夫が怖いからということなどを話した。妻にとって夫は恐ろしいと描かれている。離婚したくてもできない、ということが苦労話として話されており、離婚したいとは思っても実際に離婚することには否定的である。

ヒジェは精肉店の女性が気に入り、毎日豚肉を買い続けた。その女性は話せない。父親は女性に告白し、デートをすることになる。無言でのデートは続き、2人で旅行にまで行くことになった。誰も夫の浮気を止めることはなく、普通に描かれている。

Xはポンゴンが気に入ったので同じクラブで働き始め、2人の仲は縮まった。ある日、やくざがクラブに乗り込んできた。ポンゴンとXは店から逃げ出し、車で海へ向かうことにした。結婚している女性に好意を抱くことに対して否定的な雰囲気は無い。また、結婚している女性が男性に好意を抱き始めても、否定的ではない。

一方やくざのボスは、Xに恨みがあったので、殺そうとしていた。やくざが向かったのが2人と同じ海で、2人はやくざに捕まってしまう。やくざたちは近くにいたカップルが邪魔なので捕まえると、そのカップルはポンゴンの夫と精肉店の女性であった。4人が殺されるのも時間の問題になっていた。Xは生きて帰ることができたら結婚しようと言い、ポンゴンとXは車で崖から落とされた。

2人は重傷だが、生きていたので結婚式を挙げている。夫と肉屋の女性は新婚旅行へ旅立ったので、式には欠席している。そういう訳で、ソックは父親が2人いると言うことを先生に説明し終えて、夜の学校から出てきた。妻が家出したことで夫婦がお互いに恋愛し、離婚、再婚の道をたどっているが、全く否定的な要素は無い。離婚、再婚を肯定的に扱った映画であるが、家庭は崩壊しているので結婚がハッピーエンドに結びついていない。

### 3. 『ボーン・トゥ・キル』(1996) チャン・ヒヨンス

8位の『ボーン・トゥ・キル』(1996)は、チャン・ヒヨンス監督の作品である。1959年生まれで、中央大学演劇映画科を経て、韓国映画アカデミー1期を卒業しており、KBSで働いた経験もある。1992年に『歩いて空まで( )』で監督デビューを果たし、この作品で第30回(1991)大鐘賞新人監督賞・編集賞、第29回(1993)百想芸術大賞新人監督賞を受賞した。



その後、『ゲームの法則 ( )』(1994)、『ビールが恋人よりいい 7 つの理由 ( )』、『ボーン・トゥ・キル ( )』(1996)、『男の香り ( )』(1998)、『ライバン ( )』(2001) 等の作品を制作している<sup>27</sup>。

男性主人公のキルは殺し屋である。ある夜、道端で酔っ払いの女性が倒れていたの、その女性の家までつれて帰った。女性の家は、自宅アパートの向かいのビルである。女性はスハといい職業はホステスである。2人は食事をきっかけに仲良く過ごした。

スハの夢は歌手になることであった。以前付き合っていた男に、お金があれば歌手になれるからと言われ金を渡すが、騙されてしまったことがある。ある日、スハを騙した男が再びスハの家にやってきた。男はやり直そうと言うが、スハは拒絶する。スハに腹を立てた男は暴力を振るった。自分の部屋からそれを見ていたキルは、彼女を助けよう部屋へ行き、男を殴りつけた。男は待っていると言いながら帰った。

キルは依頼が入ったため、家を空けることになった。自分が殺し屋だということは話していない。スハにペットの世話を頼み、鍵を預けた。帰宅するとスハはおらず、スハは金を持って逃げていた。自宅でやけ飲みをしていたキルは、ふと昔、母親が自分と無理心中をしようとしたが、自分は逃げ出したことを思い出した。

一方、クラブで歌手をしていたスハは、お客を殴ってしまい、クビになる。キルはスハを助け、2人で暮らすようになった。

ある日、2人の部屋にやくざが現れる。やくざは、「女は男をだめにする、殺し屋をやめるなどというような、変な気は起こすな」とキルに言い去っていく。殺し屋という事実を知ったスハは出て行こうとする。キルはスハに愛していると言った。

やくざはスハを誘拐し、キルを呼び出した。キルは暴行を受けるが助かる。スハは「あなたは優しすぎるからこのような仕事は似合わない」という。2人でやくざから逃げようと列車に乗ったが、キルは出発前の列車から降りた。キルは窓の外から「自分のことは忘れてくれ」とスハに言い、列車は出発してしまう。

キルはボスに拾われて育てられた。ボスはキルに普通の人として生きてほしいと思っていたが、組の乗っ取りを企むボスの部下に騙され、殺し屋になってしまったのだ。ボスの首を狙う部下が、ボスを襲撃している所へ行き、ボスを守るために戦うキルであったが、ボスはやられてしまう。キルも刺され、意識はだんだん遠のいた。スハはキルと別れたホームで、キルが現れるのではないかと待っている。

### 第3節 1997年の韓国映画

1997年の観客数は、韓国映画が1,212万人、外国映画が3,540万人と全体で4,752万人ほどであった。前年と同様に、外国映画割合が高くなっており、全体に対する韓国映画の割合は25.5%となっている。興行収入は、韓国映画が600億ウォン、外国映画が1,784億ウォン計2,384億ウォンであった。前年に引き続き、外国映画が圧倒的な市場を抱えている。しかし、韓国映画の観客数、興行収入が共に増加しており、1996年から順調に韓国映画市場が成長していることがうかがえる。

韓国映画の興行成績1位はインターネットの恋を描いたラブストーリーの『接続( )』であり、2位は『手紙( )』、3位は『娼( 、日本未発売)』である。

その中で、1位『接続』、2位『手紙』、3位『娼』、7位『ゴースト・ママ』、11位『ミスター・コンドーム( 、日本未発売)』、12位『オルガミ〜罨〜(ガ )』、15位『敗者復活戦( )』が条件に当てはまる。1位『接続』、2位『手紙』、3位『娼』、11位『ミスター・コンドーム』は、入手できなかったため未見である。

#### 1. 『ゴースト・ママ』(1996)ハン・ジスン

1997年の7位『ゴースト・ママ』は、1996年の15位でもあり、ハン・ジスン監督の作品である。ハン・ジスン監督は、1967年生まれで漢陽大学演劇映画科を卒業し、1987年『われらの歪んだ英雄( )』(パク・ジョンウォ、1992)の演出部で映画界に入門した。映画社(黄奇性事団)の作家として活動しながら、『偶然の旅行( )』(1994、キム・ジョンジン)のシナリオ、『ネオンの中に陽が沈む( )』(1995、イ・ヒョンスン)のシナリオと助監督を担当した。その他、『おもしろい映画( )』(2002)、『彼女を信じないでください( )』(2004)の制作などにもかかわっている。

監督デビュー作は、この作品であり、監督自ら脚本を書き、演出した映画である。その他の作品に、『チム〜あこがれの人〜( )』(1998)、『エンジェル・スノー( /一日)』(2000)、『けんか( )』(2007)がある。

夫チソクと妻インジュは仲睦まじい夫婦である。息子が生まれ、充実した生活を送っている。ある時、チソクが会議の資料を家に忘れたので、インジュが持っていくことになった。助手席に息子を乗せて、運転しながらあやしていたが、反対車線の車と激突してしま

う。息子は軽いけがで済んだが、インジュは事故死してしまう。

妻の死亡事故から1年後、チソクは息子と2人で暮らしていた。妻の母親は、チソクが落ち着くまでは私がダビンを育てようか、男手ひとつで育てるのは子供のためにならないし、と息子を引き取ることを提案してくれたが、チソクはその申し出を断る。母親は自分が娘を失った喪失感から孫を育てたいと思っているとも考えられるが、男性の育児に対して周囲が否定している様子が描かれている。

インジュのことで思いつめたチソクは、自殺をしようとするが失敗する。そこへ幽霊のインジュが現れた。インジュはチソクだけに見え、触ることができる。

ある日、インジュは息子を見に行こうと帰ってくる幼稚園バスを見ていた。すると、息子を迎えに来た女性がいた。彼女はチソクの同僚でウンスクという。彼女は時々、ダビンを迎えに行ったりご飯を作ったりと、色々世話をしてくれるようだ。インジュはウンスクを観察しながら、「チソクはショートカットが好きなのに髪は長くてパーマをかけて結んでいる」「メガネをかけているし、美大出身なのに服のセンスがない」などと、指摘するのであった。

チソクは車がパンクしたため、電車で通勤中にウンスクに出会った。偶然一緒に出勤したのだが、周囲に誤解されてしまう。相変わらずウンスクは、チソクにあれこれ世話を焼いてくれる。周囲の誤解を解き、ウンスクに期待させないために、チソクは自分に構うなと突き放してしまう。

インジュはウンスクのことなどで安心できないと、チソクを見張り始める。更にインジュは夏なのに寒いから暖房をつけろ、夜は眠れないから話に付き合えと、色々な要求をしてくる。チソクは、インジュのことで徐々に疲れてきた。

ウンスクは、チソクと同僚を自分の美術展に招待した。美術展に行くと、そこには髪型、服装、化粧を変えて美しく変身したウンスクがいた。その姿に驚きながら、ウンスク作品を見ると、その彫刻はインジュの笑顔であった。

インジュは、自分はもうこの世界にいるべきではないと考え、帰ってきた夫にわざと冷たい態度をとり、息子をつれてもとの世界に戻ると言い、息子の姿を消した。息子がいなくなったことを知ったチソクは、ウンスクと共に急いで息子を探した。ウンスクに付き添ってもらい、発見された息子を念のため病院に連れて行った。

自宅に戻りインジュを怒ると、インジュは「あなたにダビンは渡さない、私のことを忘れることができないくせに」と言った。忘れることができると証明してやると、チソクは

部屋中に飾ってあるインジュとの思い出の写真を全て床に投げつけ、外のゴミ箱に捨てた。

インジュは、息子の姿を見に病院に来ていた。泣きながら「こうするしかなかった」と言い残し、息子の元を去っていった。家に戻ったチソクは、散らかしたはずの部屋が片付いているのを見て、インジュの態度に隠された本当の理由に気付くのであった。

チソクとウンスクは結婚することになった。結婚式には同僚やインジュの母親など多くの人々が出席した。インジュは式の様子を見ていた。突然、息子のボールがインジュの方に転がってきた。息子はボールを拾い、見えるはずのないインジュのほうを見ながら、お母さん、と言ったのであった。インジュは消えていった。妻は死んでも夫のために尽くしている。1人目の妻は亡くなっているため、普通のハッピーエンドにはなっていない。

## 2. 『オルガミ～毘～』(1997) キム・ソンホン

12位の『オルガミ～毘～』(1997)は、キム・ソンホン監督4作目の作品である。1956年釜山で生まれた監督は、中央大学演劇映画科を卒業し、シナリオ作家として活動を開始する。カン・ウソク監督の『幸せは成績順じゃない( )』(1989)では、第26回(1990)百想芸術大賞シナリオ賞を受賞している。

1990年に自らシナリオを共同執筆した『そう、たまには空を見よう( )』( )』で監督デビューを果たした。その他に『17歳のクーデター( )』(1991)『爪( )』(1994)『新装開店( )』(1999)『セイ・イエス( )』(2001)などを制作している<sup>28</sup>。

母チンスクと息子トンウは2人で朝食を食べている。母親は「最近デートをしていないから、今週こそは2人で出かけよう」と提案するが、トンウは紹介したい女性がいると言う。母親が会いたくないと言うと、トンウは会ってくれないのなら自分は死ぬとまで言い、母親を説得した。母は会うことを約束したが、腹を立てている。はじめの場面では、母親と息子の仲の良さが強調されている。

トンウには父がいなかったが、恋人スジンも両親が不在で、兄に育てられた。スジンは両親がいないことを心配したが、トンウは「母はそのようなことを気にしない」と言った。2人は結婚し、式を終え新婚旅行から戻ってきた。

スジンは義母と仲良くできるか心配していたが、心配は杞憂に終わり関係が上手くいくように思えた。しかし、トンウがいない時の義母は、別人のようにスジンに冷たく当たっ

た。風呂場のドアが開いていたので中を見ると、義母が夫の体を洗っている。スジンは意味がわからないと夫に言い、夫はもうしないようにするからと言った。

自分を娘として考えてくれるように義母にお願いしたスジンは、「そうするわ」と返事をした義母のことをうれしそうに夫に話した。しかし、義母はスジンが脅迫してくると泣きながら嘘をついた。トンウはスジンのことを殴ったが、スジンは泣きながらこれ以上我慢できないと言った。トンウはスジンの味方をする約束してその場は落ち着いた。

トンウは週末に母親をデートに誘った。母親は息子と2人きりの気でいたが、実はトンウがスジンと呼んで、3人で仲良くできるようにと考えていた。義母は「今日は2人で楽しむから帰れ」と言うがスジンは帰らず、逆に義母が帰った。スジンは夫の協力を確認し、この家での生活をがんばることにした。

しかし義母は、息子がいない時にスジンを浴槽に頭から沈め、これ以上自分と息子を引き裂くなら死ぬ、次に生意気なことを言ったら殺すと言った。スジンは限界だと考え、荷物をまとめて出て行った。義母はスジンを追いかけようとした息子に「勝手に出て行ったのだから放っておけ」「お前におもちゃを与えただけ」「結婚なんてくだらないとわかっただろ」「私との間には女を入れない」と言った。結婚後も息子の世話をする母親が、嫁の目に異常な光景として映っているが、現実存在する可能性がある母親と息子の関係を風刺的に描いたものである。本当にあるかもしれないからこそ、ホラー調に仕上がるのである。嫁と姑の関係も同様である。

母親の言葉を聞いたトンウは、家を出ようとした。母親は「30年間全てを捧げてあなたのために生きてきた」「あなたがいなくなるくらいなら死ぬ」と包丁を持ち出した。息子は母親を止めようとするが、息子の胸にナイフが刺さり死んでしまう。

そのころ、スジンは友人の家に行った。電話が鳴ったのでスジンが出ると義母であった。義母は「トンウが服毒自殺未遂で寝込んでいるので、顔だけでも見せてほしい」と嘘をつく。スジンは一度断ったが、会うことにした。家に戻りトンウの様子を見に行こうとしたスジンは、義母にスコップで殴られ意識を失った。スジンが目を覚ますと、地下倉庫のおもちゃ置き場につれてこられており、縛られていた。義母は「トンウのおもちゃは全て取ってある。あなたもおもちゃの1つ」と暴行を加えた。スジンは監禁される事になった。

消えたスジンを心配し、友人が義母へ電話をするが、義母は電話を切ってしまう。友人は、義母が留守の時に家を訪れた。誰かいませんか、と友人が言うが、何の返事も無い。地下室から音が聞こえるので、友人が中に入ると、両手両足を縛られた傷だらけのスジン

がいた。友人は急いでスジンを手助け、スジンは地下から脱出することができた。階段の上で、友人はいつの間にか帰ってきていた義母に殴られた。義母は「私に逆らうのなら死ぬ。お前はおもちゃだ」とスジンに迫ってくる。スジンは今度こそ殺されると思ったが、何とか友人と2人で逃げ切った。義母はトンウの部屋へ行き、トンウの死体の側で自殺した。

その後スジンは、友人と共に2人の灰を湖に撒きに行った。せめてあの世では一緒になれるようにと、2人の灰を一緒に撒いたのであった。ここでは、一度嫁になった家に対する嫁としての権利と責任が込められており、韓国社会の家族のつながりが現れている。

### 3. 『敗者復活戦』(1997) イ・グァンフン

15位の『敗者復活戦』(1997)は、イ・グァンフン監督の作品である。1959年に生まれ、西江大学新聞放送学科を卒業し、アメリカ留学してオハイオ州立大学で映画演出を専攻し、同大学院修士(MIFA)を取得する。帰国後の1989年にイ・ジャンホ『ミス・ユニコーン( /ミス犀とミスターコラント)』で助監督を担当し、1991年にはMBCテレビドラマでアシスタント・ディレクターを経験する。1995年の『ドクター・ポン( )』で監督デビューを果たし、1997年にこの『敗者復活戦』を発表した。その他には、『愛のゴースト( )』(1999)『千年湖( )』(2003)を制作している。

ある日、獣医の男性ミンギユの前に写真家のウネという女性が現れた。ウネの話によると、ミンギユの彼女ファヨンと、ウネの彼氏チヌが本気で付き合っているという。ウネは結婚の準備をしていたが、一度プロポーズを拒否すると会ってくれなくなり、別れて1ヶ月も経っていない。

ミンギユは彼女と上手くいっているつもりであったため、ウネの話が半信半疑であった。しかし、家に戻るとファヨンにあげた指輪が郵送されていた。ミンギユが彼女のところに行くと「私たちは違いすぎるから別れましょう」と言われた。

ミンギユは、ウネの話が本当であったと知った。ウネは協力して2人に嫌がらせをしようと思いつく。2人はいたずら電話をそれぞれの相手にかけて。しかし、ミンギユはファヨンに呼び出され、どうなるのかと思っていたが、ファヨンはそれであなたに許されるならかまわないわ、と言って去っていった。

ウネは、ミンギユの働く動物園に遊びに来た。ミンギユの診察中、ウネは池に落ちてしまう。服を乾かしながら、2人はアフリカでテント生活をするミンギユの夢について話し

た。ミンギユは、ウネが帰った後、もう連絡することも、会う事も無いと考えていた。しかし、ウネが麻酔銃を持ち出したため、ミンギユはそれを取り返すために、ウネに会いに行った。ミンギユは部屋で麻酔銃を探すが、部屋にはないとウネに言われてしまう。

チヌがウネの家に来た。チヌはウネに結婚しないとされたことで傷ついたと話した。チヌは「もうすぐパリへ留学する。また連絡するから」と言い、帰って行った。ウネはミンギユにチヌがパリに留学することを話し、「私は彼についていく」「ファヨン仕事優先みたいだけれど、私は全てを捨てて彼のために生きる覚悟がある」「彼は別れた直後に他の女と付き合えるような人ではない」と言った。

ウネは、チヌが自分に都合のよい事を言ったにもかかわらず、ファヨンと釜山へ行ったことを知り、釜山へ行くと言い出した。美術展の会場を訪ねると、チヌは不在であった。ウネとミンギユがチヌたちを追いかけると、仲良く過ごすチヌとファヨンの姿があった。チヌはウネに「愛しているのは君だが、美術をやっていく上で様々なことが楽だから彼女と結婚する」と言った。ウネは「彼女がかわいそう」と言い立ち去った。

ウネにミンギユから、自分よりも大きなキリンのぬいぐるみが届いた。ミンギユは簡単に返されないように、大きくてかさばるものを贈った。ウネがミンギユに電話すると同僚が電話に出た。ミンギユが今夜8時の飛行機でアフリカに行くという。空港までミンギユを追いかけたが、いくら探してもミンギユの姿が見つからない。

ウネは以前チヌにした嫌がらせと同じように、災警報機を鳴らした。ミンギユはそれを知っていたためウネに気付き、空港で待っていた。ウネは「行かないで、会いたかった」とミンギユに告げた。ウネは、ミンギユが夢のためにアフリカへ行くと考えていたが、アフリカ行きは出張であり、1週間で帰るのであった。2人は笑いあった。

#### 第4節 1998年の韓国映画

1998年は、韓国映画43本、外国映画244本の計287本が公開された。韓国映画の観客数は、1,259万人と前年に越えた1千万人をキープしている。一方外国映画は、3,759万人と前年より200万人増加している。合計で5,000万人をこえ、1991年以来の5,000万人突破となり、伸び悩んでいた観客人数が、戻ってきつつあった。

興行成績は、韓国映画が629億ウォン、外国映画が1,955億ウォンであり、合計2,584億ウォンである。収入は、年々伸びていくが、わずかな触れ幅である。

韓国映画の興行成績1位は前年から継続上映されている『手紙』、2位は『約束( )』、

3位は『女校怪談（ ）』であった。

その中で、2位の『約束』、4位の『八月のクリスマス（8 ）』、7位の『情事（ ）』、8位の『ディナーの後に（ ）／乙女たちの夕食』、9位の『美術館の隣の動物園（ ）』、10位の『チム～あこがれの人～』、11位の『男の香り』、14位の『陽が西から昇ったら（ ）』が条件に当てはまる。2位の『約束』、8位の『ディナーの後に』、9位の『美術館の隣の動物園』は、入手できず未見である。

### 1. 『八月のクリスマス』(1998) ホ・ジノ

4位の『八月のクリスマス』(1998)は、ホ・ジノ監督の作品である。1963年生まれで、延世大学哲学科卒業後、大宇電子広報室で1年半働いていたが辞職し、1992年に韓国映画アカデミーに入学した。卒業作品『コチョルのために（ ）』(1993、16mm 短編映画)がバンクーバー国際映画祭に招待され好評を受ける。卒業後は、パク・クァンス監督の下で下積みを送った。

デビュー作である『八月のクリスマス』(1998)はヒット作となり、評論家からも高い評価を受け、第19回(1998)青龍賞新人監督賞をはじめ、国内賞の監督賞、新人監督賞を総なめにした。その他には、『春の日は過ぎ行く（ ）』(2001)、『四月の雪（ ）』(2005)を発表した。『『平凡な日常』の中で『平常で無い物語』を書ききるのが、この監督の能力の1つ<sup>29</sup>』と評されている。

男性主人公チョンウォンは、ソウルで写真屋を営んでいる。彼には母親が不在であるという家庭の不幸が描かれている。葬式に参列し店に帰ってくるとお客が来た。写真を現像してほしいといわれ、できるだけ早くしてくださいとせかされた。

この前のお客が訪ねてきた。彼女はタリムといい、警察官で違法駐車を取り締まっている。彼女はチョンウォンをおじさんと呼ぶ。チョンウォンはなぜ結婚しないの、と尋ねられ、チョンウォンは忙しいからと答えた。その後タリムは時々店に来た。結婚していないことに対して不思議がられており、結婚していて当然ということが肯定されている。

友人と食事をしていたチョンウォンは、酔っ払っていた。友人に俺はもうすぐ死ぬと言うが、友人は酔っ払いの冗談と受け取っていた。しかしチョンウォンの病状は、本当にそれほど悪くなっていた。



タリムがチョンウォンをデートに誘い、遊園地に行くことになった。遊園地の後も、2人でいろいろな場所を回り、夜道を2人で腕を組みながら歩いた。しかし、その後チョンウォンの病状が悪くなり、店を休むことになった。タリムは店に来るが閉まっている。

チョンウォンは倒れて救急車で運ばれ、入院することになる。タリムは何度も店を訪れるが、いつも閉まっている。来月異動となったタリムは、写真屋を何度も訪れ待っていた。いくら待っても誰も来ないので、ドアの隙間に手紙を差し込んだ。数日後にもう一度見に来たタリムであったが、手紙がそのままになっていたのを持って帰ろうとした。しかし、店の中に入ってしまったので諦めた。

チョンウォンは、店に戻ってきた。大量の手紙の中にタリムの手紙を見つけ、返事を書いた。チョンウォンは、警察署に行ってみるがタリムに会うことができない。チョンウォンは、彼女が駐車違反の取締をしている現場にいるのを見つけた。しかし、声をかけずに店へ帰り、タリムの手紙と一緒に返事の手紙を箱にしまった。

自分で撮った自分の写真が、葬式で使われている。冬になり父親が店を再開した。しかし、タリムが店を訪ねた時には丁度誰もいなかった。外のウィンドウには、タリムの写真が飾ってあった。愛を秘密にしたまま旅立たせてくれてありがとう、というチョンウォンのナレーションで物語は終わる。主人公が病死し、ハッピーエンドにはならない。

第3回女性観客映画賞では、「性的イメージや類型化された女性常套型を越え、生きていく生活者としての女性を表現した点で、全般的に好意的な評価を受けた」とされている<sup>30</sup>。

## 2. 『情事』(1998) イ・ジェヨン

7位の『情事』(1998)は、イ・ジェヨン監督の作品である。1965年生まれで、外国語大学トルコ語科卒業、韓国映画アカデミー7期卒業である。大学時代は演劇サークルに所属し、短編映画に出演していた。大学卒業後に映画制作を始める。『情事』(1998)は商業映画デビュー作である。評論家からは「高品質メロ」と絶賛され、第19回(1998)青龍賞では監督賞と新人監督賞にノミネートされた。その他には『純愛譜( )』(2000)、『スキャンダル( — /スキャンダル—朝鮮男女相悦之詞)』(2003)を制作している。

39歳の主婦ソヒョンは、建築家の夫と10歳の息子と暮らしている。アメリカで暮らしている妹は、仕事が忙しくて帰れないからと、ソヒョンに結婚準備を頼んだ。数日後、ソ

ヒョンは、妹の婚約者ウインと会うことになった。ウインは石材を売買する仕事をしており、14年間アメリカで暮らしている。2人は新居を探しに行くことになった。湖畔にある家が気に入り、ソヒョンは妹に電話をして確認をとった。ソヒョンは車でウインを家まで送った。ウインはお茶でもと言うが、ソヒョンは断った。

数日後、2人が探しに行った郊外にある湖の家ではなく、ウインの父親が2人の新居としてアパートを準備した。ウインは「父はいつも自分の思い通りにしてしまう」と言った。10年前にウインの兄が事故死したことで、自分が期待されてしまい、結局父親の石材会社へ勤めている。ソヒョンはいつでも湖を見ることができるようにと、湖の絵を結婚祝いとしてプレゼントした。ウインはアメリカで暮らす前、5年間ブラジルにいたこと、そこに湖があったこと、40歳になったらそこで暮らしたいことを話した。

ソヒョンが夫の会社にいる時ウインから電話あり、結婚準備のために出かけた。その帰りに、映画を見に行こうとしたが、妹からソヒョンに電話がかかってきた。ウインと一緒にいるかどうかを尋ねられたソヒョンは嘘をつき、映画を見ずに帰りましようと言った。ソヒョンはウインを家まで送ったが、お茶でも飲んで下さいと言われ、家に上がった。帰ろうとすると、ウインにキスをされてしまう。

夫から新郎が挨拶に来たと電話があった。夫と一緒に夕食を食べようとウインを家に誘った。食事が終わり、ウインが帰るので、ソヒョンは見送るためにエレベーターに乗った。エレベーターの中でウインに抱きしめられるが、突き放した。

家に戻ると電話があり、ウインが公園で待っているという。ソヒョンが公園に行くと、ウインがベンチに座っていた。ソヒョンは「なぜ私が好きなの」と尋ねると、ウインは「あなたこそなぜ自分が好きなのか」と言った。帰り際に、ウインは「待っているから電話してください」と言った。

ソヒョンはウインが気になったので、会社に電話をするがウインは不在であった。家を訪ねると風邪で寝込んでいた。2人はそのまま関係を持った。その後、度々連絡を取り合い、一緒に過ごした。電話に出ない、家にいない妻に疑いを持った夫は、ソヒョンの携帯を見てウインと会っている事を知る。

ソヒョンの父親が倒れて病院に運ばれた。ソヒョンは意識の無い父親の看病をしながら、父親が昔「心から愛する人が現れたなら、他人のことを考えずに絶対に逃すな」と言っていたことを思い出した。数日後、父親は亡くなり、妹は父親の死もあり結婚を延期して、アメリカで式を挙げることにした。

ウインのことが忘れられないソヒョンは、ウインに電話をしてしまう。ソヒョンは体育館で息子の試合を見ていたが、学校に来たウインと抜け出した。ソヒョンはウインに、あなたと生きていきたいが、私は一緒に行くことができないと言う。

ウインは妹に他に愛する人がいるから1人でアメリカに帰ることを告げた。姉の家に戻った妹であったが、その頃ソヒョンも夫に出て行くと言っていた。ウインの愛する人がソヒョンであると知った妹は「私に対してこんなことができるなんて信じられない」「二度と会いたくない」と泣き叫ぶ。

ウインは1人で空港に向かった。ロサンゼルスに戻ろうとしていたが、行き先をリオに変更した。また、ソヒョンも家を出て空港に1人で向かい、飛行機に乗った。2人は気付いていないが、同じ飛行機に乗っている。家族は完全に崩壊しているが、そのことについて否定的に扱われておらず、不倫の映画において、結末に幸せが暗示されている。主人公は、家庭よりも個人を優先している。

### 3. 『チム～あこがれの人～』(1998)ハン・ジスン

10位の『チム～あこがれの人～』(1998)（：チムとは、「目をつける」「予約する」のような意味で使われる若者の言葉）は、ハン・ジスン監督の作品である。デビュー作『ゴースト・ママ』(1996)と同様、この作品も監督自ら脚本を書き、演出した映画である。

ADの男性チュンヒョクは、男友達チョリの姉チェヨンに子供のころから片思いをしている。友人の中でチェヨンだけ結婚しておらず、両親はチェヨンが結婚していないことを心配している。

ある日、チュンヒョクは、チェヨンに呼び出されたのでその場所に向かうと、チェヨンは酔っ払っていた。チュンヒョクは、思い切ってチェヨンに告白をするが流され、酔っ払ったチェヨンは倒れて眠ってしまう。チュンヒョクは、チェヨンを仕方なくホテルの一室に運び込み寝かしつけたが、次の日、チェヨンに誤解され、絶交を言い渡された。

絶交されたチュンヒョクは、ショックのあまり衰弱して病院に運ばれていた。付き合いなくてもいい、せめて会いたいというチュンヒョクに、先輩が女装をして女友達になるという提案をする。

1ヶ月間準備を重ね、ついに女装をしてチェヨンに会う時がきた。チェヨンが仕事に行くときに、一緒に車に乗せてもらったのである。メイク専門学校の講師をしていることに

し、名前はチェヨンと同じ名前を名乗った（次から男性を「チェヨン」とする）。

ある時、「チェヨン」はチェヨンと晩御飯を作ることになった。チェヨンの家で食べ終わった後、「チェヨン」は占いが得意だといひ、チェヨンの指輪を使って占いはじめる。占いは嘘で、チュンヒョクが彼女について知っていることを述べるだけである。帰宅したチョリは、「チェヨン」を一目見て好きになってしまう。チョリは、チュンヒョクに対して「チェヨン」のことを相談するが、その時に年上を好きになることに対して、「年上は有り得ない」などと否定的な意見が述べられている。

チェヨンと「チェヨン」は仲良くなった。「チェヨン」は明日外回りのあるチェヨンに、出かけ先のデパートで午後3時から5時の間に運命の人と会う、それは昔からの知り合いであると占った。次の日チュンヒョクは、デパートで3時にチェヨンと会うために待っていた。もうすぐ3時になるというところで、チェヨンの目の前に出ようとするが、転んでしまう。その間に、チェヨンは本当に昔の知り合いソンミンと出会う。チェヨンは、ソンミンを運命の人だと思い、付き合うことになる。

サンミンとサンミンの友人、そしてチェヨンと「チェヨン」の4人で旅行に行くことになる。「チェヨン」は何かと2人の邪魔をするが、ソンミンとチェヨンのキスを目撃してしまう。「チェヨン」は、ソンミンの言うことに突っかかり、チェヨンとけんかになる。

しばらくして、2人は仲直りをする。本当にソンミンが好きであると告げるチェヨンを見て、「チェヨン」は2人の相性はとてもよいと占う。チュンヒョクは、「チェヨン」としての自分を消すために、「チェヨン」をフランス留学させることにした。フランスへ行く仕事のある先輩に、フランスからチェヨンへの小包を送るように頼む。

チェヨンは、ミンヒという女性に呼び出された。そこには、ミンヒとソンミンがいた。ミンヒは、ソンミンが自分とチェヨンのどちらを選ぶかはっきりさせるために、チェヨンを呼び出したのだ。チェヨンは怒ってソンミンに平手打ちし、その場から去るが、ソンミンが追いかけてきた。ソンミンは「ミンヒとは別れるつもり」「この年の恋愛は相手を見極めるためにこういうものだ」「君を愛しているのは事実だから大人として考えてほしい」という。傷ついたチェヨンは、「チェヨン」のところへ行き、話を聞いてもらうのであった。

「チェヨン」は、ソンミンにチェヨンが傷ついていると告げるが、2人の問題だから口を出すなと言われる。「チェヨン」は、正体をばらしてソンミンを殴ってしまい、通りかかったチェヨンに女装がばれてしまう。チュンヒョクは、チェヨンに叩かれ最低だと言われたが、楽しかった、ありがとうと言い去った。チェヨンは自宅で、幼いころから遊びに来

ていたため置いてあるチュンヒョクの荷物を見つける。昔の日記を見つけたので開いてみると、チェヨンへの思いがつづられていた。チェヨンは海外にいるソンミンの両親に会うことになった。出発する前日、フランスから「チェヨン」が送った小包が届く。中にはチェヨンの好きな香水と手紙が入っていた。

工作中的チュンヒョクのところへチョリが来て、海外へ発ったチェヨンを見送ってきた、戻ってきたら結婚式だと告げる。チュンヒョクは、チェヨンが酔い止めを持ったかどうかを心配した。チョリはお前には負けたと言い後ろを見ると、チョリの視線の先には、チェヨンが立っていた。チェヨンは「年上だけどいいの」とチュンヒョクに問い、チュンヒョクはそれに答えたのであった。

#### 4. 『男の香り』(1998) チャン・ヒョンス

11位の『男の香り』(1998)は、『ボーン・トゥ・キル』(1996)を制作したチャン・ヒョンス監督の作品である。映画の原作は、ハ・ビョンムの小説であり、第3回(1998)釜山国際映画祭韓国映画パノラマ部門出品作品である。

男性主人公ヒョスクは、12歳の頃に少女ウネと出会った。ヒョスクとウネは血がつながっていないが、兄妹のように育った。ある時ウネを助けるために、ヒョスクは他人を暴行して少年院に入った。ウネはヒョスクを待ち、その後、2人はソウルで暮らすことにした。2人は工事現場で働きながら、近くに小さな家を借りて生活し始めた。

ある日工事現場に、工事を止めさせようとやくざがやってきた。ヒョスクは、そのやくざたちを追い返してしまう。その後、ヒョスクは強いため、再び来たやくざに目をつけられ連れて行かれた。

やくざに雇われていたヒョスクは、けんかで黒星会のスファに勝ち、黒星会に入ることになった。黒星会に入ったヒョスクは、急速に地位を上げた。大金が手に入ったのでウネを大学に通わせ、2人の新しい家を用意した。ウネはいきなり大金を手に入れた兄を不審に思ったが、ヒョスクは事業をやっているとごまかした。

最近ウネは大学の先輩チョルミンに付きまといわれていた。ウネが自分を避けるため、チョルミンはウネを無理やり連れ去り、自分の部屋へつれてきた。結婚してくれと言うが、ウネは帰らせてくださいと言い続ける。帰宅後、ウネは兄さんを好きになっていいかわからない、兄さんを愛することができればいいのに、いつまで妹で私を女としてみるこ

できないのかと言った。

ヒョスクは警察に捕まり、7年の刑を言い渡された。ウネはチョルミンと結婚する代わりに、兄を出所させるという取引をした。ウネは兄に会い結婚すると告げたが、ヒョスクは何も言わず黙っていた。その後、何も知らないヒョスクは出所した。部下の男性スファは妹が愛しているのはあなただと言うが、ヒョスクはありがとうと言うだけであった。ヒョスクは結婚式を見届けたが落ち込み酒浸りになった。

チョルミンは、ウネとヒョスクに血のつながりの無いことを知り、ウネに暴力を振るった。暴力と暴言に耐えかねたウネは、チョルミンを包丁で刺した。その場に駆けつけたヒョスクは、チョルミンが死んでいるのを発見し、何が起こったのかを知った。スヒョクは自分が身代わりになるために、スファにウネを連れて出て行かせた。

3年後、スヒョクの死刑はもうすぐ執行される。一方、その後ウネはカナダに逃がされていた。ウネは兄の死刑が執行されることを知り、韓国の刑務所へ会いに行った。ヒョスクは死ぬ前にもう一度会いたかったと言った。ウネは一度だけ愛していると言ってほしいとヒョスクに言った。時間になったと外から告げられたが、2人は離れられなかった。

ヒョスクは死刑執行前に、家族に言いたいことはあるかと聞かれた。言いたいことは手紙に書いてあるので渡してほしいと言ひ残し、短い人生を終えた。

ウネはヒョスクの死刑が執行された後、死体を引き取った。渡された手紙には「愛する人へ愛していると言えないことが一番つらい」と記されていた。ウネはこれから農家に向かう。そこには、別の女性が産んだスヒョクの子供がいる。ウネは男の子に、自分が母親であると言った。

## 5. 『陽が西から昇ったら』(1998) イ・ウン

15位の『陽が西から昇ったら』(1998)は、イ・ウン監督の作品である。1961年生まれで、中央大学演劇映画科、同大学院映画学科修士課程を修了している。大学には映画ではなく演劇で入学していたが、1985年から大学で映画のワークショップを始める。1988年に独立映画集団チャンサンコンメを結成するが、数年後に見切りをつけて脱退し、チャンイオ・プロダクションを設立した。その後、ミョン企画のシム・ジェミョンと結婚して1995年にミョン・フィルムを創立し、商業映画界に進出する。1998年に、この作品でデビューしたが、主に制作者として活動している。ミョン・フィルムでは、他の制作会社が大作に偏りがちなのに対し、作品性のある小作品の制作も積極的に手がけている。

警官の男性ポムスが交通整理をしていると、車が道路に乗り上げた。演劇学科の女子大生ヒョンジュの車である。ポムスはヒョンジュに運転を教えることになった。ヒョンジュは教えてもらったお礼に、自分が出演する演劇のチケットを渡した。

数日後、ポムスは演劇を見に行き、ヒョンジュの車の上に花束を置いて帰った。ヒョンジュはそのお礼にと、料理を作って持って行き一緒に食べた。ヒョンジュは留学してみたいという希望を持っており、ポムスは野球審判を目指して勉強している。2人は手紙のやり取りをしようと約束した。

2人は久しぶりに会うことになり、ヒョンジュは留学することをポムスに告げた。ポムスはヒョンジュを愛していると言うが、ヒョンジュはこれからも友達でいまいしょうと言った。ポムスは47通も手紙をやり取りして、恋人にならない男女がいるのかと考えた。

3年後、ポムスは念願の審判デビューをむかえ、墨審としてグラウンドに立っていた。ある日同僚に言われ、今一番人気のユ・ハリンという女優が出ているドラマを見た。すると、驚いたことに、ユ・ハリンは3年前に文通していたヒョンジュであった。

野球は、新しいシーズンが開幕する。始球式には、今話題のユ・ハリンが来ることになった。ヒョンジュが始球式をすると知ったポムスは張り切るが、ヒョンジュは全く気付かず試合の途中で帰ってしまった。

ヒョンジュは、偶然見た野球中継でポムスが審判をしていることを発見し、野球を見に行くことにした。帰り道で待ち伏せし、ポムスと会うことができた。その後、ヒョンジュは度々野球を見に行ったが、野球場で新聞記者に見つかってしまう。一方、ユ・ハリンを愛するラーメン会社社長のジミンは、彼女を調べ上げ、一緒にいる男が野球審判であると突き止めた。

ポムスは審判員の忘年会に、2年目も1人で参加していることを先輩に責められ、女性を連れて来いと会を追い出された。外に出ると、偶然ヒョンジュがいたので、2人で戻った。忘年会が終了し、ポムスはヒョンジュを家まで送って行った。しかし、2人の様子を新聞記者につけられていたことに気付かなかった。

ヒョンジュは、写真を撮られたためマネージャーに叱られる。一方、ジミンの部下がユ・ハリンではなく、ナム・ヒョンジュの名前で届いている手紙を発見し、手紙を偽物とすり替えてしまう。偽物の手紙によって誤解が生じ、ヒョンジュは約束していた開幕戦の始球式と重なっている海外ロケに出発してしまう。

ロケから戻ったヒョンジュは、ジミンとの記者会見が用意されていることを知らされる。

記者会見場にいたヒョンジュだが、開幕戦が雨で一日延期になったことを知り球場へ向かった。それを知ったジミンは、記者会見を球場で行うことにした。

始球式のマウンドには、主審のポムスとユ・ハリンがいる。ジミンは、ユ・ハリンの婚約者が来ていると放送し、大騒ぎになる。マウンドを降りるヒョンジュの後ろ姿に、ポムスはヒョンジュと叫んだ。ヒョンジュは振り返り、ポムスのところへ飛び込んだ。

次の日スポーツ新聞は、銭湯の番頭とミスコリアが結婚するくらいありえない話として、人気女優と野球審判員の恋が一面を飾った。

## 第5節 1999年の韓国映画

1999年の観客数は、韓国映画が2,172万人、外国映画が3,300万人と全体で5,472万人ほどであった。全体に占める韓国映画の比率は39.7%となっている。これは、前年の25.1%から大幅に増加している。韓国映画が約1,000万人増加し、一気に2,000万人の大台に乗り、外国映画は400万人程度の減少を見せた。興行収入では、韓国映画が1,128億ウォン、外国映画1,734億ウォンと全体で2,862億ウォンであった。韓国映画の興行収入は一気に1,000億ウォンを超えた。この年は、シュリが公開された年であるため、韓国映画の市場は一気に増大した。

韓国映画の興行成績1位は『シュリ（ ）』、2位は『アタック・ザ・ガス・ステーション！（ /重油所襲撃事件）』、3位は前年から継続上映されている『約束』である。対象となるのは、6位『ハッピーエンド（ ）』、8位の『愛のゴースト（ 、チャグイモ：\_\_ \_\_ \_\_（自殺した霊の会）の略）』、15位の『我が心のオルガン（ ）』である。

### 1. 『ハッピーエンド』（1999）チョン・ジウ

6位『ハッピーエンド』（1999）は、チョン・ジウ監督の作品である。1968年生まれで、1988年に漢陽大学演劇映画学部に入學、1996年卒業している。長編映画デビューまでに、多くの作品の演出や撮影を担当している。また、学生制作作品の俳優や演劇の舞台も経験しており、演技に対する見識も深い。

1994年からインディペンデント・プロダクションの映画制作所青年の会員となり、短編映画を演出し、国内外で大きな注目を集め、短編映画のスターと呼ばれるようになる。2年間の企画・脚本執筆期間を経て着手した『ハッピーエンド』（1999）で長編監督としてデ



ビューしている。若手監督が選定する第2回（1999）ディレクターズ・カット賞新人監督賞と第20回（2000）映画評論化協会賞新人監督賞を受賞した。

男性主人公ミンギは、銀行をリストラされた元サラリーマンである。子供英語塾の塾長をしている妻ポラの代わりに、今は家事と娘ヨニの育児をこなしている。ミンギは妻に家に仕事を持ち込むなと言ったが、妻は「好きで仕事を家でしているわけではないのに子供まで見なければならぬのか、主夫になるのが嫌なら仕事を探せ」と言い切った。リストラされたサラリーマンが主夫をする様子が描かれている。

ポラは、一緒に働く大学時代の恋人イルボムと不倫関係にあり、仕事と称してイルボムの家に何度も通っている。イルボムはポラに自分の部屋の鍵を渡した。男性が女性を家に残して別の女性のところへ通うだけの設定はあまり映画では描かれず、男性が浮気、不倫をしている場合は、女性側も不倫、浮気をしている場合が多い。この映画では、男女を逆にしていることで、より社会の興味を引いている。

ミンギは最近の妻の行動を不審に思い、イルボムの部屋へ忍び込んだ。部屋でアルバムを開いてみると、妻がバスタオル一枚で写真に写っている。ミンギは妻の不倫を確信した。

自宅にミンギの恩師が亡くなったという連絡があり、ミンギは所用で家を出た。その後、すぐにイルボムが自宅に電話をかけてきた。ポラはイルボムにどうかしていると言いながらも、30分だけ会う約束をして家を出た。妻は不倫をしていることに対して罪悪感を抱いているが、不倫をやめることにはならない。

ミンギが家に戻り、ヨニの様子を見ると熱が出ていたので、慌てて病院に連れて行った。病院から戻ると、家の前で妻とイルボムが抱き合っている。ミンギはイルボムが帰ろうとしたので階段に隠れ、エレベーターが下りたのを見計らって家に戻ろうとした。しかし、イルボムはエレベーターに乗っておらず、ミンギは自宅に入っていく2人を見たのである。

ミンギは、恩師の告別式のために、3日間大邱へ行くと言って出かけた。同じアパートの女友達ミヨンが、駅まで見送ってくれた。しかし、ミンギは途中で電車を降りてイルボムの家に向かい、家の中を探った。その夜、妻が化粧を落としていると、鏡にイルボムの家で撮った自分の写真が貼られている。イルボムの仕業だと考えた妻が、イルボムに電話をしていると、突然電話が切れた。次いで部屋が真っ暗になり、妻はイルボムのシャツを着た夫に刺殺された。

ミンギはイルボムの部屋に細工をした後、電車で大邱へと向かった。次の朝、ミヨンは

ヨニの世話を頼まれていたので、ミンギの家にやってきた。ベッドに横たわる妻の姿を見つけ、事件が発覚する。ミンギの細工によって、イルボムが事件の犯人として逮捕された。ミンギは妻の指輪と写真を見ながら涙を流した。泣きながら写真を焼き、妻の指輪はトイレに流した。

## 2. 『愛のゴースト』(1999) イ・グァンフン

8位の『愛のゴースト』(1999)は、『敗者復活戦』(1997)を制作したイ・グァンフン監督の作品である。この作品は、あの世を表現するためにコンピュータグラフィックを使用しており、使用時間は20分を越える。イタリアの第14回(2000)Far East映画祭、第21回(2001)Fantasporto国際映画祭公式コンペ部門出品作品である。

アニメーターの女性チェビョルは、証券ブローカーの男性ハンスと付き合っている。しかし、チェビョルはハンスが別の女性と一緒にいるのを目撃してしまう。その女性は、ハンスが勤める会社社長の娘ヒョンジュである。チェビョルは問い詰めるが、ハンスに純真で一緒にいて落ち着けるチェビョルが好きだ、これ以上口うるさいならもう会わないといわれ、チェビョルはすぐに謝った。

チェビョルが地下鉄を待っていると、後ろから突き飛ばされた。そこへ地下鉄が入って来たため、チェビョルは死んでしまった。突き飛ばしたのは「自殺した幽霊の会」通称チャグイモのメンバーであり、会員を集めるためにチェビョルを自殺させたのだ。チェビョルは気がつくやうに幽霊になっており、チャグイモのメンバーになっていた。自殺した幽霊は生まれ変わらない、会員を続けるためには会員を増やさなければならないと説明を受けた。

チェビョルは、男性カントテラスと一緒に行動することになった。彼は、不思議な存在であり、会員を増やすどころか、病院で人の命を救っていた。チェビョルは、ハンスの様子を見に行くが、ハンスはすでにチェビョルのことを忘れ、普通に生活していた。チェビョルは怒りに震えるが、一緒にいたカントテラスは、彼女をなだめ、その場から離れた。その後もチェビョルは、ハンスに復讐しようとするが、カントテラスに止められる。何度も復讐しようとしているうちに、幽霊を取り締まるメッセンジャーに追われることになる。

カントテラスは、自殺ではなく事故死であった。一緒にいた医者である彼女は、カントテラスの手術を担当したが助けられなかったため、手術を怖がっている。カントテラスは、患者の手術をためらっている彼女を見つけ、大丈夫だと訴えかけた。彼女は見事手術を成

功させたが、成功の影には、新しいパートナーの存在があった。

チェビョルと一緒にメッセンジャーから逃げ続けていたカントテラスは、ただの幽霊ではなくメッセンジャーの一員であった。一緒に行動しているうちに、お互いのことが気になっていた2人であったが、チェビョルはついにメッセンジャーに捕まってしまう、死刑を宣告される。その死刑を行うのが、カントテラスの役目であった。しかし、カントテラスはチェビョルをつれて、死刑場から逃げ出した。

他のメッセンジャーから追いかけているうちに、チャグィモのメンバーであったもう1人のメッセンジャーが助けてくれた。偶然事故死した、ハンスとヒョンジュの幽霊を罪人として連行し、チェビョルとカントテラスを逃がしてくれた。死亡したハンスとヒョンジュの体を借りて、2人は生きた人間として逃げることができた。

### 3. 『我が心のオルガン』(1999) イ・ヨンジェ

15位の『我が心のオルガン』(1999)は、イ・ヨンジェ監督の作品である。ハ・グンチャンの短編小説『女の教え子( )』(1981)が原作である。1958年生まれで、延世大学生命工学科を卒業した。技術を超えた映像の力に魅了され、同大学大学院国文学科に進学し、シナリオ文学を専攻した。学生時代は延世劇芸術研究会に所属し、劇団サヌルリム創設メンバーとして出演・演出と活躍した。1986年、韓国映画アカデミー3期に入学し、卒業後の1987年にKBS放送局教養局構成作家として助演出を経験した。また、プロデューサーとしてMBCのドラマを制作し、その後青い鳥映画者代表に就任している。

この作品で長編映画監督デビューし、第20回(1999)青龍賞新人監督賞、第37回(2000)大鐘賞脚色賞、イタリアで開かれた第4回(2000)スケルミ・ダモレ映画祭で最優秀作品賞のSilver Rose賞、若い審査委員団賞、観客賞、第14回(2000)福岡アジア映画祭で特別賞を受賞した。

ストーリーは、女性主人公がお気に入りのレコードをかけながら、昔を思い出すところから始まる。1960年代の山村での物語である。この小学校は、小学校に通えなかった子供も年齢が過ぎてから通っているため、クラスの年齢がばらばらである。また、家の手伝いがあるため、中学校に通えない子供が多い。下の兄弟の面倒を見ながらこの学校に通っているホンヨンは17歳の女子学生である。

ある日、田舎の学校に2人の若い教師がやってきた。21歳の男性カン・スハと女性のヤ

ン・ウニである。ホンヨンのクラスは、スハが受け持つことになった。何気ないことからホンヨンはスハのことを好きになる。しかし、スハはウニが好きである。ホンヨンはスハとウニが仲良くしているのを見て学校が嫌になり、欠席してしまう。スハはホンヨンの家まで行き、明日からは学校に来るようにと言った。

スハは、宿題の日記を添削していた。ホンヨンの日記には、スハとウニのことが書いてあった。年上の女性が年下の男性とだなんてとんでもない、と書かれており、スハは余計なお世話だと思いながら読んでいた。

スハは自分の気持ちを伝えるために、ウニへラブレターを書いた。次の日に渡そうと思っていたが、ウニは婚約者と海外へ行くため学校を辞めることになった。その日のホンヨンの日記には、女性は夫に従うのがいいからよかった、という内容が書かれていた。スハは「好き勝手に書きやがって」とイライラするのであった。女子学生は、女性が男性に従うのが当然であることを肯定的にとらえている。

ある日、スハは LP のことをホンヨンに尋ねられ、家に見に来るよう誘った。ホンヨンは、壊れたレコードを見つけた。それはスハが、ウニに貸していたレコードだが、生徒が壊れてしまったものである。ホンヨンは、その壊れたレコードをスハにもらった。

春休みになる前、スハは学校を辞めると生徒に伝えた。ソウルへ向かう日、生徒たちが見送りに来た。ホンヨンはスハに餞別を渡した。その中身は、お気に入りであったが壊れてしまったレコードの新品であった。

レコードを聴きながら昔を思い出し、2 人の結婚写真を眺めているところで終わる。スハとホンヨンが結婚していることを暗示している。最終的に、初恋は実るものとして肯定的に終了している。

## 第 6 節 2000 年の韓国映画

2000 年韓国映画の興行収入は、約 1,200 億ウォンであり、外国映画が約 2,200 億ウォンである。全体で約 3,400 億ウォンであり、前年度から約 600 億ウォンの増加である。

韓国映画の観客数は、全国で約 2,200 万人であり、前年と大差ない人数となっている。映画全体の観客数は、約 6,400 万人と前年に比べ 1,000 万人の増加である。この増加は、外国映画の影響によるものである。韓国映画の観客数は、全体の 35.1%であり、ほとんどが外国映画の観客となっているが、1999 年とともに、外国映画の差が詰まっている。

韓国映画の観客数 1 位は『JSA ( JSA/共同警備区域 JSA)』、2 位は『反則

王（ ）』、3位は『アウトライブ—飛天舞—（ /飛天舞)』であった。『JSA』は前年の『シュリ』（1999）を抜き、観客動員数歴代1位を獲得している。1位の『JSA』は南北分断、2位の『反則王』はサラリーマンがプロレスラーになるヒューマンドラマ、3位の『アウトライブ—飛天舞—』は、ファンタジーである。

その中で、7位の『リメンバー・ミー（ /同感)』、9位『LISE／嘘（ ）』、11位の『イルマーレ（ /時越愛)』、13位の『寵愛（ 、美人)』、14位の『Interview（ ）』が条件に当てはまる。

### 1. 『リメンバー・ミー』（2000）キム・ジョングオン

7位の『リメンバー・ミー』（2000）は、キム・ジョングオン監督の作品である。1969年生まれで、学生時代には俳優として映画に出演した経験を持つ。1994年にソウル芸術専門大学映画科を卒業し、多数の短編映画を制作した。商業映画界入りした後は、いくつかの映画で助監督を担当し、この作品で映画監督デビューを果たした。この作品は、第8回（2000）春史映画芸術賞新人監督賞を受賞している。また、第5回女性観客映画賞—2000年女性の観客が選ぶ最高の映画「今年のベスト韓国映画第2位」に選ばれた。

この映画は、映画本編が小説として出版されている。また、日本版リメイクが『時の香り〜リメンバー・ミー〜』（2001、山川直人）として制作された。その後、映画社 Ditto エンターテイメントを創立している。その他の作品として、『天国からの手紙（ /火星にいった男)』（2003）がある。

1979年、内気な女子大学生ソウンは、同じ大学の先輩トンヒが好きだが、見ているだけで満足している。トンヒは軍隊を除隊し、大学に復帰したばかりであった。ソウンはトンヒが軍隊にいた頃、いつも手紙を送っていた。先輩が所属している無線同好会をのぞいていると、無線機をもらうことになってしまう。ソウンは無線を持ち帰ったものの放置していた。突然見知らぬ人から無線が入り、ソウンは戸惑いながらも話をしたのであった。

放置していた無線から、再び音が聞こえた。無線の男性は、前回話した人であった。同じ大学に通っているとわかったので、男性は無線を始めたばかりのソウンにわかりやすい本を貸してくれると言った。明日、大学の時計塔前で、2時に会う約束をした。

次の日ソウンは、時計塔の前に到着したが、男性はまだ来ていないようだったので待ってみた。いくら時間がたっても、男性は現れなかった。一方、男性は確かに時計塔の前に

いたのである。その夜、無線機で話すと原因が判明し、ソウンは 77 年入学で、男性は 99 年入学であり、2 人は同じ大学に通っているが、違う時を生きているということがわかった。ソウンのいる時代は 1979 年であり、男性のいる時代は 2000 年であった。

2 人は無線を使ってお互いの家族のことや、恋人の話など、様々なことを話した。そのうち、ソウンはついに先輩のトンヒとデートをすることになり、2 人は付き合うようになった。そのようなことも、無線で話せるようになった。

ある時、男性の両親の話を知っていると、両親が同じ 77 年入学であることが判明した。ソウンは気になり両親の名前を尋ねると、男性の両親はトンヒと親友の女性ソンミであった。ソウンは未来を知って絶望してしまう。

先輩のトンヒは、けがで病院に入院することになった。ソウンは、ソンミとトンヒのことが気になり病院へ行くと、2 人は仲良く話していた。それを見たソウンは病院を立ち去った。ソウンはトンミと疎遠になってしまい、トンヒにも別れを告げた。

無線はついに通じなくなってしまう。男性は自分の大学で、ソウンを探した。少し前までこの大学の教授をしていたが、別の大学に移ったことを知った。それは、自分が入学してくることをソウンが知っていたからであった。男性は、現在のソウンを探しにソウンの大学へ向かった。そこには、大学教授として過ごすソウンの姿があった。

## 2. 『LISE / 嘘』(2000) チャン・ソヌ

9 位の『LISE / 嘘』(2000) は、チャン・ソヌの作品である。原作は、チャン・ジョイルの小説『私に嘘をついてみて ( )』である。監督は 1952 年生まれで、社会批判的課題作を発表する異色の監督として知られている。1971 年ソウル大学に入学し、考古人類学を専攻した。映画監督を目指したのは『風吹くよき日 ( )』(1980、イ・ジャンホ)を見て、光州民主化運動を映画化してみようと思ったのがきっかけである。光州事件(1980)などが起こり、政治的激動期であった 1980 年から 1981 年にかけては、民主化運動をしていたために、政府にマークされていた。

デビュー作はソヌ・ワンとの共作『ソウルのイエス ( ) / ソウルの皇帝』(1986)だが、ソウルを風刺したものであり、韓国ではお蔵入りになった。TV の脚本を書いていたが『成功時代 ( )』(1988)で復帰した。

原作の小説は 1996 年に出版され、法廷で淫乱書籍との判決を受け、発売一週間で店頭から撤去された。出版差し止めになり、作者は淫乱猥褻物配布容疑で在宅起訴され、有罪

判決を受けた。映画は映像物等級委員会に等級保留判定を 2 度受けて公開延期となり、3 回目の審査で当初のものから問題の箇所を 15 分ほど削除し、2000 年 1 月に公開された。

しかし、淫乱暴力性助長媒体対策委員会市民協議会が、チャン・ソヌ監督と制作社シンシネのシン・チョル氏、『LISE／嘘』（2000）を上映する全国の映画館主を淫乱物制作配布容疑で訴えた。封切後は順調に観客を動員したが、ソウル地検が捜査を始めると映画館などは一週間で上映を打ち切った。打ち切り後も捜査は継続されたが、ビデオを発売したところ、ビデオも淫乱物配布容疑で市民団体に訴えられた。しかし、最終的にソウル地検は容疑を否認した。また、『シバジ（：代理母の意。名家の跡取りがいない時に男の子を産む職業、又はその女性）』（1986、イム・グオンテク）以来、ヴェネチア映画祭のコンペ部門に進出し話題となった<sup>31</sup>。

18 歳の女子高生 Y は、妻と別居中で 38 歳の現代美術家 J と出会った。J の妻はパリで芸術活動をしている。Y と J が出会ったきっかけは、女友達のウリが J のファンであったことである。Y は緊張するウリの代わりに電話をかけて、J の声がすてきだから関係を持ちたいと言い、J に会いに行くことになった。J は処女に対して気が引けると言いながらも 2 人は関係を持った。J にとっては不倫であるが、Y との関係は不道德な関係とは考えていない。一方、Y も不倫に対して否定をしておらず、妻と別れた場合にこの関係が終わるといい、結婚と自分との関係の両方を継続させることを肯定している。

J は Y になぜもうすぐ卒業なのに自分と関係を持ったのかと尋ねた。Y は姉のことを話し始めた。姉は Y が中学生のときにレイプされ、1 年間うつ病を患った後自殺した。2 番目の姉もアルバイト先でレイプされたが、現在はその人と結婚してブラジルで暮らしている。Y は自分が姉のようになる前に、20 歳にまでに処女を捨てたかったと話した。

2 度目に会ったとき、お互いに会いたかった、寂しかったという感情を持っていた。J は自分の変態であると告げた。妻とも何気なくお尻を叩くことから始まったが、エスカレートし後に暴力となった。妻は革のベルトまで耐えたが、洗濯板で殴った後パリに旅立った。Y は好きにしてほしいと言った。はじめは手で叩くだけであったが、棒で殴るようになっていった。しかし、Y は J に対して愛していると言い続けた。Y と J は何度も会うようになり、棒で殴るだけでなく、鞭で殴るようになっていた。

Y と J は再会し、ホースやロープで殴った。J は妻にパリに来て欲しいと言われたため、3 ヶ月パリに渡ることになった。Y は 3 ヶ月会えないことを思い、いつもより強く殴られた。

3 ヶ月後、ソウルに到着してすぐに、J は Y の通う大学までやってきた。2 人はモーテルに入り、J は Y が集めてきた木の枝で殴った。J は Y に妻と離婚すると言うが、Y は妻に対して不誠実であるならば私に対してもそうなるから、離婚したらこの関係も終わり、と言った。殴られるのは気持ちいいのかと聞かれた Y は、そうでもない、J が好きだからと答えた。J は役割を変えてみようと言い、Y に殴られた。J は殴られることが苦痛であったが、故郷に帰った気分になったと言った。

J は、再び 1 ヶ月パリへ行かなければならなくなった。J はパリで妻に対して殴ってくれと頼むが、妻は取り合わなかった。1 ヶ月後、Y は戻ってきた J を迎えにいき、そのままモーテルへ行った。家に戻ると、J の家が火事になっていた。J と会っていることをウリが兄に話してしまったのであった。

Y は家出し、2 人はどこにも行かず、行為に没頭した。Y は J に「私の」という刺青を彫った。しかし、Y の兄がオートバイで事故死した時、Y は家に帰ると言い出した。J は Y に言い寄ったが、結局は妻のところへ戻った。

数ヶ月後、Y から突然パリの空港にいるという電話があった。J は、すぐに家を飛び出し、Y に会いに行った。Y はこれからブラジルへ向かう途中であり、パリを経由したのだと言う。2 人は、すぐにホテルへ向かった。Y は高校の制服を着て、くわの柄で J を殴りつけた。次の朝、Y はすぐにブラジルへ向かったのであった。

妻は、J の体にある刺青の意味を聞いた。その日から J は嘘をつき始める。

### 3. 『イルマーレ』(2000) イ・ヒョンスン

11 位の『イルマーレ』(2000) は、イ・ヒョンスン監督の作品である。1961 年生まれで、弘益大学視覚デザイン科を卒業している。大学 2 年生の時に「映画タイトルのデザイン」という授業により映画に関心を持つようになり、パク・チョルス『霧の柱( )』(1986) で助監督として映画界に入門する。1987 年に韓国映画アカデミー 4 期を卒業し、その後パク・クァンス監督の下で修行を始め、助監督を経験する。

YMCA の活動を通じて女性問題に関心を持ち、自ら「映画を作る理由はフェミニズム」と公言している。「韓国初のフェミニスト映画」と評される『君の中のブルー( )』(1992) で監督デビューした。第 2 作目の『ネオンの中へ日が沈む』(1995) も、女性問題を扱った映画として注目された。しかし、その後フェミニズム映画を企画するが制作する機会を与えられず、映画界に失望し監督から遠ざかっていたが、1998 年に復帰を決意する。



この作品は、監督復帰作となり、第5回（2001）スケルミ・ダモレ映画祭（Schermi D'amore-Festival of sentimental film and melodrama）では審査員特別賞・ジャーナル批評家賞・若い批評家賞を受賞した。2002年にハリウッド・メジャーのワーナーブラザーズがリメイク権を50万ドルで購入した。

1999年12月21日、イルマーレという名前の家に住む女性ウンジュは、引越し準備をしていた。ウンジュは、自分宛に来た手紙を転送してほしいという手紙を郵便受けに残した。連絡の取れなくなった恋人から、手紙が来るかもしれないと待つが、一向に連絡は来ない。

男子大学生ソンヒョンは、橋の工事現場で働いており建築家志望である。新築の家で1人暮らしをすることになり、彼は家にイルマーレという名前をつけた。郵便受けを見ると、手紙が入っていた。この家は1ヶ月前に来たばかりで、誰か住んでいたはずがない。間違えたのかと思い、その住所に手紙を送った。

ウンジュが届いた手紙を見ると「この家に誰か住んでいたことはない」とあり、日付は1997年12月28日になっている。ウンジュは不思議に思い、返事を書いた。それを受け取ったソンヒョンは、日付が1999年12月29日となっているので不思議に思う。お互い違う時空に暮らしていることが分かり、手紙をやり取りするようになった。

ウンジュが、連絡の取れない恋人に出した手紙が戻ってきた。電話をすると女性が出て、後ろで恋人の声がした。ウンジュは今まではげせなかった指輪をはずした。ウンジュは、手紙に失恋のことを書いて、ソンヒョンへ送った。

ソンヒョンの父親は病院に入院しているが、会いに行けずにいた。ソンヒョンは、ウンジュへの手紙で、建築家ハン・ソクジンの2000年の資料があるかと尋ねた。ウンジュは本屋でハン・ソクジンの資料を見つけたが、1998年に死亡したと書かれていた。ソンヒョンは7歳の頃父親に捨てられたため、父親を信じられなかった。しかし、イルマーレの本当の名前は、「Son's house」であり、ソンヒョンの父親が設計したものであった。イルマーレには、父親の愛が込められていたのである。

2人は、2000年3月11日15時に、済州島で会う約束をした。ウンジュが約束の場所へ向かう途中、工事現場の机に手書きの美しい完成図が置かれていた。ウンジュが見ていると、工事関係者がこの家は自分の先輩が愛する人のために作った家であると教えてくれた。ウンジュはしばらく待っていたが、ソンヒョンは現れなかった。

ウンジュは仕事場で、女性と昔の恋人が結納の話をしていてのを見てしまい、忘れたと

思っていた彼のことを思い出してしまう。彼と別れて声優になったウンジュだが、彼についてアメリカに行った方がよかったのかと悩む。本屋の店長は、自立した女が本当の愛を見つけるのだからよかったのだと言った。

偶然ウンジュは恋人と再会した。男性は、一緒にアメリカへ渡っていればこんなことにはならなかった、と去っていった。ウンジュは手紙で、私が彼と離れないように協力してほしいと頼んだ。ソンヒョンは、協力することを告げた。

ウンジュは、濟州島で見た家の完成図を見かけた。事務室にいた人が、それはソンヒョンがあなたのために建てた家だと言った。彼は数年前の今日、交通事故で死亡したという。それは恋人との最後のデート 1998 年 3 月 25 日であり、ウンジュはデート中の交通事故を思い出した。それがソンヒョンの事故だったのである。ウンジュは急いでイルマーレに向かった。その場所に行かないで欲しいと手紙に書き、急いで郵便受けに入れた。ウンジュはソンヒョンに死なないで欲しいと必死に祈った。

今日は、ウンジュがイルマーレから引っ越す日である。引越しの準備をしていると、1 人の男性がイルマーレに歩いてきた。その男性はウンジュにむかって、今からする話を信じてくれますか、と言った。男性が手に持っているのは、ウンジュの手紙であった。

#### 4. 『寵愛』(2000) ヨ・ギュンドン

13 位の『寵愛』(2000) は、ヨ・ギュンドン監督の作品である。1958 年生まれで、ソウル大学哲学科を卒業している。劇団「演友舞台」で活動し、1988 年『成功時代』で俳優として映画界入りした。その後、助監督と脚色を経験する。1994 年脚本を担当した『外の世界へ ( )』で監督デビューし、第 33 回 (1995) 大鐘賞新人監督賞を受賞した。以後、監督、脚本、俳優、映画企画・制作、小説家、テレビの司会、CM など多彩な活動をする個性的な人物で、自分の監督作品ではパロディを好むことが知られている。

この作品は、監督が自ら執筆した小説『体 ( )』を映画化したものである。全裸シーンが多いため、審査が心配されていたが、芸術性が認められ映像物等級委員会の審議もクリアし、ノーカットで上映された。

ヌードモデルの女が、インタビューを仕事とするライターの男性の家に泊めてくれとやってくる。2 人は以前インタビューを通して知り合った。女性はしばらく寝泊りして、また出て行く。彼女はずっとここにいるわけではなく、付き合っているわけではない。しか

し、彼は彼女のために食事を作り、洗濯をし、アイロンをかける。彼女は再び帰ってくる。男性が女性に尽くすことが肯定的に描かれている。

過去に、男性は彼女にヌードモデルをすることについて、インタビューをしたことがある。その後再び彼女に出会った時は、彼女が男性に好きだと言っていたが、男性からは2度と付きまとうなと言われ、突き飛ばされていた。男性が女性に暴力を受けているが、女性は男性に縋り付いている。

家に戻ってくる彼女は、私は誰も愛していないという。男はそれが嘘で、まだ例の彼を愛していると考えている。彼女は以前、「彼のことを本当に愛していた、忘れられない」と言っていた。

彼女は出て行き、そしてまた戻ってくる。他の女を思い出しても嫉妬しないのと尋ねると、彼女は別にといい。男はそのような彼女を恋しく思い、一緒にいたいと男は思っている。彼女はいつも戻っては来るが、待つのはつらいと思っている。

彼女は電話がかかってくると、いつも急いで嬉しそうに出て行く。おそらく昔の忘れられない男である。ある日、彼女は帰ってきたが、殴られたような跡やあざがあった。彼女は男に「行くところがないからここに来る、私にほれてるんでしょ」「あの人だけを愛している、殴られてもいい」と言う。

男は彼女の相手を探し、横断歩道の通りすがりにナイフで刺殺した。その後、彼女と男は海にあるキャンピングカーでしばらく暮らす。彼女に彼氏が死んだという連絡が来る。男は行為の最中に彼女の首を絞めて殺した。彼女は最期に愛していると言った。彼女を抱き上げ砂浜に横たえた。男は再び、自分の部屋に戻った。

## 5. 『Interview』(2000) ピョン・ヒョク

14位の『Interview』(2000)は、ピョン・ヒョク監督の作品である。1966年生まれで、高麗大学仏文科、韓国映画アカデミー7期を卒業している。卒業作品としてその後、フランスに留学し、パリVIII大学映画学修士課程を修了し、韓国人で初めてフランス国立映画学校(FEMIS)を卒業し、パリI大学美学博士課程に進学した。2005年には延世大学大学院の教授となっている。これまでに多くの短編映画を制作している。

この作品は、ピョン・ヒョク監督の長編映画デビュー作であり、第1回(2000)釜山映画評論家協会の新人監督賞を受賞した。1998年にハリウッド劇場とシネ2000が共同公募した「予感21」シナリオ当選作で、低予算映画として企画したものだが、実験映画と商業

映画が融合した形で完成した。

フランスで映画を勉強してきた男性ウンソクは、映画監督をしている。今回の映画は、愛についてのドキュメンタリー映画である。インタビュー形式で質問していき、それをつなぎ合わせて作品を完成させる。

ある日、彼は助監督が取ってきたビデオテープの中に映った女性、ヨンヒを見つける。彼女は美容室で美容補助をしているらしい。ウンソクはヨンヒのことが気になり、直接インタビューをするようになる。

ヨンヒの恋人は現在軍隊に行っている。軍隊に行っている間、待っていて欲しいと言われ、将来は結婚する約束をしているという。ウンソクは、ヨンヒが働く姿を撮りたいと頼むが断られてしまう。その代わりに、恋人との面会に同行してもよいと言われる。ヨンヒの日常が撮りたかったため、美容師試験会場にスタッフと行くが、彼女は試験を受けておらず、美容室で働いているヨンヒは、全くの別人であった。

ヨンヒが美容師をしているという話は嘘であり、ヨンヒは有名なダンサーであった。パートナーであった恋人が自殺して、あまりのショックに彼女は自殺を図るが未遂に終わった。韓国に戻り今までの自分を捨て、ダンス教室を開きながら静かに生きていたのである。

ウンソクは1年前ヨンヒに出会っている。パリで映画の勉強をしていた時、韓国のバレエ団がパリ公演をするので撮影と通訳を頼まれた。ウンソクは一組の男女を撮影したが、その女性がヨンヒである。

ヨンヒは、辛い時期にウンソクのインタビューを無理やり頼まれたのであった。ヨンヒは、昔の自分を思い出すのは辛く、自分を隠しておきたいと思っていた。そのため、長かった髪を切り昔の自分と決別した。髪を切った時に、美容室で補助をしていた女性がヨンヒであり、その女性のことをインタビューで語ったのである。ヨンヒは無理やりインタビューや撮影に同行していたが、徐々にウンソクに心を開いていった。そして、少しずつ本当の自分を見せ始める。

ウンソクは、軍隊にいる彼氏に会いに行くというヨンヒについて行った。入り口まで来たが、ヨンヒは別の方向に向かっていった。ウンソクがその後ろを追いかけると、1つのお墓があった。それは、ヨンヒの彼氏であった男性のものであった。

ウンソクは1年前のパリで、有名なダンサーを撮影したことを思い出し、そこで撮影した舞踏家がヨンヒだったということに気付いた。これまでのインタビューで、ヨンヒに嘘

をつかれていた事がわかり、悔しい気持ちになる。ヨンヒはこれまでのことと、本当の自分について語ったビデオをウンソクに送った。ヨンヒのインタビューは中断したが、2人は再会した。

## 第7節 2001年の韓国映画

2001年に制作された韓国映画は65本、公開された韓国映画は52本である。韓国映画の興行収入は前年度の2倍を上回る約2,600億ウォンとなり、全体の興行収入も5,000億ウォンを超えた。

韓国映画の観客動員数は、全国4,400万人、ソウル1,600万人と、共に前年の2倍となった。全体の観客動員数は、前年から2,500万人増の8,900万人となった。前年まで30%台であった、韓国映画の全国観客動員数が合計観客数の50%に達した。外国映画の観客動員数は3,000万人から4,000万人台を推移しているため、韓国映画の観客数が急激に増加していることがわかる。2000年と比べ、格段に外国映画との差も縮まっている。

韓国映画の興行成績1位は、『友へーチング( )』、2位は前年から継続上映された『JSA』、3位が『猟奇的な彼女( )』であった。1999年の『シュリ』、2000年の『JSA』と、南北問題がからむ内容のヒットが連続した。しかし、2位に前年の『JSA』が高い人気を得ているものの、この年のヒットは、男性同士の友情の世界を描いた『友へーチング』やインターネット小説を基にしたラブストーリー『猟奇的な彼女』などで、『JSA』や『シュリ』(1999)などとは異なるタイプの韓国映画のヒットを生んだ。

その中で、条件に当てはまる作品は、3位『猟奇的な彼女』、5位『花嫁はギャングスター( /やくざの妻)』、12位『バンジージャンプする( )』、13位『ラスト・プレゼント( /プレゼント)』である。

### 1. 『猟奇的な彼女』(2001) クァク・ジェヨン

3位の『猟奇的な彼女』(2001)は、クァク・ジェヨン監督・脚本の作品である。原作は1974年生まれ作家キム・ホシクが、1998年にPC通信ナウヌリに連載していたもので、作者の実体験を基に書かれたインターネット小説を映画化したものである。

クァク・ジェヨン監督は、1959年生まれで、大学は慶熙大学物理学科出身である。在学中にとった短編作品『先生を描くこと( )』が青少年映画祭で作品賞を受賞した。卒業後、イ・ボンウォン監督の助監督を務め、1989年『雨の日の水彩画(

)』で監督デビューを果たした。今回の『猟奇的な彼女』(2001)は、8年ぶりの監督作品である。そのほかの作品として、『雨降る日の水彩画』(1989)、『秋の旅行(ガ )』(1991)、『雨降る日の水彩画2( )2』(1993)、『ラブストーリー( 、クラシック)』(2002)、『僕の彼女を紹介します( )』(2004)などの作品がある。また、自らの監督作品以外にも脚本を手がけ、『純愛中毒( /中毒)』(2002)、『ピアノを弾く大統領( )』(2002)、『デイジー( )』(2005)などの脚本も担当している。

この映画は、第22回(2003)香港金像奨最優秀アジア映画賞、ゆうばり国際ファンタスティック映画祭2002ヤング・ファンタスティック・グランプリと観客の人気投票によるファンタランド大賞、第22回(2001)青龍映画賞で脚色賞などを受賞している。

男性主人公キョヌは、復学生(兵役を終えて大学に復帰した人)である。彼女のいないキョヌに、おばが女性を紹介するという話があったが断った。公益勤務要員として兵役を終えて戻ってきたキョヌは、復学生として戻ったことを仲間たちと一緒に楽しく祝った。

帰り道、地下鉄で泥酔している女性と同じ車両に乗り合わせた。酔っ払っているが、魅力的な女性である。彼女を見ていると、彼女は自分の前に座っているおじいさんの頭の上に吐いた。なぜか彼女は、キョヌの方を見ながら「チャギヤ(ダーリンの意味)」と言い倒れたため、周囲の人から彼女だと誤解され、介抱する羽目になった。

地下鉄を降りて、ベンチに彼女を下ろして立ち去ろうとしたが、結局は自腹でホテルに連れて行き、薬と水を飲ませ寝かせた。その後、汗や嘔吐物を流すためにシャワーを浴びたが、誤解を受けて警察に連行されてしまう。

次の日に釈放されて家で寝ていると、彼女から呼び出された。昨日のことを説明するように問い詰められる。彼女は初対面のキョヌに対して「ため口」をきき、命令口調である。食事しに行くと、隣で食べているお客に向かって「お前ら援助交際だろ、身分証出してみろ」と言い争いになった。しかし、酒が入ると酔っ払い「私、昨日好きな人と別れたの」と泣き出し、再び気を失ってしまう。キョヌは再び彼女をホテルで寝かせ、彼女の心の傷を癒そうと決意する。

2人で過ごす毎日は、にぎやかなものであった。酔っ払い迎えに来いと彼女に言うと放置され警察の檻の中にいた。彼女が迎えには来てくれたが「このやろう、ちゃんとしろ」と殴られる。またある時は川の深さを確かめるために、カナヅチのキョヌを水の中に突き

落とした。ある日、私の誕生日を忘れたら殺すと言われ、夜の遊園地を貸しきりにして喜ばせようとした。そこで脱走兵と出会い人質となったが、彼女が説得し脱走兵は改心する。

高校の制服でクラブに行ったり、彼女が書いたシナリオを読んだり、スポーツをしたりと、多くの時間を2人で過ごした。酔っ払った彼女を家まで送り届けて父親と出くわし説教をされ、2人の交際は認められないとも言われた。

彼女が両親から強制的に男性を紹介された時、キョヌは突然現場に呼び出された。複雑な思いを隠し、彼は彼女と付き合う方法を相手に伝える。彼女は帰っていくキョヌを追って地下鉄の駅まで走り、場内アナウンスでキョヌを呼び出した。現れたキョヌと抱き合ったのも束の間、彼女は再びキョヌを殴った。

2人は、タイムカプセルを丘の上に埋めた。中身はお互いに対する手紙である。2年後の再会を約束し、2人は別々の列車に乗って別れた。キョヌには、2年間はとても長く、つらい日々を思えた。彼女との楽しい思い出をインターネットで発表したら、映画会社から映画化の話が舞い込んだ。しかし、今は彼女に知らせることはできない。キョヌは、全くできなかったスポーツの腕を磨きながら、再会の日を待った。

約束の場所で待っていたキョヌだが、彼女は来なかった。キョヌは1人で手紙を読み、彼女は恋人が死んだ悲しい思い出を持っていたことなど、彼女の思いを知った。

更に1年経った。今日は、おばに女性を紹介してもらう日である。電話ですぐに行くということを告げ、待ち合わせ場所に向かった。その女性は留学から帰ったばかりで、数年前恋人を亡くしていた。女性はあの彼女であった。彼女の亡くなった恋人はおばの息子であり、息子の恋人が彼女であった。2人は信じられないと言う気持ちで見つめあい、テーブルの下でそっと手をつないだ。

レビューでは、「常套的メロでありながらこの映画が澁刺としている理由は、20代の軽さを描き、誰でも共感できる新世代の感受性と恋愛法が日常に自然に溶け込んでいるからだ。最近の映画ジャンルが逃してきた部分を提示できたため購買力は大きい、新しいものであるのに陳腐なものになった」<sup>32</sup>と、売れたが内容的には陳腐であるという意見や、「このようなかわいい女性が猟奇的（「ちょっとおかしな」「変な」「かわいいわりに突拍子もないことをする」といった意味／シネマコリアより）な行為ばかりし、男性がよく想像する理想的女性像をやたらと覆すのは、こっけいであると同時に、痛快であると言え。そして、何よりとんだ性格は魅力的に見える。それは今の若者たちの趣向と絶妙にかみ合うのである。しかし、猟奇的ハプニングはコメディを誇張するためにわざとらしい設定が

されているが、どこか不自然だ。コメディとメロ、猟奇コードがごった返すが、それでも、N世代<sup>33</sup>のための飴玉のような映画だ」<sup>34</sup>と男性の理想を覆した映画という評価もある。

その他、「猟奇的な彼女は、どこに飛ぶかわからない世代の女性像を代弁しているように見えるが、1人の男性だけを見続け、私は愛しか知らない、というスタイルの朝鮮女人像を含んでいる。キョヌのような平凡な男性の理想の片方を持っている。韓国的感性と性的役割を抜け出さない基本に堅実なキャラクターと緊張感のある取り留めのないドラマで、本当のロマンティック映画のように作られた」<sup>35</sup>という新しい世代を表しているようで、実はそうでもない映画としての評価もある。

## 2. 『花嫁はギャングスター』(2001) チョ・ジンギユ

5位の『花嫁はギャングスター』(2001)は、チョ・ジンギユ監督の作品である。脚本は、カン・ヒョジン、キム・ムンソンが担当している。この作品はチョ・ジンギユ監督のデビュー作であり、韓国映画史上初めて、女性がやくざクシヨン映画に主演したヒット作である。チョ・ジンギユ監督は、1960年大邱生まれで、嶺南(ヨンナム)大学美術学部西洋学科を卒業後、日本の早稲田大学大学院に留学した。韓国に帰国後、フリーのプログラムディレクターとしてSBS系の会社に入り、娯楽プログラム制作に参加した後、『花嫁はギャングスター』(2001)で監督デビューを果たした。この作品は、当時歴代興行成績4位という結果をたたき出した。

その他の作品に、『オッケドンム( : 竹馬の友・親友、肩を組む)』(2004)『ソウルウェディングー花嫁はギャングスター3( 3 : やくざの妻 3)』(2006)がある。ちなみに、『花嫁はギャングスター』(2001)の続編である『ザ・ブライドー花嫁はギャングスター2( 2ー /やくざの妻 2ー帰ってきた伝説)』(2003)は、チョン・フンスン監督の作品である。

やくざの男性パダは、自分の後輩である男が部下として使えそうなので、自分の組に入れようと、事務所に連れてきた。パダは事務所に向かいながら、組のナンバー2が持つ伝説を話した。その実力は何十人もの敵に囲まれても、1人でそれを全てなぎ倒すほどで、大きなハサミを持って格闘し、1人でその場を治めたというものである。

事務所に入ると、スーツを着た男たちの中に、新聞を読む女の姿があった。後輩が女性をからかおうとした途端、周囲の男たちに睨まれた。この女性こそ、やくざ界の生きる伝



説であり、組織のナンバー2 ウンジンである。50人の部下を束ねているウンジンだが、幼い頃両親がおらず孤児院で育ち、そこで別れた姉の思い出がある。特殊な状況だが男性が女性に従い、女性が強い立場で描かれている。

ウンジンは探し回った末、別れていた姉と再会する。しかし姉は胃ガンの末期状態であった。死を目前とした姉の願いは、ウンジンが幸せな結婚をし、温かい家庭を作り、平凡な人生を生きることであった。結婚どころか恋愛もしたことのない極道一筋のウンジンは、早速部下たちに相談しながら結婚相手を捕まえようとするが、失敗続きで上手くいかない。結婚を恋愛ではなく、姉の願いのためにしようとしている。家族のためなら結婚もできることが肯定的に描かれている。

ある時、ウンジンが道端でチンピラともめていると、ウンジンをやくざと知らない男がかばってきたが、けがをして病院に運ばれた。その男はお見合いで58回も断られているという町役場の職員スイルである。スイルは愛らしい妻と温かい家庭を夢見ている。スイルに助けられたことをきっかけに、ウンジンは部下にスイルの事を調べさせ、スイルと結婚することにした。

無事に結婚式を終え、新婦のウンジンがやくざであることを知らないスイルは、甘い結婚生活を夢見ていたが、ウンジンの言葉遣い、いびき、暴力などに対して、驚きを隠せなかった。スイルは家事を全くやらず、一緒に寝るのを拒否するウンジンが恐ろしいばかりであった。その頃ウンジンはビルを合法的に運営し、自分と部下たちの安定した基盤を用意するため20階建てのビルを新築中であった。しかし、この建物が接している地域には白ザメ派が存在し、ウンジンが建設中のビルの経営利権に目をつけ、不穏な動きをしている。

ある日スイルは、ウンジンの背中に彫られた龍の刺青を見て、妻の正体を知ってしまう。これまでの扱いはひどく、結婚生活もろくなものではなかったため、スイルはウンジンと離婚する決意をするが、ウンジンは姉が死ぬときまでは夫婦を続けてほしいと頼む。結婚はあくまで家族である姉のためであると肯定的に描かれている。

病院で手の施しようがなくなり、自宅で姉の看病することになった。そんな姉にかわいい赤ちゃんが見たいと言われたため、夫婦生活を拒絶し続けてきたウンジンが、自らスイルを襲うようになる。そんな中、姉の容態が急変し病院へ搬送され、ウンジンは急いで病院に駆けつける。妊娠したことを姉に告げると、姉は微笑んだ。ウンジンは姉の最期を看取った。

ある日ウンジンの部下であるパダが、白ザメ派のチンピラたち刺さされ、死亡した。現

場にいたパダの彼女は、パダのことをすぐに連絡し、ウンジンにも連絡が入った。少しずつウンジンとスイルの関係がよくなり、ウンジンは初めてスイルに料理を作ろうとしていたが、パダのことを聞いて家を飛び出した。

向かった先は、白ザメ派のところであり、先に乗り込んでいた部下たちは倒れていた。ウンジンは何とか闘うが、結局はやられて病院へ運ばれる。腹ばかり攻撃を受けたため、流産してしまったウンジンを見て、スイルはある決意をする。

白ザメ派が酒を飲んでいるところに、スイルが灯油を持って乗り込んだ。灯油を撒き散らし、火を点けようとするが失敗してしまう。しかし、白ザメ派のやくざがタバコに火をつけようと、ライターに火をつけてしまい、その瞬間火の海になり、スイルは急いで脱出した。白ザメ派は大打撃を受けて壊滅状態となった。

その後、白ザメ派を壊滅させたことで、スイルは新たな伝説として語られるようになった。やくざと対峙するスイルは黒ずくめの服装にサングラスをかけ、ウンジンの武器であるはさみを取り出し、取り出したはさみをウンジンに渡した。復活したウンジンの横に立っているのは、気弱であったスイルである。

### 3. 『バンジージャンプする』(2001) キム・デスン

12位の『バンジージャンプする』(2001)は、キム・デスン監督、コ・ウンニム脚本である。キム・デスン監督は1967年生まれである。韓国の中央大学演劇映画科を卒業し、イム・グォンテク監督の『西便制( )』(1993)演出、『娼( )』(1997)助監督、『春香伝( )』(2000)助監督などを経て、この作品で監督デビューを果たした。監督作品として他に『血の涙( )』(2005)、『ノートに眠った願いごと(가 / 秋へ)』(2006)がある。

『バンジージャンプする』(2001)は、第24回黄金撮影賞で新人監督賞、第22回青龍映画賞で新人監督賞、脚本賞、第37回百想芸術大賞でシナリオ賞、ドイツのハンブルグ映画祭観客賞であるゴールデン・テサ・フィルムなど多くの賞を受賞している。

物語は1983年の夏から始まる。国文科2年、男子学生イヌは、彫刻科2年生の女性テヒに出会う。ある雨の日のバス停で、イヌがバスを待っていると、傘を持っていないテヒが自分の傘に走り込んで来た。一目惚れを信じないイヌであったが、この出会いでテヒに一目惚れしてしまう。

しばらく経ったある日、イヌは学校でテヒを見かけすぐに追いかけたが、緊張と口下手で話せない。しかし、徐々に距離を縮め、付き合うことになる。テヒは、大切な人ができたら渡そうと思っていた、自分の似顔絵を彫刻したライターをイヌにプレゼントした。けんかをしつつも、一緒に過ごしてきたが、イヌが兵役に出発する日が近づいていた。テヒは出発の当日は必ず見送りに行くからと約束し、ついに出発の日を迎えた。しかし、列車が出発する時間になっても、テヒはあらわれない。イヌは必ず行くと言ったテヒの言葉を信じ、次の日になっても駅で待ち続けたが、テヒは現れなかった。

17年後の2000年春、テヒのことを忘れられないままイヌは新しい生活を送っていた。高校の国語教師として働く彼は、結婚して娘も1人いる。イヌは担任になった男子クラスの生徒ヒョンビンが気になりだす。自分が異常かと思い、精神科に行ってみるが「極めて正常」という診断である。

イヌは、ヒョンビンが突然いなくなった、テヒの生まれ変わりではないかと思い始める。ヒョンビンには、テヒと同じ癖があるなど、テヒの面影がある。

イヌとヒョンビンが同性愛者といううわさが校内で流れた。同性愛者であると糾弾するような張り紙が貼り出され、授業はボイコットされる。そして、イヌは学校を解雇され、妻にもあなたは同性愛者だったのかと責められ、見放される。

ヒョンビンはなぜか分からないが、同性愛者扱いの原因であるイヌを憎めなかった。ライターを見ながら、覚えのないはずのテヒとイヌの記憶が浮かぶ。ヒョンビンは、自転車に乗り、学校を飛び出した。テヒとイヌの記憶が思い浮かび、自転車を必死にこいで向かった先は、軍隊に行くイヌと見送るテヒが待ち合わせた駅である。

ヒョンビンが駅前の横断歩道を渡る途中、トラックにはねられた。はねられた瞬間、イヌと待ち合わせていたあの日、なぜテヒがイヌに見送れなかったのかというテヒの記憶を思い出した。テヒはここでトラックにはねられ死亡していたのである。ヒョンビンははねられたが無事で、すぐにホームに向かった。

イヌは、現れたヒョンビンをやっと来たねと迎えた。列車の窓に映るのはイヌとヒョンビンではなく、イヌとテヒであった。「ごめんね、遅くなったでしょ」というテヒにイヌは、「遅くても来てくれてありがとう」と返した。

2人は、ニュージーランドのバンジージャンプをしに行った。手をつなぎ橋の上から飛び降りた。「次は女に生まれないと」「僕も女だったらどうするの」「もう一度待たなくちゃ」というテヒとイヌの会話とイヌのナレーションで終了する。

観客の評価では、「感動的」「生まれ変わり・仏教のことを考える」「何度見てもよい」「韓国のメロドラマで一番よい」「構成が良かった」「記憶に残る映画」というプラスの評価と、「何が言いたいかわからない」「愛のためとはいえ利己的過ぎる」というマイナス評価があったが、全体的にプラス評価が多い。

#### 4. 『ラスト・プレゼント』(2001) オ・ギファン

13位の『ラスト・プレゼント』(2001)は、オ・ギファン監督の作品である。1967年生まれで、漢陽大学演劇映画科を卒業し、1992年に映画界へ入門した。しかし1993年から1995年までは広告プロデューサーとして働き、1996年に朝鮮日報のドキュメンタリー監督を任された。1994年に西江大学大学院で映像を専攻し、韓国映画アカデミー9期を卒業後、助監督を経験した。映像に関する多様な経験によって、この作品が制作された。その他の作品として、『作業の定石 ( /作業とはナンパのこと)』(2005)『2人だ ( )』(2007) などがある。

売れないコメディアン男性の主人公ヨンギは、相方と「お笑い王」という番組の前座をやっている。前座で稼いでいるが、少ない給料を酒に費やしている。ヨンギは結婚しており、2年前に子供が死亡した。妻チョンヨン、稼ぎの少ない夫の怠惰な生活に別れたほうがましと言う。

ヨンギとチョンヨンは学生のころ出会った。チョンヨンに一目惚れしたヨンギがチョンヨンのアルバイト先に何度も押しかけ、2人は付き合うことになった。チョンヨンが孤児であったため、ヨンギの両親に結婚を反対されたが、それを押し切って結婚した。

チョンヨンは、ヨンギに冷たく当たっているが、夫がコメディアンとして成功することを心から願っている。夫の成功のため、番組のプロデューサーやプロデューサーの妻に、ヨンギが番組に出演できるように、夫に隠れて頼みに行っている。

ある日ヨンギは、金さえあればレギュラーにしてやるという詐欺師に出会う。実力で売りたいヨンギはその話を断る。本人に断られた詐欺師は、妻のベビー用品店に向かい、夫がレギュラーで出られるようにしてやる話を話をする。話し合いの途中、妻は突然倒れ病院に運ばれた。一方ヨンギは、初めは否定的であったが売れない自分の身を嘆き、妻が開いているベビー用品店を担保に金を手に入れ、その金を詐欺に渡そうとした。

しかし詐欺師は受け取らず、お前の妻が倒れたという話しをする。すぐに病院に向かっ

たヨンギは、実は妻は以前から病にかかっており、余命が短いことを知る。医者責めるが、医者からなぜ気付かなかったのだと逆に叱られる。ヨンギは呆然とし泣き崩れる。

ヨンギは、最近チョンヨンが昔の写真を懐かしそうに見ているのを思い出した。写真に丸印がある人物がいたので、妻は初恋の人に会いたがっているのだと考え、詐欺師に人を探して欲しいと頼む。担保をすぐに取り戻し、小さな営業にも出かけて稼ぎ、妻のために体にいいものを買ってきた。

チョンヨンは自分がもう長くはないと考え、夫のためにできる限りのことをしようと、プロデューサーの妻に何度もお願いに行っていた。プロデューサーの妻は、話してみるけど期待しないでと言って立ち去ろうとするが、チョンヨンはそこで再び倒れてしまう。プロデューサーの妻に「なぜ病気を夫に黙っているのか」と尋ねられ、チョンヨンは「何もしてあげられないから邪魔したくない」と答える。

ヨンギは勘当されていた実家を訪ねた。以前妻が父親のために編んだセーターを持っていき両親に謝り、妻のことを話した。しばらくして両親がチョンヨンの店に来た。今までつらく当たってごめんなさい、あなたは立派な嫁だと言い、両親と夫婦の4人で家族写真を撮った。写真が家族の証として登場している。チョンヨンは嫁としてやっと認めてもらえたと、母親の墓参りに来る。母が病気であることを死ぬまで言わなかったことを思い出し、今ならその理由がわかると言った。

詐欺師たちは人探しをしていた。写真の人物を尋ね、皆に会いに行けないなどと断られていたが、友人だけはチョンヨンに会いに来た。写真にある丸の印はこの友人の片思いであり、写真はお互いの好きな人に印をして交換したものであった。ヨンギはチョンヨンの初恋が、そのころ転校して来た自分であったことを知った。

「お笑い王」に出ることができたヨンギのコンビは順調に勝ち進み、ついに決勝戦まで進んだ。準決勝まではテレビで見ていたチョンヨンであったが、決勝戦はステージを見に行った。夫がステージで演じているのは、まるで自分たちの出会いから今までをなぞるかのようなコントであった。それを見届けたチョンヨンは、そのまま意識を失った。チョンヨンは亡くなり、葬儀を済ませてきた夫が1人で家にいる。

## 第8節 2002年の韓国映画

2002年に制作された韓国映画は78本、公開された韓国映画は82本である。制作、公開された映画は、どちらも前年度を上回っている。韓国映画の興行収入は約3,000億ウォン

であり、全体の興行収入は約 6,300 億ウォンである。前年度から映画市場が拡大していることがわかる。

韓国映画の観客動員数は、全国約 5,000 万人、ソウル 1,800 万人であり、前年度伸びに比べると大幅な観客増加とは言えないが、増加の傾向を示している。全体の観客総数は、ついに 1 億人を突破し、約 1 億 500 万人となっている。外国映画が、前年度より 1,000 万人増加の 5,400 万人であった。韓国映画の全国観客動員数は、48.3%と前年からは減少しているものの、2001 年に続き韓国映画と外国映画にそれほど差がない結果となっている。

韓国映画の興行成績 1 位は『大変な結婚 (가 / 家門の栄光)』、2 位は『おばあちゃんの家 ( / 家へ)』、3 位は『達磨よ、遊ぼう! ( )』であった。1 位である『大変な結婚』は、やくざの娘がエリートの婿と結婚するまでを描いたやくざのラブコメディ、2 位の『おばあちゃんの家』は都会の孫と田舎の祖母の関係を描いたもの、3 位の『達磨よ、遊ぼう!』は、僧侶とやくざの争いを描いたものである。この年は、1995 年の『ドクター・ポン』ぶりに、ラブコメディが 1 位を獲得しており、1996 年から 2005 年までの 1 位の中でラブコメディはこの作品だけである。

その中で、1 位の『大変な結婚』、8 位の『セックス・イズ・ゼロ ( / 色即是空)』、9 位『夢精期 ( )』、11 位『永遠の片思い ( / 恋愛小説)』、15 位『オアシス ( )』が当てはまる。9 位『夢精期』は日本未発売のため入手できず未見である。

## 1. 『大変な結婚』(2002) チョン・フンスン

1 位の『大変な結婚』(2002) は、チョン・フンスン監督の作品である。1960 年生まれで、ソウル芸術大学映画科を卒業し、1984 年にキム・ギヨン監督の作品演出、イ・ミョンセ監督の助監督を経験した。1997 年に『懸賞手配 ( )』で監督デビューした。この作品は 2 作目で、3 作目は『ザ・ブライド—花嫁はギャングスター2』(2003) である。

ソウル大学出身の男性テソは、若くして会社を経営しているエリートである。ある朝、ホテルの一室でテソが目覚めると、隣に女性チンギョンが寝ていた。2 人は昨日のことを全く覚えていない。2 人はひとまずホテルを出たが、テソは偶然彼女に見られてしまう。

テソが会社に出勤すると、やくざに屋上へ連れて行かれた。やくざはチンギョンの兄たちであり、チンギョンはやくざ会長の娘であった。3 人はテソがエリートだと知り、学歴のないことがコンプレックスとなっている自分たちの家に、エリートを加えたいと考え、2

人を結婚させようという作戦に出る。

2人に何もなかったことを証明するために、テソはチンギョンに連絡をとり、処女かどうかの検査を受けてほしいと言った。チンギョンは、始めは断っていたが了承する。検査の結果は処女であると証明されることになった。

結局2人は、チンギョンの家に行かなければならなくなった。チンギョンの父親は、テソとチンギョンに夫婦は縁、赤い糸で結ばれていると言い、寝たのなら結婚するしかないと言う。テソは証明書もあり2人は何もなかった、と断ろうとするが、父親は「生娘なのに何が気に入らない」と怒り出す。

2人が結婚する話が急激に進み、テソの家族と食事をするようになった。テソの父親は元軍人で、チンギョンの父親に対して強気に出ようとしたが、やくざが恐ろしいため、命が惜しいから結婚してくれと息子に頼んだ。

テソの彼女はチンギョンを呼び出し、「一回寝たくらいでいい気になるな。家族もやくざのくせに」と言った。チンギョンは直後にテソと会い「やくざだが私にとっては大事な家族。母親がいない中、愛されて育ってきた。なぜバカにするのか」と泣き出した。

テソがチンギョンの兄たちと飲みに行くと、テソの彼女とモデルの男性のキスを目撃してしまう。実はこのモデルは、チンギョンの兄たちに仕組まれた人物であった。テソは彼女の浮気を怒りに行くわけでもなく、彼女の方を見ずに知らない振りをした。

チンギョンはテソに「家に戻り、結婚を白紙にするよう説得する」とEメールで別れを告げ、実家に帰ろうとする。テソは自分の気持ちに気付き、チンギョンを追いかけた。

ついに、2人の結婚式の日がやってきた。長男は、母親も生きていたらと、母親のことを思い出すのであった。式は始まったが、外が騒がしい。次男と三男は、襲ってきたやくざを倒そうとするが、会場の入り口にまで来てしまう。入り口で、テソとチンギョンを含めた、家族全員でやくざと戦うのであった。

はじめにチンギョンとテソがホテルで目覚めたのは、酔わせた2人を無理やり同じ部屋に運んだ兄弟たちの仕業であった。この結婚ははじめから仕組まれていたのである。

## 2. 『セックス・イズ・ゼロ』(2002) ユン・ジェギョン

8位の『セックス・イズ・ゼロ』(2002)は、監督の作品であり、2003年2位でもある。1969年生まれで、高麗大学経済学科卒業後、広告制作に携わり、多くの広告を制作した。1997年には、世界インターネット広告公募で最高賞を受賞した。1999年、『新婚旅行』で

企業主催のシナリオ公募で最高賞を受賞した。

その後『女高怪談 2』のシナリオを共同制作するなど、いくつかの脚本を手掛けてきたが、2001年に『マイボス・マイヒーロー（ ）』で監督デビューした。その他に『浪漫刺客（ ）』（2004）『1番街の奇跡（1 冨 ）』（2007）がある。『セックス・イズ・ゼロ』（2002）は2作目であり、監督が脚本も手掛けている。第8回（2003）女性観客映画賞「最悪の韓国映画」選定作品、第5回（2003）Udine Far East Film Festival 招待作品、韓流シネマ・フィステバル 2005 上映作品である。

兵役を終了し、大学に復帰した法学科1年生の男性ウンシクは、27歳である。ウンシクは、体育科3年生でエアロビクス部代表選手である22歳の女性ウニョに一目惚れする。

サンウクはお金持ちのプレーボーイで、ウニョと同じエアロビクス部に所属しているジウォンと付き合っている。サンウクは以前から美しいと評判のウニョが気になっており、ウニョに付き合おうと言った。ウニョはサンウクがジウォンと付き合っていることを知っていたが、サンウクは「ジウォンとは別れた」と言った。

次の日、ウニョはジウォンに叩かれた。ジウォンは、「人の男を取るのには母親譲りか、父親も知らないくせに」とウニョを罵った。ウニョはサンウクと付き合っている訳でもなく、頭にきたので叩き返した。結局ウニョとサンウクが付き合うことになった。

もうすぐウニョの誕生日なので、友人たちでウニョのために誕生日会を企画した。ウニョが欲しい指輪のために、ウンシクたち同好会の4人で120万ウォンを稼いだ。一方ウニョは、調子が悪いと思っていたら妊娠していた。サンウクにその事実を話すと本当に俺の子なのかと疑われ、責められた。サンウクは、再びジウォンとよりを戻したのであった。

ウニョは産婦人科を訪れたが、保護者や相手と一緒に来いと言われる。サンウクに明日時間があるかと尋ねると、金があるだろとカードを渡される。ウニョは、金なんて頼んでないとカードを叩き落とし、サンウクの前から立ち去った。ウニョは、母親に話そうとするが、店で忙しそうに接客している。気持ちを落ち着けようと、お気に入りのリングがあった店に行ってみるが、そのリングはなく、ウニョは落ち込んだ。

その頃、友人と同好会のメンバーはウニョの誕生日のために、ケーキを準備して待っていた。ウニョが現れたので一斉に祝い、ウンシクが指輪をウニョに渡そうとするが、ウニョはウンシクを叩いて出て行ってしまった。

ウニョからウンシクに電話あり、午後からデートをしようという誘いであった。ウンシ



クがデートだと思って向かった先は、産婦人科である。今日ウニョは手術を受けるのだ。ウニョは無事手術を終え、ウンシクはプレゼントの指輪を返品し、ウニョが必要だと思うものを買って戻ってウニョの看病をした。

エアロビクスの大会の日に、安静にしていなくてはならないはずのウニョが、個人戦に出るために会場に来た。最後まで踊りきったウニョであったが、トイレで血まみれになり、倒れていた。ウンシクは、ウニョを連れて病院へ向かった。病院に駆けつけた母親は、苦労して育てたのにこのばか娘と叱った。ウンシクはサンウクを殴り飛ばし、ウニョの病院へ連れて行った。

数日後、ウニョはウンシクの部屋を訪ね、自分のことがまだ好きかどうかをウンシクに聞いた。2人はいい雰囲気であったが、寮が火事になり、2人は窓から飛び降りた。

レビューでは、「ここ数年の韓国映画において<最も志の低い映画>と評されても仕方のない内容で、あまりの下品さ、汚さは、観る者の多くに拒否反応を抱かせるだろうし、拒絶することも容易である。だが、ここまでやればむしろ清々しさと作家性すら感じさせ、ふざけているようであっても、実は演出側の緻密な計算に成り立っているのではないかと思わせる、カッチリとした構造を持つ作品だ」「一部の日本人が見たら卒倒するかもしれない。俳優たちの素晴らしい演技と、あまりにも下品な内容という、相反するものが共存して成立している不思議な映画」<sup>36</sup>という評価を受けており、タブーに挑戦した映画であったと言える。

### 3. 『永遠の片想い』(2002) イ・ハン

11位の『永遠の片想い』(2002)は、イ・ハン監督の作品である。1970年生まれで、漢陽大学演劇映画科を卒業し、ペ・チャンホ監督の下で学んだ。この監督は、愛を映画という道具で論じることを好む監督の1人であるといわれている。この作品でデビューし、2006年には『青春漫画～僕らのシナリオ～( )』を制作している。

大学を休学中のチファンは、カフェでアルバイトをしている。父親は幼い頃死亡したが、父親の影響で写真好きである。チファンのカメラのファインダーに2人の女性スインとキョンヒが入ってきた。スインは清楚な雰囲気、病弱なところがある。キョンヒは明るく活発な雰囲気である。スインとキョンヒは高卒で大学に入っていない。2人は親友でいつも一緒に行動している。

スインに一目惚れしたチファンは、告白したがスインに断られた。しかし、チファンは彼女たちに友達になろうと提案し、20歳の3人はいい友達として、楽しい日々を送った。

ある時、チファン、スイン、キョンヒの3人は、車で旅行することになった。旅行中は、仲良く楽しい時間を過ごしていた。チファンとスインは、お互いの初恋の話をした。幼い頃チファンは、好きな子をいつも見ているだけであった。その子に向かって、ガキ大将の少年が「お前は今日から俺の女だ」と言ったので、女の子を守ろうとした。女の子に「あんた強いの?」と言われ、チファンは強いとってしまい、ガキ大将の少年とけんかすることになった。結局負けてしまい、女の子は「強い男が好き」とガキ大将について行った。女性の好みは「強い男性」として描かれている。

スインの初恋は、スインは病弱で入院していた頃である。その頃、同じ位病気が重いのに、いつもどこかでいたずらをして、スインの病室に逃げ込んでくる子がいた。スインは、その子と仲良くなり、いつも一緒に遊んでいた。

しかし、旅行中にスインの体調が悪くなり、そのまま入院することになった。その後、チファンが2人と会うことが少なくなっていった。スインは、初めて告白された時は断ったが、徐々にチファンのことが気になりだしていた。キョンヒも同様にチファンのことが好きになっていた。初めスインのことが好きであったチファンは、徐々にキョンヒのことが好きになっていた。

チファンとの友人関係が重荷になったという言葉を残し、キョンヒとスインは連絡先も住所も残さず姿を消してしまった。チファンは、2人がいなくなった事実を簡単には受け入れることができず苦しんだ。

5年後、苦労して2人を忘れたと思っていたチファンに、差出人がわからない写真が届いた。チファンはこの写真から、キョンヒとスインを思い出し、2人の手がかりがありそうな場所を探した。すると、スインは数年前に既に亡くなっており、キョンヒはソウルから離れ田舎で生活していた。手紙を送ってきていたのは、キョンヒであった。

手紙をもとに、チファンはキョンヒが暮らしている家を探し当てた。2人は久々の再開を果たした。しかし、キョンヒも病を患っており、余命わずかであったのだ。

チファンに対して、葬式に男が来ないと村人に笑われるから葬式に来てほしいという手紙を送った。手紙が小道具として何回か登場している。そのまま、キョンヒは亡くなったのである。2人の女性主人公が死亡し、全く幸せな要素が無いままエンディングを迎えた。

後半で登場したキョンヒは、前半部分の活発な印象が全くなくなっている。それらは、

キョンヒの服装や見た目に現れている。前半ではパーマの髪に、カジュアルな服装をしていたが、後半ではストレートの黒髪に、服装はロングスカートとカーディガンなど、白を基調としたファッションになっている。この髪型やファッションは、当初のスインにも当てはまり、病弱でおとなしく、死亡することを暗示している。

#### 4. 『オアシス』(2002) イ・チャンドン

15 位の『オアシス』(2002) は、イ・チャンドン監督の作品である。1954 年生まれで、慶北大学師範学部国語教育学科を卒業した。7 年間大邱で演劇活動をし、演出や俳優を担当した。1981 年から 1987 年までは教師として教壇に立ち、1983 年に『戦利 ( )』で小説家としてデビューした。その後、文学の限界を感じていたとき、友人の誘いで助監督と脚本を担当したのが映画界へ入るきっかけとなった。パク・クァンス監督の『美しき青年—全泰堯 ( )』で脚本を担当し、第 32 回 (1996) 百想芸術大賞シナリオ賞を受賞した。

その後、1997 年に『グリーンフィッシュ ( )』で監督デビューし、「新人監督とは思えない完成度を持つ作品」と高い評価を受けた。監督、脚本を担当した 2 作目の『ペパーミントキャンディ ( )』(2000) は、NHK との共同制作作品であった。小説家出身の監督であり、作品性が強く、かつ商業的に成立する作品を生みだすことができる監督の 1 人と言われている。

この作品は 3 作品目であり、第 59 回ヴェネチア映画祭で特別監督賞を含み、5 つの部門で受賞した映画である。その他『密陽 ( )』(2007) を制作している。

ジョンドゥは、車で人身事故を起こし刑務所から出所したばかりである。しかし、事故は実は兄が起こしたもので、ジョンドゥは身代わりにさせられた。前科があるなどして、ジョンドゥは家族から疎外されがちであった。

ジョンドゥは、人身事故を起こした相手側の家へ花を持って訪ねた。その家には、コンジュがいた。コンジュは、重度の脳性麻痺患者である。体が麻痺しており、ゆっくりとしか話せない。兄夫婦と暮らしていたが、アパートに 1 人置いていかれた。兄とその嫁は、障害者を持つ家族用のアパートに、コンジュを除いた家族だけで住んでいる。兄夫婦は、隣人に月 20 万ウォンで、コンジュの面倒を見させている。

ジョンドゥはコンジュが気になり、部屋へ通うようになった。初めは、コンジュも警戒

していた。しかし、チョンドゥはコンジュの話し相手になり、一緒に掃除や洗濯をし、2人で食事をした。徐々に2人は、仲良くなっていった。コンジュの車椅子を押して、2人で地下鉄に乗り、外へ出かけることもあった。しかし、食事をしようと店に入ると、2人は拒否されてしまう。仕方なく、ジョンドゥは中華の出前をとり、コンジュに食べさせた。

ある日、チョンドゥの家族にお祝い事があり、コンジュを連れて会場へ向かった。しかし、チョンドゥの家族は、なぜ連れてきたのかと、コンジュのことを拒絶してしまう。コンジュを送り家まで来ると、コンジュはジョンドゥに帰って欲しくないと言い、2人は関係を持つとした。しかし、コンジュの部屋を訪ねてきた兄夫婦は、コンジュが強姦されていると思い警察に通報し、ジョンドゥはそのまま警察に連れて行かれた。コンジュは、必死に事実を伝えようとするが、うまく伝えることができない。誰も2人の関係を理解することができず、チョンドゥは逮捕された。

コンジュは相変わらず、あの部屋で生活している。チョンドゥから来た手紙を読みながら、チョンドゥが戻ってくるのを待っている。

## 第9節 2003年の韓国映画

2003年に制作された韓国映画は80本、公開された韓国映画は65本である。制作数はほぼ同数であるが、公開数は約20本減少している。全体的な公開本数も減少しており、この年は1996年から2005年までの公開本数のうち、一番少ない年であった。韓国映画の興行収入は、約3,800億ウォンであり、全体の興行収入は約7,100億ウォンである。韓国映画は約800億ウォンの伸びを示しており、映画市場の拡大は続いている。

韓国映画の観客動員数は、全国で約6,300万人であり、その内ソウルの観客は約2,100万人である。前年度に比べ、1,000万人以上の増加となっている。外国映画の観客数が約5,500万人であるため、外国映画の観客数を上回り、韓国映画の観客動員数が全体の53.4%を占めている。韓国映画の観客動員数と興行収入は、2000年までは外国映画を大きく下回り、2001年、2002年と同程度であったが、2003年からは完全に上回っている。

韓国映画の興行成績1位は『殺人の追憶（ ）』、2位は『同じ年の家庭教師（ ）』、3位は前年度8位の『セックス・イズ・ゼロ』であった。1位の『殺人の追憶』は、実際に起こった殺人事件を元にしたもの、2位の『同じ年の家庭教師』、3位の『セックス・イズ・ゼロ』はラブコメディである。

その中で、2位の『同じ年の家庭教師』、4位の『スキャンダル』、10位の『シングルズ

( )』、12位の『君に捧げる初恋 ( /初恋死守決起大会)』、15位の『浮気な家族 ( 가 )』が条件に当てはまる。

### 1. 『同じ年の家庭教師』(2003) キム・ギョンヒョン

2位の『同じ年の家庭教師』(2003)は、キム・ギョンヒョン監督の作品である。慶熙大学新聞放送学科を卒業している。大学時代、校内で劇団を創設し、脚色と演出を任されていた。卒業後は、KBSに入社しドキュメンタリーとドラマに携わった。その後、テレビ局を辞めて助監督として映画界に入った。フリーランサーとして広告、企業広報映画演出、ドラマ脚本、シナリオ脚色など、多様な活動をしている。監督はこの作品で長編映画デビューを果たした。その他、『라이어 ( )』(2004)『大韓独立万歳』(2007)などがある。

父親の失業によって、実家が鶏肉屋になったスワンは、大学2年の女子大生である。彼女は、学費のために家庭教師をはじめめる。スワンは、これまでに家庭教師を何度かくびになっている。今日も不真面目な生徒に遭遇し、家庭教師を7日目でくびになってしまう。

しかし、家庭教師をしなければ学費を払うことができないと母親に責められ、再び家庭教師の仕事を探すことになる。母親の紹介で家庭教師の職を得たが、出会った次の生徒は成金一家の長男で喧嘩好きのチフンである。学校では番長で高校を2回も退学になったため、高校生だが同じ年である。

スワンは、初対面から「ため口」で話し、授業時間中はタバコを吸い続けるチフンに対してやる気を失う。しかし、もしもくびになれば、母親に申し訳なく思い、先生として優位に立とうとするが、チフンの行動に参ってしまう。そうこうしながら、スワンとチフンは、問題を起こしながらも徐々に仲良くなっていった。最後はハッピーエンドである。

レビューでは「まさに次世代の韓国映画界を牽引する新しい才能の登場の証として、今後重要になるであろう作品」「この『同じ年の家庭教師』は、従来韓国映画にはないスタイルを持っているため、往年の作品スタイルが好きな韓国映画ファンの一部には少し違和感と抵抗感を与えるかもしれない。その意味で、一般の映画ファンの方々に、積極的に観て評価を下して欲しい作品だ。韓国映画の未来形を示す作品」<sup>37</sup>という評価を受けている。

## 2. 『スキャンダル』(2003) イ・ジェヨン

4位の『スキャンダル』(2003)は、『情事』(1998)を制作したイ・ジェヨン監督の3作目である。原作は、フランスの小説『危険な関係』である。

チョ・ウォンは29歳のプレーボーイであった。狙った女性は必ず手に入れてしまう。ウォンには初恋の人がいたが、別の人の妻になった。その女性は、いとこであるチョ夫人である。チョ夫人は、ウォンに対して賭けを持ちかけた。チョ夫人の夫が新しく側室を迎えるので、その女を手に入れるという内容であった。ウォンは、若い女性など簡単すぎて面白くもなんともないと言い、9年間亡くなった夫を思い続ける未亡人のヒョンを落として見せると言う。成功すれば、チョ夫人を手に入れることができる賭けになった。

ウォンはヒョンに近づこうとするが、簡単ではなかった。堅く貞操を守り、キリスト教を熱心に信仰している。ウォンは礼拝に参加してみるが、ヒョンは全く誘いに乗らない。偶然を装い本屋で待ち伏せするが、拒まれてしまう。

側室のソオグがやってきた。彼女は、偶然顔を合わせた青年と恋に落ちてしまう。夜中に青年が女性のところへ忍び込んだり、手紙のやり取りをしたりするようになってしまう。そのうち、チョ夫人とウォンに目撃されてしまい、2人の関係が知られてしまう。チョ夫人とウォンは、2人の関係を応援すると言った。ウォンはソオグに手紙の書き方を教えてやると部屋に呼び出し、ソオグを手に入れてしまう。

ある日、ヒョンが道で男性に絡まれている所をウォンが助けた。それをきっかけに、ヒョンが拒絶するにもかかわらず、ウォンは手紙を送り、2人は手紙のやり取りをするようになった。ウォンはヒョンに、恋が叶わないので諦めて寺に入ると言い、同情を買おうとした。ウォンはチョ夫人に、もうすぐヒョンを落としてあなたを手に入れる、と宣言する。

ヒョンはウォンを遠ざけようと、遠くに引っ越すが、ウォンはそこまで会いにくる。ヒョンは、ウォンに少しずつ心を動かされ、ついにウォンとヒョンは一夜を過ごした。ヒョンは、ウォンと夫婦になれたらいいのに、とまで言う。ウォンが北京へ向かうことになったときも、一緒に行きたいと言うのであった。

ウォンは、いつの間にかヒョンのことを本気で愛するようになっていた。しかし、それを隠してヒョンを突き放してしまう。ある時、ウォンは恨みを持っていた人物に、刺されてしまう。しかし、どうしてもヒョンに会いたかったウォンは、必死に馬を走らせたが、ついにヒョンのところへたどり着くことは出来なかった。

ヒョンは、自分に会いに来ようとしたウォンが亡くなった事を知り、自ら命を絶った。本当はウォンの事を愛していたチョ夫人は、ウォンの死を悲しんだ。宮中にあることが出来なくなったチョ夫人は、ソオグを連れて出て行った。

レビューでは、「この作品は、韓国人の壮絶なセルフ・パロディといえるだろう。特筆すべきは、自らの歴史的文化的素材を使って、真っ正面から自己社会批判を行っていることだ。舞台となる李氏朝鮮時代が、韓国人にとって伝統と文化を象徴する誇りであると同時に、硬直と停滞の象徴でもあることを、それが今でも韓国の奥底に延々と巣喰い続ける封建時代の呪縛であることを、訥々と訴えているかのようだ」「今の視点から観ると、滑稽極まりない男女間のしきたりと、それに矛盾する自由奔放な男女の駆け引きの様相は、大いに笑ってから考えるべきであり、そこですぐさま『韓国は儒教思想がどうたらこうたら』などと、したり顔で論じようものなら、『引っかかったな』とばかりに監督のイ・ジェヨンにはよくそ笑まれそうだ。悪趣味ともいえる春画が流出するくだりは、そんな底意地悪いユーモアが噴出している」としており、韓国の伝統を皮肉に描いていることを指摘している。

### 3. 『シングルス』(2003) クォン・チリン

10位の『シングルス』(2003)は、クォン・チリン監督の作品である。1960年生まれで、漢陽大学建築工学科を卒業し、韓国映画アカデミー2期を卒業した。その後、1995年『愛するのいい日( )』でデビューし、この作品は2作品目である。原作は、日本のドラマ『29歳のクリスマス』(1994)である。

デザイナーの女性ナンは、上司に嫌がらせを受ける、彼氏には振られる、デザイナーであるのに外食産業に異動させられるなど、大きなストレスを抱えていた。愚痴を言い、親友トンミの家へ押しかけた。トンミは仕事のできるキャリアウーマンであり、年下の男性チョンジュンの家で居候生活をしている。ナンは愚痴を言いつつ、27歳のときは課長、23歳のときは世界的デザイナー、20歳のときはキャリアウーマンになりたいと思っていた昔のことを思い出し、全く違うと嘆いている。現在ナンは、29歳である。

トンミは会議で、自分が手掛けたプロジェクトを発表した。当然、本番のプレゼンテーションでも、自分で発表できると思っていた。しかし、上司は本番のプレゼンテーションでは自分が発表すると言った。トンミは、自分のプロジェクトは自分で発表したいと反発した。室長は、「女性アシスタントが本番でプレゼンをするのか」と言って取り合わない。

会議の後、室長はトンミに「プロらしく引くところは引け、私についてくればいい、よいパートナーになれる」などと言った。トンミは室長に一泡吹かせ、そのまま辞職した。

ナンが働く店に、以前エレベーターで偶然出会った男性が来た。エレベーターで渡したメモ用紙は、この店のクーポン券であった。男性はスホンと言い、ナンがデザイナーとして働いていたビルにある、証券会社で働いている。スホンが送ってくれるというので、ナンは車に乗り込んだ。2人は、改めて自己紹介をし、デートの約束をした。

トンミがチョンジュンとけんかをしたので、ナンは仲直りをしろと言った。トンミは家に戻り、チョンジュンと酒を飲みながら話をした。酔ったチョンジュンは泣き出し、トンミはチョンジュンを慰めていたが、そのまま2人は勢いで関係を持ってしまった。

スホンは、結婚相手がいくら稼いだら、仕事を辞めて家に入ると思うかとナンに尋ねた。しかしナンは、よくわからなくなる。デート中に不機嫌になり、帰り際にスホンとけんかをしてしまった。しかし、心配したスホンは、ナンの家まで戻ってきた。

ナンは昼間に、結婚するつもりだった別れた彼氏が店に来て、思い出してしまったことを話し、2人は仲直りした。スホンはナンの家に泊まり、次の日ナンにプロポーズした。スホンは、ニューヨークに行ったらデザインの勉強をするようナンに勧めた。しかし、ナンは人の手を借りて夢を叶えるなんて、と考えていた。

トンミの家へ行くと、トンミが妊娠していることが発覚した。チョンジュンの子どもだが、トンミはチョンジュンに言うつもりがない。その後、チョンジュンが別の場所に引っ越すことになったことを知る。

ナンは、店長が子どものために店を辞めるということを聞き、結婚して店を辞めると言い出せずにいた。トンミの所へ行くと、結婚せずに自分で産む決意をしていた。ナンは「子供を産めば就職は絶望的になり、結婚もデートも無理になるがいいのか」と訪ねると、トンミは「自分でお金をもうけて幸せになるつもり」と話した。妊娠の事実を知らないチョンジュンは、トンミと一緒に引っ越そうと誘うが、トンミは断った。

トンミは、自分の事務所を立ち上げた。ナンが事務所を訪れると、妊娠した事実を知った父親が事務所に来て、暴れて帰ったため、事務所が荒らされたようになっていた。トンミは、それでも子どもを産むつもりだと話した。ナンは、自分が父親になると言った。

ナンは、スホンに結婚を断った。デザイナーが天職かと思っていたけど、今の仕事が楽しいこと、しかし向いているかはわからないことを伝えた。スホンは、待つのは得意だと言うのであった。ナンとトンミは、2人で生まれてくる子どものために準備をしていた。



#### 4. 『君に捧げる初恋』(2003) オ・ジョンノク

12位の『君に捧げる初恋』(2003)は、オ・ジョンノク監督・脚本の作品である。1959年生まれで、釜山大学独文学科を卒業している。1985年から1992年までMBCドラマ制作局のプロデューサー、1992年から2001年までSBS制作部門のプロデューサーを勤めている。主にテレビドラマの監督を務めており、映画を監督したのはこの作品のみである。

男性主人公テイルと女性主人公イルメは、幼馴染みである。テイルは、幼い頃からずっとイルメのことが好きである。イルメの父ヨンダルは、テイルが通う高校で生物を教える生徒指導担当の教師である。テイルは、高校生になった今でも、イルメと結婚することを言い続けている。

ヨンダルは、勉強せずに問題ばかり起こしているテイルの将来のために、イルメと作戦を立て、問題児のテイルが優等生になれば、イルメと結婚させてやると言った。テイルは、イルメと結婚したいという一心で、毎日鼻血が出るほど勉強し、ついに韓国一のソウル大学に合格した。

しかし、イルメを結婚させたくないヨンダルは、テイルに再び条件を突きつける。次の条件は、司法試験合格である。テイルは次の条件もクリアしようと必死に勉強し、不可能だと思われていた司法試験に合格した。ヨンダルはテイルの努力に感動し、イルメとテイルの結婚を応援するようになる。

司法試験の合格祝賀パーティで、ヨンダルは2人の結婚を発表しようとした。しかし、イルメは他に好きな人がいると言い、結婚を断った。イルメは、プレーボーイの男性に気に入られ、結婚しようと言われていたのだ。

ついに、イルメが結婚することになった。他の男性と結婚しようとしていたのは、自分が病で余り長く生きられないことを知ったからであった。自分のことを思っているテイルと結婚すれば、自分がすぐに死ぬことで悲しませるため、すぐに違う人を見つけることができそうな、プレーボーイの男性と結婚しようとしていたのである。テイルは、イルメの病気を治すために、医者になることを決意するのであった。テイルは病床のイルメの手を握っている。

レビューでは、「作品で人気と注目を集めた出演者たちが勢揃い。一見期待大の作品だが、映画は大仰なだけで、中身はなく、がっかりの出来映え。制作の裏側で行われた『こうすれば観客に受けるだろう』といった論議が聞こえて来そうなシーンの寄せ集めのよう

な作品である」<sup>38</sup>との評価を受けている。

## 5. 『浮気な家族』(2003) イム・サンス

15 位の『浮気な家族』(2003) は、イム・サンス監督の作品である。1962 年生まれで、延世大学社会学科を卒業し、韓国映画アカデミー5 期を卒業している。その後、イム・グオンテク監督の下で制作、キム・ヨンビン監督の助監督、パク・チョンウォン監督の脚色を担当し、1995 年にはシナリオ公募に当選した経験を持つ。

1998 年の『ディナーの後に』で自らシナリオを書き監督デビューした。第 19 回 (1998) 青龍賞で新人監督賞を受賞する。ドキュメンタリータッチの作品『ティアーズ(涙)』(2000) の後、3 作目にこの作品を制作した。第 60 回ヴェネチア国際映画祭に出品、また第 30 回ベルギーフランドル国際映画祭最優秀監督賞を受賞している。

元ダンサーのホジョンは、弁護士の子ヨンジャク、7 歳の息子スインの 3 人で暮らしている。息子は祖母に預けられることがあるが、養子だから祖母に嫌われていると思っている。夫は、別の女性のところへ通っており、妻は薄々気付いている。義父は病気で、義母は浮気中である。

義父は容態が悪化し、本格的に入院することになった。夫は仕事があるからお前が迎えに行けと妻に頼むが、妻は自分で面倒見なさいという。夫は全くこの嫁は、とあきれられる。結局、義父を迎えに行くのは妻ホジョンであった。夫の浮気は普通のこととして肯定的な描かれ方をしている。

最近、隣に住む男子高校生がホジョンに興味を示している。その高校生が自転車で出かけるのが気になり、ホジョンは自転車で追いかけた。行き着いた先は映画館である。離れた席に座り 2 人で映画を見た後、初めて言葉を交わした。

夫は会社の出張と嘘をつき、浮気相手と 2 人で旅行に行く。その間、ホジョンは隣の高校生と 2 人で、登山に出かけた。高校生は、自分と付き合えないかと提案するが、ホジョンはかわすが、キスをされる。ヨンジャクは、車で旅行から帰宅途中、郵便配達のパイクと事故を起こした。

義父は、死亡した。義母は「これまで我慢してきた人生だったが、これからは自由に生きる」「恋人がいるから結婚する」と息子夫婦の前で告白し、恋人と旅立った。

高校生の父親は、ホジョンの夫に「あなたの妻がうちの息子を誘惑している」と話す。

その頃、息子は学校帰りに郵便配達員に道を尋ねられた。案内してくれと言われるが、息子はそのまま連れ去られた。この配達員は、夫が事故に合わせた男である。息子はビルの上から投げ落とされ死亡し、配達員もそのまま自殺した。

夫は電話で、今すぐ会いたいと浮気相手に話をしていた。その会話を妻は聞いてしまう。妻は「他に行くところがあっていいわね、会いに行ったら」と言った。夫は「女がいることが今問題なのか、お前こそ高校生の父親が息子を誘惑していると事務所に来たぞ」と言い返す。ここまで夫の浮気は全く咎められなかったが、妻は浮気している訳ではないにもかかわらず夫は妻を激しく非難している。

夫婦は殴り合いになり、夫が妻の指をけがさせてしまう。妻は病院に行き、夫は浮気相手の所へ行った。浮気相手の家に行くと、そこには違う男がいたので、家に戻った。一方ホジョンは高校生を呼び出し、初めて関係を持った。

その後、ホジョンの妊娠が発覚する。夫が、ダンススタジオで働き続けるホジョンを訪ねて来た。「やり直そう、もう一度がんばる」と夫は言うが、ホジョンは拒絶する。妻は妊娠した事実を告げ、「あなたの子じゃないわ」と言う。夫は「それでもいいから」と言うが、ホジョンは「これ以上あなたとは無理」ときっぱり断った。

## 第 10 節 2004 年の韓国映画

2004 年に制作された映画は 82 本、公開された韓国映画は 74 本である。制作本数は、前年に比べ、上向き傾向であるが落ち着いている。興行収入は、韓国映画が約 5,000 億ウォンという規模であり、外国映画を合わせると、約 8,400 億ウォンである。興行収入は、完全に韓国映画が上回る結果となっている。

韓国映画の観客数は、全国で 8,000 万人を超えソウルでは約 4,700 万人である。外国映画を合わせると、1 億 3,000 万人を超え、韓国映画の観客数は、全体の 59.3% を占めている。韓国映画が外国映画をさらに観客、興行収入で引き離す結果となっている。

韓国映画の観客動員数 1 位は『ブラザーフード』であり、2003 年から継続上映されていた『シルミド/SILMIDO ( )』と『オールド・ボーイ ( )』が、それぞれ 2 位、3 位に入った。『シルミド/SILMIDO』と『ブラザーフード』は、韓国映画史上初めて 1000 万人を超える観客を動員した。1 位の『ブラザーフード』は、朝鮮戦争、2 位の『シルミド』は実際に起こった実尾島事件の真相、3 位の『オールド・ボーイ』は、日本の同名漫画を元に映画化した復讐をテーマにしたものである。

その中で、『マイ・リトル・ブライド ( / 若い花嫁)』、『私の頭の中の消しゴム ( )』、『僕の彼女を紹介します』、『オオカミの誘惑』が条件に当てはまる作品である。

## 1. 『マイ・リトル・ブライド』(2004) キム・ホジュン

5位に入った『マイ・リトル・ブライド』(2004)は、キム・ホジュン監督のデビュー作である。キム・ホジュン監督は、日本で映画を学んだ監督である。この作品の他に『ジュニ、ジュノ ( , )』(2005)という作品も撮っている。

大学で美術を専攻し、海外に留学中であったサンミンが韓国に呼び戻された。空港には隣に住む幼馴染で16歳の女子高生ポウンが迎えに来ていた。2人が家に戻ると、ポウンの祖父が、2人に結婚するよう命令する。しかし、2人は拒絶する。

ポウンの祖父は、2人が結婚することが願っていた。若くして死んだ自分の友人であるサンミンの祖父が、自分の妻であるポウンの祖母を好きだったと知っていたため、ポウンの祖父は自分の子と友人の子を結婚させようと決めていた。しかし、子の代には男性しかおらず「孫の代には」と思っている。

祖父は何とかして2人を結婚させるために、仮病を使って入院し「死ぬ前に2人の結婚式を見たかった」と言った。それを見たポウンは、結婚するから死なないでと言っしまい、2人は仕方なく結婚することになった。高校生で結婚したポウンは、結婚の実感がわからず、新婚旅行の前に空港から逃げてしまい、サンミンは新婚旅行を1人で過ごした。

その頃ポウンは、憧れの先輩の野球部主将チョンウとデートをすることになっていた。親友ヨンジュは、結婚しているのにデートをするポウンに「夫と愛人がいてうらやましい」「結婚しているのにデートだなんて不倫」と言う。ヨンジュは先輩が好きなので、きつい言い方になり2人の仲がこじれてしまう。友人は妻が夫に尽くすべきという考えを持っており、高校生にしてこの考え方を持っていることが肯定的に描かれている。

その後、サンミンの教育実習先がポウンの学校になってしまう。ポウンの担任であるキム先生がサンミンを気に入り、サンミンは追い回される。一方ポウンは先輩とのデートを続けていたが、ついに家族とサンミンにばれてしまう。更に学校では、2人の結婚がキム先生に知られてしまう。

サンミンに気があったキム先生は、嫌がらせのために、文化祭用の体育館の大きな絵を

ポウン 1 人に割り当てる。1 人で絵を描いていたが、親友が手伝いに来てくれ、仲直りする。2 人は作業を進めるが、絵が大きすぎて進まない。その様子を見ていたサンミンは、2 人が帰ったあとに絵を手伝った。ポウンはサンミンが手伝ったとわかり、嬉しく思った。

ある時、偶然サンミンの手帳に、挟まれている手紙を見つける。その手紙は、軍隊に面会に行った時、ポウンがサンミンに宛てたものであった。教育実習中にサンミンが授業で初恋の話をしたことを思い出した。ポウンは、サンミンが大学の先輩が好きだと勘違いしていたが、手紙を見てサンミンの気持ちを理解した。

ポウンは、文化祭で付き合っていた先輩に別れを告げた。文化祭のステージで、ある女子がポウンとサンミンの結婚を発表してしまう。サンミンは、2 人の結婚は無理やりさせられたものであり、ポウンには何の非もないので、今までどおりに接して欲しいと言った。それを聞いたポウンはステージに上がり、本当に好きなのはサンミンであると告白した。

数年後、ポウンは主婦をしていた。ポウンを取り囲み、サンミン、サンミンの家族、ポウンの家族は一緒に家族写真を撮った。

評論では、「古典的コメディの再現を行っているため、好き嫌いがはっきり別れる作品に仕上がっているが、意外に巧妙で、そして丁寧で微妙な面白さを持つ作品」というプラスの意見と、「割と薄い内容だが、2 人の主人公の魅力に助けられた」というマイナスの評価がなされている。プラスの評価を下した論評は日本での論評であり、マイナス評価は韓国でなされていた評価である。

インターネットでの観客たちの反応である「ネティズンたちによる評価」では、面白かったという内容が割と多い。主人公 2 人がよかった、内容は軽いが何も考えずに見るならお勧め、などの意見が目立つ。批判的意見では、内容が幼稚、後半のストーリーが最悪、最後を無理に盛り上げようとするのでしらける、などであった。

## 2. 『私の頭の中の消しゴム』(2004) イ・ジェハン

『私の頭の中の消しゴム』(2004) は興行成績 6 位である。イ・ジェハン監督による作品であり、2001 年に日本で放送されたドラマ『Pure Soul～君が僕を忘れても～』をもとにした映画である。小説家キム・ヨンハが脚色を担当した。脚本も担当したイ・ジェハン監督は 1971 年生まれである。12 歳でアメリカに移住し、15 歳から短編映画を作り始めた。ニューヨーク大学で映画を専攻し、在学中に短編映画を約 40 本制作した。1998 年に自ら脚本を担当し制作した『THE CUT RUNS DEEP ( )』(2000) でデビューしている。

スジンは物忘れが激しい。買った缶ジュースを忘れ、コンビニに戻った。入り口でぶつかった男性が缶ジュースを持っており、スジンは彼が盗んだと思い、彼の手から缶を奪い一気に飲み干した。しかし、財布も忘れたことに気付いて、コンビニに戻ると、店員に財布と缶ジュースを渡された。自分の間違いだったと気づき、さっきの男を探してみるがそこにはいなかった。

デザイナーとして働くスジンは、会社の展示場修理を父親の会社に発注した。修理のためにきた男性は、この間のコンビニの男であった。彼は父親の会社の工事現場で現場監督として働く建築士志望のチョルスといい、2人は付き合うことになる。

その後、スジンは結婚したいとプロポーズするが、チョルスは拒否する。幼い頃母親に捨てられたため、家族や愛情とは無関係だと1人で生きてきたチョルスは、結婚を負担に感じていた。しかし、チョルスはスジンに少しずつ心を開き、2人は結婚した。

結婚後、チョルスは建築士の試験に合格して、仕事に来るようになるなど、幸せな日々が続いていた。チョルスは、スジンの物忘れは許容範囲であると思っていたが、スジンの物忘れは酷くなっていった。病院に行ったスジンは、医師から自分の脳が死んでいく病気であると知らされた。全ての記憶を無くしてしまう病気と知り、スジンはチョルスから離れようとするが、チョルスはスジンを支えながら生きる決意をする。

その日から、少しでも記憶をつなぎとめるために、2人の写真や、名前、住所、電話番号などのメモを貼った。しかし、それでもスジンの記憶は失われていった。自分が誰であるかも、家族が誰であるかわからなくなり、昔の恋人の名前を呼びながらチョルスに愛していると言ったり、自分から約束したはずの家族が遊びに来る日を忘れてりするようになる。スジンの家族はチョルスに離婚を勧めたが、チョルスはスジンと生きることを選んだ。

ある日、チョルスが仕事から戻ると、誰もいない家に手紙が残されていた。手紙にはスジンがチョルスだけを愛しているということ、全て忘れてしまってもあなたのことは覚えておきたい、それも叶わないのなら、最後まで覚えているのはあなたと過ごした日々でありますようにと記してあった。

消えたスジンを探して、チョルスはスジンが生活する施設にたどりついた。スジンは自分を見ても何も反応しない。付き添う人に様子を聞くと、調子のよいときは記憶が戻ることもあるという。チョルスはスジンの外出許可をもらい、2人が初めて出会ったコンビニへ連れて行った。最後はチョルスとスジンが道路を車で走っている。記憶が残ったわずかの間だけでも一緒にいる2人の姿がある。

評論では、「質が向上した新世代韓国メロドラマ」で、「主演の 2 人が素晴らしい」「チヨルスの家族との葛藤が安易で半端な物だったり、ヒロインを巡る周辺の人々の描き方が形式的だったり、気になる部分もある」とし、「ちょっぴり残酷だが、すてきで切なく、そして哀しく、人々の普遍的な美しさを讃えた作品」<sup>39</sup>としているものや、「韓国の正統派メロドラマで、催涙性メロ」であり、「アルツハイマーをメロドラマの新しい不治の病にすえ」たことで「メロドラマ自体の変奏を試みた」「今までの過剰なメロドラマとは違う新しい点は、記憶と愛の関係に注目しているところにある」<sup>40</sup>などとしている。また「韓国のメロドラマから消えていた家族の情緒を導入して差別化を図ったが、キャラクターが平凡だったため、平凡な不治の病メロドラマになってしまった」<sup>41</sup>ともあった。

観客の評価としては、「主演がかっこよかった（かわいかった）」「とても悲しく感動的だった」「胸が痛い映画」「うらやましいカップル」というプラスの評価と、「映像と涙はメロ映画っぽかったが未熟な作品」「泣けばいいというものではない」というマイナスの評価がされていた。興行成績 6 位なので、人気があった映画である。よい映画だという評価の観客の感想に、「胸の痛い・悲しい映画」という言葉が多く、胸の痛い悲しい映画は好んで観られており、やはり人気を集めているようだ。

### 3. 『僕の彼女を紹介します』(2004) クァク・ジェヨン

『僕の彼女を紹介します』(2004) は興行成績 12 位の作品である。クァク・ジェヨン監督の作品であり、『猟奇的な彼女』(2001) の前段階を思わせる映画になっている。

クァク・ジェヨン監督は、1959 年生まれであり、慶熙大学卒業である。この作品以外に、『雨降る日の水彩画 ( )』(1989) 『雨降る日の水彩画 2 ( )』(1993) 『猟奇的な彼女 ( )』(2001) 『ラブストーリー ( )』(2002) 『デージー ( )』(2005) などの作品がある。

警察官のキョンジンは、ある日ひったくりの男を捕まえ交番に連行した。ところが、男はひったくりではなく、ひったくりを追っていたのである。彼はミョンウと言い、職業は教師である。

ある日、ミョンウは青少年の非行防止のために、ボランティアのパトロールに参加した。そのとき、高校生の不良のけんかに巻き込まれている女性を見つけた。ミョンウをひったくりと間違えて逮捕した、あのキョンジンであった。そのまま麻薬密売組織による銃撃戦

に巻き込まれ、ミョンウはキョンジンと手錠でつながれたまま、命がけの一夜を過ごす羽目になった。ミョンウは男勝りな彼女に魅了され、キョンジンも彼のことが好きになる。

2人は夏に旅行へ出かけた。そこで落石事故にあい、川に落ちたミョンウは、意識を失い死にそうになる。ミョンウはキョンジンの必死の処置で一命を取り留め、彼女への気持ちを一層強めたのであった。

キョンジンには、双子の姉がいた。とてもよく似ているので、2人で度々入れ替わりながら過ごしていた。姉はピアノが大好きであり、警官になるのが夢であった。ある日姉は、キョンジンのかわりに出かけた先で、交通事故により死亡してしまった。キョンジンは、自分が交通事故にあうはずであったと自分を責めた。そのため、姉がなりたかった警察官になったのだとミョンウに教えた。

ある時、キョンジンが犯罪者を追跡している際、ミョンウは彼女を助けようと、自らの危険をかえりみず現場へむかった。キョンジンは犯人に向かって発砲していた。しかし、他人が撃った流れ弾がミョンウに命中してしまう。キョンジンはミョンウのそばに駆け寄り、叫びながら助けを呼んだが、ミョンウは死亡した。

キョンジンは自分を責め続け、ビルの上から飛び降り自殺をしようとした。飛び降りるが、なぜか助かってしまう。何度か自殺を試みるが、うまくいかない。

キョンジンは部署を移動になった。ミョンウが現場に来たときに追っていた犯人と、再び銃撃戦となり、キョンジンは銃で撃たれて、意識不明の重体になった。そのときの夢にミョンウが現れた。キョンジンは、自分をわざと危険にさらすようになり、自分がいつ死んでもかまわないという気持ちで仕事をしていた。彼女の元に死んでから49日目、ミョンウが現れた。ミョンウは、キョンジンにどうか幸せになってほしいと言って、彼女の元から去っていった。

評論では、「クァク・ジェヨン監督のスタイルが好きな人にはたまらないが、こういったお遊び感覚の映画は韓国では受け入れがたかった。チョン・ジヒョン出演のテレビCM引用の連続にうんざりし、『猟奇的な彼女』(2001)を引きずった内容は、生真面目な韓国のファンからすれば、幼稚で安っぽく映り、韓国内での興行成績は伸び悩んだ。しかし、決して完全にだめな映画なわけではなく、いかに冗談と遊びを理解し、楽しむ気持ちを持てるかである<sup>42)</sup>」というものや、「恋愛映画を期待する女性観客と、コメディやアクションを好む男性観客まで取り込めるだろう<sup>43)</sup>」という肯定的な意見がある。

反対に、「チョン・ジヒョンは魅力的であるが、どんな場面も彼女にだけ注目しており、



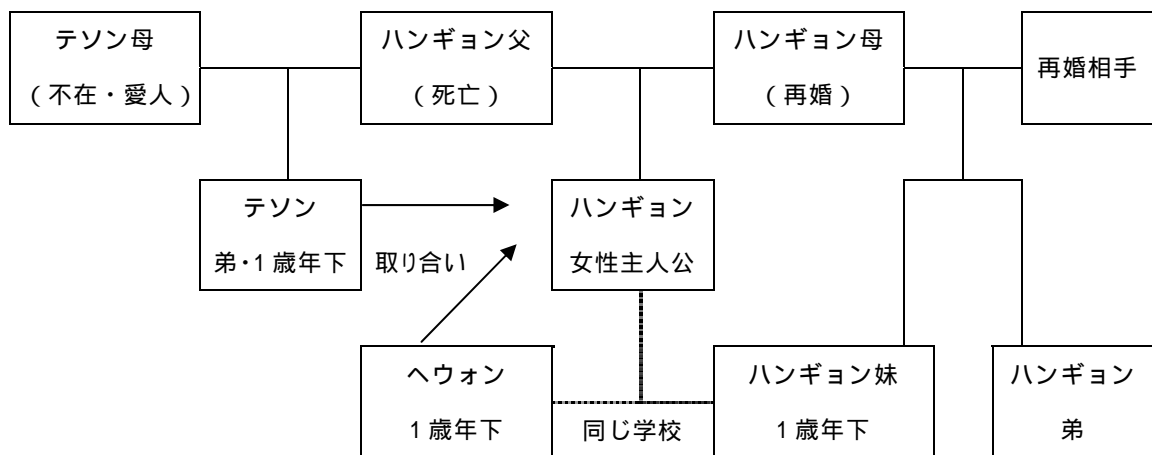
催涙性ラブストーリーからコメディ、アクションまで多様な要素がほとんど生かされていない」「様々な演出は、非現実的な設定で、雲に浮かんだようなラブストーリーである。前作と比べてもキャラクターの魅力が劣り、カメラワークや特殊効果まで技術的完成度も物足りない」「チョン・ジヒョンがCMに出演している商品がファッションブランドからヨーグルトまで露骨に挿入され、作品自体が巨大なCMプロジェクトのようである」「死んでいく男性が観客の感情の流れを指示し、案の定、男性を送ることになった女性が悲しい愛の物語を完成させたと主張するのには同意できない」<sup>44</sup>という否定的な意見もある。

#### 4. 『オオカミの誘惑』(2004) キム・テギョン

『オオカミの誘惑』(2004)は、14位に入った作品である。原作はインターネット小説家であるクィヨニのインターネット小説であり、『                     』(1996)の監督でもあるキム・テギョン監督の作品である。この映画は第3回大韓民国映画大賞を受賞している。

原作のクィヨニは、本名イ・ユンセであり、1985年生である。インターネット小説家として人気があり、多くの作品が映画化、ドラマ化などされている。『           (あいつは格好よかった)』『           (オオカミの誘惑)』『           (ドレミファソラシド)』は映画化、『           (アウトサイダー)』『           (シンドローム)』はドラマ化、『           (五つの星)』はモバイルドラマ化されている。その他、『           (私の彼氏へ)』などの作品がある。

図1 『オオカミの誘惑』(2004) 人間関係



映画を参考に筆者作成

登場人物の関係は、図の通りである（図 1）。素朴な性格と容貌をもつ女子高生ハンギョンは、ソウルで母親と再婚相手の新しい父親と暮らすために上京し、カンシン高校に転校してきた。本当の父親は既に亡くなっている。先にソウルに来ていた女友達に会うと、自分が好きだった男友達と付き合うことになっていた。傷心のハンギョンがバスに乗っていると、頭に上履きが飛んできた。上履きを投げたのはパン・ヘウォンという男で、カンシン高校一のイケメンである。

ヘウォンは、素朴なかわいさを持つハンギョンを好きになってしまう。ところが、ハンギョンに一目惚れする男がもう 1 人現れる。隣の高校一のイケメン、チョン・テソンである。突然出会ったテソンは、ハンギョンに覚えていませんかと尋ねたのである。初めて会うテソンにハンギョンは覚えがない。2 人は、ハンギョンを取り合い一歩も譲らない。

ハンギョンは、テソンが本当に自分の弟であると思い出した。テソンは亡くなった父親の愛人の子供である。ハンギョンは弟との再会を喜び、姉として弟をかわいがる。2 人の取り合いは続くのだが、テソンは弟であり、ハンギョンはヘウォンと付き合うようになる。

テソンは弟として振舞ってはいたが、本当に姉を好きになり、ハンギョンに姉でなければよかったのに、と自分の気持ちを打ち明ける。しばらくして、テソンの祖母が亡くなり、テソンはハンギョンへの気持ちを抱えたまま、親戚のいる海外へ留学することにする。

数年が経ち、相変わらずヘウォンと付き合うハンギョンに、テソンは時々、電話や手紙、インターネットでの映像で元気だという連絡をしてくる。しかし、テソンは未だハンギョンへの気持ちを諦め切れずはいなかった。テソンが海外へ行った本当の理由は、不治の病を患っており、手術を受けるためであった。

しばらくして、ハンギョンたちのところに、テソンの友人の女性が尋ねてきた。彼女の口から、テソンが亡くなったということを知らされた。

映画の評価としては、10 代向けファンタジーといわれ、内容はいまひとつであると言われている。「映画を純粹に商品、市場で流通する物品というマーケティング的視点で観た場合、極めて優れた完成度が高い映画である<sup>45)</sup>」という評価もあるが、大方の評価は、「目立ったところがひとつもない平凡な女子高生が格好いい年下の男から熱烈に愛されるという『ファンタジー』である<sup>46)</sup>」という評価である。「献身的愛と叶わぬ愛、この 2 つのキーワードはマッチョな男性 VS 純潔な男性という対立軸によって長い間韓国映画、TV ドラマを通じて拡大再生産されている。現在も進行形だといえる」という指摘もあり、献身的愛、叶わぬ愛が、長い間続く韓国の映画、ドラマの重要なテーマであるとされているようだ。

## 第 11 節 2005 年の韓国映画

2005 年に制作された映画は、87 本であり、公開本数は 83 本である。公開本数の全体は、外国映画の影響を大きく受けており、2003 年の低い数値以降、増加傾向にある。1996 年以降の韓国映画では、全体的に増加傾向である。韓国映画の興行収入は、約 5,200 億ウォンであり、全体の興行収入は、約 8,900 億ウォンである。韓国映画は、約 500 億ウォン増加している。

韓国映画の観客動員数は、全国で約 8,500 万人であり、その内ソウルの観客は約 4,600 万人である。韓国映画の観客動員数は、全体の 58.7% を占めており、前年同様外国映画を完全に上回っている。興行収入や観客動員数は、2000 年以降のような大幅な伸びはないが、緩やかに増加している。

韓国映画の興行成績 1 位は『トンマッコルへようこそ (  : ウェルカムトゥトンマッコル)』、2 位は『マラソン (  )』、3 位は『家門の危機 (가  —가

2 : 家門の危機—家門の栄光 2)』である。1 位の『トンマッコルへようこそ』は、朝鮮戦争時代のヒューマンドラマ、2 位の『マラソン』は、自閉症の子どもと家族のヒューマンドラマ、3 位の『家門の危機』は、やくざのラブコメディである。

その中で、3 位の『家門の危機』、7 位の『ユア・マイ・サンシャイン (  、君は僕の運命)』、9 位の『私の生涯で最も美しい一週間 (  가  )』、11 位『クァンシクの弟クァンテク (  )』、13 位の『恋愛の目的 (  )』、14 位の『ダンサーの純情 (  )』が条件に当てはまる。ただし、9 位の『私の生涯で最も美しい一週間』、11 位『クァンシクの弟クァンテク』、13 位の『恋愛の目的』は、未見である。

### 1. 『家門の危機』(2005) チョン・ヨンギ

3 位の『家門の危機』(2005) は、チョン・ヨンギ監督の作品である。1970 年生まれで、漢陽大学演劇映画学科を卒業した。2004 年の『人形霊 (  / 人形師)』でデビューし、この作品は監督の 2 作目である。この作品は「家門シリーズ」の 2 作目で、3 作目の『家門の復活—家門の栄光 3』(2006) も制作している。また、1 作目の『大変な結婚』(2002) は、チョン・フンスン監督が制作している。

やくざの女ボス、ドクチャの長男インジェは独身である。インジェを結婚させようと、

周囲はお見合いをさせるが断ってしまう。今回もインジェはお見合いを断り、店から出てきた。その時、1人の女性が前を通り過ぎ、インジェは一目ぼれしてしまう。

その女性はチンギョンといい、検事としてやくざがいる部屋に乗り込んだが、逆に捕まりそうになってしまう。通りかかったインジェは、やくざたちを倒し、意識を失ったチンギョンをつれて自分の部屋へ戻った。目覚めたチンギョンは、自分が何かされたかと勘違いして部屋を出て行った。

インジェは、誤解の解けたチンギョンと連絡先を交換する事になったが、自分がやくざであることを知られなくなかったため、慈善事業団体の名刺を渡した。インジェは、次の日に急いで慈善事業団体の電話番号を買い取り、慈善団体と業務提携を結んだ。

インジェとチンギョンはお互い本当のことを言わず、インジェはやくざではなく社会事業社、チンギョンは検事と言わず、公務員であると告げた。2人は徐々に仲良くなり、デートを重ねた。チンギョンのことを好きな検事の先輩は、2人の仲をよく思っていないため、2人を見張っている。先輩はチンギョンを食事に誘ったことがあるが、断られている。

チンギョンは自分が本当は検事で、暴力団担当であることをインジェに話した。チンギョンは自分の秘密を言ったから、インジェの秘密も教えて欲しいと言ったが、インジェはごまかしてしまう。

チンギョンの先輩はチンギョンを食事に誘い、結婚しようと言ったが振られた。振られた先輩は、インジェの組の事を調べ上げた。調べた資料をチンギョンに見せ、インジェは何か目的があるはずだと告げた。インジェがやくざだと知ったチンギョンは、ショックを受け、インジェに冷たくしてしまう。

しかし、母親の還暦パーティ会場に来ていたインジェの前に、チンギョンが現れた。母親はインジェが結婚相手を連れてきたと喜び、その後、チンギョンはインジェの実家に招待された。弟の嫁が、インジェの彼女が交通事故で亡くなったという過去を教えてくれた。インジェはチンギョンに「嘘をつくつもりではなく、検事はやくざを愛することはできないと思い、やくざから変わろうと思った」と言った。インジェは家族に無断で経営していたクラブを売り、そのお金を寄付してしまう。それを知った弟たちは、女性のために家族を捨てるつもりなのかとインジェを責めた。

ある時、弟が危ないという情報が入り、インジェはすぐに助けに行った。しかしそれは罠で、インジェはすぐに捕まってしまう。チンギョンはその後、辞表を提出した。

インジェの裁判の日がきた。検事はチンギョンに気がある先輩であり、弁護側にはチン

ギョンが弁護士として現れた。先輩はチンギョンに振られた逆恨みで、別のやくざにインジェを陥れるよう協力させたのだ。結果は、相手側のやくざと先輩が警察に捕まった。

インジェの組は解散し、新たな出発をすることになった。インジェとチンギョンは、互いの親を会わせることになった。チンギョンが父親と現れると、なぜか母親が取り乱した。チンギョンの父親は、40年ぶりに再会した母親の初恋の人であった。チンギョンの父親とインジェの母親は、2人の結婚はまだ早いと言い残し、2人で去って行ったのであった。

## 2. 『ユア・マイ・サンシャイン』(2005) パク・チンピョ

7位の『ユア・マイ・サンシャイン』(2005)は、パク・チンピョ監督の作品である。この作品は、実話を元に制作されており、監督自ら本人に取材やインタビューを重ね、脚本を書いた。監督は1966年生まれで、中央大学映画学科を卒業している。SBSテレビとITVでドキュメンタリープロデューサーとして30編以上のドキュメンタリープログラムを演出し、1999年に韓国放送委員会大賞企画賞を受賞した。『死んでもいい( )』(2002)でデビューし、『もし、あなたなら～六つの視線( )』(2003)という人権委員会が制作した差別問題を扱う短編オムニバスに参加した後、この作品を制作した。

ソクチュンは農村で酪農をしながら暮らす独身である。結婚相手を探すためにお見合いしているが上手くいかない。喫茶店で働くウナは、ソウルからやってきた。ウナは同僚と共に集団検診に向かう途中、ソクチュンとすれ違い、ソクチュンはウナに一目ぼれする。

ソクチュンは友人同士で飲みに行くと、店にはウナがホステスとして勤めていた。ウナは、昼は喫茶店でコーヒーを配達しながら体を売り、夜はホステスとして生活している。ソクチュンはウナに愛していると告げるが、ウナは好きにすればと言う。

ソクチュンは、ウナが働く喫茶店で母親に無理やりお見合いをさせられることになった。ウナはなぜか不愉快になり、配達に行くと言って店を出た。配達先で男性にビンで殴られ、入院することになった。ソクチュンは入院先の病院を訪ね、世界一幸せにするから結婚して下さいとプロポーズした。

2人は結婚し、楽しい新婚生活を送った。ウナが1人でソクチュンの帰りを待っていると、別れた夫から電話があった。ウナは、お金を渡すから帰ってくれと言うが、500万で手を切ることもなんかできると思っているのかと脅された。

次の日、ソクチュンの元にも夫が現れた。ソクチュンは、2500万払うから手を切るよう

に頼んだ。しかし、元夫は 2500 万で手を切れると思っているのかとウナを脅した。家にも来た元夫は「愛している、暴力や酒をやめるから戻ってきて欲しい」と言った。同時期にソクチュンは、保健所からウナが HIV に感染していることを知らされた。ソクチュンはそのことで悩んでいたため、ウナに冷たくなっていた。しかし、夫との事で見捨てられたと思ったウナは、さようならという手紙を残し、いなくなっていた。

ソクチュンはウナを 1 年以上も探し続けていた。その頃ウナは売春街で働いていたが、HIV に感染しているにもかかわらず売春をしたとして逮捕され、自分が HIV に感染していることを知った。ウナが捕まった事を知ったソクチュンは、すぐに会いに行ったが、ウナは面会を拒絶していた。

ソクチュンの兄や母親は、あの女と暮らすなら家族の縁を切ると言い、ソクチュンは母親と言い争いになった。母親が毒を飲んで一緒に死のうかと提案すると、ソクチュンはそれを飲んでしまい、入院することになった。母親はソクチュンの入院先へ行った。兄のところで孫と一緒に暮らすから、お前は強く生きろと言った。

ウナは、2 年 6 ヶ月の実刑判決を受けた。退院したソクチュンは、ウナのところへ会いに行った。今まで一度も会ってくれなかったウナと、面会することになった。ウナはソクチュンから離れるために、わざと冷たい言い方をしていた。しかし、本心を知った 2 人は、お互いに愛していることを確認した。

今日は、ウナが刑期を終えて出所する日である。ソクチュンはウナを迎えに行き、2 人は再会を果たした。

### 3. 『ダンサーの純情』(2005) パク・ヨンフン

14 位の『ダンサーの純情』(2005) は、パク・ヨンフン監督・脚本の作品である。1964 年生まれで、東国大学演劇映画科を卒業した。『301、302』(1995) のパク・チョルス監督の下で助監督を経験し、映画に助演として出演し演技も学んだ。2002 年に『純愛中毒 ( )』でデビューした。この作品が 2 作品目となる。その他の作品には日本映画『会社物語 MEMORISE OF YOU』をリメイクした『ブラボーマイライフ ( )』(2007) という作品がある。

将来を有望視されていたダンサーのヨンセは、パートナーをライバルに横取りされた上に、仕組まれたけがでダンスができなくなってしまった。失意の毎日を過ごしていると、

先輩は彼のために新しいパートナーとして、中国から朝鮮族のダンサーを呼び寄せた。朝鮮族のダンサーとは偽装結婚し、3ヵ月後のダンス大会で復活するように説得した。

空港へ迎えに行ったヨンセの前に現れたのは、ダンサーのチェミンではなく、妹のチェリンであった。姉は婚約者がいるため、妹が代わりに来たのだ。チェリンはダンスができないことがわかり、ヨンセはチェリンを家から追い出した。しかし、ヨンセは、飲み屋に売られたチェリンを放って置く事ができず、結局迎えに行くことになった。ヨンセは、彼女を新しいパートナーとして育てることを決心した。

ヨンセとチェリンは、ダンスの特訓を始めた。チェリンは必死に練習し、どうにかステップを覚えていったが、2人で踊ると合わない。ヨンセは愛がなければ体を預けることはできない、ダンスを踊っている時は、自分を愛してくれと言った。2人のダンスは、息が合うようになり、チェリンは驚くほど上達した。お互いに少しずつ特別な感情を抱くようになり始める。ヨンセはチェリンに、ダンス大会できる衣装をプレゼントした。チェリンは、ヨンセが以前のパートナーに教えた特別な技を教えて欲しいと頼んだ。

チェリンのダンスの才能を知ったヨンセの先輩は、ヒョンスにチェリンの存在を教えてしまう。ヒョンスはヨンセのライバルで、ダンス協会会長の息子である。以前ヨンセが育てたパートナーを奪い、ヨンセにけがをさせたのもヒョンスである。ヒョンスはヨンスよりも先にチェリンをパートナーとしてダンス大会にエントリーしてしまう。さらに、ヒョンスはヨンセを2度とダンスのできない体にしてしまった。

チェリンは、ヒョンスと大会に出場することになった。しかし、チェリンはヒョンスが用意した衣装は使わず、ヨンセがプレゼントした衣装を着て大会に臨んだ。ヨンスは会場で、チェリンのダンスを見つめていた。

2年間経ち、住民登録のための面接の日が訪れた。ヒョンスはチェリンを役所に連れて行った。そこで待っていたヨンセと共に、最後の面接を受けに行った。面接は別々の部屋で行われ、お互いのことを質問される。質問に答えるチェリンとヨンセは、本当にお互いのことを思っていたのであった。2人は無事に面接に合格し、夫婦として認められたが、チェリンはヒョンスに連れて行かれてしまった。

ヒョンスはチェリンに欲しいものを何でも与え、自分のダンスパートナーとして使い続けようとした。しかし、チェリンはヨンセのことを忘れることができなかった。ヨンセが1人で自分の部屋にいと、誰かが自分の部屋にやってきた。そこには、チェリンの姿があった。チェリンはヨンセの元に戻ってきたのであった。

### 第3章 映画に描かれる人間関係と価値観

#### 第1節 メロドラマ映画・ラブコメディの嗜好

##### 1. ストーリー

###### 1) 恋愛のパターンとエンディング

恋愛の取り上げ方として、ハッピーエンドとバッドエンドがある。ここでのハッピーエンドとは恋愛関係が成就する、あるいはそれを暗示させるもの、バッドエンドとは、恋愛関係の破綻、あるいはそれを暗示させるものとする。

対象作品の中では、ハッピーエンドのほうが多い。ハッピーエンドの中では、相手のことを現在進行形で思っているタイプと過去にこだわるタイプがある。

相手のことを現在進行形で思っているタイプでは、12作品の例がある。それぞれのタイプを男女別で見ると、男性の場合、『チム～あこがれの人～』（1998）の友人の姉に恋をしている男性、『陽が西から昇ったら』（1998）の手紙のやり取りをし続けた男性、『セックス・イズ・ゼロ』（2002）の大学で一目ぼれした男性、『君に捧げる初恋』（2003）の初恋の女性を追い続ける男性、『オオカミの誘惑』（2004）の女性を好きになる男性のパターンがある。

女性の場合では、『銀杏のベッド』（1996）の1000年前から1人の男性を思い続ける女性、『我が心のオルガン』（1999）の担任の先生を好きになる17歳の女子学生のパターンがある。

お互いの場合では、『オアシス』（2002）では社会に取り残された2人の恋、『私の頭の中の消しゴム』（2004）では、はじめは女性が男性を思い、その後病気で記憶を失っていく女性を男性が思い続けている。『同年の家庭教師』（2003）では、お互い徐々に好きになっている。『マイ・リトル・ブライド』（2004）では、お互いに思い合っていたことを最後に気づく。『ダンサーの純情』（2005）では、お互いにいつの間にか好きになっている。

主人公が片想いの場合、男性を主体に描かれることが多くなっている。韓国には「10回叩いて折れない木はない」という言葉があり、どのような女性もしぶとくどこまでも口説き続けなければ必ず落ちる、という意味である。その基盤は、「女たる者、貞節で身持ちが硬くなくてはならぬ」という社会の伝統にあると言われている<sup>47</sup>。女性から男性を思うことを表面的に表すことは、多くなかったと考えられる。

1990年代のものは、男性から想いを発信し、女性はそれを受け取るという形がとられ、ハッピーエンドの場合、男性が恋愛の中心に描かれる存在であることが多かった。しかし、2000年代の新しい作品には、どちらかの恋愛を中心に描くというよりも、お互いが徐々に



想いあう作品が登場している。

過去の恋人を忘れられないなど、失った過去にこだわるタイプは5作品ある。そのうち2作品では、女性主人公の恋人が過去に死亡している。『Interview』（2000）では、女性主人公が亡くなった自分の恋人を忘れられずにいた。その後、男性主人公の方に気持ちが向かうようになる。『猟奇的な彼女』（2001）では、過去に女性主人公と結婚の約束をしていた男性が亡くなり、男性のことを忘れられずにいた。男性主人公によって心の傷が癒されるものの、再会の約束をして一度別れた。その後、2人は再会する。

また、残りの3作品は、男性が女性から何らかの理由で離れている。『イルマーレ』（2000）では、女性主人公は徐々に、男性主人公のことが気になるようになるが、元恋人のことを忘れられずにいた。ラストでは、女性主人公が男性主人公の方に気持ちがいく。『敗者復活戦』（1997）では、女性主人公が浮気されて別れた男性のことを忘れられずにいた。長い間諦められなかったが、最終的に男性主人公のことを好きになる。『愛のゴースト』（1999）では、女性が不慮の事故で亡くなり幽霊となった後も、付き合っていた男性のことが忘れられなかった。男性主人公は、自分の恋人を事故でかばったため亡くなり幽霊となったが、恋人を忘れられずにいた。

過去を忘れられないタイプの作品では、忘れられない過去を持っているのがいずれも女性であった。別れた人を思い続けるのは女性であるというイメージと、一度思った相手は、思い続けなければならないということが女性に強要されていたとも考えられる。上記2つのタイプで例に挙げている17作品は、いずれもハッピーエンドを迎えている。

ラストシーンで不幸な状況、または恋愛関係の終わりなどの別れを迎えるなど、バッドエンドは8作品ある。その内6作品は、エンディングに死が関わっている。『ボーン・トゥ・キル』（1996）では、ラストでは男性主人公が死亡してしまう。『八月のクリスマス』（1998）では、男性は不治の病で亡くなる。『男の香り』（1998）の場合は、男性主人公が死刑となる。『寵愛』（2000）では、男性主人公が女性の元恋人と女性を殺害する。『永遠の片想い』（2002）では、男性主人公が好きになる2人の女性が2人とも病気で死亡する。『スキャンダル』（2003）では、男性主人公は未亡人を好きになるが、恨みによって殺害され、それを知った未亡人は自殺する。

また、恋愛関係の破綻によってラストを迎えるものが2作品ある。『リメンバー・ミー』（2000）では、未来を知ったため恋人との関係が崩れてしまう。『シングلز』（2003）では、プロポーズを受けた主人公の女性は仕事と親友のためにそれを断る。対象作品外であ

るが『春の日は過ぎ行く』（2001）もこのタイプである。

恋愛を中心にした作品には、バッドエンド（8作品）よりもハッピーエンド（17作品）の方が多かった。ただし、ストーリー中に結婚を含んでいるもの、どちらともいえないものは除いている。ハッピーエンドの作品で、1996年頃のものには普通のラブストーリーが多く、恋愛を日常の事件や大きな重要なこととして捉える傾向がある。年代の新しいものほどラブコメディが多くなり、恋愛を明るく軽い日常生活として描くようになっている。恋愛に対する考え方、感じ方に変化が生じていると言える。

これらの変化には、社会の変化も影響している。1990年代前半には、列車転覆、フェリー沈没（1993）、橋崩落（1994）、地下鉄工事現場でガス爆発、デパート崩壊（1995）など、大型事故が相次ぎ社会不安が大きかった。1997年アジア経済危機後の1998年にキム・デジュン政権が樹立し、日本の大衆文化第1次開放（1998～）、ワールドカップ開催・釜山アジア大会（2002）などによって、文化的雰囲気は明るくなり、南北首脳会議（2000）や2001年に女性部が新設されるなど、社会の変化も大きかった。

これまでの世代と若い世代には、価値観に大きな差がある。1960年代生まれで1980年代に大学に通った386世代は、軍事政権や学生運動などのあった激動の1980年代に20代であった。本格的受験戦争地獄と高学歴時代のさきがけで、規制が多かった分反抗心が強く、民族、社会を考え正義感が強い。集合的な運動で民主化を手に入れた世代である。

それに対して、新世代は1970年代のベビーブームに生まれ、1990年代以降大学生になった世代であり、軍事政権化での学生運動を知らない世代である。それぞれの個性を重視した世代である。自己表現欲が強く、集団的韓国社会へ反発している。また特にネットワーク、デジタル環境の中、コンピューターを自由自在に操り情報発信を行うなど、個人主義的思考によってIT革命を支えている世代はN世代と呼ばれている<sup>48</sup>。集団主義と個人主義という価値観を持ち、世代が違えば考え方が全く違う。

恋愛を個人として楽しもうという明るい雰囲気は、映画は観覧客の対象となる若い世代の考えと価値観を反映しており、恋愛映画の軽さや明るさは、韓国における若い世代と時代の雰囲気を象徴している。

また、結婚に関して「儒教に基づく韓国の伝統文化における結婚は、愛の完成という個人的な2人のロマンチックな選択とはほど遠く、両家の社会的結束として位置づけられていた。すなわち、男女2人の出会いという前に2つの集団の結合を意味している」<sup>49</sup>というように、韓国における結婚は恋愛の延長線上に位置しているものではなかった。伝統

社会では、「妻は、必ず夫1人のために貞節や節操を守らなければならない、舅姑によく仕え、跡継ぎを産まなければならない、嫁いだ先の家計を豊かにしなければならない義務があった」<sup>50</sup>とされ、結婚すれば大変な苦勞をすることは目に見えていた。

現在、若い世代の結婚観は変化しつつあるものの、これらの伝統的な結婚観も残っている。恋愛から結婚にまで到達しないハッピーエンドの作品が多いのは、若い世代が恋愛を個人として楽しむものの、結婚に対する夢や希望を持ってないため、社会の恋愛に対する夢や憧れが込められていると考えられる。

バッドエンドの作品では、1990年代のものは雰囲気全体が暗く重いものが多い。『八月のクリスマス』（1998）のみは、恋愛と死に対して淡々とした描き方をしている。一方2000年代の『寵愛』（2000）や『シングلز』（2003）では、ハッピーエンドではないが全体に暗い雰囲気は感じられない。

## 2) 結婚のストーリーとエンディング

何らかの形で結婚が扱われている映画は、対象作品中 22 本である。対象作品の約半分に当てはまる。結婚を扱うタイプのストーリーとしては、次のとおりである。

- ◆ 恋から始まり結婚の話は出るが、結婚まで至らない
- ◆ 恋から始まり結婚する
- ◆ 恋から始まり結婚し、結婚が継続する
- ◆ 恋から始まり結婚し、離婚する
- ◆ 結婚状態から始まり、継続する
- ◆ 結婚状態から始まり、離婚する
- ◆ 結婚状態から始まり離婚し、さらに再婚に至る

ストーリーの中で、実際に結婚まで至らない作品は、9 作品であり、そのうちストーリー中で結婚を扱うが、結婚していることが単なる設定として組み込まれており、結婚生活を中心に描かないものには、以下の 5 作品がある。

『バンジージャンプする』（2001）では、ストーリーの中心ではないが、男性主人公が数年後に再び登場したときには結婚していた。『LISE／嘘』（2000）では、主人公の中年男性が既婚者である。『銀杏のベッド』（1996）では、ラストシーンで結婚していることが判

明する。『我が心のオルガン』(1999)では、結婚していることが冒頭と最後に描かれている。『リメンバー・ミー』(2000)では、主人公の親友と主人公が付き合っていた先輩が未来で結婚している。

また、主人公が結婚を約束するがそれが叶わないものは以下の4作品がある。『シングルズ』(2003)では、結婚しそうになるが、女性がプロポーズを断る。『イルマーレ』(2000)では、以前付き合っていた男性と結婚の約束をしていたことが描かれている。『敗者復活戦』(1997)では、結婚の約束をしていた男性が、別の女性と結婚することになる。『猟奇的な彼女』(2001)では、主人公の女性と結婚の約束をしていた男性が亡くなる。

恋から結婚に到達するものには3作品がある。その中で、恋から結婚で終了するタイプとして『マイ・リトル・ブライド』(2004)があり、ストーリーの最後で結婚している。この作品は、唯一恋愛から結婚に至り、結婚をハッピーエンドとして扱っているものである。

また、恋から始まり結婚に至り、その後の生活も描かれるものは、2つの作品がある。『私の頭の中の消しゴム』(2004)では、ストーリーの途中で結婚する。『ユア・マイ・サンシャイン』(2005)は、結婚前からストーリーが始まり、ストーリーの中盤で結婚する。この2つの作品は、恋愛結婚をした2つのカップルが、難病と戦っていく共通点がある。

恋から結婚に到達するタイプは非常に数が少なく、そのうち2作品は、難病と戦っていくという特殊な設定があるため、純粋に恋から結婚に至ってハッピーエンドを迎える作品は1つしかない。家族、血縁関係などのつながりが強く、結婚にはそれらが重くのしかかってくるため、結婚をハッピーエンドというイメージとして考えにくい。このような社会であるため、結婚をハッピーエンドとして描くことは難しい。韓国社会では恋愛映画において「普通の結婚＝ハッピーエンド」ではないのである。

それを反映するように、普通の状況ではないやくざが登場するラブコメディでは、3作品すべてに結婚が絡んでいる。『花嫁はギャングスター』(2001)では、女性が気弱な男性と無理やり結婚するが、最終的に男性がやくざに慣れて、無事にエンディングを迎える。『大変な結婚』(2002)は、やくざの1人娘とエリート社長が無理やり結婚させられるが、最終的には男性がやくざに慣れ、結婚式場でハッピーエンドになる。『家門の危機』(2005)は、やくざの男性が女性検事に一目ぼれし、最後はやくざを解散させる事態になる。特殊な状況でなければ、恋愛から結婚＝ハッピーエンドと展開することができないということである。

結婚した状態からストーリーが始まるものは、以下の7作品がある。ストーリー上はハ

ッピーエンドに終わるが、実際はそうではないと考えられる作品が2つある。『パク・ボンゴンの家出事件』(1996)は、夫婦がそれぞれ別の相手と再婚し、それぞれの幸せに収まったという点で、ハッピーエンドと言える。しかし、離婚を間に挟んでいるので、普通の結婚がハッピーエンドになっていないことになる。

『ゴースト・ママ』(1996)の場合は、妻は幽霊であるため消えていくが、夫は再婚できるのでハッピーエンドである。しかし、妻が死亡しているという特殊な状況において、再婚がハッピーエンドになっているため、やはり結婚=ハッピーエンドではない。

結婚前や結婚状態から始まる作品で、ストーリー上ハッピーエンドにならないものは5作品である。ハッピーエンドにならないものは、息子に対する母親の愛と嫁に対する憎しみを描いた作品が1つ、夫婦愛を描いている作品が1つ、不倫や浮気を中心に描いている作品が3つである。

『ラスト・プレゼント』(2001)は、夫と妻がお互いを思いあう様子が描かれているが、妻は病気で亡くなる。『オルガミ〜毘〜』(1997)では、夫とその母親が死亡し、妻だけが生き残ったが、結婚生活は破綻する。『ハッピーエンド』(1999)は、妻の不倫が原因で夫が殺人事件を起こし、家庭が崩壊する。『情事』(1998)では、妻の不倫によって妻は家を飛び出し、家庭が崩壊する。『浮気な家族』(2003)は、夫の浮気に愛想を尽かし、家を出て行く妻が描かれている。

結婚した状態でストーリーが展開する映画では、家族をテーマとしない場合、嫁と姑、幽霊妻と夫、夫婦の不倫などがテーマとなり、普通の夫婦愛を描いておらず、ハッピーエンドも少ない。これらの作品は、夫婦や家族の幸せや愛情を描いているのではなく、家族の崩壊と破綻を描いている。恋愛の場合と同様、結婚した状態でストーリーが始まった場合にも、結婚に対するイメージは暗い。

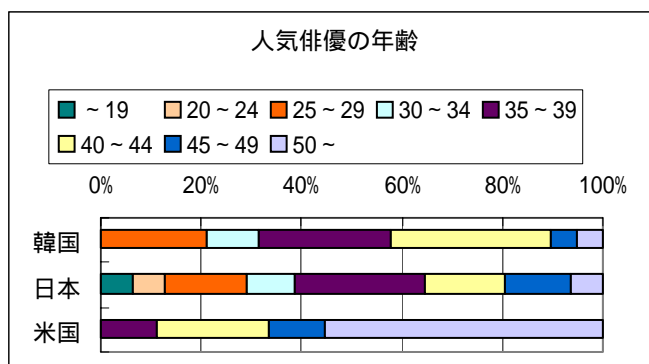
映画に出演している役者の年齢によって、内容が左右されていることもある。アメリカ、日本、韓国のそれぞれの国で行われている人気俳優ランキングを参考に、スターの年齢層を調査した(図2、3、表1、2)。

アメリカの場合、人気俳優の年齢は一番若くても30代後半となっており、ランキングの半分が50代以上であった。ランキングのうち、女優は2名であったが、いずれも40代である<sup>51</sup>。日本の俳優では、若い年齢は10代から上は70代までと幅広くなっており、一番多いのは30代後半である。一方、女優の場合に一番多いのは20代であり、40%を超えているが、同じ程度に30代も多い<sup>52</sup>。韓国における俳優の年齢は、30代後半から40代が

多く、女優は30代後半が多くなっており、20代は20%強程度である。日本に比べると、人気のある俳優、女優の年齢層が高い<sup>53</sup>。

社会の好みは映画の題材に反映されているために、各国で好まれる俳優の年齢層が違うという可能性もあるが、スターの年齢が高いアメリカの場合、映画で初恋などを題材にすることは無く、大人の恋を描くことが多い。韓国では、主人公が若いと恋愛だと若者の恋、中年になると大人の恋ではなく結婚している妻の恋になっている。また、年齢が30代になっても、若者の恋愛に出演する場合がある。

図 2 人気俳優の年齢



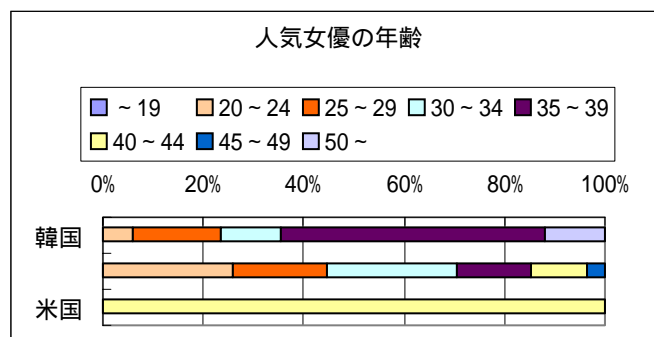
インターネット記事により筆者作成

表 1 人気俳優の年齢

年齢・単位:件	~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~
韓国			4	2	5	6	1	1
日本	2	2	5	3	8	5	4	2
米国					1	2	1	5

インターネット記事により筆者作成

図 3 人気女優の年齢



インターネット記事により筆者作成

表 2 人気女優の年齢

年齢・単位:件	~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~
韓国		1	3	2	9			2
日本		7	5	7	4	3	1	
米国						2		

インターネット記事により筆者作成

### 3) ストーリーに重要なもの

#### A. 軍隊と初恋

韓国には徴兵制がある。韓国人男性は、数えて19歳になる年に、徴兵検査が義務付けられている。徴兵検査とは、兵役に関連する行政を担当する兵務庁が実施するもので、身体測定や体力測定を行い、入隊後の訓練に耐えうるかどうかを判断する。

兵役の種類は、徴集・志願により入営した者や特別予備将校などを現役兵、現役終了した者を予備役、18歳から30歳で入隊以前の者を第一国民役、徴兵検査の結果、現役服役はできないが、非常時の軍事支援業務には耐えられると判断された者や現役兵で戦傷等によって軍務に耐えられなくなった者を第二国民役としている。

身体に異常がなく、あったとしてもその程度が少なく、学力にも問題が無い者は、1級から3級と判定され現役兵に選抜される。疾病や心身障害があり、現役服役に支障のある場合は4級で、公益勤務要員として召集される。公益勤務要員とは、家から通いながら兵役の義務を果たす人のことで、主に区役所や市役所、兵務庁や国防部の補助業務をするこ

とになる。疾病・心身障害の程度が甚だしく、兵役にも公益勤務要員にも適さないものは5級となり、第二国民役となる。6級と判定されたものは、軍役免除となる。また、7級は身体再検査である。

兵役の期間は場合によって異なるが、基本的に陸軍は26ヶ月、海軍は28ヶ月、空軍は30ヶ月である。国防上の必要がある場合には、1年以内の延長が認められている。なお、女性も志願により入隊することはできる。

徴兵検査を延期できるのは、国外に在住または居住している者、国外を往来する船員、罪を犯して拘束中の者、刑を執行されている者に限られている。兵役は30歳までに終えておく義務になっており、入営すると、二兵、一兵、上兵、兵長と出世し、除隊となる。

徴兵は原則男性全員の義務となっているが、父親か兄弟が戦死か重い負傷者となった場合、混血や親のいない場合は免除される。五輪メダリスト、アジア大会優勝などの実績を持つスポーツ選手など、スポーツ界で国際的に活躍した者も免除となる。2002年のサッカーワールドカップでベスト4に残った韓国チームのメンバーも免除されている。この他、高校卒業資格を持っていない者、体が不自由な者、3代続けて家系に男子が1人しかいない場合、兵役該当者が家計を支えている場合、海外永住韓国人なども免除の対象となる。

大学への進学者は、受験前ではなく入学してから兵役につく人が多数派である。受験前に入隊すると、2年間以上勉強することができなくなってしまうからである。大学生は、兵役を終えてから復学して勉強を続ける。これらの影響で、男性が社会に出るのは25歳から26歳になってからが多い<sup>54</sup>。

男性の義務である兵役は、映画の中でも日常的なこととして数多く描かれている。恋愛映画にも登場するほど日常的であり、恋愛と兵役は切っても切れない関係にある。『猟奇的な彼女』(2001)では、公益勤務要員と脱走兵が登場する。男性主人公は公益勤務要員として兵役を終え、大学に復学するところから描かれている。映画の中でもキョヌが友人たちからからかわれているように、一般的に兵役でありながら軍隊のような厳しい訓練のない公益勤務要員に対しては、兵役として認められず情けないというイメージが付きまとっている。

ストーリー中盤では、軍隊に入る前に付き合っていた彼女に、待ってもらえなかった男性が、遊園地に逃げ込んでいる脱走兵として描かれている。兵役は2年以上の期間があるため、兵役の前に付き合っていた彼女とは、上手くいかない場合が多い。この脱走兵も、同様に彼女と上手くいかなかったようである。



兵役から戻った学生が大学に戻ってくるということは日常的なことであり、軍隊に入った男性と付き合いしていた女性が上手くいかないことも日常的である。そのため、韓国人にとって、本格的な恋が始まるのは、兵役が終わった所からであり、『猟奇的な彼女』(2001)の主人公のストーリーも兵役が終了した所からストーリーが始まる。

その他、『セックス・イズ・ゼロ』(2002)では、男性主人公が軍隊から戻って復学したところから物語が始まり、『リメンバー・ミー』(2000)では、女性主人公が好意を持っている先輩が、兵役から戻ってきたところから描かれている。

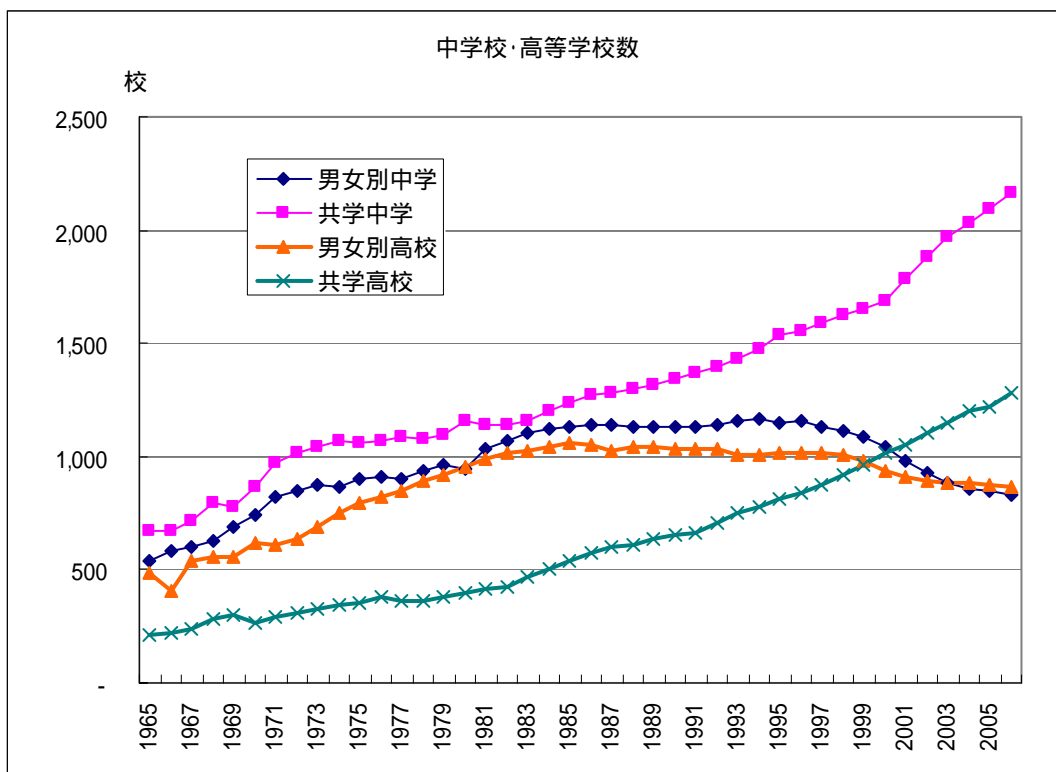
兵役から戻ってくる所だけではなく、これから向かう所が描かれている場合もある。『パンジー・ジャンプする』(2001)では、男性主人公が軍隊に行くところが描かれており、付き合い合っている女性に見送りをお願いしていた。『永遠の片想い』(2002)では、主人公の妹が好きになった本屋の男性が軍隊に入ることが描かれている。

『Interview』(2000)では、後に別人の話であると分かるが、女性主人公が付き合い合っている彼氏は軍隊に行っており、結婚の約束をしているという話が描かれている。また、『マイ・リトル・ブライド』(2004)では、軍隊にいる男性主人公に面会に行く様子や、男性主人公が兵役を退役した後に行われる、定期的な訓練に行く様子が描かれている。

これらのように、軍隊と恋愛は日常的に関わっていることが描かれている。現在では、中学校、高校共に、男女共学の学校が多数を占めており、増加している(図4)。しかし、男女共学であるにもかかわらず、男女別に授業を行っている学校も多く存在している<sup>55</sup>。そのため、男女別の学校が少なくなったとはいえ、常に男子生徒女子生徒が共に活動することが少ない。さらに、高校生までは、熾烈な受験戦争を戦わなければならない、恋をする時間も少ない。大学に入るまで恋をしづらい状況になっているため、恋は貴重なものであり、韓国人にとって初恋がより重要なものと考えられていることになる。

また、軍隊に行く年齢は、19歳以降と大学生になってからである。男性にとって恋愛が自由にできるようになる大学生になった後、すぐに軍隊へ行かなければならないため、女性より恋がしにくい状況が長く続く。

図 4 中学校・高等学校数



『2007

』 96 頁

映画の作品中でも、初恋が関係するものは多く存在する。『バンジージャンプする』（2001）では、教師である主人公がクラスで授業をする時、男子学生たちから初恋の話をせがまれる。この時、主人公は亡くなった元彼女のことを初恋として話をしている。『マイ・リトル・ブライド』（2004）でも教育実習生の男性主人公が、授業中生徒に初恋の話をせがまれるシーンが登場する。生徒が先生に初恋の話をせがむのはごく日常的なことであり、普通のこととして描かれている。しかし、その話の内容は、現在彼女がいるかどうかではなく、初恋の話である。『永遠の片思い』（2002）では、男性主人公が女性主人公の初恋の話を聞いたがることや、自分で初恋の話をすることが描かれている。

初恋が実る、または実っている作品として描かれているものは、対象作品中 5 つの作品がある。『ラスト・プレゼント』（2001）では、後で分かる事実として、妻と夫は実は初恋同士であったという設定が明らかとなる。『マイ・リトル・ブライド』（2004）でも後で主人公同士は初恋であったと明らかになり、初恋が実っている。『君に捧げる初恋』（2003）は、

男性主人公が初恋の幼馴染が好きで、幼馴染と結婚するために様々な努力をする。最終的には、主人公同士の想いが通じあう。『我が心のオルガン』(1999)では、17歳の小学生が新しくきた若い男性教師を好きになり初恋を経験している。その後、その教師と主人公が結婚していることを暗示するシーンが登場する。『ラスト・プレゼント』(2001)では、夫婦がお互いの初恋であったことが判明する。

その他、対象作品ではないが『ワニ&ジュナ』()では、お互いが幼いころの初恋であることを暗示するシーンが最後に登場する。また、『家門の危機』(2005)では、ストーリーの最後に、女性主人公の父親は、男性主人公の母親の初恋であるというエピソードが出てくる。

恋愛をしにくい環境の中では、恋愛は貴重なものであり、初恋は重要なものである。そのため、映画のストーリーにも初恋が多く描かれている。

## B. 手紙と写真

対象となる映画では手紙と写真が、頻繁に登場する。『八月のクリスマス』(1998)では、手紙、写真の両方が登場する。写真店を営む男性主人公の入院中に、女性主人公は、何度店を訪れても閉まっていたため、男性主人公への手紙を書いた。退院して店に戻ってきた男性主人公は、女性主人公が書いた手紙を発見し、返事を書いた。しかし、それが相手に渡されることはなかった。また、男性主人公は、女性主人公の証明写真を勝手に1枚自分で持っていた。男性主人公の写真店には家族写真を撮りに来る家族が登場する。

『陽が西からのぼる』では、男性主人公と女性主人公が数年間、40通以上の文通を続けた。『永遠の片想い』(2002)では、三角関係の中で手紙が登場する。女性主人公の2人は、幼馴染の親友である。男性主人公は、女性主人公①へ手紙を書く。その手紙は、自分で渡さず女性主人公②に頼んだ。手紙は、女性主人公②との仲を取り持ってほしいという内容であった。しかし、手紙は女性主人公①へ渡る前に女性主人公②が破ってしまった。

女性主人公①は2通の手紙を書いている。女性主人公①から女性主人公②へ渡した手紙は、女性主人公②が大切であり、大好きという内容である。もう1通は、女性主人公①から男性主人公への手紙である。内容は、女性主人公②と男性主人公は想い合っているから、女性主人公②のことを頼むという内容であった。

女性主人公②は、何通もの手紙を男性主人公へ送っている。手紙には、女性主人公②が自分で撮った写真を送っている。男性主人公は、手紙を手がかりに女性主人公②を訪ねた。

しかし、その時会ったのを最後に、女性主人公②は亡くなった。最後の手紙には、葬式に男が来ないと村人に笑われるから来てほしいと言うものであった。

『マイ・リトル・ブライド』(2004)の男性主人公は、「軍隊にいた頃、自分に面会に来てくれた人」である女性主人公が渡した手紙を現在も大切に持っている。軍隊にいくと、恋人のいる人は必ずと言っていいほど手紙のやり取りをする。

また、結婚すると欠かせないものが結婚写真である。『マイ・リトル・ブライド』(2004)では、2人の住む部屋には大きな結婚写真があり、男性主人公の部屋にも、女性主人公の写真が飾ってある。ラストシーンでも家族写真として写真を撮っている。結婚したら必ず写真を撮りそれを引き伸ばして大きな写真を新居に飾るのが新婚である。

『ラスト・プレゼント』(2001)では、死期の迫った妻のために、夫が勘当されていた両親の元へ行き、妻を嫁として認めてほしいとお願いにいき、その後家族写真を撮るシーンが登場する。ここでは、家族に認められた証として、家族写真を撮影している。

家族写真や結婚写真などの記念写真は、一緒に撮影する人々との人間関係において、関係を強固にする、または関係の証として重要であると考えられる。

## 2. 好みの条件

### 1) 主人公の死と病気

2006年の新聞記事に、韓国映画の中の死について書かれているものがある<sup>56</sup>。この記事では、2005年9月1日から2006年8月31日までに韓国で公開された韓国映画100本(アニメ、ドキュメンタリー除外)で描写されている死を種類別に分類している。この映画の中で1事例以上の死が描かれているものが67本である。ストーリーに関係する死は205件であり、平均すると1本の映画で2人が死ぬ。一番多い死は殺人の117件であり、映画の中で死ぬ人物の57%が殺害されている。殺人が必須条件に近いホラー、アクション映画が多いためである。続いて2位が自殺(11.2%)、3位が交通事故(6.8%)である。疾病によって死亡する映画はそれほど多くなく、その場合は特殊な不治の病が好まれているようである。しかし、恋愛映画になると死が関連する映画のうち、3割は病気によって死ぬとされている。

対象作品の中で、死がストーリーに関わるタイプは2つに分けられる。1つは、主人公自身が死に関わる場合、もう1つは主人公周辺で起こる場合である。主人公が何らかの原因で死亡する作品は、10作品ある。対象作品のうち約25%の確率で主人公が死亡するとい

うことは、死を含む作品は高い割合で好まれていると考えられる。

10 作品の中で、殺人や自殺によって死亡する作品は 5 作品であり、上記記事の通り一番多い。『スキャンダル』(2003) では、男性主人公と未亡人の 2 人とも死亡してしまう。男性主人公は恨みを持った人に殺され、未亡人は男性が殺されたことを知り自殺してしまう。『ハッピーエンド』(1999) と『寵愛』(2000) では、男性主人公が女性主人公を殺害している。『男の香り』(1998) では、主人公の妹の婚約者を妹が殺害してしまう。さらに兄は、その罪をかぶって死刑になる。『ボーン・トゥ・キル』(1996) では、殺し屋として生きてきた主人公が、仲間内の抗争によって死亡する。この 2 作品は、主人公が死亡することによって、女性を残して恋愛関係が壊れ、ストーリーが終了する。

不慮の事故によって死亡するパターンは 2 作品である。『愛のゴースト』(1999) では、ストーリーの冒頭で妻が交通事故死してしまう。しかし、事故死した妻が立ち直れない夫のことを思い、幽霊として現れる。幽霊として現れた妻は、夫を立ち直らせた後、自ら姿を消す。『僕の彼女を紹介します』(2004) では、男性主人公が死亡する。恋人である女性主人公が警官であり、事件現場に居合わせた男性主人公が拳銃の弾に当たって死亡する。男性主人公が死亡した後も、物語が続き、恋人を失ったショックから女性主人公を立ち直らせるように仕向けた上でストーリーは終了する。この 2 作品は、死亡した側が生き残っている側を励まし、今後の人生を生きていくよう諭している。

病気が原因で死亡する作品は 3 作品ある。『永遠の片想い』(2002) では、女性主人公が 2 人とも原因不明の不治の病で死亡する。『八月のクリスマス』(1998) では、男性主人公が死亡する。彼は、初めから不治の病であり、死ぬことが確定している。『ラスト・プレゼント』(2001) では、妻が死亡する。妻が病気であることがわかるが、その病気は治らず、途中で妻は必ず死ぬということが分かる。いずれの作品も、なぜ病気になったか、何の病気かは明らかになっておらず、ただ「不治の病」である。

死亡しないが、主人公が病気になる作品は 2 つあり、病気が関係する作品は合計で 5 作品である。『ユア・マイ・サンシャイン』(2005) では、女性主人公が HIV に感染していることが発覚する。また、『私の頭の中の消しゴム』(2004) では、アルツハイマー病にかかった女性が登場する。病気になった場合、2 作品とも結婚後に妻が「不治の病」と言われる病気となり、それを夫が支える形になっている。

## 2) 家族の死と不幸な設定

主人公以外で死や病気が関係してくる場合、家族であることが多い。家族の誰かがいない、家族の誰かが亡くなるなど、特に両親が不在である場合が多い。家族が亡くなる以外にも、複雑な家庭環境である場合がある。映画の中の死について書かれている記事には、「交通事故は、主人公の悲劇的家族史を説明する下地として登場する機会が多かった」<sup>57</sup>とあり、主人公の家族が悲劇的であることが、重要な要素として登場していると考えられる。

主人公の親が亡くなっている作品は、11 作品ある。そのうち、父親が不在の作品が 4 作品、母親が不在の作品が 2 作品、両親が不在、または孤児の作品が 3 作品、主人公が 2 人の場合、両方の親が亡くなっている作品が 2 作品である。

父親がいない作品は次のものである。『情事』(1998) では、女性主人公の父親がストーリーの途中で亡くなる。『セックス・イズ・ゼロ』(2002) では、女性主人公の父親が不在であった。父親が不在であることを理由に、母親のことをばかにされる場面が登場する。『私の頭の中の消しゴム』(2004) の男性主人公は、父親が不在である。さらに幼い頃、母親に捨てられたという経緯を持ち、母親に墮胎しておけばよかったとまで言われている。

また、『オオカミの誘惑』(2004) では父親が不在であること以外に、母親が再婚していることや、父親に愛人がおり、その子どもが登場するなど、複雑な関係になっている。女性主人公の父親が死亡し、母親が再婚している。再婚後、母親には子ども 2 人（主人公にとって妹と弟）が存在する。更に男性主人公 2 人のうち、1 人は女性主人公の父親と愛人の間に生まれた子であり、異母姉弟である。

母親が不在の作品は、次の作品がある。『大変な結婚』(2002) では、やくざ一家である女性主人公の母親が不在である。『八月のクリスマス』(1998) では、男性主人公の母親が不在である。

両親が不在の作品は、次のものである。『男の香り』(1998) は、男女の主人公同士が兄妹であり 2 人で生きていく設定である。『花嫁はギャングスター』(2001) の女性主人公と姉は、幼いころ孤児院で育った 2 人だけの家族であり、両親は不在である。さらによく再会できた姉が、胃がん末期であり死亡するという不幸な設定となっている。主人公がやくざの世界に入ったのは、1 人で生きていくためという理由が必要なため、故意に家族環境を厳しく設定している。

複合しているものでは、『パク・ポンゴンの家出事件』(1996) の男性主人公の母親が亡くなったという設定と、女性主人公の両親が高校生の時に亡くなったという設定がある。

両親の不在が結婚に関係している作品が2本ある。『オルガミ〜罌〜』（1997）では、女性主人公の両親が不在であることと、男性主人公の父親が不在である設定になっている。女性主人公には、両親がおらず家族は兄1人である。男性主人公と結婚する際に、自分に両親がいないことを心配していた。相手の家族にとって、子どもの結婚相手に両親がいないことが、マイナスイメージにつながる恐れがある、と女性主人公が考えている。

『ラスト・プレゼント』（2001）では、女性主人公の両親がおらず、孤児である。主人公夫婦は、両親の反対を押し切って結婚している。理由は、妻が孤児であることがあげられている。孤児であることによって、男性主人公の両親に結婚を反対され、男性主人公は勘当されている。男性の両親は、両親のいない女性との結婚を認めなかった。家族の形態が、結婚に影響を与えていることを現している。

家族関係に何か問題が存在することや家族の不在が、恋愛映画を盛り上げる設定や、恋愛の障害、主人公の心の傷にまで影響を及ぼす。家族に問題があることが障害や悲劇になるということは、それほど韓国での家族の重要性は高い。

また、不幸な設定と言う点で、メロドラマ映画では「女性の不幸」を描いてきたといわれているが、メロドラマにありがちな不幸な設定を男性が背負っているパターンもある。

『ダンサーの純情』（2005）の男性主人公は、ダンスの才能と、ダンサーを育てる才能の2つを持っていた。自分のパートナーとなる女性を育てて大会に臨もうとするが、そのパートナーをライバルに横取りされてしまう。さらに、代わりのパートナーと出場した大会で、ライバルにけがをさせられる。その後、立ち直ってけがを克服し、再びパートナーを育てて大会に挑むが、またしてもパートナーを横取りされてしまう。その後、交通事故を仕向けたライバルのせいで、2度とダンスが踊れなくなってしまうという悲劇に見舞われる。その後、女性主人公が自分の元に戻ってきたことによって、恋愛の面のみ報われる。

『オオカミの誘惑』（2004）では、男性主人公2人のうち、1人は女性主人公の父親と愛人の間に生まれた子であり、女性主人公とは異母姉弟である。父親の愛人の子どもは、女性主人公のことを好きになるが、血の繋がりによって、姉のことをあきらめることになる。父親や母親、祖母が死亡したことによって身寄りがなくなり、親戚を頼って海外に移り住むことになる。さらに、この男性は最終的に不治の病で死亡するという不幸な設定で描かれている。この男性は、何も報われず死亡してしまう。メロドラマで不幸を背負わされるのが女性だけではなくなっている。

### 3) 時空を越える作品

時空を越える作品は、対象作品中 3 本存在する。『銀杏のベッド』(1996)『リメンバー・ミー』(2000)『イルマーレ』(2000)である。『銀杏のベッド』(1996)は 1000 年、『リメンバー・ミー』(2000)は 20 年、『イルマーレ』(2000)は 2 年の時を隔てている。

1996 年の『銀杏のベッド』では、1000 年もの時を越えた前世の記憶と前世の恋を中心にしている。しかし、主人公の男性は現代でも恋愛中である。最終的に、主人公は現在付き合っている女性と結婚し、娘が生まれている。娘が冒頭ストーリーを語り始め、回想し終えたところで物語は終了する。父親である主人公は、亡くなっている事が判明し、母親が父親は行くべき所に行ったと言うのである。エンディングは、現代の恋が結婚に落ち着いた後、1000 年前の恋が実ったということになっている。

2000 年の『リメンバー・ミー』では、20 年の時を隔てて出会った男女のストーリーであるが、恋が叶う話ではない。1970 年代の女性主人公が付き合っている男性は、将来自分の親友と結婚してしまう。20 年後を生きる男性主人公は、付き合っている男性と親友の子どもであった。女性は、未来を知って失望し、自分から彼氏と別れ身を引いた。その後、男性主人公が、2000 年を生きるの女性主人公を探すと、彼女は独身であり、大学教授をしていた。

同じく 2000 年の『イルマーレ』は、2 年を隔てた 2 人が文通によって出会い、エンディングで恋の始まりを暗示する。途中女性は、過去の自分が付き合っている彼氏と別れないようにしてほしいと、過去を生きる男性に頼んだ。男性は、未来を生きる女性に恋をしていたが、事故死してしまう。しかし、それを悔やんだ女性は、男性に事故現場に向かわないよう手紙を送った。奇跡が起こり、時間が逆戻りした結果、女性は引越しの日逆戻りし、男性は引越し作業をしている女性の所へ向かった。なお、『イルマーレ』(2000)はハリウッドで同名映画としてリメイクされている<sup>58</sup>。

### 4) やくざコメディ

韓国の管理対象組織暴力団は 2007 年現在、全国に 471 派、11,476 人である。その内、犯罪団体として確定判決を受けた組織は、167 派である。一番多いのは釜山地検管轄の 101 派、1,833 人である。次いで水原地検管轄の 45 派、1,581 人、光州地検管轄の 33 派、1,542 人、ソウル中央地検管轄の 81 派、1,193 人である。釜山に多いのは、港などは暴力団員が居やすい場所が多いからである。また、ソウルは組織暴力団が企業化されて見つかりにく



くなっているが、釜山では公的な場所で暴力行使をする場合が多い<sup>59</sup>。韓国の人口は約4,800万人であるため、約4,800人に1人の割合で暴力団員がいることになる。組数は多いが、1つ1つの組員は少ないと考えられる。

日本の指定暴力団は21組、暴力団員は構成員、準構成員を合わせて84,700人である。一番人数の多い組は、兵庫県を拠点とする六代目山口組の構成員約2万人、準構成員19,000人であり、勢力は1都1道2府41県と全国に及んでいる。日本の人口は約1億2,700万人であるので、約1,500人に1人の暴力団員という割合である。日本の暴力団は、主要三団体で構成員全体の76.1%を占めている。その内訳は、六代目山口組が39,700人、住吉会が12,400人、稲川会が9,500人である<sup>60</sup>。

日本と比べて韓国の暴力団は会派数が多く、一組あたりの団員数が少ないところが多いと考えられる。日本では、一番多い組では約20,000人が所属しており、少ない所では、約70人の組もある。日本のやくざ映画は、『極道の妻たち』や『仁義なき戦い』のように、やくざ映画はやくざの世界でのみ展開されていることが多い。それとは違い、韓国映画では、一般人とやくざが同じ世界で展開され、やくざがコメディに登場するものが人気を得ている。

韓国映画で2000年以降ヒットしている作品のうち、やくざを登場させるコメディというものがある。新聞記事においても、2006年の韓国映画には、やくざが多数登場していることが取り上げられている<sup>61</sup>。2001年から毎年見られるようになった「やくざシリーズ」には、代表的な3つのシリーズがある。『花嫁はギャングスター』シリーズ、『マイボス・マイヒーロー』シリーズ、『家門』シリーズである。

『花嫁はギャングスター』シリーズは3作目まであり、興行成績は2001年の1作目は530万人、2003年の2作目は190万人、2006年の3作目は180万人であり、徐々に興行成績を落としている。

『マイボス・マイヒーロー』シリーズは、2001年の1作目『マイ・ボス マイ・ヒーロー（頭師父一体）』は340万人、2005年の2作目『マイ・ボス マイ・ヒーロー2ーリターンズ（Two 師父一体）』は600万人まで上昇したが、2007年の3作目『上司父一体ー頭師父一体3（3）』は100万人にとどまった。

3シリーズ中で一番興行成績のよかった『家門』シリーズは、2002年の1作目『大変な結婚（韓国名では家門の栄光）』は520万人、2005年の2作目『家門の危機』は564万人と調子よくきていたが、2006年の3作目『家門の復活』は350万人と興行成績を落とした。

2000年代以前でのやくざ映画は、「社会への批評や暴力の本質を省察するよりは『マッチョ・ファンタジー』や『男性性の再構成』に焦点が当てられた」「『ボス文化』の再生産、なくした父権への郷愁、力への崇拝が特徴だ。暴力団と権力者との癒着は付随的なものであるだけで、やくざ映画は『男性映画』として消費された」と言われている。また、「2000年代に入ってから、『やくざコメディ』という新種のジャンルが追加され、暴言と暴力をコメディで混ぜ合わせたもの」と言われている<sup>62</sup>。

映画の登場人物には一般の人々が多数登場し、『大変な結婚』（2002）の男性主人公は、やくざと徐々に打ち解けている。「やくざコメディには、普通の勤め人やインテリが最初は嫌がっているが、いつの間にかやくざと交わり、その雰囲気染まってしまうストーリーが少なくない」<sup>63</sup>という指摘のように、一般人との関係は、やくざとしてではなく、人同士の付き合いという程度になっている。

日本よりもやくざ人口の比率が低いのが、やくざコメディが韓国でヒットしたのは、徴兵制などに関係する強いものへの憧れによるバイオレンス志向、社会のアウトローであるやくざにこめた秩序や権威に対する反抗、職業によっては悪く描くとクレームが付く可能性があり、やくざならどのように描いても問題が起これにくいという社会事情という理由があげられている<sup>64</sup>。

やくざコメディは、やくざを描く際に、恐怖の対象、極悪人のイメージ、憧れの対象などとして、やくざの世界だけで完結させながら描くのではない。一般の人々が生きる世界に登場させ、コメディの登場人物の1人としてやくざを扱い、面白おかしく描くのである。

## 第2節 恋愛における男女逆転

### 1. 相手の条件

#### 1) 理想の相手

韓国では、女性の外見の美しさが特に重視され、これを基準とした理想の女性像が形成されてきた。戦後の1950年代や1960年代は、顔の美しい人がもてはやされた。妻は夫に従う価値観の中では、女性に選択権はなく、男性が選ぶ側であり、女性は選ばれる側であった。1970年代になり、ようやく女性の価値基準に幅が出始めたと言われている<sup>65</sup>。美人であることは女性の幸福の記号であり、幸福とは、美人であって経済的に裕福である男と結婚し、男の子を産むことを意味し、韓国人は、いかにも目に見えるところに自分のプライドの根拠を置く<sup>66</sup>。しかし、女性は男性を見た目で選んでいたわけではなく、男性の価

値は経済力であった。

結婚情報会社 DUO ( )<sup>67</sup>が、20代から30代の未婚男女を対象とした調査結果では、男性はニキビ顔の女性、女性のはげ頭の男性が一番嫌いであることがわかった<sup>68</sup>。この他、男性は、つめ垢(13.2%)、歯に挟まった唐辛子粉(12.1%)、釣り上がった目(10.4%)などを女性の許せない姿として選んだ。女性は、脂性の頭と顔(10.7%)、歯の間の唐辛子粉(9.8%)、鼻毛、低い背(各8.4%)などに拒否感をあらわした。

これらの外見の問題を解決しようと、20代から30代の83%が整形手術を考えた事があるとしている。未婚男性528人に、お見合いで気に入った女性が整形美人であった場合どうするかという質問をしたところ、54.5%は付き合いを継続させると答えた。また、実際に自分の恋人が整形手術をするのは嫌であるが、恋人が望むなら関係ないという答えが一番多かった。

記事の終わりでは、結婚情報会社関係者が「配偶者の選択時、外見の比重が高いのは事実だが、絶対的に外見だけが配偶者の条件ではない。しかし、ニキビなど特定の外見を絶対に排除する人が少なくないのも事実であり、ある程度の管理が必要である」としている。このように、外見に対する価値は比重が重い。

外見と共に重要視されているのは、経済力である。結婚情報会社の Bien-Aller ( )<sup>69</sup>が2006年5月6日から15日にかけて、結婚適齢期の未婚男女584人(男女各292人)を対象に電子メールとインターネットを通じて「配偶者候補の経済力(男)、外見(女)が自分の満足する基準の場合、性格、価値観などの充足をもとめるか?」というアンケートを行った。「特別な問題がなければ、結婚できる」が男性42.2%、女性43.1%で一番多く、「ある程度は合わなければならぬ」が男性28.9%、女性35.3%、「関係ない」が男性10.9%、女性19.6%という結果が出ている。

相手の条件がいくら良くても絶対許せないことは、男性にとっては相手の浪費癖(32.2%)、肥満(16.1%)、マナー・教養がない(13.8%)、宗教の違い(11.5%)などであり、女性にとってははげ頭(34.0%)、宗教の違い(18.9%)、マナー・教養がない(15.1%)、相性が悪い(13.2%)、浪費癖(11.3%)などであった。

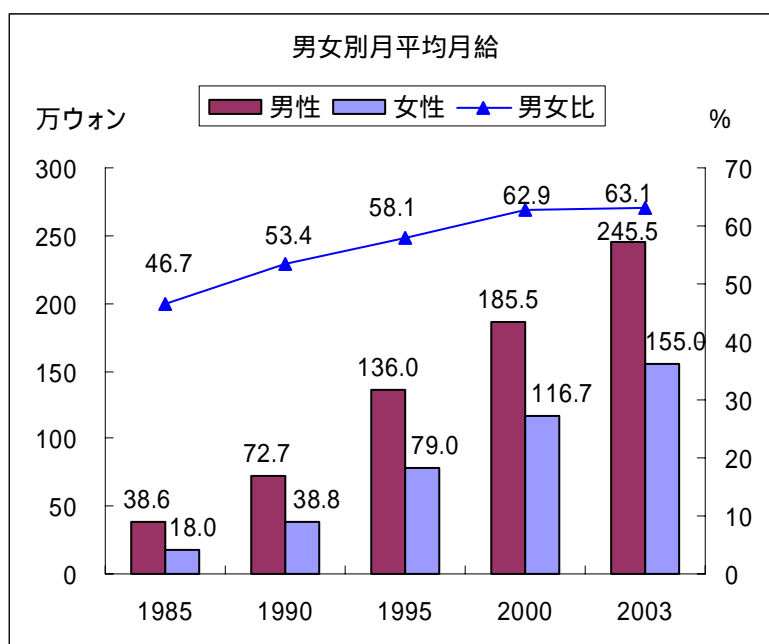
これらの質問のように、韓国人は見た目に対して強いこだわりを持っていることが分かる。また、男性にのみ恋人が整形していた場合どうするか、という質問をしているところを見ると、女性の価値基準に幅が出ているとはいえ、外見が美しいことに対する価値観が弱まっている訳ではないと言える。さらに、「配偶者候補の経済力(男)、外見(女)」とい

うアンケートをしていること自体に、男性に求められているのは経済力、女性に求められているのは外見ということがはっきりと表れている。

別のニュース記事では、結婚情報会社 DUO（ ）が、結婚できた会員 6,000 人を対象にアンケートを実施した結果、結婚できた男性は大部分が年俸 2,000 万ウォン（約 242 万円/2007 年 12 月現在）以上であり、2,000 万ウォン未満であった男性は 7%に過ぎなかったと伝えている。また、女性も同様に、結婚に成功した会員は、年俸 2,000 万ウォン以上が 56%、それ以下は 44%であった。結婚情報会社関係者は「女性が自分よりも収入の少ない男を忌避している」としている<sup>70</sup>。

2005 年女性統計年報によると、男女の平均月給は依然として女性のほうが低い数値になっているものの、少しずつ差が縮まっている（図 5）。1985 年の時点では、男性の平均月給は 38.6 万ウォン、女性の平均月給は 18.0 万ウォンであり、女性の平均月給は男性の 46.7%に過ぎなかった。2003 年になると、男性の平均月給は 245.5 万ウォン（約 29.7 万円/2007 年 12 月現在）、女性の平均月給は 155.5 万ウォン（約 18.8 万円/2007 年 12 月現在）であり、女性の平均月給が男性の 63.1%まで上昇した<sup>71</sup>。年俸 2000 万ウォンというのは、月給にすると約 166 万ウォンであり、女性の平均月給でクリアできる数字である<sup>72</sup>。

図 5 男女平均賃金格差



『2005

』 288, 289 頁

このように、結婚には男性の経済力と女性の外見が、必要な条件として現れている。映画の中では、男性の場合、外見を重視していると取れる場面がいくつかある。『ゴースト・ママ』(1996)では、男性主人公の同僚の女性は、妻が亡くなってからこれまで、主人公とその子供の世話をしてくれていた女性であり、おしゃれに関心がなかった。男性主人公は、妻が幽霊として現れてから同僚のことを放っておいた上に、好意を持っていた同僚を振って突き放した。その女性は、ストーリーの終盤で美しく変身する。女性が美しくなったとたん、男性主人公は同僚の女性を意識し始めた。

『八月のクリスマス』(1998)では、子供同士の話で、写真を見ながら好きな女子を指差し会話をしている。その中で、徐々にけんかになりお互いの事を悪く言い始める。最終的には相手の容姿を指摘しながら、「男前で背が高ければいいのか」という会話になっていく。これらのように、美人か美人でないかで女性の見方が変化視することや、子どもの頃からすでに容姿が重要であると考えていることが表現されている。

また、外見以外では『愛のゴースト』(1999)の女性主人公の付き合っていた彼氏は、主人公に対してうるさく言わない女性が好きと言っている。しかし、実際主人公と二股をかけながら付き合っていたのは、自分が勤める会社社長の娘である。この男性は、自分の出世に役立つような、権力に近い女性と付き合っている。

『敗者復活戦』(1997)の男性は、別れた女性主人公に、「愛しているのは君だが、別の女性と結婚するのは、楽であるから」と言っており、結婚相手は、好きな人よりも自分の役に立つ相手を選ぶと表現されている。男性側から女性の好みを話している場面は以上のように登場している。

女性の場合、前記のアンケートでは相手の経済力が重視されていたが、映画の中では経済力を重視せずに相手を選んでいる場合がある。

『陽が西から昇ったら』(1998)では男性が野球審判員で女性が人気女優、『銀杏のベッド』(1996)では男性が画家で女性が医者というように、女性のほうが経済力を持っている作品もあり、特に相手の経済力についてこだわっていない。『シングلز』(2003)のように経済力のある男性を女性が選択しない場合や、『私の頭の中の消しゴム』(2004)のように、お金のない男性を選択するというように、経済力を重視していないことが表面化しているものもある。『君に捧げる初恋』(2003)では、男性が弁護士と医者になっているが、その作品では女性主人公のために男性が自ら弁護士や医者になっており、女性側が経済力で選んでいるわけではない。

女性が主婦の場合では、『浮気な家族』（2003）の夫は弁護士だが、妻は自分でも働いているので、男性に経済力のみを求めているとは考えにくい。また、『ハッピーエンド』（1999）では女性が塾経営者で男性がリストラされたサラリーマンというように、女性のほうが稼いでいる。映画の中では実際とは違い、男性の経済力が重要なものとして表現されていない。全体的に男性が稼がなければならない、という価値観は描かれておらず、女性が養うことが描かれている。

『永遠の片想い』（2002）では、幼い女の子の理想の男性像が描かれている。男性主人公には初恋の女の子がいたのだが、女の子に向かって、ガキ大将が「お前は今日から俺の女だ」と言った。それを見ていた主人公は、女の子を守ろうとして近付いた。主人公は女の子に「あんたは強いのか」と言われ強いと答えてしまう。ガキ大将とけんかすることになったが、けんかが強いのは嘘なので、当然負けてしまい、女の子は「強い男が好き」と言ってガキ大将についていった。理想の男性像が、強い男というように表現されており、幼い子どもの理想もそうであることが表現されており、現実とは差がある。

実際に結婚相手に重要視することは何か。高麗大学学生相談センターが行った 2006 年度新入生実態調査の中で、大学新入生の職業による配偶者選好度を調査している記事がある<sup>73</sup>。結果によると、1 位が教師（27.7%）、2 位が公務員（12.1%）であった。男女別に見ると、男子学生が好む配偶者の職業 1 位は教師（39.4%）、2 位は公務員（11.3%）であり、女子学生が好む配偶者の職業 1 位は医者（17.6%）、2 位は公務員（12.1%）であった。

また、配偶者選択基準を見ると、男子学生は性格（48.9%）、外見（18.4%）、価値観（10.8%）を重視すると選択し、女子学生は性格（43.5%）、職業（16.8%）、価値観（16.7%）を重視している。

学生の場合、性格を一番上位にあげているが、韓国結婚文化研究所が調査した「2007 年配偶者人気職業」によると、配偶者人気職業群は以前とは変化したようである。職業が安定しており、給料が高く、名誉のある職業という条件によって、海外プロスポーツ選手が配偶者として好まれている。

海外プロスポーツ選手は、男性職業の中で判事、公務員とともに 1 位、女性職業の中では単独 1 位に選ばれた。男性の場合、1 位に変化があったものの「相変わらず医者、薬剤師、判事、検事、弁護士、公務員など、金、権力、名誉、安定性のある職業は他の職業より高い数値を出している」と紹介している。女性の場合は、以前は教師が 1 位であったが、アナウンサー、公務員などが新しく登場している。研究所は「配偶者が経済力を持ち、そ

れほどきつい仕事ではなく、時間の余裕を持っていることを望む新世代<sup>74</sup>の考えを反映している」<sup>75</sup>と説明している。

理想の相手に関して、多くの記事が紹介されている。独身に関するある記事では、『「男性は能力、女性は外見」という結婚観が『男性も外見、女性は能力』に変化している。男性の経済力に頼らなくてもいいという女性が増えており、異性を選択する基準も変化している」「男性は女性の経済力をより考慮している」「女性が必ずしも初婚である必要は無い」「女性は経済力、男性は外見に気を使わなければならない」<sup>76</sup>という内容が紹介されている。「男性も外見」というように男女ともに外見が重視されており、女性の経済力も考慮されるようになっている。

結婚情報会社 SUN00 の研究所が発表した資料によると、理想的男性配偶者の条件は、年所得 1 億ウォン以上、身長 179 c m から 180 センチ、体重 70 kg から 80 kg、短髪、女性は身長 163cm から 165 cm、体重 40 kg から 49 kg、長いストレートヘアであると新聞記事で紹介されている。「いい男」の条件は、外見、性格、能力、財力、家柄、学歴などが挙げられるが、最近では外見より職業、職業より財力が条件として大きな比重であるとされている<sup>77</sup>。外見が重視されるのは当然のこととされ、それにプラスされたものが必要となっている。

また、日韓の配偶者に関する調査がある。2007 年 10 月ごろ韓国の結婚情報会社 DU0 と日本の結婚情報会社オーネット<sup>78</sup>が、24 歳から 33 歳の未婚男女各 500 人を対象とした「未婚観」「結婚観」「生活価値観」などについてアンケートを実施した<sup>79</sup>。

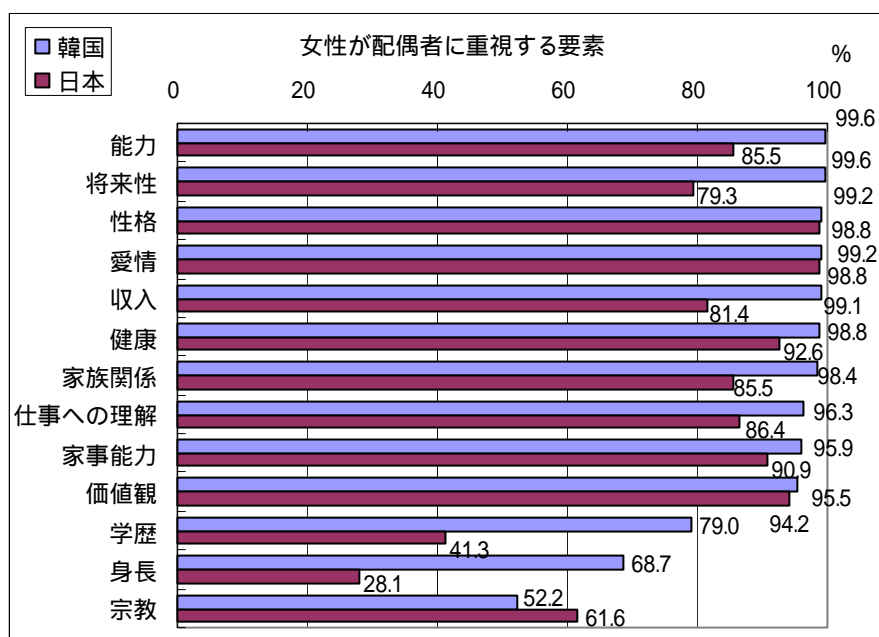
結婚相手を選択するとき考慮する要因（複数回答）として、韓国女性に能力、将来性（各 99.6%）、性格、愛情（99.2%）、収入（99.1%）であり、日本女性に性格、愛情（98.8%）、価値観（94.2%）、健康（92.6%）、家事能力（90.9%）を選択した。韓国女性に比べて配偶者に対する期待値が高く、「能力、外見、性格まで兼ね備えた＜完璧男＞を望んでいる」と紹介されている。

また、韓国男性は、配偶者を選択するときの要因として愛情（97.6%）と性格（97.1%）、仕事に対する理解（95.1%）、健康（94.7%）、価値観（92.3%）などを選び、日本人男性は愛情（96.2%）、家事能力（84.4%）、仕事に対する理解（84.0%）、外見（84.4%）などを選択している（図 6、7）。

日本は理想の相手の条件として愛や性格を重視しており、恋愛至上主義の中で結婚が考えられている。韓国では結婚に対して愛や性格などを重視するとともに、現実的な条件についても理想が高くなっている。現実世界において、ドラマや映画の中に出てくるかのよ

うな完璧な男性が理想像とされている。学歴や収入が重視されており、競争社会であることが現れている。映画では経済力を重視しない美しい恋愛の物語が描かれているが、現実の結婚は生活の手段としての役割が重視されている。また、日本よりも男女とも家族関係が重視されている。

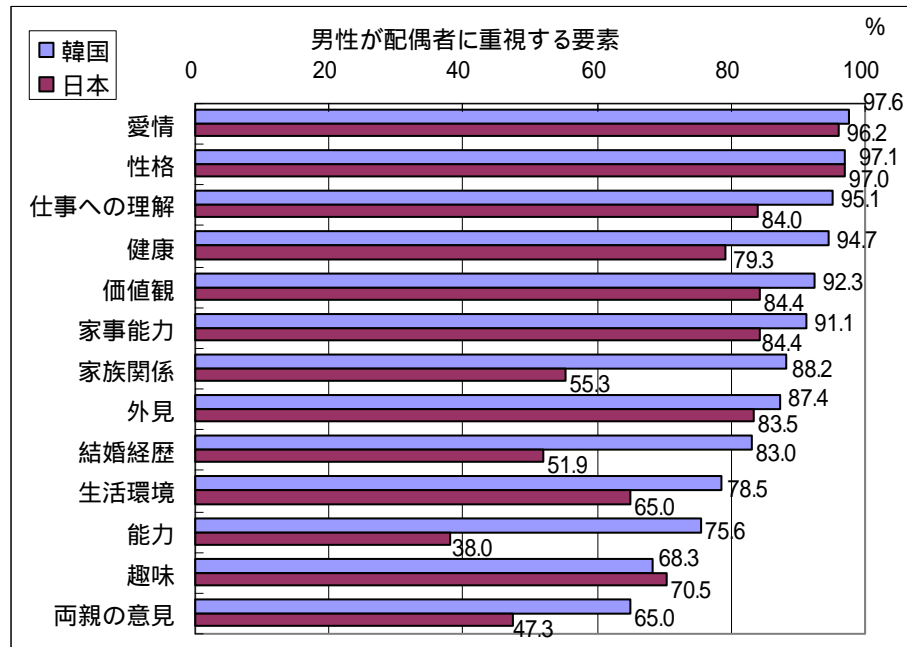
図 6 日・韓における配偶者の重視要素（女性）



「 『 』 2007年10月9日



図 7 日・韓における配偶者の重視要素（男性）



「 『 』 2007年10月9日

2) 年上女性、年下男性のカップル

恋愛や結婚相手の条件の1つとして、相手の年齢が上げられる。これまで韓国では、男性が年上であることが当然のものとして、受け入れられてきたと考えられる。しかし近年、女性が年上であるカップルが増加していることが、インターネットのニュース記事で取り上げられている<sup>80</sup>。

また、結婚相談所 Bien-Aller ( )<sup>81</sup>が2006年7月5日から13日までに未婚男女648名(男女各324名)に行った「男性より女性の年が上のカップルに対する意見」というアンケートによると、女性の70%が男性の方が年下のカップルに対して肯定的な意見を持っており、男性の53.8%も年上の女性に対して肯定的な反応を示した。「不自然である」「絶対にだめ」という意見は、男性が21.2%、女性が5.9%であった。

2006年7月20日のスポーツカンの記事<sup>82</sup>によると、「2006年5月のテレビ放送で約2,400名に対して行った調査では、67%の約1,600名が年下男性、年上女性の組み合わせで付き合ったことがあると伝えている」としている。記事は「年下男・年上女、これが結婚の正解である」という一文で締めくくられている。年上女性、年下男性を選択する若い世代は

増えており、女性が年上のカップルが流行する風潮ともなっている。

しかし、結婚となると話は別になるという現状がある。1996年に結婚した初婚夫婦のうち、夫が年上の夫婦は79.7%、同じ年の夫婦は11.0%であり、妻が年上の夫婦は9.3%と少数派であった。10年後である2006年に結婚した初婚夫婦では、夫が年上の夫婦は71.9%、同じ年の夫婦は15.4%であり、妻が年上の夫婦は12.8%となった<sup>83</sup>。

夫婦のうち妻が年上という組み合わせは、年々増加傾向にあるものの、変化は緩やかであり、統計上わずか12.8%という少数であることには変わらない。しかし、ニュースで取り上げられている様子から、このわずかな変化が韓国にとって重大なできごととして捉えられていることがわかる。

日本では、1975年に結婚した初婚夫婦のうち、夫が年上の夫婦は68.0%、同じ年の夫婦は20.6%、妻が年上の夫婦は11.4%である。また、2005年に結婚した初婚夫婦では、夫が年上の夫婦は57.4%、同じ年の夫婦は19.0%、妻が年上の夫婦は23.7%である。夫が年上の夫婦が一番多いのは韓国と同じであるが、妻が年上、同じ年の割合が、韓国よりも多い。日本では、それほど不自然に見えない女性が年上の夫婦も、韓国では少数の特殊な例として見られていることになる。

韓国映画の中で、年下男性と年上女性のカップルが登場するものは、対象の作品中2本ある。1998年の『チム～あこがれの人～』と2004年の『オオカミの誘惑』である。どちらの映画もカップルは結婚に至らない。

『チム～あこがれの人』(1998)は、年下の男性が年上の女性を好きになり、ハッピーエンドになる映画である。映画の中で、主人公の友人が「年上の女性がいい訳がない、それが常識」と言ったり、女性が最後に「年上だけどいいの」と尋ねたりしている。この映画の中では、年下の男性と年上の女性が付き合うことは、ありえないことであり、非常識なことであるという否定的な表現をされている。

韓国の結婚状況を見る限り、年下男性と年上女性がカップルになり、上手くいくことは少数のめずらしいことであり、映画の世界のこととして、それも結婚ではなく付き合うだけという設定で描かれたのだといえる。

『オオカミの誘惑』(2004)では、女性が1つ年上というカップルが登場する。女性は2人の年下から好かれるが、最終的にそのうちの1人と付き合うことになる。年が1歳差しかなく、学生同士というものもあるが、年下から好かれる女性にも、年上を好きになる男性にも否定的な表現はされていない。

また、この映画の中では、年下男性と年上女性の組み合わせに対する、登場人物の否定的な意見が一切出てこなかった。『チム～あこがれの人』(1998)よりも年下男性と年上女性の組み合わせが、結婚ではなく付き合うという点では、社会的に理解されやすい状況に変化していたとみることができる。

対象外の作品の中にも年上女と年下男のカップルを扱ったものがある。『春の日は過ぎ行く』(2001)は年下の男性と年上の女性の物語で、最後は別れでエンディングを迎える。女性が年下の男性と付き合う、男性が年上の女性と付き合うということを選択でき、それが理由で別れを選んでいるわけではないので、年上の男性と年上の女性が付き合うことに対しては否定的ではない。付き合うこと自体は自然に近づいている状況といえる。

また、1999年の『我が心のオルガン』では、登場人物のカップルではないが、年上女性と年下男性に関して、「年上の女性と付き合う男性はよくない」と考える女性が登場する。この作品の舞台は、1960年代を中心としており、1960年代の社会意識に基づきつつ、1999年の社会意識を反映している映画である。1999年の時点では、年上女性と年下男性の組み合わせが一般的に受け入れられていなかったといえる。

対象作品中に、「普通」の状況(不倫、浮気などを除く状況)で付き合うカップルの中で年上女性と年下男性が2組しかないということは、年上女性と年下男性の組み合わせが一般的ではないと考えられており、自然ではないということである。韓国において、恋愛の場合は年上女性と年下男性のカップルが許容されているが、結婚する異性は、男性の場合は年下女性、女性の場合は年上男性というのが自然であると考えられている事になる。

韓国人にとって、恋愛では年上女性と年下男性のカップルも許容されるようになったが、結婚は年上男性と年下女性でなければならないという感覚があると考えられる。男性たちは兵役によって20代前半の約2年間日常生活から離れていく。そのため、兵役が終わってから本格的に恋愛し始めることになる。同じ年の女性と軍隊に入る前から終わるまで恋愛関係が続いていたとすれば、結婚の可能性も考えられるが、それ以外の女性は、大学に通う兵役から戻ってきた男性が恋愛対象になる。そうすると、軍隊から戻ってきた男性の恋愛対象は、復学した同じ大学に通う年下の女性になる。20代前半に恋愛しにくい時期が存在するために、年上男性と年下女性が恋愛関係になる可能性が高い。この関係が男女の理想的な姿であると考えられるようになったとみることができる。

女性の社会進出と激しい女性運動の影響を受け、韓国社会が変化したことは年上女性と年下男性カップル増加の原因の1つであると考えられる。こうした変化が、徐々に映画の

中で描かれるようになっていく。男性の弱さが許容される流れによって、年下男性の許容が起こっている。弱い男性を許容する流れの一方、『シュリ』(1999)『ブラザーフッド』(2004)『JSA』(2000)など、徹底的に男の弱さを排除し、男の社会を描くことで強くありたい男性を補っている。1つの事柄に対して、全く逆の強い反発が起こり、両極端な面を持つ社会となる。

## 2. 男性の「弱さ」と女性の強さ

### 1) 男性の「弱さ」

韓国社会において男性は、「男らしく」強くなければならないという軍隊のような環境があり、家父長制など社会の価値観に従い強くありたいという願望を持ってきた。「男らしい男性」の標準タイプとみなされるものは、洋画のヒーロー像として描かれてきたような、責任感、決断力、独立心、成果主義、パワー、そして合理性を備えた人間像に近いものである<sup>84</sup>とされていた。元々儒教道徳には、男女の分をはっきりさせるという考え方がある。

『シュリ』(1999)や『ブラザーフッド』(2004)など韓国映画において、男性社会である軍隊を描いたものが扱われ、女性そのものや女性的な面を排除した「男らしい男性」が表現されている。それらの作品が人気を得ているのは、『シュリ』(1999)をきっかけとするハリウッド映画を意識した韓国型ブロックバスター映画の誕生という側面もあるが、映画で「男らしさ」を誇示することによって、男性の強さを取り戻そうとしていると考えられる。韓国社会と韓国人男性は強くなければならないという固定観念と、強くありたいという願望にとらわれている。

しかし、映画の中には、上記の「男らしい男性」とは異なる男性の姿がある。例えば2001年の『花嫁はギャングスター』では、妻がやくざで強い立場にあり、夫は妻に強く出ることができない弱い立場として描かれている。「強い妻(女性)と軟弱な夫(男性)」という関係は、『花嫁はギャングスター』をはじめ、同時期韓国公開されていた『猟奇的な彼女』、『春の日は過ぎゆく』にも見られる傾向である<sup>85</sup>という指摘のように、男女が逆転し、強い女性・弱い男性や強い妻・弱い夫が映画の中で表現されている。

『猟奇的な彼女』(2001)は弱い男性を表現する映画の典型的な例である。普通の女子大学生が、男子大学生を普通に殴り、乱暴な言葉遣いをし、記念日は忘れるなど脅し、プレゼントとして花をもってこい、呼び出したらすぐに来い、などと命令する。男性主人公は、その命令やわがままに全て付き合い、何も言わず暴力を受け入れ、女性に振り回され

る情けない弱い男として描かれている。「弱い」男性と、それを振り回す強い女性という構図の登場である。この作品の登場は、韓国社会の変化を象徴していると言える。

もう1つ、主人公の男性を「弱い」ものとして際立たせるのは、兵役の種類である。映画のストーリーは、主人公の男性が兵役を終えて大学に復学する所から始まるのだが、そこで彼が、公益勤務要員（兵役の1つであるが、軍に入らず役所などに勤める人々）として兵役を終えてきた事実が分かる。友人たちからは、兵役のことを軽い口調でからかわれている。兵役を回避したいと思う人々は多くいるが、軍隊に入ってこそ本当の1人前の男になるとみなされる韓国社会では、実際に軍に所属していないことで1人前の男として認められないという立場に陥ることもある。わざわざ公益勤務要員として設定することで、男性を「弱く」情けなく描いても違和感なく見ることができるのである。

『猟奇的な彼女』（2001）以外でも、男性の弱い姿を描いた作品は、いくつか挙げられる。『寵愛』（2000）の男性主人公は、女性主人公が自分の部屋に帰ってくるのをひたすら待ち続けている。彼女のために料理を作り、洗濯し、アイロン掛けをする。男性はひたすら彼女に尽くす男であると言える。彼女は男性が自分に気があることを知っており、男性にあなたを利用していると告げたこともある。男性はそれでも自分の部屋に戻ってきてくれる彼女のことを思い続けているという一途さを持っている。また、彼女は、昔の恋人から電話がかかってくると、すぐに男性の部屋を飛び出し会いに行くが、男性は何も言わず彼女を待っている。しかし本当は、昔の男からの電話で出て行ってほしくないという思いも持っているが、それは言葉にしない。

このような設定は、男性主人公が女性、女性主人公が男性として当てはめても違和感なく見ることができる。男性は女性に行動を強要される訳でなく、自分の意思で行っている。男性が家事をしながら女性を待つという姿は、「男らしい男性」ではない。

また、『永遠の片想い』（2002）の男性主人公は、弱いという訳ではないが、優しい男性として表現されている。3人での無理な旅行にも付き合うなど、2人の女性たちのために、何でもするという尽くす面を持っている。何をすることも自分からと言うよりは、2人に押され気味であり、自分が強いというタイプではない。

同様に『僕の彼女を紹介します』（2004）の中でも、男性が女性を引っ張っていくと言うよりも、女性に男性が振り回されるように描かれている。この作品の場合、男性が弱々しいというわけではないが、女性の方が活発な性格であり、女性の言うことに付き合っている。

その他、15位以内ではないため対象作品外であるが、『春の日は過ぎゆく』( )では、女性が年上のカップルであり、年下の男性をリードしている形になっている。男性が女性に引っ張られており、女性が強気とすることができるので、男性のほうが「弱い」立場で表現されている。

映画の中で「弱い」男性の姿が描かれるようになっていく。男性は強くなければならぬ、男らしくなければならぬという強い価値観を守りたいとしながらも、強くあり続けることに疲れたことや、社会的立場が強くなりつつある「強い」女性の登場もあり、「弱い」男性の許容できるようになっている。

## 2) 変化した女性

前項の「弱い男性」の対として、強い女性を考えることができる。男性が男性らしく「強く」なければならなかったように、女性は、女性らしく「弱く」ならなければならなかった。しかし、政府や市民運動などにより、女性の権利に関する制度的・法的枠組みは急速に整備されている<sup>86</sup>。特に1990年代以降、社会における政治的取り組みや法整備は急速に発展しており、女性を取り巻く環境は急激に変化しており、それに伴い、映画の中にも強い立場を取れる女性が描かれている。

『花嫁はギャングスター』(2001)のように、女性主人公がやくざのナンバー2という実力を持つ「強い」女性や、『春の日は過ぎゆく』( )のように離婚経験のある女性が若い男性との恋愛の主導権を握るといった立場の「強い」女性も登場する。

『マイ・リトル・ブライド』(2004)では女性主人公の担任として、仕事を持つ独身女性が登場している。この女性は、男性主人公の教育実習指導教員であり、学校に弁当を作ってきて、主人公に食べさせるなど、男性主人公の気を引こうと、様々な行動を起こし積極的に行動する。

『私の頭の中の消しゴム』(2004)では、女性主人公からプロポーズをしている。男性主人公はそれを何回も断るが、女性はあきらめずにプロポーズし続ける。女性の側から、しつこく何度もプロポーズをし、なぜ私と結婚できないのかと質問までする。ここには、相手の態度を待つだけの女性、あきらめる女性など、消極的な態度は存在しない。この女性は、自分の望むことをはっきりいい、だめならだめでなぜなのかを問いただし、断られても諦めず、自分が成し遂げたいことを貫く姿勢を持っている女性として描かれている。

封建的、儒教的と言われる韓国では、女性の社会的立場や家庭での立場は弱いとされて

いるが、「強い」女性が映画に表現されることは、女性に対する社会の変化を物語っている。

### 3) 女性の結婚と仕事

韓国において進学率は、急激に上昇している。高校進学率は、1985年の時点で88.2%（男性93.1%）であり、2005年には99.8%（男性99.7%）と、ほぼ100%に近い数値となっている。大学進学率は、1985年では34.1%（男性38.3%）であったが、10年後の1995年は49.8%（男性52.9%）、さらに10年後の2005年は80.4%（男性82.7%）となっている<sup>87</sup>。大学進学率が男女共に8割を越えている。

また、25歳以上の学歴構成比も急激に変化している。1985年には小学校卒以下が54.1%（男性31.9%）、中卒が20.5%（男性20.5%）、高卒が20.2%（男性21.1%）、大卒以上が5.2%（男性15.5%）であり、小学校卒以下が半数以上を占めていた。これが2000年には小学校卒以下が30.4%（男性15.1%）、中卒が14.3%（男性12.3%）、高卒が37.3%（男性41.6%）、大卒以上が18.0%（男性31.0%）となった<sup>88</sup>。これらの統計のように、男性に比べて低い所もあるが、女性の進学率は上昇し、高学歴化が進んでいるのは事実である。

韓国では、1970年代の急激な経済規模の拡大によって、女性の労働力は著しい量的増加を記録したが、質的な面ではほとんど何の変化もみられずにいた<sup>89</sup>。しかし、現在は以前とは違い、高学歴化しているにもかかわらず、女性の就業状況は厳しい状態が続いている。

女性の就業率は、1980年は高等学校卒で53.8%（男性54.8%）、専門大学（専門学校）卒で41.7%（男性48.7%）、大学卒で68.1%（男性75.2%）、大学院卒（1985）で77.1%（男性86.9%）であった。2005年現在は、高等学校卒で57.0%（男性47.3%）、専門大学（専門学校）卒で82.6%（男性84.6%）、大学卒で62.3%（男性67.7%）、大学院卒78.6%（87.3%）となっている<sup>90</sup>。大学卒以上の就業率は、男女差が縮小し、数値自体は以前より改善されている。

女性の労働参加率は、2005年50.5%であるが、年齢別に見ると30～39才で下落し、40才以降上昇のM字型である（図8、表3）。未婚女性の経済活動参加率は、1990年は高校卒で66.1%、大学卒以上で78.8%であり、2004年になると、高校卒で55.8%、大学卒以上で82.8%である。これが既婚女性になると、1990年は高校卒で34.7%、大学卒以上で39.6%であり、2004年になると、高校卒で51.0%、大学卒以上で48.5%である<sup>91</sup>。結婚と仕事は、未だ両立が難しい状況であるといえるが、以前より数値が上がっており、結婚後も仕事を続ける人は増えていると言える。

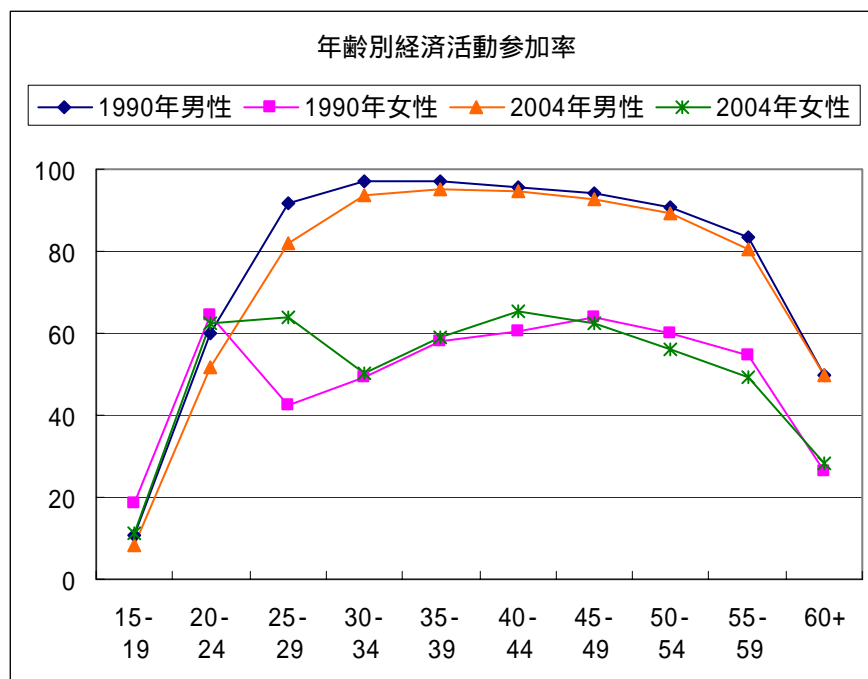
賃金労働の場合、女性の 1985 年の労働形態は、正規雇用が 60%、非正規雇用が 22%、日雇いが 18%であった。1990 年以降、全体の労働形態の中で非正規雇用の割合が伸びているが、2004 年の時点では、正規雇用の割合が上回っている。女性の非正規雇用の割合は、1995 年に正規雇用に並びその後は正規雇用を上回り続けながら、徐々に増加している。2004 年になると労働形態は、正規雇用が 37%、非正規雇用が 46%、日雇いが 17%である<sup>92</sup>。

女性が働くことに対してどのように考えているかについては、家庭に専念、結婚前まで、1 人目の出産前まで、子どもの成長後、結婚前と子どもの成長後、家庭と関係なくの 6 つに分類されている（図 9、表 4）。女性の場合、「家庭に専念」が 6.0%、「結婚前まで」が 4.4%、「1 人目の出産前まで」が 5.5%、「子どもの成長後」が 13.4%、「結婚前と子どもの成長後」が 26.2%、「家庭と関係なく」が 40.2%となっている。結婚に関係なく就業に対して前向きに考えている人が 40%を占めている。

男性の場合、「家庭に専念」が 10.0%、「結婚前まで」が 6.1%、「1 人目の出産前まで」が 8.1%、「子どもの成長後」が 14.3%、「結婚前と子どもの成長後」が 24.6%、「家庭と関係なく」が 30.2%となっている。家庭に専念、結婚前まで、1 人目の出産前までの項目で、それぞれ女性を上回っており、家庭と関係なくでは 10%下回っている。男性に比べて、女性は自らが結婚後も仕事をするに対して肯定的であり、男性は女性が家庭に専念すると考えるよりも家庭に専念して欲しいと思っていることがわかる。



図 8 年齢別経済活動参加率



『2005

』42頁

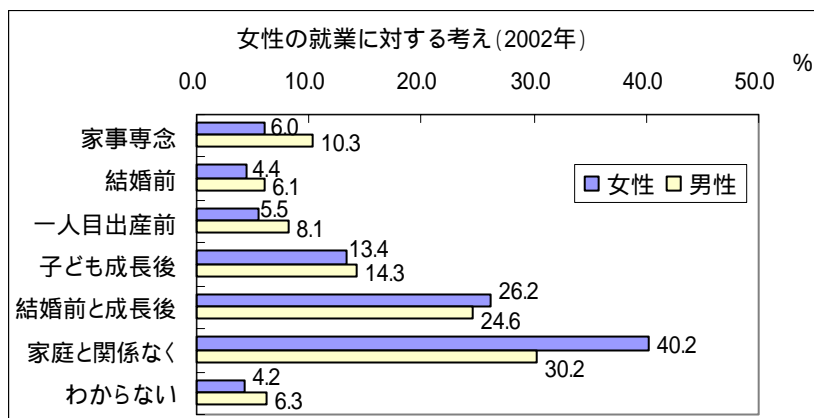
表 3 年齢別経済活動参加率

年齢・単位: %	15-19	20-24	25-29	30-34	35-39	40-44	45-49	50-54	55-59	60+	
1990年	男性	10.8	60.2	91.9	97.2	97	95.7	94.2	90.6	83.6	49.9
	女性	18.7	64.6	42.6	49.5	57.9	60.7	63.9	60	54.4	26.4
2004年	男性	8.5	51.8	82	93.8	95.1	94.8	92.5	89.4	80.7	49.6
	女性	11	62.5	63.7	50.3	58.8	65.4	62.6	56.1	49.4	28.3

『2005

』42頁

図 9 女性の就業に対する意識



『2005 』 319 頁

表 4 女性の就業に対する意識

単位: %		家事専念	結婚前	一人目出産前	子どもの成長後	結婚前と子どもの成長後	家庭と関係なく	わからない
1988	合計	21.2	26.3		21.0	20.7	10.8	
	男性	25.4	28.7		19.3	18.2	8.4	
	女性	17.5	17.8		23.9	24.6	16.7	
1991	合計	21.1	20.2		22.4	22.5	13.7	
	男性	25.7	22.9		20.9	20.2	10.3	
	女性	17.0	17.8		23.9	24.6	16.7	
1995	合計	15.8	13.2		16.1	34.1	20.9	
	男性	19.6	15.1		16.1	32.3	16.8	
	女性	12.1	11.3		16.1	35.8	24.7	
1998	合計	10.0	11.6	7.5	14.5	26.4	26.8	3.1
	男性	11.6	13.1	8.4	15.0	25.2	23.1	3.7
	女性	8.5	10.3	6.7	14.0	27.6	30.4	2.6
2002	合計	8.1	5.2	6.8	13.8	25.4	35.4	5.2
	男性	10.3	6.1	8.1	14.3	24.6	30.2	6.3
	女性	6.0	4.4	5.5	13.4	26.2	40.2	4.2

『2005 』 319 頁

映画の中では、女性が職業を持って働いている姿が描かれており、さらに専門職であることが多い。『銀杏のベッド』(1996)では、女性主人公が貧乏にも負けず、自分の意思で医者になり、その道を貫こうとする姿が表現されている。この女性は、男性主人公にプロポーズされるが、一度断っている。結婚を渋る理由としては、このままの関係がいい、という彼女の言葉がある。

女性主人公は、自分が仕事をしているときには結婚について無関心であったが、仕事でうまくいかない時には、結婚も考えるような展開となっている。その後、結婚するが仕事を続けているかどうかは不明である。映画が公開された1996年の時点で、結婚は自分で決める、結婚してもしなくてもどちらでも良いという考え方が表現されている。

『敗者復活戦』(1997)では、画家である男性が不得意な、絵を描くこと以外の手続きなどを全て女性が引き受けている。この女性は、画家の男性と付き合うまでは、獣医の男性と付き合っていた。男性に利用されているようにも見えるが、自分自身が仕事のステップアップのために、画家の男性を結婚相手として選んでいる。結婚して仕事を辞めるのではなく、結婚した後、自分の仕事を成長させることができる人との結婚を選択する女性が描かれている。

『チム～あこがれの人』(1998)では、女性主人公が仕事を一生懸命こなしているが、家族や周囲から独身であることを心配されている。自分だけ結婚していないことに何の疑問も持っていなかったが、久しぶりに会った友人たちは、結婚して子どもがおり、話題についていけない。仕事をしている女性が結婚できないという雰囲気表現されている。

『シングلز』(2003)の女性主人公は独身である。気に入らないからと上司に異動させられてしまう。デザイナーとして働いてきた主人公であったが、何の関連もない飲食業の部署で働くことになる。しかし、理不尽な扱いを受けたにもかかわらず、会社を辞めることなく異動先でも一生懸命働いている。女性の働きづらさが表れている。

異動先の店長は女性である。ストーリー終盤になると、この店長は子どものために仕事を辞めるといい、主人公に後を託す。主人公は、そのときプロポーズされていたため、仕事を辞めようかと考えていたが、言い出せなくなってしまった。これまで店長としてがんばってきた面と、子どものためにと仕事を辞めていく面と2つの女性の姿が描かれている。

最終的に、この主人公は仕事を辞めず、付き合っていた人からのプロポーズを断る。結婚したいという気持ちもあったが、親友が妊娠し1人で育てると聞いたこと、自分の夢を他人に頼って叶えることへの違和感、仕事をしたいという気持ちなどがあったためである。

結婚が一番ではなく、自分がほかにも大切なものがある場合、今は結婚を選択せずに生きていくという道を選ぶ場合が描かれている。

そのほか女性の仕事は、『大変な結婚』（2002）の主人公は製薬会社勤務、『君に捧げる初恋』（2003）では会社員、『敗者復活戦』（1997）では写真家、『八月のクリスマス』（1998）、『僕の彼女を紹介します』（2004）では警察官、『家門の危機』（2005）では検事の後に弁護士、『陽が西から昇ったら』（1998）では女優、『イルマーレ』（2000）では声優、『Interview』（2000）ではダンサー、『花嫁はギャングスター』（2001）ではやくざ、『ボーン・トゥ・キル』（1996）、『ユア・マイ・サンシャイン』（2005）ではホステスという職業に就いている。1990年代よりも2000年代のほうが、普通に女性が仕事をしている様子が描きやすくなっていると考えられる。『シングلز』（2003）では、女性が働く上での苦労についても自然に描かれており、より現実的に表現されている。

また、『我が心のオルガン』（1999）では、女性教師が恋人と結婚し、海外に行くため仕事をやめている。1960年代という舞台設定があるので、この時代には、夫に従うのが当然だと思える女性が普通の女性であったと表現されていることになる。現代の映画の中でも、『私の頭の中の消しゴム』（2004）の主人公はデザイナーとして働いていたが、結婚した後に仕事を辞めている。

一方、結婚後も仕事を続けている女性は、『ハッピーエンド』（1999）では主婦兼塾の経営者であり家計を支えており、『浮気な家族』（2003）では元ダンサー、結婚後は主婦をしながら裏方で働くという女性も描かれている。

『花嫁はギャングスター』（2001）では、やくざという状況が特殊であるが、女性が男性の上司として働いている。主人公の女性が、部下に向かって「お前ら女の下で働くのは嫌だろ」という内容の質問をする場面がある。そのときの部下は「自分を助けてくれた人に女だろうと男だろうと関係ない、一生ついていく」という返事をする。女の自分が上司であることが部下たちにとって嫌なことかもしれないと考えての質問であり、女性の上司はまだ受け入れられにくい環境が表現されている。映画の中で描かれる女性は、現実を多少は反映しているものの、現実の女性とのずれが生じていることが分かる。

### 3. 女性の弱さ

#### 1) 変化しない女性

女性の高学歴化が進み、社会進出が活発になっている。前項では、「弱い」男性や「強

い」女性の登場について論じた。2001年インターネットでの婚前同棲に対する意識の調査で、婚前同棲は賛成が9割近く、女性のほうが高い数値であったことから、この結果は『女性上位時代』という表現がまんざら嘘ではないことを表している<sup>93</sup>とあり、女性が強くなっていると論じている。この調査結果に対して「女性上位時代」という言葉を使うのがふさわしいかは別として、女性が強くなりつつあるのは確かであり、多くの人がそのような認識を持っている。

しかし、強くなったとはいえ、社会全体の価値観が完全に変化しているわけではなく、強い面、弱い面という2つの面が同時に存在している。韓国社会は儒教的であるということに対して、「ささいな習慣だけで韓国が儒教の国などと規定したりするのは、誤解の原因にこそなっても、韓国社会を理解する上では役に立たない。(中略)今日、儒教的といわれることからは、独裁政治の中で再生産されてきた権威主義的秩序意識にほかならない<sup>94</sup>という指摘もあるが、一般的に韓国の女性は、現在も韓国社会に強い影響を残している儒教的な価値観と家父長制の影響を受けており、男性に従属的であるといわれている<sup>95</sup>。

韓国社会＝儒教＝女性の抑圧というイメージが連想されるように、韓国女性のあり方は儒教を基本とした価値観が根底にあるということである。ここでは、「強くなった」と言われている女性の中にも存在する、固定観念や価値観に縛られるなど立場の「弱い」女性について検討する。

韓国社会で重要である儒教は、李朝時代(1392～1910)の支配思想であった。儒教は厳格な身分制度と家族制度を重んじていたが、李朝初期と後期では厳格さに大きく差があり、李朝初期では女性の地位もかなり高かったとされている<sup>96</sup>。

朝鮮王朝初期の女性の地位に関する特徴は、血統は男系のみではなく、女系からもつながる、相続は男女の差無く、子ども達の間で平等に分配された、祖先祭祀の責任は娘にも息子にもあった、養子を取ることはほとんど無かった、結婚した男女は夫か妻のどちらかの家に住んだ(父系社会ではなかったことを示唆)、養子を取る場合、その決定のプロセスに妻側の親族も関わり、夫側親族のみで決めることは無かった、家系図には生まれた順に男女とも記載された、再婚は男女とも可能だったなどである<sup>97</sup>。

朝鮮王朝中期になると、儒教が社会に浸透し始めた。男系中心社会が出来上がったのは、17世紀以降のことである。儒教は、家族、親族を社会の基盤として位置づけ、父系血統の継承を核心においたため、家父長的な直系主義、長子優先主義を取り、祖先祭祀を守り続けることを重要なことであることとした。結婚の目的は、血統を継ぐ息子を得ることにな

り、息子は大事にされたが、娘は実家からも外の人として扱われた<sup>98</sup>。

嫁の義務は、息子を出産し育てることである。儒教規範の1つ「七去之悪」の中にも、息子を産めないことが離婚原因として挙げられている。その他に、義理の両親に不服従、姦通、嫉妬、慢性病、おしゃべり、盗みあげられている。「七去之悪」は、法律上では1908年に廃止された<sup>99</sup>。

また、「一夫従事」「再婚禁止」という教えも説かれ、李朝後期になればなるほど、女性の地位や行動は厳しく制限されるようになり、父系血縁の原理は絶対化されていった<sup>100</sup>。一生を1人の男性に仕えることが美德とされ、夫が死亡しても再婚することは許されなくなった。

「三綱五倫」は、儒教の三種類の基本と五種類の実践的な道徳である。三綱は「君為臣綱」「父為子綱」「夫為婦綱」で、君臣、親子、夫婦のあり方を示したものである。五倫は「父子有親」「君臣有義」「夫婦有別」「長幼有序」「朋友有信」であり、相互通行を謳っているが実際には親に孝行、君に忠誠、夫や年上の人に一方的に尽くすことが求められており、庶民、女子、子どもなどが社会的弱者であった<sup>101</sup>。

儒教的規範は女性に対して抑圧的であったが、母親としての女性に限定される女性の地位を守るという側面を持っていた。儒教は公と私の領域を明白に区分し、公の領域から女性を排除していたが、私の領域における女性の献身を理想とし、その役割を果たした女性に対しては地位を保証していたと考えられる<sup>102</sup>。

嫁として息子を出産し、立派に育て上げることによって、女性は母親として婚家での地位や社会的地位が安定し、保護される。息子が成長し家長になると、家長の母親となり家庭内での相当な権力を持ち、老後の生活の保障と地位確保がなされるのである。

近代になると、日本の植民地支配、朝鮮戦争、南北分断などを経験する。戦争などにより家庭を支えるのは女性だけとなり、嫁として婚家を支えていくことを絶対的使命として、家父長制の中で儒教的な女性観を強く内面化していたのである<sup>103</sup>。

このように、女性は公的な場では一切認められず、結婚すれば夫や婚家に仕え続け、息子を産み母親となった場合にのみ社会的に認められるという立場であった。嫁であり「母親」でなければ、女性が社会的に認められないということである。

映画の中では「伝統的」な価値観を持つ女性が数多く表現されている。嫁、母親としての振舞いをする女性や、1人の人に尽くし続ける女性たちである。

『マイ・リトル・ブライド』（2004）では女性主人公の担任として、仕事を持つ独身女

性が登場しているが、この女性は、男性主人公の教育実習指導教員である。男性主人公の気を引こうと学校に弁当を作ってきて、食べさせる。また、突然家に押しかけ、勝手に洗濯をしてあげようとするなど、積極的に行動している。しかし、男性主人公の気を引くために行っている行動は、食事などデートに誘うわけではなく、まるで母親のような行為である。女性が男性の気を引く手段がこのように描かれているのは、常に女性に母親の役割を求めている男性と、常に男性の母親でなければならない女性を表現していることになる。

『ゴースト・ママ』(1996)での女性は、妻が亡くなった男性主人公に対して思いを寄せていたが、一度振られている。しかし、振られていても女性は男性のことを諦めなかった。男性主人公に尽くし、一途に思い続けた女性は、最終的には報われて男性と結婚することになり、ハッピーエンドになった。

女性は、相手に尽くし続け、相手を思い続けている。最終的に、結婚まで結びついたのでハッピーエンドである。また妻は、男性が落ち込んでいるのを見かねて幽霊として現れた。男性を元気付け、普通に生活できるようになった後、傍にいる女性と幸せになるのを見届けて消えていく。女性は尽くすものとして描かれている。

『敗者復活戦』(1997)では、女性主人公は元彼氏の男性と結婚しようとしていたが、別れを選択することになってしまう。女性主人公は最後まで男性とよりを戻したいと考えていた。それは、男性が女性主人公に対して煮え切らない態度をとっていたせいでもあるが、彼女は一途に相手を思い続けるタイプである。男性側は、女性主人公に気持ちはあるが、今の女性と結婚すると言うのである。

女性主人公は、常に男性が自分のことを好きだという自信によって、男性より「上の立場」であると考えていた。しかし、男性に引かれると、自分が追いかけるようになる。この女性は、常に誰かに必要とされたいと考えており、他人に依存しているタイプである。「すてきなプロポーズを夢見ていた」ということから、結婚することにかんがりの夢を抱いていたと言える。

女性主人公は、「全てを捨てて彼のために生きる覚悟がある」と言っており、相手のために自分を犠牲にして尽くしたいと思っている。彼のためにフランスへ付いていく覚悟があるという時、女性主人公は仕事のことを全く考えていなかった。浮気相手の女性に対して、「彼女は仕事のことしか考えてなさそうだから、自分の方が彼に尽くすことができる」と、誇らしげに言うのである。彼女は、自分の元に彼が戻ってくることを盲目的に信じ、尽くし続けようとしている。

『ボーン・トゥ・キル』（1996）には、女性を利用する男性と、それでも男性を信じてしまう女性が描かれている。ホステスをしながら生活している女性主人公は、歌手になる夢があった。しかし、以前付き合っていた男性に、お金があれば歌手になれると言われたため、お金を渡したが、渡したお金を持って逃げられてしまう。

女性は騙されてしまったのだが、再びその男性が女性の前に現れた。男性が昔のことを謝罪し、もう一度やり直そうと言ってきたのである。自分が過去にした事を棚に上げ、自分のことを一度拒絶された時には、今度は本当だ、大丈夫だと言い、2人の関係をやり直そうとする。女性は一度拒絶するものの、結局は男性の元へ戻ってしまう。騙されても信じ続け、自分の夢とそれを叶えてくれるかもしれない男性に縋り付いてしまう。男性側はお金が手に入り、さらに女性も自分についてくる。女性は男性に従い、男性は女性を利用している。

『愛のゴースト』（1999）の女性主人公の付き合っていた彼氏は、主人公に対してうるさく言わない女性が好きと言っている。しかし男性は、主人公と二股しながら付き合っていた。女性はそのことには気付かず、うるさく言わない女性が好きと言う彼氏に、悪いところは直すからと言って、彼氏の言うとおりにしようとする。

女性に対する価値観が変化の中にあるとはいえ、簡単にそれらのものがなくなるわけではなく、進行する変化と共に「伝統的」価値観を持つ女性は存在しており、価値観は混沌としている。これらの女性主人公たちのように、「立派な母親」「立派な嫁」と呼ばれるための規範に基づく行動をとっていることが映画の中で表現されている。

## 2) 表面的強さと伝統的精神

強い女性でありながら、伝統的な面を持っている女性も表現されている。1人の人を思い続ける一途さが好まれるのは、1人の男性に仕えつづけるという儒教道徳をもとにしたものであると考えられる。

『イルマーレ』（2000）では、留学していく彼氏よりも、自分の夢を選んだ女性主人公が表現されている。しかし彼女は、別れた彼氏を忘れることができずにいる。男性主人公と女性はお互いの事が気になり始めるが、女性が別れた彼氏と偶然会ってしまうと、気持ち元彼氏に傾いてしまうほど、別れた男性を一途に思い続けている。

女性主人公は、自分の夢を選んだことが原因で、彼氏と別れることになり、後悔している。しかし、友人は自立していてこそ、本当の愛を手に入れることができるといい、彼女



の選択が間違っていなかったという。男性に従って付いていくだけではなく、女性が1人で自立することがプラスのイメージとされている。彼女は、仕事を選んだ自分から大好きな彼氏が離れてしまったため、それを良いと考えるのをためらってしまう。

女性は、彼氏と別れないように助けてくださいと、彼女のことが好きな男性主人公に頼んでしまうところは、自分のことだけしか考えられていない状態である。しかし女性は、そのことが原因で男性主人公が交通事故死してしまうことを後に知った。男性に死んでほしくないと思い、引きずっていた彼氏への気持ちを振り切り、男性主人公のことを助けることができた。簡単に好きな人を変えることはできず、一途に思い続けている。

『寵愛』(2000)では、自由気ままでありながら「たとえ暴力を受けても彼のことが好き」といい続ける女性が描かれている。女性主人公が会いに行く男性は彼女の元彼氏であり、彼女に対して常に暴力を振るっている。しかし、彼女はそれでもその男性のことが忘れられず、いつまでも依存し、思い続けている。

彼女の振舞い方は自由奔放である。彼女は、恋人でもない男性主人公の家を訪れ、食事をし、泊まり、関係を持ち、そして出て行くという自由な女性である。しかし彼女は、振られたはずの昔の人が忘れられないでいる。電話があれば、いつもすぐに準備をし、その男性の元へ行くのである。性的には自由奔放に振舞っているものの、1人の男性が忘れられず、従順にしているという一面を持つ。

彼女を振ったはずの男性は、そのような彼女を上手く利用している。どれほど酷い扱いをしても、彼女は自分の元から去って行かないという自信があるため、飴と鞭を使い分けながら彼女を逃がさないようにしている。彼女は都合のいい女性として考えられており、男性は自分勝手である。男性の支配と、女性の従順さを表現していると言える。

『猟奇的な彼女』(2001)では、弱い男性のところで紹介したように、強い女性が登場する。男性に命令し、わがままで振り回し、暴力を振るう女性が登場する。しかし、その女性は亡くなった彼氏のことを忘れられずにいるという一面を持っている。この女性も1人の人を一途に思い続けている。

ヒロインの性格が強い、又は明るくはつらつとしていながらも、一途な部分を持つという『猟奇的な彼女』(2001)のような映画が登場していることは、「古いものと新しいものが混沌として共存しているように見えるのが現在の韓国社会である」<sup>104</sup>という指摘のように、韓国社会は、現代的な面と伝統的な面が融合しており、両極端な面を持っている。

### 3) 女性の描かれ方

これまで韓国映画において、女性はどのように描かれてきたのか。例として『春香伝』をあげることができる。『春香伝』は、朝鮮王朝後期に人気があった古典小説であり、映画としては何度も繰り返し作られてきた作品である<sup>105</sup>。最も古いものは1923年に作られたもので、これまで確認されている限り20回にわたり映画化されている<sup>106</sup>。1987年に作られたものは、観客の関心を引くことができず不振だった<sup>107</sup>。また、2000年に作られた『春香伝』に対して「1960年代の『春香伝』ブームとは違って、観客に主人公への心理的同一化を必ずしも求めていない」「パンソリの物語に韓国の民衆が直接に感泣する時代が終わったという自覚を抱いている」<sup>108</sup>という指摘がされている。ストーリーは次の通りである。

『春香伝』（2000、イム・グォンテク）

16歳のモンニョンは、全羅北道の南原を治める長官の息子である。彼は科挙試験に向けて勉強に励んでいた。ブランコに乗っている女性に一目ぼれした。彼女は妓生ウォルメの娘チュニャンという。彼女は妓生の娘であるが文学、絵、裁縫など教養のある女性である。2人は晴れて夫婦となったが、父親に知られ、外出せずに学問に専念するように注意された。

ある日、モンニョンは、チュニャンに父親の昇進で都へ帰ることを告げ、貴族の息子が妾を作れば、科挙を受けることができなくなるため、しばらく離れて暮らさなければならないことを説明した。チュニャンはモンニョンを責め、自分の身分を恨めしく思った。モンニョンは、待っていてほしいと告げ、自分が持っていた鏡をチュニャンに手渡し、チュニャンは自分の指輪を差し出した。

新しい長官は、チュニャンの美しさを一目見て気に入った。チュニャンに対して、今日から自分に仕えるように命じるが、チュニャンは拒否し続けたため、罰を受け牢に入れられた。

その頃、モンニョンは科挙の臨時試験を主席で合格し、全羅道の悪政を探る極秘任務を任された。モンニョンは、自分に手紙を届ける途中の男に偶然出会い、牢に入れられたチュニャンの手紙を受け取った。手紙には、長官の誕生日に死刑が執行されることが記されていた。モンニョンはチュニャンを救うため、チュニャンの家へ行った。極秘任務を知られないために、わざと汚い格好でチュニャンの母親の前に現れ、官僚になれなかったと嘘の説明をした。モンニョンはチュニャンに会いたいと頼み、牢屋へ向かった。2人は再会し、チュニャンは死んだらあなたの手でソウルの先祖の墓近くに埋めてほしいと頼んだ。

長官の誕生日がやってきた。モンニョンは、誕生日の席に忍び込み、仲間に合図を出して一斉に官僚たちを捕まえた。長官も捕まり、モンニョンが新しい長官となった。

次の日、新しい長官に呼び出されたチュニャンは、新たな長官も自分を仕えさせようとしていると考え拒絶していた。モンニョンはチュニャンに指輪を渡し、2人は喜びの再会を果たした。悪政を正し、ソウルへ戻ると王は大変喜んだ。モンニョンがチュニャンのことを話すと、都へ連れて来る様命じた。南原の人々も悪政から解放され、幸せに暮らしたのである。

女性主人公は、1人の男性に一生を捧げ、それを信じて待ち続ける「貞女」「烈女」といった「理想の女性」として描かれている。「ヒロインのあり方は、朝鮮王朝を支配してきた儒教イデオロギーの女性観を見事に体現しており、両班（特権階級、支配階級を形成した文官と武官のこと）と庶民という当時の階級制度を肯定するとともに、男性中心主義の世界観を人々に共用するものであった。国教とされた儒教を通しての民族の統合という意味では、この物語は歴史的に大きな役割をはたしてきたが、それが女性を抑圧する構造を必然的に招いていたことも忘れてはならない」<sup>109</sup>という指摘の通り、単に勧善懲悪の古典物語として受け取ることはできない。

女性主人公は、自分に仕えるようにという官僚からの命に何度も背き、夫の帰りを信じて待ち続けた。権力に屈することなく、自分の意思を通した女性主人公は、強い信念を持った女性であると言える。一方、夫も女性のことを忘れず、約束どおり帰ってきた。権力によって、女性主人公を手に入れようとした官僚は、悪人として描かれる。世の中は、女性に貞節を守るように言いながら、官僚は自分がそれを崩すようなことを命令しているのである。

この古典の人気があった時代は、仲人による結婚であり、「妻妾制」があり、平民は平民と結婚するというように階級的内婚制度が行われていた時代であった。そのため、直接的な出会いによる恋愛と結婚、身分を越えた愛、一夫多妻ではなく一夫一妻を描いているストーリーは、当時の人々にとって、最も理想的だと考えられていたはずである<sup>110</sup>。

高官に仕えるように言われながらも、それを拒絶し夫を待ち続けたのは、その当時としては強い女性であったと考えられる。しかしそれは、この時代であったからこそであり、現在において女性主人公を女性の理想像として考えることはできない。これまでに何度も映画がつくられてきたのは、女性主人公を韓国人の理想の女性像としながら、朝鮮王朝から時代が離れるにつれて、民族意識を高めるための自国の伝統文化として受け入れてきたからだと考えられる。

メロドラマにおいて女性が語られる場合、女性の抑圧や犠牲に関する議論がされてきた。

女性の描かれ方は、家庭の中や母親としての役割から抜け出す女性が登場するという変化をたどっているが、未だ女性の描かれ方は、抑圧された状況にあると指摘されている。しかし、「強くなった女性」ということも一般的に言われるようになっている。女性が強くなっているという流れと同時に、女性は抑圧された状態にあるという指摘もなされており、相反する状況が同時に起こっている。

「強い」女性と「弱い」女性を分離して考えるのではなく、それぞれが同時に存在するものとして考えることにより、抑圧だけではない、地位が低いばかりではない、儒教ばかりではない、家父長だけではない、男性の理想だけではない、弱いだけではないなど、抑圧の対象とされてきた女性の姿の中に、強さを見ることができる。

まず、現在との比較のために、1980年代までの映画における女性が、どのように表現されていたかをみることにする。なお、扱う映画は李・佐藤『韓国映画入門』を参考にしており、実際の映画は未見であることをお断りしておく。

#### A. 社会規範・意思・行動の対象に基づく女性の分類

ここでは女性の表現について、表現される上で女性が人間として扱われているかどうかと、自分の意思を表現すること、自分の意思で選択することなど、自分の意思の有無によって分類を行う。抑圧されてきた中にも、自分の思いを表現し、行動する女性は存在するはずである。その思いや行動が、社会通念に縛られている状態が続いていたと考えられる。

ただし、世の中の定めるルールや倫理観の枠は徐々に変化しているものと考え、各分類の中にも時代によって内容に差がある。社会のどのような抑制や影響を受けていたとしても、また、表現される女性が男性の理想であったとしても、その中で生きている女性それぞれの意思が表現されているはずである。分類においてまず、上記文献の作品紹介の中から、女性の表現を抽出し、意思が無い場合とある場合に分類し、さらに意思が存在する場合を6種類に分類した。分類ごとに具体例を挙げている。

##### 1) 意思が無い場合

無感情、無意志、非人間的で物のような状態として表現される。物々交換のために使用されたり、自分の意志とは無関係に、また表現されることもなく言いなりにされたりする状態である。女性自身に意志は無く、物のように扱われる非人間的な女性として表現されている。女性が抑圧された状態であり、搾取の対象であったといえる。年代が進むにつれ、

社会における女性の立場をそのまま反映したものから、それを批判・風刺するための表現に変化していると考えられる。

- 水と引き換えにされる女性『アリラン』1926
- 金のために売られる女性『暁の頃』1927
- 男に目をつけられ犯されそうになる女性『主なき渡し舟』1932
- 恋人がいるのに妾にされそうになる女性『漢江』1938
- 屍姦される女性『ピアゴル』1955
- 父親に縁談を決められる女性『嫁入りの日』1956
- 身代わりに嫁に出される召し使いの女性『嫁入りの日』1956
- 井戸の水と引き換えに捧げられる娘『高麗葬』1963
- 妻のいる男に好かれ、最終的には捨てられる女性『霧』1967
- 権力者に売られる女性『石花村』1972
- 父親の指示で住み込みの働きに出される女性『花靴』1978
- 婚約者を決められている女性『ピョンテとヨンジャ』1979
- 死者と結婚させられ、結婚後即未亡人にされる女性『糸車よ、糸車よ』1983
- 貞淑を強要されながらも、若い主人に犯される女性『糸車よ、糸車よ』1983
- 不義者として追放される女性『糸車よ、糸車よ』1983
- 追放先でも目をつけられる女性『糸車よ、糸車よ』1983
- 男性に問題があるのに妊娠しないと責められる女性『糸車よ、糸車よ』1983
- 子どものために召し使いと寝るように強要される女性『糸車よ、糸車よ』1983
- 出産後、家の秘密を守るために自殺しろといわれる女性『糸車よ、糸車よ』1983
- 男性に捨てられた女性・夫に出て行かれる女性『寡婦の舞』1983
- 跡継ぎのために妾にされ、下男と関係を持たせられる女性『恣女木』1984
- 力づくでもものにされそうになる女性『夜の熱気の中へ』1985
- お金のために売られそうになる女性『黄真伊』1986
- 跡継ぎのために犠牲になる女性『シバジ』1986

## 2) 意思がある場合

自ら何かを考える状態として表現される。その中で、自分の意志をどのように表現する

か、行動はどのようなものであるか、社会のルールに縛られているかどうかで以下のように分類した。自己犠牲型、諦観葛藤型、自己流動型、自己防衛型、自己肯定型、自由推進型の 6 つである。(表 5)

表 5 分類表

	社会規範	自己意思	対象
自己犠牲	+	+	他人のため
諦観葛藤	+	-	なし
自己流動	0	-	なし
自己防衛	+	+	自分のため
自己肯定	0	+	自分のため
自由推進	-	+	自分のため

従属 + 貫徹 +

反抗 - 放棄 -

不問 0

筆者作成

a. 自己犠牲型 (社会規範+、自己意思+、他人のため)

待ち続ける、忍耐など内向的、消極的強さで、何かを守ろうと自分の意志で行動しているが、受身の態勢をとっている。自分というものが社会の枠内に存在する。また、何かのために自分の犠牲をいとわない。

具体例

10年間夫を待ち続ける女性『愛を求めて』1928、

身を隠した男を10年間、貞操を守り通して待つ女性『芳娥打令』1931

息子に年老いた自分を捨てろという母親『高麗葬』1963

愛人を理解する妻『憎くてももう一度』1968

夫の魂を救うために海に身投げした妻『石花村』1972

母親のために死のうとする娘『石花村』1972

b. 諦観葛藤型（社会規範＋、自己意思－、なし）

社会によって意志が拘束される。自分の気持ちはあるものの、それを諦める。本当はこうしたい、という自分の意志とは裏腹に、周囲の影響を受ける、または社会の常識にとられ自分の気持ちを諦める。社会常識と自分の気持ちの板ばさみになり、葛藤する。逸脱しそうになるが留まる、他人に決められたことと自分の気持ちの間で揺れる。

具体例

好きな人をあきらめて拒む女性『石花村』1972

3人の男を渡り歩くが、不幸な死を選択する女性『星たちの故郷』1974

恋をする相手を諦める未亡人の女性『離れの客とお母さん』1961

愛する人と婚約者でゆれる女性『ピョンテとヨンジャ』1979

c. 自己流動型（社会規範0、自己意思－、なし）

自らの意思を相手に委ねる。または、そうせざるを得ない状態にある。強く出られると断れない、受動的態度である。社会の枠にはとられないが、それを自分で決めるわけではなく、状況や相手に応じて自分の意思や行動を変化させる。

具体例

夫を待たず、他の男と同居する女性『主なき渡し舟』1932

男性の誘惑に負ける女性『自由夫人』1956

アメリカ兵相手の娼婦になる女性『誤発弾』1961

夫の親友と暮らす妻『浜辺の村』1965

夫、子どもを失い売春する女性『暗闇の子たち』1981

隣家の息子を受け入れる女性『寡婦の舞』1983

d. 自己防衛型（社会規範＋、自己意思＋、自分のため）

自分の存在価値を持ち続けるために、社会の規律や美徳、掟などを守るために行動する。社会の枠内に留まるためという、社会に束縛されている状態ではあるが、社会の規律を守ることが一番正しく、それを行おうとする自分の意思がある。そのためなら自己犠牲もいとわない。

たとえば、『春香伝』では死んでも貞操を守ろうとする、権力に打ち勝つ烈女が登場する。社会の掟や慣習を守るためであるが、自分が正しいと思うことを主張している。貞操

を守るという社会規範に従い、それを守らなければ社会から拒絶されてしまうため自由ではない。社会に自分を繋ぎ止め、自分を存在させるための防衛的な強さである。誰かを守るためではなく、自分のために社会規範を守り、それを遵守するために自分を犠牲にする。

#### 具体例

未亡人の恋の相手に出て行けという姑の女性『離れの客とお母さん』1961

好きな相手を拒絶する未亡人の女性『離れの客とお母さん』1961

烈女として貞操を堅く守った女性『烈女門』1962

自分の悲しみを押し殺し、姑を慰める嫁『浜辺の村』1965

役人を誘う振りをして夫に殉死する女性『郭公は夜中に泣く』1980

密会が見つかって自殺する女性『川の流れば止められない』1984

密会をする女性自体は社会の規則から逸脱しているが、結局、見つかった後それを貫き通すわけでは無く、自殺してしまうので社会の規範に束縛されている

#### e. 自己肯定型（社会規範 0、自己意思 +、自分のため）

外向的で、積極的強さを持つ。自分の意志で行動し、能動的に前向きな行動を選択する。自分の意志を尊重する。社会の枠外に出ることもいとわない、あるいは社会の枠の存在を気にしない。自らの意思を貫徹させるが、規範に従属するかしないかはこだわらない。

#### 具体例

夫を探すために上京する妻『帰着地』1939

上司の欲情をはねのける女性『ピアゴル』1955

別の男に身を許す烈女『烈女門』1962

未亡人だが作男と逃げることに同意する女性『烈女門』1962

息子と出て行く烈女『烈女門』1962

不倫相手に尽くしつつシングルマザーとして生きる女性『憎くてももう一度』1968

夫の元から出て、助けられた人と暮らし、子どもを生む女性『甕を造る老人』1969

密通する女性『石花村』1972

番人と密通し妊娠する嫁『避幕』1980

歌手を夢見て上京する女性『暗闇の子たち』1981

仲間の子どもの引き取ってまっとうに生きようとする女性『暗闇の子たち』1981

相手を不幸にするからと拒む女性『鳴よすいすい飛ぶな』1982



夫に死なれ、働きながら子育てする女性『寡婦の舞』1983

王の側室の娘と結婚させられた元婚約者と密会する女性『川の流れば止められない』1984

帰ってこない夫に愛想をつかす女性『ディープ・ブルー・ナイト』1985

生きるために自ら体を売る女性『桑の葉』1985

アメリカ留学を決めプロポーズを断る女性『わが青春の甘き日々』1987

#### f. 自由推進型（社会規範－、自己意思＋、自分のため）

自分のために、自ら社会の枠から意識的に抜け出す。積極的に、能動的に行動する。反社会的とされる行為を自ら進んで行う。規範に従属しない、または反抗し、自らの意思を貫徹させる。

##### 具体例

妻のいる雇い主を誘惑する女性『女中』1960

卵売りと密通する女性『離れの客とお母さん』1961

何人もの男を渡り歩く女性『冬の女』1977

妻であるが家から抜け出す女性『エマ夫人』1982

偽装結婚で市民権をとらせる商売をする女性『ディープ・ブルー・ナイト』1985

## B. 現在の女性の場合

以上のように分類したタイプによって、対象作品に登場する女性を分類する。

### 1) 意思がない場合

以前のもと同様、女性自身に意志は無く、男性に振り回されるだけの存在であるが、それに対して、女性が反応している。しかし、その状況から抜け出せるわけではない。下記の場合は、付き合っていたのは自らの意思であったが、自分の意思とは関係なくどうでもいい存在として扱われている。しかし、以前よりも数は少なく、女性の悲惨さがそのまま描かれることは少なくなっている。

##### 具体例

付き合っていた男性に、妊娠したとたん捨てられる女性『セックス・イズ・ゼロ』2002

## 2) 意思がある場合

### A. 自己犠牲型（社会規範＋、自己意思＋、他人のため）

現在の自己犠牲型は、命をかけるような自己犠牲はほとんど無くなり、自己犠牲の程度が薄れてきた。例えば『マイ・リトル・ブライド』（2004）のように決められた結婚をする女性は、祖父の願いのためという思いを持っている。しかし、始めは拒絶の意思も見せていた。

男性のわがままに振り回されていた女性は、最終的にその男性を振ることになり、継続して尽くす、という形ではない。また、結婚したら尽くすもの、という価値観を高校生で持っており、この価値観は引き継がれ、韓国に残っていると言える。母親は息子に対して、尽くすよりも自ら手元においておきたいという意志を持って接する。結果的には尽くしていることになる。そうして、より近い関係を築いているともいえる。「何かのために」の何かが、男性を中心としたものだけではなく家族や友人にまで広がっているものもある。

#### 具体例

報われるかどうか分からない相手に思いを持ち尽くし続ける女性『ゴースト・ママ』1996

結婚生活のために義母の虐待に耐える嫁『オルガミ～罨～』1997

彼氏とよりを戻したいために彼氏に尽くす女性『敗者復活戦』1997

夫の虐待を耐える女性『八月のクリスマス』1998

愛する人のために好きではない人と結婚する女性『男の香り』1998

他の女性が産んだ、血の繋がらない兄の子どもを育てる女性『男の香り』1998

恋人に言われたことを忠実に守る女性『愛のゴースト』1999

結婚するために仕事をやめる女性『我が心のオルガン』1999

別れた彼氏を一途に思い続ける女性『イルマーレ』2000

別れた彼氏を一途に思い続ける女性『寵愛』2000

別れた彼氏を一途に思い続ける女性『Interview』2000

別れた彼氏を一途に思い続ける女性『猟奇的な彼女』2001

姉のために結婚する女性『花嫁はギャングスター』2001

仕事の少ない夫のために病気を隠し働く女性『ラスト・プレゼント』2001

友人のために好きな人から身を引く女性『永遠の片思い』2002

好きな人と両思いだが、病気のため行方をくらます女性『永遠の片思い』2002

好きな人を悲しませないために別の人と結婚しようとする女性『君に捧げる初恋』2003

祖父の願いのために幼馴染と結婚させられる女性『マイ・リトル・ブライド』2004  
結婚したら尽くすもの、と思う女子高生『マイ・リトル・ブライド』2004  
息子離れできない母親『マイ・リトル・ブライド』2004  
自分が病気のため夫の前から去る女性『私の頭の中の消しゴム』2004  
姉のために姉がやりたかったことをやる妹『僕の彼女を紹介します』2004  
自分が恋人を殺してしまったと思ひ死のうとする女性『僕の彼女を紹介します』2004  
相手を不幸にしないために自分から去る女性『ユア・マイ・サンシャイン』2005  
姉のために外国に行く妹『ダンサーの純情』2005

#### B. 諦観葛藤型（社会規範＋、自己意思－、なし）

結婚したら家族であるという価値観に対して、諦めの気持ちを持つ。社会に対する諦観や葛藤と言うよりは、夫個人への諦めと考えられる。

##### 具体例

元夫から暴力、離婚後も追いかけれられお金を請求され払う女性『ユア・マイ・サンシャイン』2005

#### C. 自己流動型（社会規範0、自己意思－、なし）

相手に流されているわけではないが、自ら何かをするわけではなく、待ちの態度を取ろうとしている。以前より、どうにでもなれという考え方ではなくなり、自分はこのようにしたいと言う理想や意思はあるが、自ら行動に出るわけではない。自分の意見が無いわけではないが、周囲の流れのままに行動する。強制されるものもなく、社会の環境も厳しくないが、自己主張はしない。

##### 具体例

好意を持っている男性に何も言わない女性『八月のクリスマス』1998

好きな人には自分から何も言わない女性『陽が西から昇ったら』1998

中の悪かった男性をいつの間にか好きになる女性『同い年の家庭教師』2003

2人の男性に追いかけれられいつの間にか1人を好きになり付き合う女性『オオカミの誘惑』2004

#### D. 自己防衛型（社会規範＋、自己意思＋、自分のため）

処女検査を受けて自分の身の潔白を証明しようとする、一度寝たら結婚、と思う女性が存在している。社会に縛られ、決められた枠にしがっている。自分を何かの枠にはめて

考えないと安心できないと言う思いも存在する。命をかけた自己防衛は無くなっている。

#### 具体例

虐待されていたが、嫁としての責任を果たす女性『オルガミ～畏～』1997

処女検査を受ける女性『大変な結婚』2002

一度寝たら結婚、と思う女性『大変な結婚』2002

未亡人を貫く女性『スキャンダル』2003

生きている人に尽くすわけではなく、女性の再婚を許さない社会の価値観を守っている

#### E. 自己肯定型（社会規範0、自己意思+、自分のため）

自分の思うことをそのまま表現し、恋愛関係や夫婦関係において忍耐や我慢の対象となっていたことにも拒絶を突きつけることができる。また、自分が思っていることをやり遂げる。以前のものと比べ、自由に人生を生きている女性が多い。これまでに比べると、規範が薄れている。

#### 具体例

自分で仕事をし、結婚を自分の意思で選択する女性『銀杏のベッド』1996

結婚しているが、家出をする妻『パク・ボンゴンの家出事件』1996

彼氏がいる間に浮気し、自分の仕事のためになる人と結婚する女性『敗者復活戦』1997

結婚を心配されても気にしない女性『チム～あこがれの人～』1998

二股を許さない女性『チム～あこがれの人～』1998

年下男性と付き合う女性『チム～あこがれの人～』1998

仕事のない夫に家事と子育てをさせる妻『ハッピーエンド』1999

結婚せずに働き続ける女性『リメンバー・ミー』2000

恋人よりも自分の夢を優先する女性『イルマーレ』2000

男性をわがままで振り回し、暴力を振るう女性『猟奇的な彼女』2001

「嫁らしく」しない妻『花嫁はギャングスター』2001

浮気疑惑を1回は許す女性『大変な結婚』2002

浮気は許さない、と強く出る妻『大変な結婚』2002

自分の意思でプロポーズを断る女性『シングルズ』2003

浮気していた夫によりを戻そうと言われるが、断る女性『浮気な家族』2003

自分が好きで付き合っていた先輩に別れを告げる女子高生『マイ・リトル・ブライド』2004

自分が好きな男性と結婚するためにアプローチする女性『私の頭の中の消しゴム』2004

男性を振り回す女性『僕の彼女を紹介します』2004

自分のやりたい仕事を続ける女性『家門の危機』2005

好きな男性の元に戻る女性『ダンサーの純情』2005

#### F. 自由推進型（社会規範－、自己意思＋、自分のため）

以前よりも社会のタブーに対する枠が狭まり、またタブーに対して寛容になったことで、女性は自由を得た。しかし、自由になったことで、より男性の欲望を押し付けられる可能性も存在する。例えば、自分が浮気相手であることを承知で、好きな男性を付き合う女性が描かれるようになった。自分のことが好きで、後腐れの無い浮気相手という男性の願望が正当化されているとも言える。

##### 具体例

子どもがいても離婚して再婚を選択する女性『パク・ポンゴンの家出事件』1996

結婚しているが妹の婚約者を好きになり家を出て行く女性『情事』1998

夫と子どもがいるが、不倫している妻『ハッピーエンド』1999

既婚中年男性と関係を持つ女子高生『LISE／嘘』2000

付き合いしていない男性と関係を持ち、自分に好意を持っている男性を利用する女性『寵愛』2000

浮気する女性『大変な結婚』2002

クラス担任の児童の父親と浮気する女性教師『大変な結婚』2002

男性を誘う障害を持った女性『オアシス』2002

好きな人ができる未亡人『スキャンダル』2003

シングルマザーを志す女性『シングلز』2003

妻帯者と浮気する女性『浮気な家族』2003

高校生と浮気する主婦『浮気な家族』2003

義父の病氣中に浮気する義母『浮気な家族』2003

結婚したが、先輩と付き合う女子高生『マイ・リトル・ブライド』2004

年下男性に言い寄る教師『マイ・リトル・ブライド』2004

会社の上司と不倫する女性『私の頭の中の消しゴム』2004

これらの分類では、女性が明らかに強くなったところと、引き継がれた価値観が混合し

ていることが分かる。女性が自由に自己表現している点では、強くなったように感じられる。しかし、女性が尽くす、貞操を守るなど昔とかわらない価値観も表現されている。また、女性の自由が広がるに伴い、浮気相手でも許される、都合のよい相手として利用されるなど、男性から昔とは違った形で都合のよい価値観を押し付けられる可能性もある。

映画の中に表現されている女性を弱い・強いと完全に分けることはできない。抑圧されている中にもその時代での強さがあり、自由の中にも伝統的価値観は存在している。これまでよりも、E や F タイプの女性に対する社会の価値観は、厳しいものではなくなり、同時に A タイプのような自己犠牲の程度も弱まっている。規範を守りながら自分の権利を主張するものから、現在は自分の意見を主張する上で古い価値観が欧米の影響を受けながら価値観が変化していることは事実である。

しかし、この分類に当てはまらないような、『情事』(1998) の女性のように不倫の根拠を父親の言葉に求めるといったものがある。不倫は、社会の規範に反抗的なことであり、個人主義化の傾向が見られる。しかし、自分の意思を決定する際、父親の意見を参考にしていくことは、完全な個人主義とは言えない。社会が欧米化、近代化しても、西洋の価値観通りにいくのではない。韓国の価値観を織り交ぜながら、または反発しながら、両方の価値観が存在していることを表している。

### 第3節 家と結婚

韓国での婚姻数は、近年減少傾向にある(図10、表6)。1995年には、39.8万件であった婚姻数は、2004年になると31.0万件となっている。また、平均初婚年齢を見ると、1990年の男性は27.8歳、女性は24.8歳に対して、2004年の男性は30.6歳、女性は27.5歳となっている。男性は2.8歳、女性は2.7歳平均初婚年齢が上昇している<sup>111</sup>。韓国においても晩婚化が進んでいることがわかる。離婚については、別に述べることとする。

再婚の割合は増加傾向を示している(図11、表7)。1995年の婚姻形態別婚姻構成比では、初婚同士の割合が86.3%であるため、どちらか又は2人とも再婚の割合は13.7%である。2004年は初婚同士の割合が75.0%、どちらか又は2人とも再婚の割合は25.0%となっており、10%以上の伸びを示している。

また、再婚男性と初婚女性の割合は1995年には3.6%で、2004年には3.9%と変化は見られない。初婚男性と再婚女性の割合は、1995年が3.6%であったものが2004年には6.1%と2.5%上昇している。また、再婚同士の割合は、1995年に6.5%であったものが、2004

年には14.3%と7.8%上昇している。離婚の増加に伴い、再婚同士の結婚が最も増加しており、再婚同士の結婚が、再婚相手に初婚の人を選ぶよりも多くなっている。

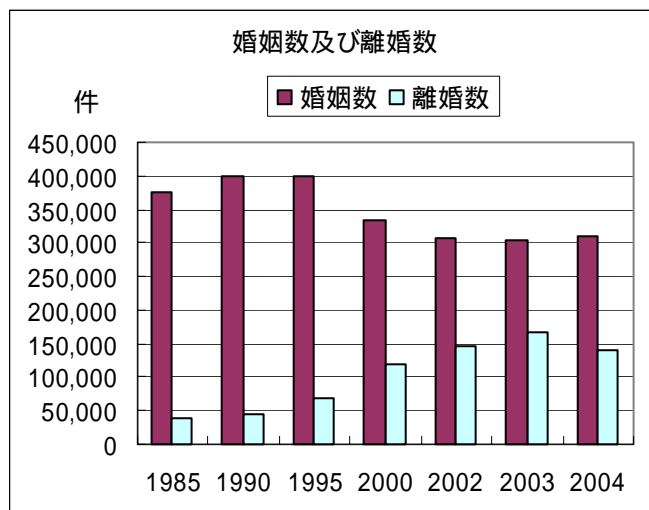
総婚姻数に対する再婚の比率は、1980年には男性6.4%、女性4.1%と非常に低い数値となっている（図12、表8）。その後、男性が僅かに上回りながら徐々に増加し、15年後の1995年に男女とも10.0%の割合となる。この1995年を境に、女性が男性の数値を上回っている。2004年には男性18.2%に対して、女性20.4%となり、約2割の男女は再婚であることになる。1995年から2004年までの間に約10%上昇したことになる。

再婚に対する考えについては、社会統計調査を基にした統計となっている（図13、14）。社会統計調査は、全国の約30,000の標本世帯内における満15歳以上の世帯員約70,000人に対して行われている<sup>112</sup>。1998年では絶対にしなければならないが2.5%、したほうがよいが17.4%、どちらでもよいが52.2%、しないほうがよいが14.8%、してはならないが4.4%、わからないが8.7%であった。2002年では、絶対にしなければならないが1.8%、したほうがよいが18.9%、どちらでもよいが52.0%、しないほうがよいが12.8%、してはならないが3.9%、わからないが10.6%であった。

両年とも、半数以上がどちらでも良いとなっている。数年では変化が僅かであるが、男性のほうが再婚に肯定的な意見が多く、女性は再婚に否定的な意見を持っている割合が上回っている。また、年代別に見ると30代までの世代では、どちらでも良いという意見が6割前後を占めている。また、年代が進むにつれて再婚したほうが良いという割合が増えているが、50代以上の女性の場合、絶対にしてはならないという意見が8.8%と世代別の中では最も高くなっている。

結婚に関する状況の変化が起こっており、それに伴って結婚や離婚に対する考え方も変化している。環境の変化は早いですが、環境とともにある人々の考え方は急激に変化するものではなく、両極端な二面性を持ち、世代間の価値観には断絶と呼べるほどの差異があると考えられる。すなわち、急激に変化しているのは若い世代がほとんどであると考えられる。しかし、熟年離婚の増加など結婚や離婚に対する考え方は、若い世代だけの変化に留まっていなかったことを示している。

図 10 婚姻数及び離婚数



『2005

』 86 頁

表 6 婚姻数及び離婚数

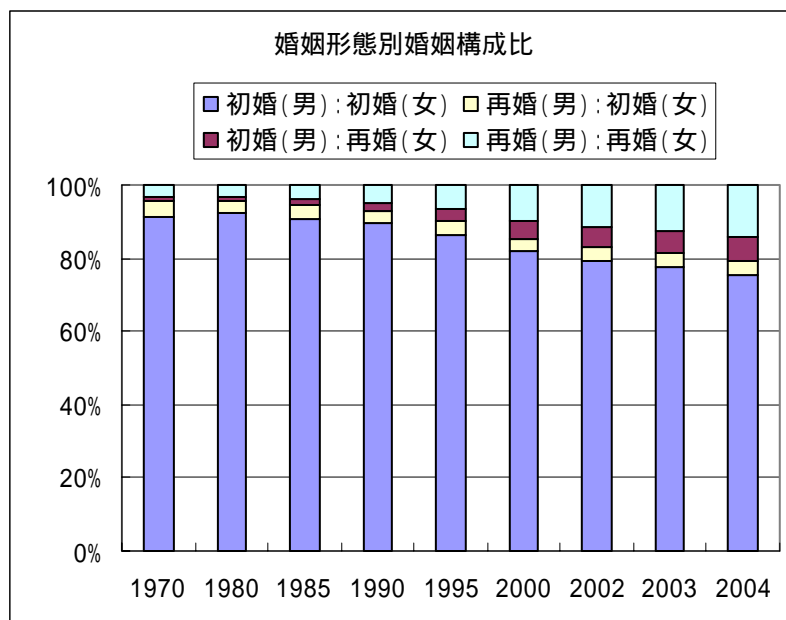
単位: 件、%	婚姻数	婚姻率	離婚数	離婚率	離婚数/婚姻数
1985	376,847	9.2	38,838	1.0	10.3
1990	399,312	9.3	45,694	1.1	11.4
1995	398,484	8.7	68,279	1.5	17.1
2000	334,030	7.0	119,982	2.5	35.9
2002	306,573	6.4	145,324	3.0	47.4
2003	304,932	6.3	167,096	3.5	54.8
2004	310,944	6.4	139,365	2.9	44.9

『2005

』 86 頁



图 11 婚姻形态别婚姻构成比



『2005

』85 頁

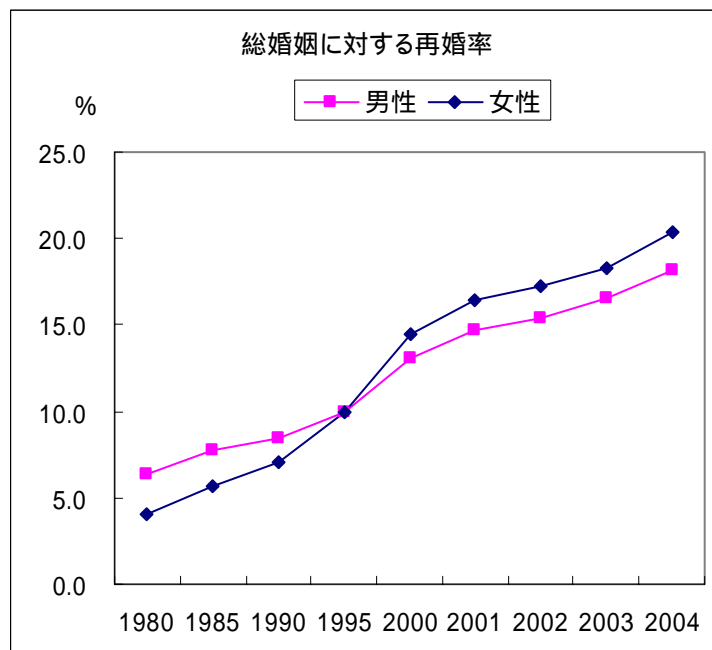
表 7 婚姻形态别婚姻构成比

单位:%	初婚(男)初婚(女)	再婚(男)初婚(女)	初婚(男)再婚(女)	再婚(男)再婚(女)
1970	91.5	4.1	0.9	3.5
1980	92.2	3.5	1.2	3.1
1985	90.6	3.7	1.7	4.0
1990	89.3	3.6	2.3	4.7
1995	86.3	3.6	3.6	6.5
2000	82.0	3.5	4.9	9.6
2002	79.0	3.8	5.6	11.6
2003	77.3	3.9	5.7	12.5
2004	75.0	3.9	6.1	14.3

『2005

』85 頁

図 12 性別再婚件数及び再婚比率



『2005

』 87 頁

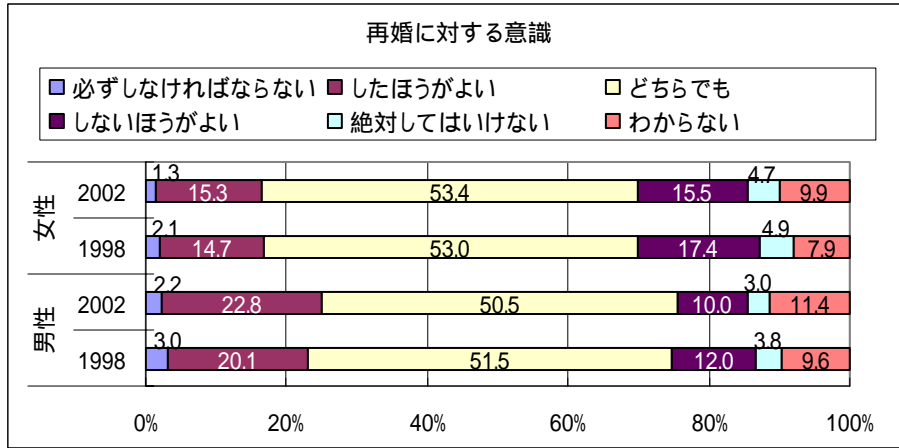
表 8 性別再婚数及び再婚比率

単位:件、%	再婚数		総婚姻に対する再婚の比率	
	男性	女性	男性	女性
1980	25,579	16,367	6.4	4.1
1985	29,025	21,558	7.7	5.7
1990	33,348	28,153	8.4	7.1
1995	39,838	39,843	10.0	10.0
2000	43,617	48,324	13.1	14.5
2001	46,943	52,543	14.7	16.4
2002	47,225	52,595	15.4	17.2
2003	50,237	55,791	16.5	18.3
2004	56,671	63,555	18.2	20.4

『2005

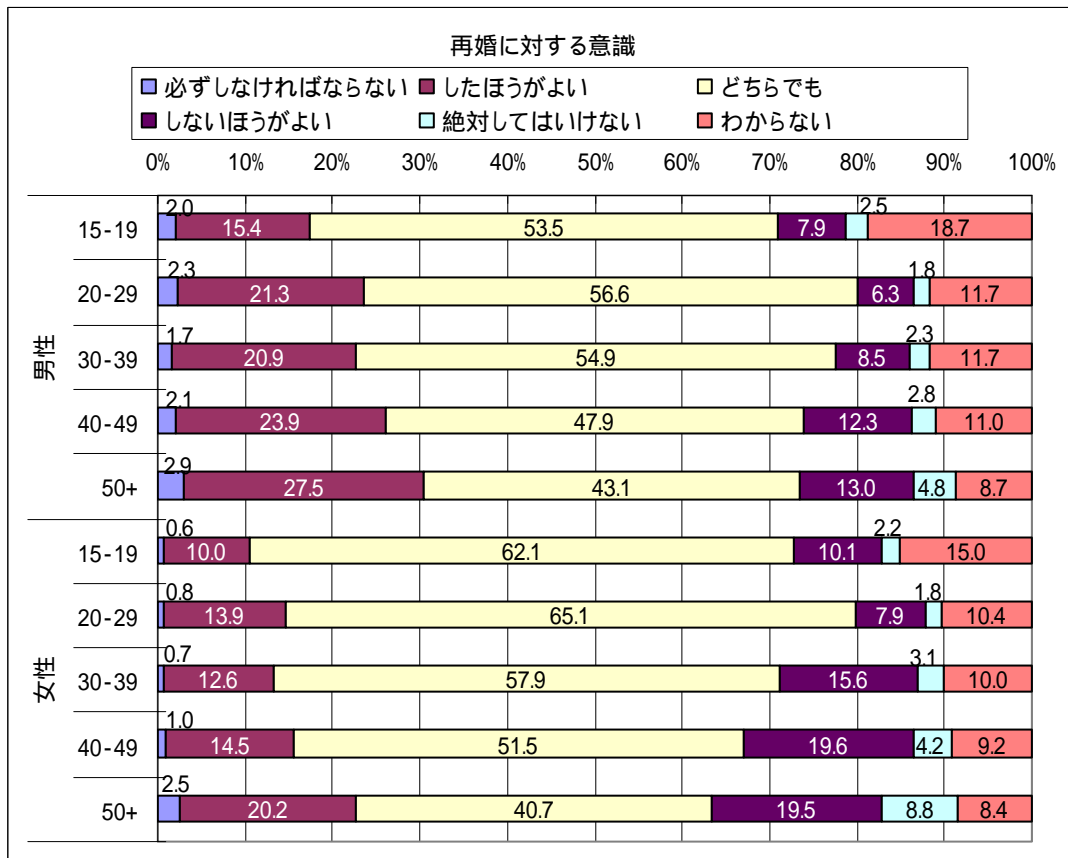
』 87 頁

図 13 再婚に対する意識—1998年、2002年



『2005 』104頁

図 14 再婚に対する意識—世代別（2002年）



『2005 』104頁

## 1. お見合い

結婚に家族が関わる事柄の1つに、お見合いがある。映画の中でもいくつか両親が子どもにお見合いをさせる場面が登場する。また、お見合いをさせなくても、子どもや孫の結婚について関わりを持つ家族が描かれている。結婚に及ぶ、家の影響力が強く残っていることが表れている。

『猟奇的な彼女』(2001)では、家族がお見合いを勧めている。男性主人公の母親は、親戚が女性を紹介してくれるということを息子に話す。しかし、息子はその紹介に乗り気ではない。また、女性主人公の父親に交際が知られた時、父親はそれを認めなかった。その後、両親は彼女に、お見合いのようなことをさせる。数年後、2人が再開する最後の場面も、親戚が男性主人公に、彼女を紹介するという場であった。

初めて出会った頃は、2人ともまだ大学生である。それにもかかわらず、親は自分の子供に交際相手がいない事を心配し、または結婚するとは決まっていない交際相手を認められないと言い、お見合いまでさせるのである。交際相手を認められないというのはまだしも、親戚に女性を紹介されたり、お見合いをしたりというのは、すでに結婚ということ意識していることになる。子どもに幸せな結婚をしてほしい、と親が願っていることもあるが、家に関わる結婚には家族が積極的に関係してくる。家同士のつながり、家族の関係というものが結婚に深く関わっていることが分かる。

しかし、男性主人公に対する最初の親戚の紹介も、彼女のお見合いも結果的には失敗している。家族は子どもの結婚に関わるものの、最終的な決定権はここでは持たなかった。恋愛と家、家族に関わりはするが、本人たちは家族の意思を拒否できる。主体は本人にあるということであり、家族は関わるが、それが絶対ではない。

また、結婚に家族が関わるものの、家族の意見が絶対ではないパターンは、もう1つある。『家門の危機』(2005)では、主人公の母親や弟たちは、男性主人公を結婚させようとお見合いさせる。しかし、昔の恋人が忘れられず、本人にその気がないため、結婚や交際には発展しなかった。絶対に結婚しなければならないと思っているのは周囲の人間であり、この男性はすぐに結婚しなければならないと考えていなかった。

お見合い以外にも、両親の反対を押し切って結婚し、両親が子どもを勘当したという場合や、祖父が孫同士を結婚させようとするなど、結婚相手に家族が口出しをする場合が存在する。

『ラスト・プレゼント』(2001)の夫婦は、両親の反対を押し切って結婚している。理由

は、妻が孤児であることがあげられている。男性の両親は、結婚したいと言う自分の息子を勘当し、両親のいない女性との結婚を認めなかった。女性に両親がいないという家族の形態が、結婚に影響を与えていることを現している。『オルガミ～罌～』（1997）では、両親の不在が結婚に影響を与えることを懸念する場面が登場する。この場合は、結婚相手の男性も父親が不在であり、男性の母親が気にしないということで結婚に結びついている。

『大変な結婚』（2002）では、女性主人公の父親が、2人の間に何かあったのなら結婚するしかない、と言う。男性主人公は、何もありません、証明書もありますので、と結婚を断ろうとした。父親は、生娘なのに何が気に入らないのだ、嫌なのか、と怒りだす。貞操や純潔に対する価値観は、田舎により強く残っている、あるいは残っていると思われることが表現されている。女性主人公が生娘であると処女であることの価値は話すか、彼女が結婚したいかどうかは問われていない。

『マイ・リトル・ブライド』（2004）では、祖父による結婚の強要が現されている。男性主人公と女性主人公の家は隣同士で幼馴染である。男性主人公の父親は、女性主人公の祖父にかわいがられていたため、2人を結婚させたいと思っている女性主人公の祖父に協力しようと、必死に結婚させようとするがうまく行かない。最終的に、女性主人公の祖父は、わざと病気が重くなったふりをして入院し、2人に今すぐ結婚することを約束させる。

祖父が2人の結婚に必死になる理由は、友人の無念を自分が晴らしたいためである。男性主人公の父は、お世話になった祖父へ恩返し気持ちはあり、頼まれると協力せざるを得ない。孫たちにとっては勝手な約束であるが、嘘であっても祖父が病気で死ぬかもしれないと分かると、祖父の願いを聞いてしまう。

祖父に頼まれたからと、そのまま言うことを聞いてしまうというのは、年上を敬うという儒教精神と家父長制が自然に入り混じっている。しかし、現実社会に儒教精神や家父長制がそのまま残っているわけではない。その古さをコメディに取り入れられるのは、それが少しは現実にもあるが、だいぶ廃れたものであり、面白おかしく表現しても大丈夫であるからであると考えられる。

## 2. 結婚生活と夫婦

結婚生活や結婚後の夫婦の様子は、どのように描かれているか。ここでは、対象作品中ストーリーに結婚が含まれる映画を取り上げ、夫婦の描かれ方について考える。ただし対象作品は、恋愛中心の物語であるため、ほとんどのストーリーで結婚が破綻してしまう。

ストーリーの部分でものべたが、対象作品には結婚生活が幸せなものであるという作品はほとんど無く、幸せな結婚生活を描いた作品はなかった。家や家族というテーマは、結婚における家や嫁としての責任の重さがあり、現実の壁にぶつかるため結婚には恋愛の軽さは無い。また、伝統的な結婚価値観は必ずしも恋愛を前提条件としている訳ではなく、社会において家庭を持つことが当然視される場合、結婚に過度の希望や夢を託す必要性が存在しない。

また、歌謡曲においては、結婚の夢や理想を描かず、結婚自体を表現しない傾向が見られる。1930年代から2004年までの韓国の歌謡曲には、幸せな結婚を歌う歌がほとんど存在しない。日本と比較した場合、その少なさが際立つ。映画において、幸せな夫婦愛ですらあまり描かれていないのは、夫婦はお互いの愛というよりも、家族であり血縁集団という感覚が強いためである。

『パク・ポンゴンの家出事件』(1996)では、浮気により夫婦関係が解消され、夫婦のお互いに新しいパートナーと再婚する。5位という人気の高さは、遅くとも1996年にはこの映画の内容や結末をある程度受け入れることができる社会であった、または、このような社会を望むという願望があることを示す。

この夫婦は、結婚前に子供ができた「できちゃった婚」である。1996年の時点で、ストーリー上に自然と大学生同士の「できちゃった婚」が表現される。それに対しては、マイナスイメージも非難される様子もなく、ごく普通にストーリーの一部として扱われている。社会で「できちゃった婚」が認識され、更に普通に受け入れられていたのか、あるいは映画の中だからであり、映画のマイナスイメージのない表現が先行しているだけなのかは不明である。しかし、「できちゃった婚」が存在していることを表現することは許されていた。1996年は映画法から映画振興法に変化した時期であり、検閲から等級制に移行した時期でもあるため、その影響も考えられる。

夫は妻が口うるさいことに不満を持っている。夫は口の利けない精肉店の女性が何も言わないで静かであると言うことを気に入ったのである。この夫の場合、妻になる女性の条件として、口うるさくなく、自分に意見しない従順であることだ。

一方、静かで従順である女性とは反対に、妻はよく話す。妻は夫に対して、会話をしてくれない、文句ばかりを言う、言うことを聞かざるを得ないという不満を持っていた。息子が言うように、母親が黙らないと喧嘩になるということは、多くのことで自分の意見を抑え、夫の言う通りにしてきたと考えられる。子どもから見ても夫婦の関係は夫が上、妻

が下というのである。

夫に対する不満が頂点に達し、家出につながった。妻は、静かで従順な女性を求める男性に対する、意思を持った女性のささやかな反乱として、家出をした。いきなり離婚するのではなく家出である。簡単には離婚しにくい環境であるのだ。はじめからすべてを断ち切り離婚してしまうのは、子どももいるので生活に対する不安と夫に対する恐怖が勝ってしまいでしなかつたのである。夫に縛られている日常から出て行ったことで、日常から抜けだし、自分の夢を再び追うことを思い出し、押し込めていた自分を取り戻そうとしたのである。

結婚と言う枠にとらわれたままではあるが、限られた範囲の中で自分の意思を貫こうとしているからである。離婚をせずに家出であるので完全に断ち切って自由に奔放になったという訳ではなく、婚姻関係というつながりを持ったまま、不自由の安心感を持ちながらの自己実現である。

『ゴースト・ママ』（1996）は、夫婦が結婚している状態で物語がスタートする。しかし、初期の段階で妻が死亡し、幽霊となって夫の前に現れる。エンディングでは、夫は別の女性と結婚し、妻はそれを見届けて消えることとなる。

この妻は、自分が死んだ上に、幽霊として現れるがもう一度消えなければならず、2度死ぬようなことになる。さらに、夫が別の女性と幸せになる様子を見なければならなかつた。

妻は、妻の死によって意気消沈している夫を勇気付けるだけ勇気付け、その後は消えなければならぬ。自分の愛する人を幸せにして去っていくという自己犠牲的な面を持ち、死んだ人間という自分ではどうすることも出来ない事実を背負う。

夫が2度目に結婚するときに、死亡した元妻の母親が結婚式に出席している。家のつながりはどこまでも続く。また、男性が子持ちで2度目の結婚をすることは、あまり違和感なく描かれている。もしこれが女性であった場合、上手くいかないと考えられる。男性が2度目の結婚をする作品として、1995年の『ドクター・ポン』も、妻と死別した子持ちの主人公が新しい女性と恋をしていくストーリーである。

『オルガミ〜罌〜』（1997）は、韓国の嫁と姑、結婚生活の奥に潜む陰の部分の縮図にしたものである。嫁と姑の関係、母親と夫の関係は、韓国に幸せな結婚を連想させない理由の1つであると言える。母親は夫に対する執着が強く、夫も母親に対して深く依存するように育てられているため、自分の意思で母親を大切にし、嫁に対する母親の接し方に何

の疑問も抱かない。

母親と息子の関係が粘着質なものであり、更にこの母子の場合、父親が死亡している点からも、唯一の息子であるという意識が、一層息子に対する思いを助長している。唯一の肉親である母親は、息子にとっても絶対的な存在である。韓国社会において、息子と母親の関係はここまで行かないとしても、かなり親密にならざるを得ない。母親は息子を産むことによって、婚家で立場と権力を得るためである。

最終的に、姑は息子の遺体の側で自殺し、死んだ2人の灰を嫁が湖にまくところでストーリーは終了する。虐待、監禁などのひどい目にあった結婚生活であり、姑に対しても相当の恨みを持つはずであるが、嫁は最後まで面倒を見ているのである。これは韓国の家、一族、というつながりの強さを表している。

『情事』(1998)の中心は不倫であり、しかも、妹の婚約者を奪ってしまう。妻が夫以外の人に恋をし、その結果自分の意思で家を出て行くことになる。恋を貫き、家庭を崩壊させるのである。

1998年の時点で、不倫の結果、家庭が崩壊するストーリーが存在している。女性の不倫ストーリーが、流行し始める先駆けである。全体的に画面は薄暗く、静かな雰囲気であり決して明るいイメージが登場する映画ではない。しかし、不倫に対する世の中の視線が、絶対にダメなもの、タブーなものと言う認識から、そのような場合もあると考えられるような社会になっていることを示している。一番大切と考えられている家族や家庭よりも、自分の意思を優先させるタイプの出現であり、韓国人の価値観が変化している1つの例である。

妻が出て行こうとする際、夫は離婚をさせないような気である。離婚にマイナスイメージを持つ観客の大半のイメージを代弁していると考えられる。しかし、妻はそれを押し切り、家を出てしまう。この女性の夫や妹など家族にとってのエンディングは、家族の終焉であり崩壊であるため、ハッピーエンドではない。しかし、この女性は、家庭を崩壊させ捨ててでも手に入れたいものがあり、それを求めて家族を捨てるという選択をしている。

2人がその後どうなったかは不明のままである。不倫を円満で幸せな結末で終えることは、難しかったと考えられる。しかし、それでも2人がお互いを思って全てを捨てていくなると、お互いにとってはハッピーエンドに近いものであると考えられる。

『男の香り』(1998)の結婚は、幸せと呼ぶには程遠いような結婚の仕方である。夫になる人物は妻になる人物に思いを寄せていたが、妻は主人公のことが好きである。主人公



の危機を救うために、好きでもない相手との結婚を承諾してしまう。結婚は取引の材料として利用されており、女性は自ら犠牲となって主人公を救うのである。仕方なく結婚した結婚生活が楽しいわけも無く、夫は妻に暴力を振るう。結婚が幸せなものであるというのは微塵も感じられない。この結婚はストーリーの途中で、暴力に耐えかねた妻が夫を殺害することで終了してしまう。

『ハッピーエンド』（1999）では、妻が自分の意思で不倫をしている。夫婦の結婚生活は幸せに描かれているわけではない。ごく普通の日常として、炊事、洗濯、育児など、大半の作業を夫がこなしている場面が描かれる。主夫という設定が登場しているのは、当時 IMF 危機もあり不景気でリストラにあった夫という設定があるからかもしれないが、主夫が社会で認識されるようにもなっていたと考えられる。主夫は男性が家事をするような意識を持ったと言うのではなく、リストラにあったため仕方なくという意識のほうが強い。主夫は不景気の産物である。

不倫を許せなかった夫は、リストラにあったという社会的なストレスと、家庭においても妻が家計を支えていること、さらに不倫をするというストレスで、どこにいても自分が惨めであるという考えに至り、妻を殺害しその罪を不倫相手に着せた。どこに行っても自分は惨めという立場に追いやられた、と考えた男性が、せめて家庭では自分が権力を握りたいという復讐心ともいえる。家庭における夫の地位が崩壊したのである。

『花嫁はギャングスター』（2001）では、ストーリー中に結婚し、その後の生活も描かれている。姉が女性主人公に対して幸せな結婚をして温かい家庭を持って平凡な人生を送って欲しいと願っている。姉と女性主人公にとって、家族はお互いだけであったので、家族に対する憧れが強かった。また、死期の近い姉は、女性主人公が独りにならないように、新しい家族を早く持つてほしいと願っていたと考えられる。

姉が見たいのは、結婚した女性主人公であり、「幸せな妹」が見たいということである。それは、姉が妹の幸せは結婚、結婚は幸せなもの、と考えているからである。また、自分が結婚できなかった＝幸せになれなかったという自分の結婚への思いをも、妹に託している。姉は結婚して家族を持つことが、一番の幸せと考えている。

妹は死期の近い姉に、結婚して温かい家庭、子供を見たいと言われ、実行して見せたくなってしまう。姉の望むままに結婚式を挙げ、子どもを作る。これも幸せの1つであるが、結婚が幸せであるという観念は、近代以降に個人が恋愛によって結婚を選択するという理念が成立したからである。「結婚を選択しない」という考え方もあるため、妹にそれが当て

はまるとは限らないが、妹は姉の言うとおりに結婚する。

結婚が含まれている話ではあるが、やくざの世界に身をおく女性と、ごく普通の結婚生活を夢見ていた一般人の男性であるため、2人の一般常識にはずれがある。女性主人公は、家事は全般的にしない、夫に対して乱暴な言葉遣いをする、引越しパーティの料理を作るのではなく、シェフを呼んで作らせる、暴力を振るう、夫婦関係を拒否するなどの行動を取る。夫は驚いてばかりであり、理想とかけ離れているのである。

夫の理想の家庭とは、幸せな結婚と温かい家庭、かわいい妻、子どもがいるなどという条件は出てきたが、具体的なものは不明である。夫の理想は表現されているが、理想とはかけ離れた、真逆の家庭がそこには存在している。すなわち夫の理想とは、家事全般をこなす、夫には丁寧な言葉遣いをし、手料理を作り、暴力を振るわず、夫婦関係を拒否しないということである。

夫が言葉使いに注意しろ、と強気に注意してみるが、妻はだったらお前も「ため口」を使えばいいと改めない。夫婦の間柄では、妻は夫に対して丁寧な言葉遣いをしなければならないと考えられていることが表現されている。恋人として付き合っている時は仲良くなるにつれて、くだけた言葉遣いをするようになるが、夫婦になると一転して丁寧な言葉遣いをしなければならないのは、家庭では妻は夫より下という序列が現われていると考えられる。

映画の途中で、妻が初めて料理を夫に作るという場面があった。その時夫は喜んでいて、映画の中では料理は完成せずじまいである。夫に料理を作ろうとするあたり、妻が結婚生活に感化され、少し適応し始めていたと考えられる。

しかし、結局エンディングでは、町役場の職員であったスイルがやくざの世界に足を踏み入れたような形になっている。妻を改めさせるどころか、自分を変えられてしまったのだ。その後のことは描かれてはいないが、スイルが変化しているということは、弱い夫の立場はそのままである。

『ラスト・プレゼント』（2001）では、当初、結婚生活は順調に進んでいたようだが、幼い子どもが亡くなったところから異変が生じたと推測される。さらに、夫がコメディアンとして成功できず、長い下積み生活を送っている。

妻は、夫に夢を叶えてもらいたいと思っているが、口ではそれを表現しない。妻は、好きでベビー用品店の仕事をしていると考えられるが、夫が仕事に専念できるように、自分が稼ぐ気である。それに対して夫は、妻に対してそっけない態度を取り続けていたが、妻

の病気に気付いてからは、口では優しい言葉を掛け合うことはないものの、妻のために何かしようとする。お互いのことを思い合っている様子が描かれている。夫婦が助け合っていく様子を美しいものとして描いている。

『大変な結婚』(2002)では、最後に結婚することになる。互いに記憶がないため、本当に関係がなかったことを証明するために、「処女かどうかの検査を受けてください」と男性は言い、女性は「何を言っているのか」と断るが、「そうするようにします」と了承した。検査の結果、女性は処女であると証明された。検査をしてまで、処女であること証明しなければならぬほど、結婚前は処女でなければならない、という考え方がこの女性には強いと言える。一方この女性は、一回関係を持つと、結婚しなければならないと思っている。すぐに妊娠検査薬を買ってきた主人公は、同僚から妊娠に対する知識がないと指摘されていた。

また、男性主人公の彼女と主人公の女性が2人で会うことになった時、男性の彼女は、「一回寝たくらいでいい気になるな」と言っている。この女性の場合、主人公の女性ほど処女にこだわりは無い。

また、女性主人公の兄の中で長男の子どもが学校で問題を起こし呼び出された。その時、長男は担任の先生に一目ぼれした。長男が息子の担任と浮気しようとする、その現場で妻が先生を殴り倒し、夫を懲らしめ車で轢こうとする。やくざという特殊な環境があるとはいえ、浮気は許さないと強く出る妻の姿が描かれている。夫婦の力関係において、必ずしも夫が上ではないという状況が、何を描いても許されるやくざコメディにおいて描かれている。一般人で普通に描くことが難しいためであると考えられる。

『浮気な家族』(2003)の夫婦の息子は養子である。終盤で妻が妊娠したのが奇跡であると表現されているため、妻が妊娠しにくい体質であったと考えられる。子どもが産めない女性であっても結婚を解消するには至らない。養子であっても子どもがいればそれでよいと許容されるようになっていくように表現されている。子どもが生まれぬ夫婦の場合、夫婦2人だけで生活していこうとするのは考えにくいのだろうか。夫婦という関係には、必ず子どもがいなければならないようだ。

友人との電話で、妻は「妻は女じゃない、家政婦の気分になるのだ」という。夫は、仕事が忙しいことを理由に、父親がリハビリセンターから病院に移る時に、妻を迎えに行かせた。また、夫の父親が吐血した時も、夫は自分の父親に何もせず、妻を呼んで血の処理をさせる。夫は仕事を理由に自分の父親のことを押し付けている。妻が自分の家族の面倒

を見るのは当然であるという、夫の考えが現れている。妻は夫に対して、自分の親の面倒くらい自分で見ろ、ということを行っている。夫は「まったくこの嫁は」と自分の言うとおりにしない、または、自分の親の世話を快く引き受けてくれない妻に対して呆れている。夫の立場は、妻が親の世話をすることが当然と思っている。

しかし、その当然であることに対して「自分で面倒を見なさい」と言う事ができる妻が描かれている。結局、この映画中では妻が夫の父親の世話をすることにはなるが、自分の親は自分で世話をするようにと言うことはできることが描かれている。

『マイ・リトル・ブライド』(2004)では高校生のうちに結婚した女性主人公が、まだ結婚ということを意識せず、憧れていた先輩と付き合うことになる。自分にとって結婚が形式的であるため、先輩のことを愛人と思うことも、この関係が不倫であるとも考えられない。しかし、友人は主人公が先輩と付き合うことについて、「結婚しているくせに不倫だ」といい、「妻は夫に尽くすもの」と主人公に話すのである。高校生の時点で、妻の役割について考えを持っている。

『私の頭の中の消しゴム』(2004)では、ストーリーの途中で結婚する。女性のほうから結婚したいことを男性に伝えている。妻が病気になったため、両親は男性側に離婚を勧めたが、夫が病気であった場合は、おそらく妻が一生看病していくことが当然と考えられただろう。『ユア・マイ・サンシャイン』(2005)は、結婚前からストーリーが始まり、ストーリーの中盤で結婚する。

この2つの作品は、結婚する過程と結婚生活中に発覚する妻の病気を中心に描いている。女性側が弱く男性が守っていくという形になっている。妻は病気になるという不幸を背負い、男性がそれを支えて守っていく夫婦の姿は、男性が家の中心にあり女性はそれに従うという結婚の姿ではない。家のためではなく、妻という1人の女性のために生きる男性の尽くす姿である。妻が病気の夫に尽くすとなると、あまりにも普遍的であり、男性が病気の妻に尽くすとなると、通常は異なる姿であるため特別な感動を与える。男性が尽くす側になることはまだ普遍的ではないが、それもあり得ると考えられるほどには、世の中の変化は起こっている。

### 3. 「家」での人間関係

#### 1) 母と息子

「家」での人間関係は、夫婦の他に嫁と姑や夫との親子関係があげられる。「家」の中

で一番権力を持つのは、家父長制のトップである父であるが、「韓国では嫁をもらうとき、母親の意見が強く働くとされている。親子の絆が強いだけに、親の反対を押し切って結婚することは難しく、特に長男の嫁の場合、一生同居しなければならない場合もあるので、男女ともに慎重になる」<sup>113</sup>というように、結婚が関わる場合、息子を持つ母親が家庭内で一番権力を持つ場合もある。

嫁に与えられる役割は、家を継ぐべき男の子を産むことと、夫の家族と仲良く過ごすことである。嫁は長男を産むことによって自分の基盤を固めることができ、姑との力関係は、少しずつ自分が強いほうへ、変化していく<sup>114</sup>。

韓国女性民友会の家族と性に関する相談所によると、嫁の日常の悩みは、何が何でも男の子を産んで欲しいと願う義理の両親からの圧力、経済力によって兄弟関係においても待遇が違いため、夫や嫁の実家の経済力による差別、義理の親を養ったり家事労働を強いられられたりすることなどであるようだ<sup>115</sup>。このように、現代においても、夫の家の力が強く、嫁には長男を出産しなければならないという強い圧力がかかることが分かる。

男女の出生比率の偏りや、男児を産むために女兒が選択的に墮胎される「男児選好」が深刻な社会問題となっている。それは、1995年に胎児の性別鑑別を規制・性別による人工中絶を禁止する法が制定されているにもかかわらず、妊娠中の性別鑑別により不正に女兒の人工中絶が行われているためであると言われている。

2004年に韓国で生まれた子の性比は、女100：男108.2である（表9）。1980年代末から1990年代後半にかけて、男児出生の比率が110%以上の割合となっているが、その他は大体110%前後で推移している。日本では、1980年代からほぼ105%で推移しているが<sup>116</sup>、それと比較すると高い数値である。

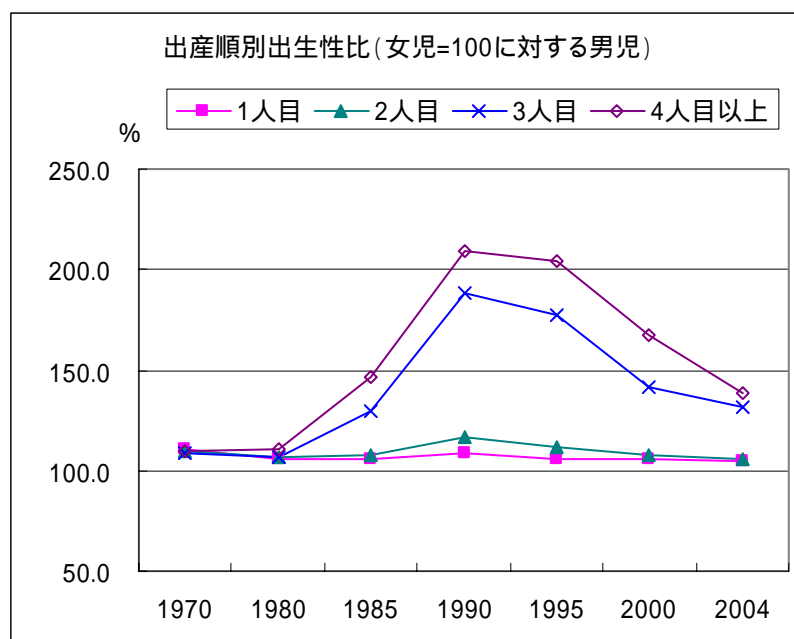
出産順別出生性比をみると、1人目と2人目の数値はほぼ同じだが、3人目と4人目の子どもになると、男児の性比の数値が跳ね上がっている（図15）。1986年は3人目が129.2%、4人目が146.8%であり、1990年は3人目が188.8%、4人目が209.2%、1995年は3人目が177.2%、4人目が203.9%である。1990年代は男児選好の傾向が強く出ている。2000年になると3人目が141.7%、4人目が167.6%、2004年は3人目が132.0%、4人目が138.4%と1990年代よりは落ち着いているが、男児選好の傾向は依然として続いている。

表 9 出産順別出生性比

単位:%	全体	1人目	2人目	3人目	4人目以上
1970	109.5	110.2	109.3	109.1	109.4
1980	105.3	106.0	106.5	106.9	110.2
1985	109.4	106.0	107.8	129.2	146.8
1990	116.5	108.5	117.0	188.8	209.2
1995	113.2	105.8	111.7	177.2	203.9
2000	110.2	106.2	107.4	141.7	167.5
2004	108.2	105.2	106.2	132.0	138.4

『2005 』 60 頁

図 15 出産順別出生性比グラフ



『2005 』 47 頁

息子を出産した嫁は、その家では跡取りの母親としての地位を確保することができる。こうして生まれた息子に対して、深い母親の愛情が注がれることで母親と息子の関係が近くなり、母親と息子の関係が粘着質なものになっていく。「ママボーイ」と呼ばれるマザコン男性が目につくのは、家父長制の家族制度による男子偏重によるものである。

これらの状況は、映画の中ではどのように描かれているか。

『オルガミ〜罨〜』（1997）では、母親の息子に対する異常な執着と息子への愛情が描かれている。この女性は夫を亡くしており、息子と2人暮らしであることも、息子への愛情を過剰なものにしている。韓国において全ての母親と息子がこうである訳ではないが、母親の息子に対する愛情はこのような一面を持っており、それを過激に表現したのがこの作品である。

また、息子は母親の愛情を全く疑っていない。元より両親を大切にす韓国であるが、この映画では、母親のことが大好きな息子として描かれている。

これほどではないが、母親と息子の仲がいい一面を自然に描いている場面がある。『マイ・リトル・ブライド』（2004）の男性主人公は母親と仲よしである。2人で一緒に腕を組みながらテレビを観るような間柄である。腕を組んでいるのが母親と20代の息子であり、息子は恥ずかしがることも嫌がることもない。日本人よりもスキンシップは普段から多いため、腕を組むのは普通である。しかし、母親と息子の距離の近さを表す表現であることは確かである。

また結婚後に2人が住む家は、部屋から内装まで全て男性の母親が揃えている。そして、2人の新居に男性主人公の母親が晩ご飯のおかずを持ってやってくることもある。これらのことは、妻が女子高生なので仕方ないとはいえ、男性主人公の母親が息子夫婦に介入したがつているように見える。しかし、介入できる強い立場であるのが息子の母親であり、介入するのが当たり前という状況であるとも考えられる。

嫁に行った娘と母の関係はどうであるか。女性主人公の母親は、いつかは2人に結婚して欲しいと思っていたが、16歳という年齢で結婚する女性主人公を心配し、不安に思っている。娘は一度嫁として外に出すと、自分の子であっても、自分の子ではないような感覚になる。そして、息子と母親の関係とは違い、娘と母親の関係は、一定の距離を保っているようである。親として嫁との繋がりがあつたとしても、婿の家より立場が弱く、家の意識が反映されている。

## 2) 母と嫁と家

『オルガミ～罨～』（1997）では、姑が息子を本当に愛してしまい、嫁に息子を取られるという感覚を持った姑と、嫁の関係は自然と悪くなっている。姑は結婚後も息子の世話をし続け、嫁に対しては酷い虐待、監禁などを行っている。息子との仲を裂かれた原因である嫁に、異常な嫉妬心を燃やす母親の姿が描かれている。

しかし、嫁は散々虐待を受け監禁されたにもかかわらず、最後の場面で嫁としての責任を果たすことになる。酷い目にあつたはずの家族のために、死亡した夫と姑2人の灰を湖に撒きに行った。関わりたくないはずの家族関係であるが、夫とは正式に離婚したわけではなく、喪主は女性主人公となってしまう。逃げたはずの家のために役目を果たす主人公は、完全に嫁として機能しており、家にとって嫁は、嫁でしかないのである。この最後のシーンは、韓国の嫁と家の関係を垣間見る瞬間である。

## 4. 家よりも恋

### 1) 浮気

結婚していない状態での浮気は、どのようにとらえられているか。男性が浮気をしている場合と、女性が浮気をしている場合の2種類がある。浮気の場合、男性の場合が圧倒的に多くなっている。

『愛のゴースト』（1999）では、主人公の彼氏が浮気をしている。男性は主人公の女性とは別に、社長の娘と付き合いしており悪いと思っていない。女性が死亡後も、すぐに女性のことを忘れてしまうほど、悪く描かれている。女性の方は、男性に冷たく扱われても文句を言わず、ひたすらついていく側であった。

『チム～あこがれの人』（1998）では、男性が二股をかけている。女性主人公と再会した、昔の同級生である男性は、主人公と付き合いながら実は他の女性とも付き合いしていた。主人公の女性は、男性の二股相手である女性から呼び出され、そこで初めて二股の事実を知る。男性の頬を引っ叩き、怒りをぶつけて去っていく。

しかし、男性の方は何食わぬ顔で、「殴られるのは当然だ、彼女とは別れて君を選ぶつもりだ、大人として考えてほしい」と言う。男性は結婚相手を選ぶためには、様々な人と付き合い、試してみる必要があるというスタンスで、2人と付き合いしていた。彼女はその後どうなったのかわからないが、そのまま男性に捨てられたと考えられる。

男性は二股をかけておいて、その事実が明らかになったにもかかわらず別れずに、その



まま付き合い、結婚相手として両親に紹介しようとするのである。お互いにとって有益であれば、二股していても関係なく結婚まで進もうとしている。一方女性の側は、納得できていないように描かれている。

完全な同時進行ではないが、『セックス・イズ・ゼロ』(2002)では、付き合っている彼女がいるにもかかわらず、別の女性に手を出す男性が描かれている。男性は付き合っている彼女と無理やり別れ、女性主人公と付き合いすることになった。しばらく普通に付き合っていたが、女性主人公が妊娠したと同時に突き放し、もとの女性とよりを戻している。男性は女性にひどく冷たくし謝らない。

『イルマーレ』(2000)では、女性主人公の元彼氏は、留学する際に彼女に待っていることを望みながら、留学中に近くにいた女性と結婚することになった。女性は何度も彼氏に手紙を送ったり、電話をかけたりしていたが、一向に連絡がつかなかった。その間、彼氏は別の女性と一緒にいたのである。

『LISE／嘘』(2000)では、高校生と中年男性の浮気が表現されている。女性は、男性に対して、妻と別れろという要求はせず、「妻に対して不誠実であれば、自分に対してもいずれそうなるから、妻と別れば、自分たちの関係が終わる」という考えを持っている。不倫や浮気を容認しているが、それによって家族を壊すことは否定している。家族に悪い、という気持ちからではなく、自分に対する態度にも不誠実さが表れるから、という理由である。

浮気は完全な誤解であるが『大変な結婚』(2002)では、浮気の疑いがある彼氏を一度は許す女性が描かれている。男性主人公は、朝起きたら女性主人公が隣に寝ていた事を付き合っている彼女に説明し、「本当に何も無かった」と説明した。この説明に対して彼女は「一回は許すけど、今は出て行け」と言った。浮気の疑惑を一回は許すが、態度としては怒っていることを表現している。浮気をされれば怒って当然という価値観が表現されている。しかし、この女性は男性主人公の浮気に怒っていたが、別の男性と浮気をする。ただしこの浮気は、仕組まれていたものである。

また、男性だけでなく女性の浮気も登場する作品がある。『敗者復活戦』(1997)では、浮気相手と本当に付き合いようになる男女が登場する。女性主人公と付き合っていた男性は、女性主人公にプロポーズをしたが、断られた。その後、自分から連絡を取らなくなり、別れる前から女性と付き合っている。女性主人公と別れていないので浮気となる。男性は主人公の女性に対して「愛しているのは君だが、結婚するのは彼女」と都合のいいことを

言っている。

一方、男性主人公と付き合っている女性は、男性と別れる前から別の相手と付き合っているのが浮気である。女性は、彼氏に別れを告げる時、自分たちは合わないということを主張し、別の男性と付き合っていることは言わないが、彼氏は薄々気付いている。この女性は、多少の罪悪感を持っているようであったが、浮気を選んだことには変わらない。女性が浮気をされて泣き寝入りする、というパターンではなく、女性が自分で相手を選択する立場として描かれている。

## 2) 家より恋

家族が大変重要視されている韓国社会において、結婚と家族の関係が変化していると考えられる。それは、映画の中に家庭、家族よりも恋愛を選ぶ主人公が登場していることから考えることができる。それらの主人公が登場する映画の興行成績がよいことは、それらのことが受け入れられていることを示している。

『情事』(1998)では、不倫で悩む女性主人公が、以前父親の話したことを思い出すシーンがある。父親は以前、本当に好きな人ができた時は、他の事を考えずにその人を逃すな、と言っていたと回想している。父親が不倫を勧めているわけではないが、本当に好きな人を逃さないようにと言っていたことを思い出す主人公は、家族より個人、自分を優先している。父親が言っていることは正しいと言う表面的な価値観によって、主人公が自分のすることに対しての不安を取り除く装置として父親の言葉が働いている。自分自身の選択を父親の教えるに従って行う形は、家族の価値の重さが行き続けている状況を示している。

『バンジージャンプする』(2001)では、同性愛の噂のため学校を放校になった男性主人公が登場する。彼は結婚しており、妻と娘がいる。しかし、男性主人公は、自分のクラスにいる男子生徒が、昔の恋人の生まれ変わりであると思っている。男子生徒も、昔の記憶を少しずつ思い出す。結婚して家庭がある男性であるが、昔の恋人が忘れられずその幻影を追い続けており、家庭を飛び出してしまう。妻と娘のいる家庭よりも、恋人を優先している。

妻と娘は周地的にしか描かれておらず、家庭・家族よりも男性主人公は恋愛を選んだのである。家庭・家族がある人物が、自分の恋愛を選ぶというのは不倫、家庭崩壊であるはずなのであるが、相手が死亡し生まれ変わった、ということと同性愛によってそれらの印象が薄れている。家族を持った人物が自ら家庭を顧みない行動をとり崩壊させていくこと

は、家族を一番重要視すべきものとして扱っていない。家庭や家族を重視しないのはラブストーリーであるから仕方がないが、この映画では家族が絶対ではない。

『家門の危機』(2005)の主人公は、女性主人公が検事であるため、やくざの自分を愛せないと考えた。彼は、恋のために家業であるやくざを捨てる決意をする。母親や兄弟などの周囲は反対していたが、最終的に組は解散することになる。男性は母親がボスとして守ってきた家業のやくざを捨てて恋を取っており、家や家族よりも恋を優先させている。この男性にとって、家の重要性が恋に負けたのである。

男性が母親や兄弟たちと共に、やくざの家業を完全に解散させ、女性に合わせている点は、男性の仕事に合わせて、自分の仕事を辞める女性とは全く反対のパターンである。弱い男性として描かれているわけではないが、女性に合わせて男性は、自分を強く見せることや上位に立ちたいと思う男性ではない。

『家門の危機』(2005)の前作『大変な結婚』(2002)では、女性主人公本人がやくざを継ぐわけではないが、エリートであった男性がやくざに合わせていた。しかし、会社を辞めたことは描かれていなかったため、やくざと付き合いながら、自分の会社に勤めていると考えられる。しかし、『家門の危機』(2005)はこの作品とは違い、完全にやくざのほうに一般人に合わせていると同時に、やくざであるからこそ描けているのかもしれないが、家よりも愛を重視したというのは、これまでとは違うパターンである。

これらのようにラブストーリーでは、家族を重要視しないこともある。1990年代にも不倫によって家族崩壊が起こっている作品もあるが、『バンジージャンプする』(2001)のように結婚しているにもかかわらず家族が周辺的なことや、『家門の危機』(2005)のように家業を捨てることで、完全に家よりも恋を選んでしまうのは、家という繋がりを持ちながらも個人のほうを重視する新たな傾向だと考えられる。

### 3) 不倫と離婚

#### A. 不倫の現状

家や家族がありながら、それよりも恋を重要視した場合、行きつくところは不倫や離婚であり、家族、家庭の崩壊である。ただし、韓国では不倫は犯罪となる可能性がある。韓国には姦通罪が存在している。

姦通罪が施行されたのは1953年であり、刑法241条は、姦通をした場合、2年以下の懲役に処すと規定している。姦通罪に対しては、これまで1990年、1993年、2001年と2007

年を合わせた4回の違憲審判が行われている。賛否両論あり、姦通罪廃止の立場では「公権力がプライバシーの領域に介入することは、行き過ぎた行為」とし、支持者は「韓国の伝統的な性道徳の観念と一夫一妻制、家庭中心の生活の維持」「姦通罪に問われるのはほとんど男性である」などを理由に挙げているとしている<sup>117</sup>。

現行法では、姦通罪による告訴は離婚を前提としており、離婚訴状も一緒に出さなければならない。また、時効は3年であり、離婚訴訟は不貞行為が見つかった日から6ヶ月、不貞行為があった日から2年以内にしなければならない<sup>118</sup>。

実際に、映画では不倫に関するテーマのものが話題を集めているが、現実ではどうか。傾向をつかむため、インターネットの新聞記事でどのように取り上げられているかをまとめた。記事は2003年から2006年までのものであるが、2003年に多くの新聞記事で不倫に関するアンケートが取り上げられている。

『浮気な家族』(2003)をきっかけとしたアンケートが行われている<sup>119</sup>。ハンギョレ 21は、映画を制作したミョン・フィルムと共に、世論調査専門機関エヌアイコリアに依頼して、2003年7月7日から9日、全国の既婚男女3,857人(男2,175人、女1,682人)を対象に「夫婦の性生活に対するアンケート」を実施した。『浮気な家族』(2003)は家族が浮気をする話であり、30代人権弁護士である夫は年下の恋人との関係が生きがいで、妻は夫の浮気に縛られず、隣家の高校生と仕返しの浮気をするという話である。

調査結果、男性42.2%、女性19.9%が配偶者以外の恋人と付き合ったことがあると答えた。年齢別では、特に50代以上男性50.9%、40代以上の女性23.4%が高い数値を示し、30代以下は20%であった。

夫婦の性生活が楽しいと言う回答は、男性39.5%、女性36.4%になったが、配偶者以外の異性と関係を持ちたいと言う答えは男性83.8%、女性49.4%になった。しかし、夫婦生活を肯定的に評価していても、大部分の男性と半分くらいの女性は「婚外関係」に関心を抱いているのである。

「婚外性経験」があるかと言う質問には、男性67.7%、女性12.3%があると答えた。婚外性経験は男女間差異がはっきりした。男性の相手として遊興業店の女性が36.6%と一番多く、恋人が22.4%、インターネットやナイトクラブで一時的に会った人が11.5%であった。女性の相手は、60%が持続的な恋人であり、インターネット・ナイトクラブで会った人13%、遊興業店であった人0.5%であった。

配偶者が不倫をしたら離婚をするか、という質問には、女性が離婚に対して積極的な姿

勢を見せた。絶対に離婚すると言う答えは男性が 29.2%、女性が 35.4%であった。また、不倫の範囲は、性関係がなくても愛する感情が 32.8%、性関係があるすべての場合が 27.7%、愛の感情で性関係が 22.3%という結果であった。

「テレビの連続ドラマに登場する食卓では多くの対話が行きかいし、妻と夫が優しく眠る『模範家庭』は消えている。不倫の爆発的噴出を通じて、社会的な一夫一婦制と性的な一夫一婦制の道が遠くなっている。(中略)相変わらず、男性たちの不倫が女性よりずっと多いが、性売買や不倫が男性には数千年間制度的に保障されてきた点を考慮すると、明らかに『結婚に対する反乱』は特に女性たちに激しく起こっている」<sup>120</sup>という評価がなされている。

また、同じアンケートを扱った別の新聞記事では、「不倫が明るみに出ても、家庭は維持したいと言う要求が多い。韓国社会では離婚が与える苦痛が大きい。離婚後の現実が寄り恐ろしくて耐えるのだ<sup>121</sup>」という意見を紹介しており、離婚がし難い社会的状況が現われている。

別の新聞記事では、不倫をテーマにしているテレビドラマが人気を集めていること述べ、不倫に関するアンケートを取り上げている<sup>122</sup>。2003年8月6日、結婚情報会社ダックスクラブは、全国の既婚男女 449人(男 212人、女 237人)を対象としたアンケートを行っている。「不倫を考えた事がある」と答えたのは、男性回答者の 56.6%、女性回答者の 40.5%であり、「不倫を考えたことはない」は男性 33.5%、女性 42.2%、「良くわからない」は男性 9.9%、女性 17.3%であった。半分近い既婚男女が不倫に対して道徳的拒否感を持っていないと明らかになったと伝えている。

また、不倫に対する基本的認識としては、「可能だと思うが、しないだろう」は男性 51.4%、女性 42.6%となっており、拒否感を持っていないが自分がすることはない人が半数近いことが分かる。「不倫を考えてみた理由」は、男性は「単純な好奇心」が 49.2%、女性は「配偶者が嫌になり」が 52.1%であった。その他の回答には、「倦怠期だから」「後から理想の人と出会ったから」などが多い。「配偶者が嫌になる時」は、男性の場合は、「他の家の夫と比べられる時」が 33.5%、「些細なことで文句をつけ、小言を言う時」が 21.2%、「夫婦関係が円満ではないとき」が 11.8%である。女性の場合は、「夫が実家のことに無関心の時」が 31.2%、「他の家の妻と比較する時」が 21.5%、「帰宅時間が遅い時」が 20.3%であった。

「デートに誘われた時にどうするか」に対しては、男性は「一旦会ってみる」14.6%、

「相手によって決定する」50.5%などである。女性は「会わない」54.4%であり、男性のほうが女性より不倫に陥りやすい回答である。「配偶者の不倫を知ったらどうするか」という質問には、男性は67.5%が「離婚する」と答え、女性は45.6%が「悔しいが注意して家庭を維持する」と答えている。女性の不倫に対しては、厳しい目を向けられ、反対に夫の不倫に対して離婚を突きつけることができない現実が浮かび上がっている。

不倫がテーマの映画やドラマに対する議論が白熱していることを取り上げ、インターネットによってアンケート調査を行い、浮気を進める社会に対して否定的な意見が述べられていることを紹介している記事がある<sup>123</sup>。インターネットポータルサイト Daum は、2003年8月28日から「不倫ドラマと映画ブーム、どう見るか」というアンケートを計5,252人<sup>124</sup>のネティズンに実施している。調査では、「不倫を助長し、家庭崩壊のきっかけを提供する憂慮がある」との回答が64.5% (3,388人)、「社会の現状を反映する鏡であるだけ、憂慮するほどの水準ではない」が33.7% (1,771人)、「判断を保留」が1.8%である。大多数は不倫と家庭崩壊を憂慮しているが、約3割の回答者は寛大な態度をとっている。

上記アンケートの回答者の意見は、「現代の性文化が火の点いた家なら映像媒体が油をまいて煽っている」「テーマはいくらでもあるのに韓国映画は不倫と暴力にばかり関心を持っているのか」という否定的なものや、一部の意見にとどまっているが「異性との出会いは人生の活力になる」「映画は映画であるだけだ」という肯定的なものもある。「ドラマと映画が不倫や不道德をひどく美化している」とし「刺激的なテーマとして不倫を選んでいるだけで、現実を反映しているわけではない」と指摘している<sup>125</sup>。これらのニュース記事やアンケートの結果によって、不倫が日常的に語られるテーマとして、表に出ていることはうかがえる。

また、不倫に対する価値観に関してもアンケートが行われている<sup>126</sup>。貿易専門就業ポータルサイトのトレードインと、リサーチ専門機関ポールエバーが、会社員1,488人を対象にアンケートを行っている。回答者の49.5%が不倫を目撃したことがあると答えている。

不倫も愛かという質問に、回答者の52.7%が「愛ではない」と答えた反面、47.3%は「不倫も愛である」と答えた。性別で見ると、男性49.9%、女性41.3%が「愛である」と答え、男性が女性より高くなっている。年代別にみると、40代50.8%、30代49.6%、50代以上48.3%、20代41.0%の順であり、40代が最も高い。

愛になりうる理由は、「お互いの感情が純粋である可能性もある」が52.3%、「個人の感情が重要」が24.0%、「(そのような状況になれば)自分も相手を受愛する様な気がするから」

が 12.6%、「不倫に対する認識変化」が 6.4%、「夫婦関係に対する認識変化」が 2.4%、その他 2.3%であった。

不倫が愛ではない理由は、「他の人を不幸にする」が 25.1%、「倫理的に間違った行動である」が 24.7%、「瞬間的感情に過ぎない」が 24.1%、「夫婦の信頼を壊す行動」が 24.0%、「法的制裁を受けるから」が 1.4%、その他 0.6%であった。

男性は「倫理的間違った行動である」の 27.4%が一番高く、女性は「他の人を不幸にする」の 28.6%が一番多かった。年代別では、20代の 28.5%は「他の人を不幸にする」、30代の 24.6%と 50代以上の 33.3%は「瞬間的な感情に過ぎない」、40代の 30.8%は「倫理的に間違った行動である」を選んだ。

不倫時にその相手を愛することができるかという質問に、回答者の 77.0%は「できる」と答えた。性別で見ると、男性 81.5%、女性 64.1%であり、年代別では 50代以上が 92.9%と一番高く、40代 82.6%、30代 78.4%、20代 68.8%であり、年齢が高いほど比率が高くなっている。

理由として「愛の感情はいつでも変わる事が出来る」が 42.6%、「個人の感情がより重要」が 26.6%、「何の理由も無しにそうなる」が 19.2%、「すでに心が変わり、配偶者とは不幸になるだけ」が 8.7%、その他が 30.0%であった。

不倫時にその相手を愛することが出来ない理由は「他の人を傷つけるのが嫌だ」が 48.8%、「1人の人だけを愛したい」が 37.0%、「周囲の目が怖い」が 7.4%、「その他」が 5.6%、「不利益を被る」が 1.2%となった。男性は「1人の人だけを愛したい」の 46.9%、女性は「他の人を傷つけるのが嫌だ」の 53.3%が一番高く、年代別では「他の人を傷つけるのが嫌だ」で、20代が 56.4%、40代が 52.4%、50代以上が 100%、「1人の人だけを愛したい」で 30代の 47.1%がそれぞれ一番高かった。不倫に対する考え方が寛容になったことは事実であると言える。

別の記事では、女性の不倫と離婚について述べられている記事もある<sup>127</sup>。2005年12月3日ソウルで開かれた「2005年韓国女性心理学会統計学術大会」で、大邱カトリック大学心理学科ソン・ハンギ教授が既婚女性の性価値観に対して調査した内容を発表している。

調査対象は、デパートの文化センター受講生、教師、銀行員、専業主婦などで、452名の平均年齢は 38.4歳である。それによると、女性たちの浮気や不倫の理由は、「夫に嫌気がさして」が 37.5%で一番多く、「お酒を飲んで偶発的に」(22.2%)、「男性の誘惑に負けて」(13.3%)の順であった。相手と出会う経路は「職場や町内」(22.5%)、「集まりで偶

然」(20.0%)、「友人や同僚の紹介」(17.5%)、「インターネットチャットや同好会」(15.0%)など多様であったとしている。「最近是不倫が配偶者にばれたとしてもお互い知らない不利をする場合が多くなった」「不倫を素材にしたドラマも主婦たちの不倫に対する認識を変えた」<sup>128</sup>という指摘もされている。

2005年には、各放送社の離婚と不倫をテーマにしたドラマが大きな人気を呼んでいることが記事になっており、実際に不倫や離婚に関わる当事者たちに対するアンケートが実施されている<sup>129</sup>。

再婚情報業トゥリモアとイエガが2005年12月5日から20日までホームページ訪問者とEメールで男女400人を対象とした「2005年ドラマのテーマで離婚と不倫などが使用されることについての考え」というアンケートを実施した。アンケート結果では、40%に相当する160人の回答者が離婚と不倫をテーマにしたドラマについて反感が生まれると答えているようだ。一方、30%のネティズンは「若干の拒否感があるが、それほど気にしない」と答え、残りの30%は「面白ければ関係ない」と答えている。

女性の浮気に対しては、1956年の「映画『自由婦人』が放映されていた時代だけでも、女性にとって浮気は禁忌中の禁忌であった。万に1つでも浮気の実事がわかった場合、その女性は天罰に近い刑罰を覚悟しなければならなかった」<sup>130</sup>と言うように、女性に対する浮気や不倫の目はこれまで相当厳しかったことがうかがえる。「しかし、50年たった今、その様な話は昔話である。『おばさんたちの浮気』が映画やTVドラマの主要テーマになっている。コミック家族ドラマでさえ、不倫が構成の1つを成している」<sup>131</sup>という記事のとおり、女性の浮気や不倫に対する考え方は、徐々に社会的に寛容になっているようである。

その記事では、女性の浮気や不倫に対する意識調査が行われている。女性専門ポータルサイトゼクシインラブが会員を対象にした「不倫」に対するアンケートの結果、「過去に不倫をしたことがある」が22%、「現在不倫をしている」が19%であった。また、「一度くらい不倫を夢見ている」が40%、「過去はもちろん、これからもそんなことはないだろう」は19%であった<sup>132</sup>。

浮気や不倫に対して寛容になったといいつつも、女性の不倫や浮気を否定的に考えながら妻の不倫に悩む夫のことを取り扱っていると考えられる記事もある。

韓国日報企画取材チームは、女性ポータルサイトのゼクシインラブと共同で既婚女性対象のアンケート調査を2006年7月27日から8月6日に実施した<sup>133</sup>。回答者194人中、「直接不倫をした」56人、「不倫問題で悩んだ」36人を合わせると、女性92人は全体の半分(48%)



にあたり、特に不倫経験のない女性でも「周辺で不倫を見たことがある」61人(31%)、「不倫を見たことない」22人(11%)である。「主婦の不倫が蔓延している」と主婦の不倫が流行していることを伝えている。

記事では、「実際『妻の不倫』で悩む男性は増加している。男性悩み相談センター『男性の電話』によると、毎年2,400余件に達する相談電話のうち、『妻の不倫』関連が全体の4分の1に達し、年毎にその比率は増えている」<sup>134</sup>と、男性が妻の不倫で悩み相談をするケースが増えていることを伝えている。

「主婦の不倫は相当数が報復犯罪と離婚など家庭崩壊と社会不安に連結している。2006年7月、8名の死亡者を出したカラオケ放火事件で見たように、女性の不倫は相手男性や夫の暴力、放火殺人など取り返しのつかない衝動犯罪を引き起こす危険が大きい」<sup>135</sup>と、女性の不倫が即犯罪につながることを危惧する記事が出ている。女性の不倫に対する考え方が寛容になってきたとはいえ、未だ妻の不倫が、夫の犯罪の原因であるという扱いを受けられる可能性があることを示している。

主婦の不倫が急増している理由は、「専門家は、主婦の不倫急増は女性の社会活動増加により、男性との接触機会拡大、性解放風潮など、女性の社会的地位向上と密接に関連があると見ている。このような社会雰囲気の変化にもかかわらず、夫の家父長的態度が変わらずにいることも、妻の不倫をあおる原因に数えられる」<sup>136</sup>とし、主婦の不倫は、女性の社会進出と男性の家父長的態度によるものであるとしている。

この記事において、女性の不倫が増加した原因にのみ関心を向けるのは不当であり、女性に責任を転嫁していることになる。不倫の機会が増えたのは、男女とも変わらないはずであり、社会全体を考えると、これまでの男性の不倫が、話題に上らなかったことも考慮しなければならない。

以上のように、不倫や浮気、離婚が映画やドラマのテーマとして扱われることによって、不倫や浮気、離婚に対しての考え方をめぐって、社会が大きく反応していることがわかる。現実には女性の浮気、不倫が増加していると言われているが、明るみに出やすくなったため、急激に増えたような感覚であると考えられる。男性の浮気や不倫はあまり騒がれておらず、アンケートからも女性の浮気や婚外性経験は、男性よりも明らかに少ないことが分かる。それにもかかわらず、これほど増加したと騒がれ、取り上げられている。しかし、「禁忌中の禁忌」であった女性の不倫が、こうして多くの新聞記事で取り上げられるようになったことは、1つの変化である。

## B. 離婚

浮気や不倫に対する価値観の変化とともに、離婚の価値観にも変化が起こっている。「2005年韓国女性心理学会統計学術大会」で発表された、ソン・ハンギ教授の論文によると、既婚女性5人中1人以上が離婚危機の女性であることが紹介されている<sup>137</sup>。アンケートの調査対象は、デパートの文化センター受講生、教師、銀行員、専業主婦など452名で、平均年齢は38.4歳である。この中で16.8%は「離婚や別居に対する考えが最近3年間、頭の中で回っている」とし、7.1%は「夫と離婚したい」と答えているようだ。

実際に統計の数値を見てみると、明らかに離婚件数は増加している。婚姻件数は減少しているものの、離婚件数は増加傾向にある（表10、図16）。離婚件数は、1995年には6.8万件であり、その年の婚姻件数に対する離婚件数の比率は17.1%であったが、2004年には13.9万件となり、その年の婚姻件数に対する離婚件数の比率は、44.9%となっている。離婚件数は約2倍に増加しており、比率は50%に近い数値である。韓国が離婚国家になる懸念がニュース記事で紹介されるほど韓国の離婚率は高い<sup>138</sup>。また、人口1,000人に対する離婚率は、1990年では1.1、1995年では1.5であったが、2000年には2.5、2002年には3.0、2003年には3.5、2004年には2.9と、高い数値を示している。

日本の離婚率は、1980年では1.22、1990年では1.28、1995年では1.60、2000年では2.10、2001年では2.27、2002年では2.30、2003年では2.25、2004年では2.15、2005年では2.08、2006年では2.04となっている<sup>139</sup>（図17）。1996年以降、日本より韓国の方が離婚率は高くなっており、離婚率の上昇スピードが速いことがわかる（図18）。

また、結婚生活を長く送った夫婦の離婚が増加している（表11）。離婚夫婦の同居年数は、1995年は5年未満が32.6%、5年から10年が25.1%、10年から15年が20.6%、15年から20年が13.1%、20年以上が8.2%で、平均同居年数は9.4年であった。これが2004年になると、5年未満が25.2%、5年から10年が22.9%、10年から15年が18.9%、15年から20年が14.7%、20年以上が18.3%で、平均同居年数は11.4年となっている。15年以上の結婚生活を続けた夫婦の離婚が増加していることが分かる（図19）。

離婚に対する意識については（表12、図20）、1998年では、絶対に離婚してはいけないが19.0%、なるべく離婚はしてはならないが41.3%、場合によるが29.1%、理由があれば離婚してもよいが7.4%、理由があれば絶対に離婚しなければならない1.2%、分からないが2.0%であった。2002年では、絶対に離婚してはいけないが16.9%、なるべく離婚してはならないが41.5%、場合によるは32.9%、理由があれば離婚してもよいが5.9%、理

由があれば離婚しなければならないが0.7%、分からないが2.2%となっている。してはいけないが2%減少し、場合によるは3%増加しているが、大きな変化は見られない。

全体的に、離婚に否定的な意見を持つ人が多く、6割近くを占める。世代別に見ると離婚に否定的な意見は、20代の場合は半分以下となっている（図21）。特に女性の場合は約3割強にとどまっており、男性と大きく差が開いている。50代以上の場合、離婚に否定的な意見が8割近くなり、世代間の差が大きいことが分かる。

同世代であっても、男女を比較すると大きく差がある。男女別で見た場合は、離婚に対して否定的な意見は男性のほうが多くなっているが、1998年と2002年を比較すると、よりその傾向が強く現われている。ただし、男性も離婚してはいけないから、どちらでもよい、なるべく離婚してはならないというほうに変化が見られる。離婚に肯定的な意見は女性のほうが多いが、肯定的な意見は全体から見ると少数である。場合によるでは、女性の数値が高く、男女の差がよりはっきりしている。

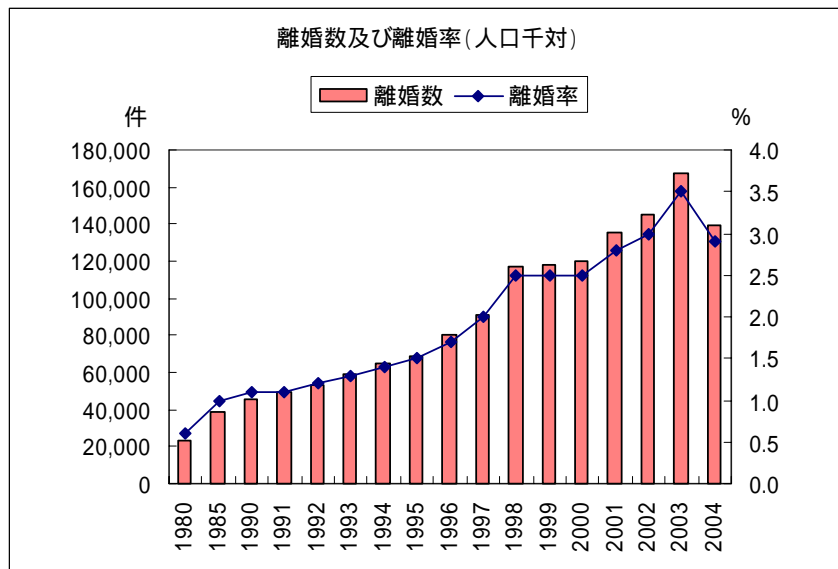
以上のように、不倫、離婚に対する韓国社会の価値観は変化していることは明らかである。そのスピードは速く、環境は急激に変化している。しかし、全ての方向へ向かって一直線に進行している訳ではなく、両極端な価値観の混在する社会と考えられる。

表 10 離婚数及び離婚率

単位:件、%	離婚数	離婚率	単位:件、%	離婚数	離婚率	
	1980	23,662	0.6	1997	91,159	2.0
	1985	38,838	1.0	1998	116,727	2.5
	1990	45,694	1.1	1999	118,014	2.5
	1991	49,205	1.1	2000	119,982	2.5
	1992	53,539	1.2	2001	135,014	2.8
	1993	59,313	1.3	2002	145,324	3.0
	1994	65,015	1.4	2003	167,096	3.5
	1995	68,279	1.5	2004	139,365	2.9
	1996	79,895	1.7			

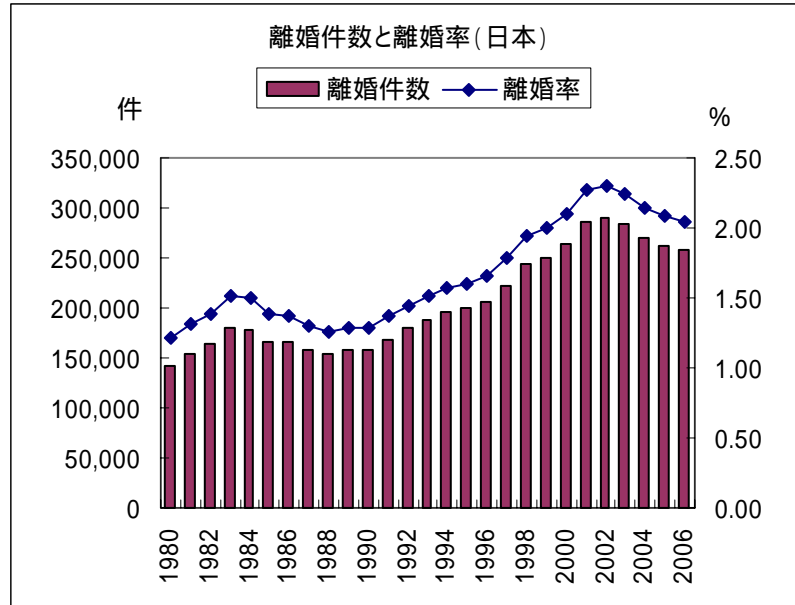
『2005 』 86 頁

図 16 離婚数及び離婚率(人口千対)



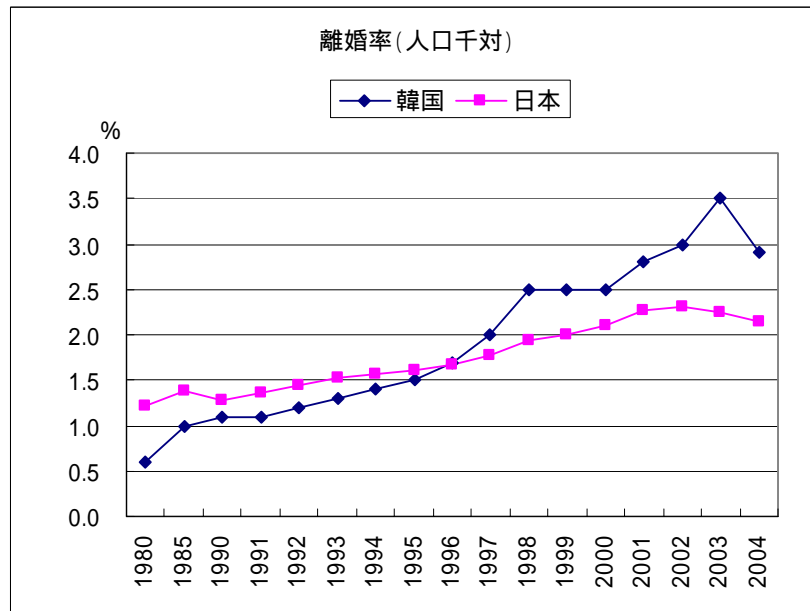
『2005 』 86 頁

図 17 離婚件数及び離婚率（人口千対）－日本



厚生労働省「平成 18 年人口動態統計の年間推移」

図 18 韓国と日本の離婚率推移



『2005 』 86 頁

厚生労働省「平成 18 年人口動態統計の年間推移」

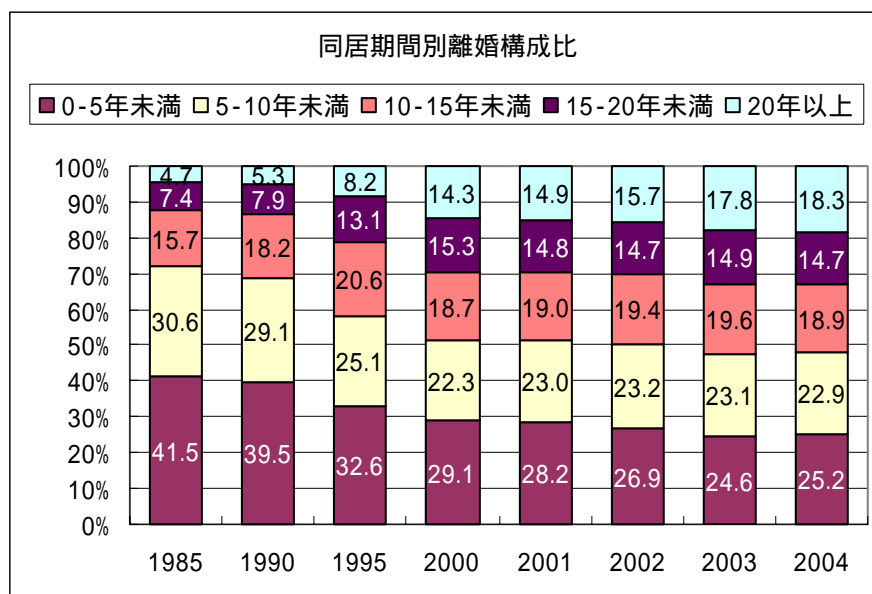
表 11 同居期間別離婚構成比

単位：%	平均同居年数	0-5年未満	5-10年未満	10-15年未満	15-20年未満	20年以上
1985	7.1	41.5	30.6	15.7	7.4	4.7
1990	8.0	39.5	29.1	18.2	7.9	5.3
1995	9.4	32.6	25.1	20.6	13.1	8.2
2000	10.6	29.1	22.3	18.7	15.3	14.3
2001	10.7	28.2	23.0	19.0	14.8	14.9
2002	10.9	26.9	23.2	19.4	14.7	15.7
2003	11.4	24.6	23.1	19.6	14.9	17.8
2004	11.4	25.2	22.9	18.9	14.7	18.3

『2005

』16頁

図 19 同居期間別離婚構成比



『2005

』16頁

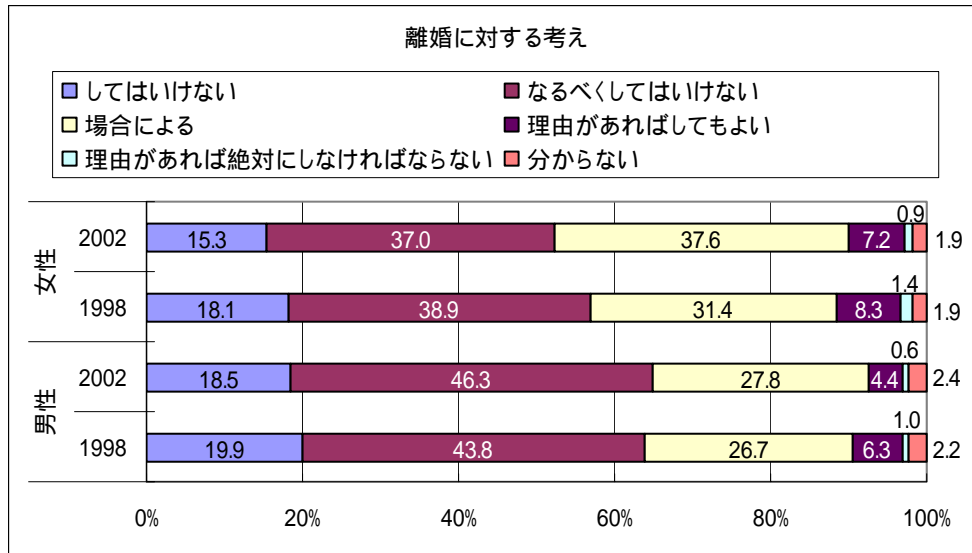
表 12 離婚に対する意識

単位：%		してはい けない	なるべくして はいけない	場合に よる	理由があれば してもよい	理由があれば絶対に しなければならない	分から ない
1998	計	19.0	41.3	29.1	7.4	1.2	2.0
	男性	19.9	43.8	26.7	6.3	1.0	2.2
	女性	18.1	38.9	31.4	8.3	1.4	1.9
2002	計	16.9	41.5	32.9	5.9	0.7	2.2
	男性	18.5	46.3	27.8	4.4	0.6	2.4
	女性	15.3	37.0	37.6	7.2	0.9	1.9
2002年							
15-19	男性	12.7	38.1	35.4	5.2	0.8	7.9
	女性	6.1	26.0	50.3	11.4	2.0	4.3
20-29	男性	12.3	43.7	35.5	5.0	0.7	2.7
	女性	5.9	28.0	53.8	9.1	1.3	2.0
30-39	男性	15.4	46.0	31.6	4.6	0.4	2.0
	女性	7.1	36.3	45.7	8.4	0.9	1.6
40-49	男性	17.0	50.3	25.8	4.6	0.6	1.8
	女性	11.7	43.2	35.8	7.0	0.8	1.4
50+	男性	29.4	48.1	17.5	3.3	0.5	1.2
	女性	32.8	42.8	18.2	4.1	0.4	1.7

『2005

』103頁

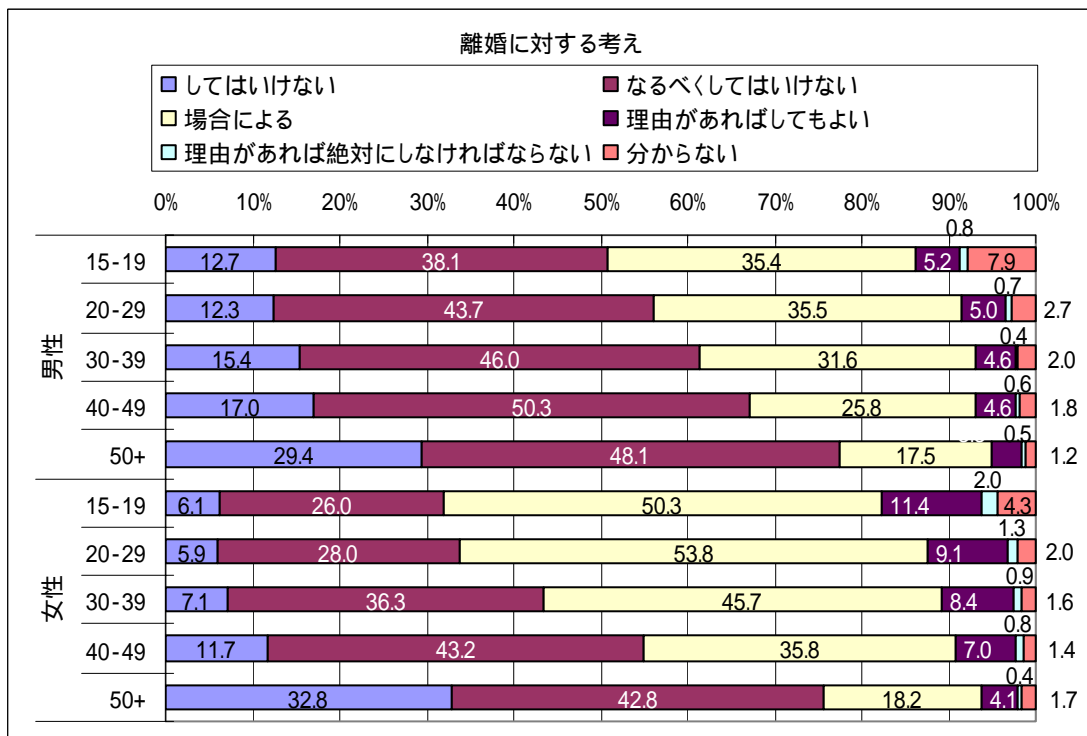
図 20 離婚に対する意識（1998、2002）



『2005

』 103 頁

図 21 離婚に対する意識（2002）－世代別



『2005

』 103 頁

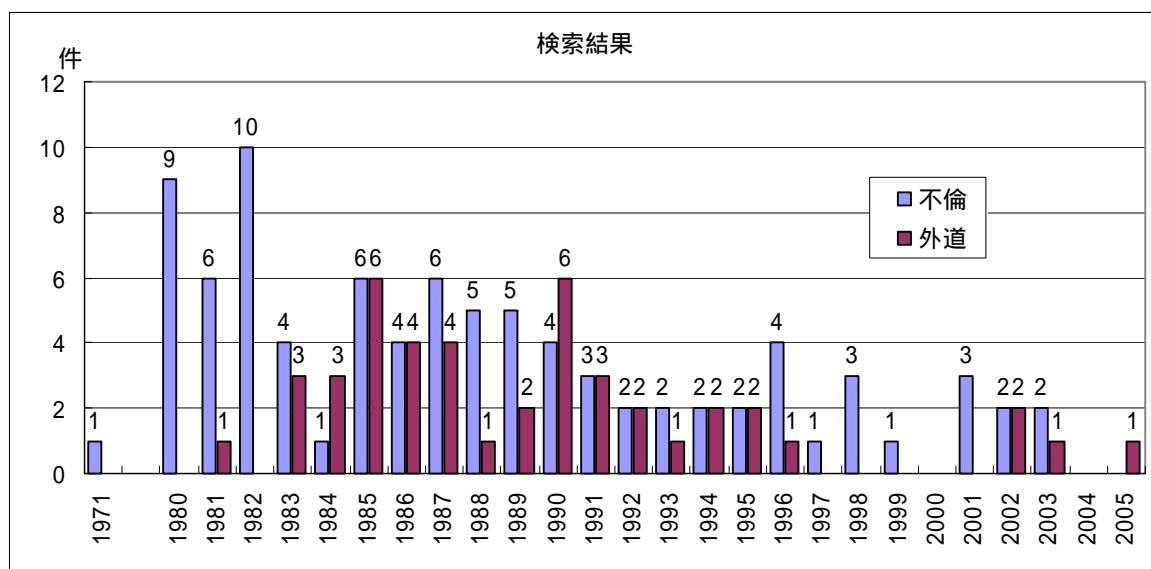


### C. 映画における不倫と離婚

韓国映画においては、不倫・離婚などに関してどのように扱われているのか。不倫が扱われている映画の流れをつかむため、韓国映画データベース (KMDb)<sup>140</sup>での検索を試みた。韓国映画データベースでは、各映画にキーワードが設けられている。そのキーワードは、サイト会員も設定できるようになっているため、キーワードの基準はあいまいである。キーワードが多く設定されているものとそうではないものなど、ばらつきはあるが、大方映画の内容に沿ったものになっている。映画によっては、キーワードに含まれていないものでも不倫を扱うものがあると考えられるので、厳密ではないが、大まかな傾向を知るために利用する。そのため、映画についてはほとんど未見である事をお断りしておく。

韓国映画データベースにおいて「 (不倫)」と「 (外道：夫婦がそれ以外の相手と性的関係を持つという意味)」というキーワードを持つ映画を検索した。その結果は次の通りである (図 22)。

図 22 不倫・外道の検索結果



『 』の検索結果を参考に作成

まず、「不倫」というキーワードに当てはまった映画は、88 件であった。制作年が一番早いものは、1971 年の『火女 ( )』(キム・ギョン) である。一番多い年は、1982 年の 10 件であり、不倫のキーワードを持つ映画は、1980 年代に集中している。

また、「外道」のキーワードを持つ映画は、45 件である。一番早い年のものは、1981 年

制作の『自由夫人』(4作目、パク・ホテ)である。一番多いのは、1985年と1990年制作の6件であり、外道のキーワードを持つ映画は、1980年代中盤から1990年代序盤に集中している。「不倫」「外道」の両方に当てはまるものが14件存在するため、作品数では119件となる。

不倫や浮気に関する作品は、最近ではテレビドラマなども含めて流行していると言われている。単純に1980年代の方が映画の本数は多いとまでは言えないが、1980年代の映画においても、不倫や浮気に関する相当数の作品が制作されていたことが分かる。以前からこのように多くの作品が制作されているにもかかわらず、現在不倫や浮気のドラマや映画が流行していると取り上げられている。

1980年代までの主な作品例として、以下のものが挙げられる。なお、内容については、韓国映画データベースによるあらすじ、シネマコリア<sup>141</sup>と輝国山人<sup>142</sup>の作品紹介を参考としているが、映画そのものは未見である。

『自由夫人』(1956、ハン・ヒョンモ) その他同名作品が6作ある。

大学教授の妻が隣の家の青年に惹かれるが、最終的には家庭に戻る。

『下女 ( )』(1960、キム・ギョン)

『火女』(1971)、『蟲女 ( )』(1972)、『火女 '82』(1982)などと合わせて、「女シリーズ」と言われている。この作品がシリーズ第1作目である。ある夫婦の家で家政婦として働くことになった女性が、この家の夫を誘惑し関係を持った後、妊娠が判明する。妻は、家政婦を階段から突き落とし流産させる。その後、家政婦は夫婦の息子を階段から突き落とし殺す。毒を飲んで家政婦と自殺することにした夫は、階段の上で死んでいく家政婦を振り切り、妻の側で死んだ。

『憎くてももう一度 ( )』(1968、チョン・ソヨン)

この作品は、7作品制作されている。あるカップルが結婚を決意したが、男性は既婚者であった。女性は、男性の子どもがやってきたため、その事実を知った。女性は1人で男性の子どもを産み育てた。しかし8年後、息子の将来のために男性を訪ね、子どもを育ててくれと頼む。しかし、息子は新しい環境に適応できず、母親ばかり探す。結局女性は、自分の子どもは自分で育てなければと、息子連れて帰る。

『エマ夫人 ( )』(1982、ジョン・イニョブ)

この作品は12作制作されている。ある女性は過失致死で服役中の夫の元に2年間、毎週面会に行く。夫の浮気で辛い思いをしたが、周囲の忠告にも離婚を決心できなかった。面会の途中である男性に出会い、誠実さを感じる。ある日、同じアパートに住む昔の恋人に出会い不倫に陥るが、変態的行為に耐えられず、面会の途中で出会った男性の元へ行く。夫は離婚を提案する。田舎にいた女性の元に面会の途中でであった男性が訪れ、フランスに行こうと約束した。しかし、約束した日に夫が特赦で出所したので、男性の元に行っていた女性は、夫を迎えに行ったのだ。

以上の4作品は、どの作品もシリーズとして続き、リメイクされているものもある。『自由夫人』はリメイクが数度行われているが、結末が同じものもあれば、家庭が崩壊し妻が別の相手へ行く(1957)、妻が自殺(1981)、夫が死亡して妻が後悔(1986)など、別の結末もある。

『自由夫人』(1956)『エマ夫人』(1982)は夫婦共に不倫、浮気をし、『憎くてももう一度』(1968)は男性のみ結婚しているパターンである。『自由夫人』(1956)『エマ夫人』(1982)『憎くてももう一度』(1968)は、それぞれ状況に違いはあるが、家庭を壊すことなく、不倫後も元の夫婦生活に戻っている。不倫関係がエンディングまで続き、成立するものはない。『憎くてももう一度』(1968)の場合も、女性は未婚の母として生きていくことを選択しているため、不倫が成立しているわけではない。これらの場合、不倫は悪いもの、家庭や夫婦という枠は壊せないものであり、そこから外れることは社会からの逸脱となる。

『下女』(1960)の場合は、少し状況が異なる。女性が自ら男性を誘惑し不倫に持ち込む。最後に夫は妻の側で死亡するものの、結果を見れば男性と不倫相手が死亡してしまうので、家庭の崩壊である。結局は、不倫は家庭の崩壊と悲劇を生むものであるということが描かれているのである。ただし、女性が自ら不倫をすることが選択されている。

女性は貞淑でなければならない、という社会の規範があるからこそ、女性が不倫をする映画が注目を集める。不倫映画には、男性側の視点で不倫をして関係が成立するものや、男性が不倫をした後、後悔して家族の元へ戻っていくという作品は見られなかった。それは、男性の不倫には寛容である、または男性の不倫が普通のことであるため、作品にも話題にもならないからであると考えられる。社会が不倫に対して破滅を生むと考えていたのは、女性側から描かれる不倫のみであり、家庭崩壊の原因が女性側にあると表現されていることになる。

ここまでの不倫を扱う映画では、不倫に対して否定的イメージを持っている。不倫は興行成績を上げる話題性のためのタブーとして織り交ぜられたものであると考えられるが、このような映画を登場させることができたのは、社会の伝統的規範に反抗する態度を多少は持っていたからだと考えられる。

次に、1990年代以降でキーワード検索に当てはまったものでは、以下のものを例として挙げるができる。

『情事』(1998) 7位 (ストーリーは対象作品のため略)

『失樂園 ( )』(1998、チャン・ギルス) 21位 (原作は日本の『失樂園』である)

言論社出版部長 中年男性と文化センターで東洋画を教える 30代女性は、お互いに一目惚れした。互いの配偶者と家庭、社会の目を意識するが、別れを考えることはできない。女性の夫が、男性の会社に2人の関係を暴露したため、男性の結婚生活と会社員人生は終わった。2人は旅行へ行き、一緒に死を選んだ。

『ハッピーエンド』(1999) 6位 (ストーリーは対象作品のため略)

『情愛 ( , /結婚は狂気の沙汰だ) 』(2002、ユ・ハ) 18位

結婚に嫌悪感を抱く大学講師の30代男性とデザイナーで結婚と恋愛は別と考える女性が出会う。女性は結婚には縛られたくないが安定した生活を夢見ている。稼ぎの良い医者で結婚するが、愛のない生活に不満を持ち男性に部屋を借り与え、彼と週末夫婦のような生活を始める。

『密愛 ( )』(2002、ピョン・ヨンジュ) 33位

女性は平凡な専業主婦として幸せな結婚生活を送っていると思っていたが、夫が浮気をしていたことがわかりショックを受ける。夫婦は田舎へ引越し、何事もなかったかのように過ごす。2人の仲は回復しない。隣の家に住む医師は、彼女に肉体関係を持っても相手を愛していると言った方が負けと言うゲームを持ちかける。妻は夫から飛び出し、不倫相手と生きていくことを選ぶが、途中で事故にあい男性は死亡する。女性は1人で生きていく。

『憎くてももう一度 2002』(2002、チョン・ソヨン) 64位 リメイク版

不倫だと知らずに付き合っていた男性の子どもを1人で育てていた女性は、自分がガンで余命わずかと言うことを知る。不倫相手の男性を探し、自分の娘を育ててもらおうように願う。娘を渡し治療に専念していたが最後に女性は亡くなる。

『駱駝（たち）（ ）』（2002、パク・キョン）年 77 位

40 代の男性と 30 代後半の女性が 1 日不倫旅行をする。

『浮気な家族』（2003）15 位（ストーリーは対象作品のため略）

『欲望（ ）』（2004、キム・ウンス）77 位

夫が男と浮気をしていることを知った妻は、偶然立ち寄ったホストバーで夫の恋人に出会う。夫への怒りに任せて衝動的に夫の恋人と関係を持つ。夫婦は元通りになり、夫の恋人は他の男性と会いながら夫との関係が元に戻ることを期待している。

『四月の雪（ ）／外出』（2005、ホ・ジノ）32 位

妻が交通事故にあったと聞いた男性は、夫が事故にあった女性に病院で出会う。やがてお互いの妻と夫が恋愛関係にあったことを知る。2 人は複雑な思いを抱えながらも、お互いを意識するようになり関係を持つ。

『秘蜜（ ）／緑の椅子』（2005、パク・チョルス）64 位

19 歳の男と関係を持った女性は、未成年との援助交際を行ったとして逮捕される。2000 年に 30 代の人妻と 10 代の高校生が、援助交際を理由に韓国国内で最初に逮捕された事件をもとにしたラブストーリーである。

不倫は女性の主人公中心に描かれることが多い。不倫が描かれるということに対しては、不倫に対する価値観の変化があると言えるものの、不倫の物語が女性側から描かれる場合が多いことは、変化の見られない点である。女性の不倫が男性よりもタブーであり、不倫の非難をされるのが女性という固定観念が存在している。男性側から不倫を描くよりも注目を集めやすく、話題性のためとも考えられる。メロドラマを見るのは女性が多いと考えられるので、女性が主人公である方が感情移入しやすいというものもある。

これまでは、家庭がうまく行かないなどの理由があつて仕方なく不倫をしていたが、上記映画の女性主人公たちは、不倫が自分の意思であることが多い。恋愛ゲームにのる、夫婦仲が冷めている、夫への仕返し、不倫を楽しむなどの状況である。不倫に対する映画での扱われ方は、完全な否定的評価から徐々に変化している。自ら不倫をすることに対して、タブーの感覚は減少している。結婚が破綻して家庭に戻れなくても、女性が昔ほど家庭に依存せずに生きることができるようになり、女性から家庭を出やすくなったこともある。

また、不倫に対する気軽さがあり、安定した生活や家庭を壊してまで相手を追いかけるほどでもないという軽さもある。反対に、家庭を壊してでも不倫を選択する、という場合もあるが、不倫が以前と比較して絶対的タブーでなくなっている事は確かである。ただし、男性の不倫は元より絶対的タブーとして描かれることは無かったと考えられ、絶対的タブーではなくなってきたと言えるのは、女性にとっての場合である。家族の元へ戻っていくものもあり、不倫のエンディングでは家庭が元通りになるという「ハッピーエンド」だけではない多様性が認められている。

以上のように、キーワード検索のみにおいても、不倫や浮気に関する映画は多く存在している。不倫や浮気は女性を中心に描かれていることが多いことは、変化していない一定の傾向である。1990年以前から現在にかけて、不倫に関する考え方が変化していることは事実であるが、対象作品では、どのように表現されているだろうか。

『パク・ポンゴンの家出事件』（1996）では、夫婦がお互いに不倫、離婚、再婚と言う道をたどり、他の作品とは違い、不倫の関係が最後に結婚と言う形で成立する。不倫をしたにも関わらず、エンディングが丸く収まる珍しいタイプである。女性主人公と夫は、それぞれ離婚をする前から、お互い違う相手のことを好きになる。別れていないので不倫と言うことになるが、それが肯定的でも否定的でもなく、普通に日常的に描かれている。ポンゴンは息子のことを少し思い出す場面があつたが、基本的に2人とも自分が優先であり、息子のことが一番に考えられているという様子ではなかつた。

夫の方は、妻を探している間であるにもかかわらず、精肉店に通いつめ告白し、さらにデートや旅行にいき、プロポーズまでしている。夫にとって、妻が出て行った時点または、それ以前から妻に気持ちがなく、結婚生活を継続させる努力も何もなかつたと考えられる。しかし、それらは否定的でもなく肯定的でもない様子で描かれている。

女性主人公は、自分を探しに来た探偵の男性と一緒にいるうちに、少しずつ魅かれていったようである。妻は不倫であるとは考えずに、男性と親しくなっていた。夫とは離婚

していないが、男性との恋愛には自然と気持ちが向かっている。結婚している状態ではあるが、家出をして自分の気持ちを楽に表現できるようになっている。

男性は、自分が受けた依頼のことをそっちのけで、夫のいる女性主人公を好きになっている。ここでも、不倫と言う意識は働いていない。3人ともが自由に恋愛をしている。

『情事』(1998)では、家庭崩壊に陥るが不倫の愛を貫く女性主人公が登場する。不倫であると同時に、子どもがいる家庭が崩壊する様子が表現されており、妻は少し後ろめたい気持ちが表現されていたが、映画の中では不倫について、肯定も否定もせず淡々と描かれている。

『ハッピーエンド』(1999)では、妻の不倫がきっかけで家庭が崩壊する。妻が元恋人と不倫しており、妻は家庭のために、不倫相手と一定の距離を保とうとするが、不倫相手は、妻のことを強く思っており、ひたすら追いかけてくる。

『浮気な家族』(2003)では、夫は2人の女性と浮気中、夫の母親も浮気中、妻は隣家の高校生と浮気の恐れがあるなど、家族全員が不倫状態にある。男性は浮気相手のところへの電話を妻に聞かれ、浮気相手の事を言われるが、女がいることが今問題なのか、と夫は悪いと一切思っていない発言をする。さらに、自分のことは棚に上げ、妻が高校生に言い寄られていることを持ち出し、誘惑しているのではないかと怒り出す。

この場合の男性は、それほど悪いこととは考えていないように描かれている。妻が他の男性を誘惑していることに対して怒りを向けるというのは、自分勝手である。夫が妻にやり直そうと持ちかけるが、妻に拒絶される。自分の浮気を当然と考え、浮気した自分が復縁できると考えている男性は、正しいまたは当然であるというよりは、マイナスイメージのほうが強い。この映画では、不倫、浮気は実らず、それが原因で家庭が崩壊するというラストは、不倫を扱う内容の割には普通であり、不倫、浮気は良くないという「正しい」イメージである。

妻の場合は、浮気相手の子供を妊娠したのち、1人で子どもを育てていこうという前向きな姿勢が見られる。夫の浮気を我慢するわけではなく、自分も浮気をしている。さらに、浮気をし続けた夫が復縁しようとしたことに対して、これ以上一緒に生活するのは無理だとはっきり断っている。夫と一緒に暮らすよりも、1人で生きていくことを選ぶ女性が映画の中では描かれている。妻に浮気相手の子供ができることが描かれている。夫に浮気相手との子供が出来た場合は、自分で引き取り妻に育てさせるが、妻の場合は自分1人で育てることになるようだ。

妻の浮気相手は高校生である。妻である女性が不倫や浮気をする場合、必ずといっていいほど年下の男性である。高校生であることで、不倫のスキャンダルとしてのイメージがさらに高くなると考えられる。

また、夫の母親も不倫をしている。母親は、夫が死亡する前から不倫をし、夫が死亡した後すぐに再婚している。夫が死亡したため再婚であるが、不倫が実った形である。この映画では、家族全員が不倫、浮気をしており、存在していた家庭は崩壊しているが、母親だけは不倫がきっかけであっても幸せになったと言える。

『私の頭の中の消しゴム』(2004)では、主なストーリーではない部分で不倫が登場する。女性主人公は、会社の上司と不倫した後、その上司に捨てられている。この不倫のことは物語の中心ではなく、単なる周辺として扱われている。主人公がアルツハイマーを患ったのは、何らかの強いショックを受けて、脳に極度のストレスがかかったことも1つの原因であるとされている。昔の恋人との別れがその原因の1つとされているが、女性主人公の昔の恋人が、不倫でなければならない必然性はない。ストーリーを盛り上げるために、挿入された障害の1つである。

不倫は、絶対に犯してはならないこの世の終わりのような、重要な出来事としてではなく、物語を盛り上げるための様々な障害やタブーのうちの1つとされ、重大に扱われるまでもない状況になっている。

以前は不倫が描かれる時、女性の夫に問題があり、女性は一時的な気の迷いで不倫をするしかなかった、そして最後は改心した夫の元に戻る、結局不倫は悪い事であるという設定や、夫に不倫をされた女性が、耐え忍んで不倫相手の子供を引き取り育てる忍耐や悲劇の設定など、不倫に対するイメージはマイナスのものが多かった。

その後、自分の意思で浮気や不倫をする女性を扱う映画が増えている。このような状況を見ると、不倫に対するタブーという意識は存在するものの、マイナスイメージの質が変わったといえる。不倫は絶対的な悪という位置から、悪いことではあるがその様な関係もある、と認識できる程度の存在になったと言える。

不倫や離婚を描き、家族よりも個人を優先することが、容認されるようになっている。しかし、『情事』(1998)のように家庭よりも不倫を選ぶ際に、それを判断する材料として、父親の言葉に従っているものがあり、個人の意思決定にも家族の意見が反映されている。近代化に伴い、全ての面において個人主義化が進展していくとは限らない。韓国において、家族と個人を分けて考えることはできないのである。



## 第4節 タブーと社会

### 1. 表現と規制

社会の禁忌というものは、通常表に出されるものではないが、時代の変化とともに、話題になることや表現されるようになることもある。タブーの扱いは、禁忌としてのイメージを前面に押し出したり、否定的・肯定的な議論が行われたり、または意見も出ないような自然なできごととして扱われたりと、社会で許容される程度によって様々である。しかし、表に出ているということ自体、そのことに対する意識の変化が現れていることになり、タブーとそれに対する表現には価値観が反映される。

2007年の放送業界に関するニュースでは「禁忌の壁を越えた」「禁忌を壊した」などという話題が目につく<sup>143</sup>。「これまで放送コンテンツで使われなかったテーマを前面に押し出し、新鮮な刺激を与えた」という。ケーブルテレビのオン・メディア<sup>144</sup>（代表キム・ソンス）は、2007年視聴者の注目を集めるためにテレビ局で使われた刺激的な素材及び表現方式が、一番目立ったプログラムを整理して発表した。その禁忌の内容は、「同性愛」「家父長崩壊」「夫婦の性」「性的表現」である。

MBCのドラマ『コーヒープリンス1号店』は、「同性愛」で話題を集めた。主人公の男性が愛を告白した対象は、男性のように見える「女性」という安全装置は用意してあったが、「お前が男だろうと宇宙人だろうと関係ない」という台詞は、男性間の愛を告白する雰囲気として大きな話題を生んだ<sup>145</sup>。

このようなプログラムは視聴者の意識変化にも影響を与えた。実際にオンメディアとマガジントが10代から50代の会員3,671人を対象に調査したアンケートでは、「現在放送で使用されているもののうち、私が許せるタブーのテーマは？」という質問に、「芸能人の陰口」が12.3%で1位、それに0.1%差で「同性愛」が12.2%で2位であった<sup>146</sup>。

同性愛に続いて、「家父長制度の崩壊」をキーワードとして選んでいる。2007年のドラマでは、父親の情けない姿が描かれており、テレビでは常に厳格で保守的なキャラクターとして登場していた祖父母が、家庭内において一番人間的で、かわいらしいキャラクターに変化している。これまでの家族の枠内で定型化されたキャラクターを見直し、家族構成員としてではない個人としての魅力を浮かび上がらせている。これは、現代の核家族、個人中心の家族の形態が大きく変化したからという分析がされている<sup>147</sup>。

また、テレビ番組は、夫婦の性を堂々と扱い始めた。数年前まで、夫婦生活の問題を扱うときに、大部分は夫婦間の性格差異や経済問題、嫁姑の葛藤などが、主要なテーマとし

で登場していた。しかし、今年は夫婦間の性が主要な話題として挙がっている。また、未婚女性の性をテーマにしたプログラムも制作されている<sup>148</sup>。

最後に「性的表現」が挙げられている。記事では、「1980年にはテレビでキスシーンを放送するは想像もできなかったことであり、1990年代には、ついにキスシーンが登場し、連日ニュースの大部分を占め、話題を呼んでいた。しかし、20年余りが過ぎた今、ドラマのキスシーン程度では話題にならない」<sup>149</sup>と紹介しており、テレビで性的表現が許されたのは、ごく最近のことであると分かる。

『コーヒープリンス 1号店』では、「婚前純潔」を越えて「婚前妊娠」というテーマを事件としてではなく自然な状況として扱っているとされており、『私の男の女』では友達の夫を誘惑し、不倫生活を描いたことが話題になっている<sup>150</sup>。放送業界では、タブーに関する表現が、大幅に変化しつつあり、社会の価値観の変化を示している。

映画に関しては、2006年の記事にニューヨークタイムズマガジンでパク・チャヌク監督のインタビューが掲載されている。韓国映画のタブーは「親北朝鮮」と「親日」であると語っており、『JSA』において北朝鮮の人々を人間として描き多くの人がショックを受けた「日本の支配が韓国の助けになったことは話してはいけない」などと紹介している<sup>151</sup>。この記事で紹介されていることは、国全体にとってのタブーであるが、実際の生活においてはどのようなことが表現されないのだろうか。

映画及びビデオに関する法律では、映像等級分類について記されている。テレビ放送の場合、放送法によって放送プログラムに対して等級分類を行い、それを放送中に表示することが義務付けられている<sup>152</sup>。

映画の場合、以前の映画やビデオに対する等級は映画、ビデオ輸入推薦及び等級分類基準<sup>153</sup>によって定められていた。この基準においては、映像等級分類が義務付けられていたが、制限上映可という項目は無く、基準に合わないものは等級保留とされ上映されなかった。この等級においては、同性愛が保留基準において明記されている。

現在は映画及びビデオの振興に関する法律<sup>154</sup>によって映像等級分類が義務付けられている。映像物等級委員会の映画及びビデオ等級分類基準<sup>155</sup>によって、分類の基準が定められている。以前とは違い、等級が保留になることは無くなった。また、同性愛の言葉が無く、以前のような性的表現の細かい規定は書かれていない。分類は全体観覧可、12歳以上観覧可、15歳以上観覧可、青少年観覧不可、制限上映可の5つに分類される。基準の内容は次の通りである。

#### 第4条 等級分類基準

等級分類は主題及び内容、台詞及び映像などを総合的に判断し次の各項各号1の基準による等級を決定しなければならない

##### ①全体観覧可：全年齢に該当する者が観覧することができる映画

1. 主題及び内容は観覧客の理解度を考慮し、情緒的安定感及び健全な価値観と人格形成に役立たなければならない
2. 台詞の表現は社会的に一般化された俗語であっても濫用せず純化されなければならない
3. 映像の表現は扇情性と暴力性を限定し、抑制しなければならない
4. その他一般的に容認されていない特定の思想・宗教・風俗などに関する描写は純化され客観的でなければならない（②12歳以上観覧可、③15歳以上観覧可は省略）

##### ④青少年観覧不可：青少年は観覧できない映画

1. 主題及び内容の表現は社会生活などで習得した知識と経験がない内容であっても観覧客と一般人が消化できるもの
2. 台詞の表現が情緒的、人格的に適切ではない水準の低級・低俗な悪口・誹謗中傷・性的言語の使用が具体的、写實的に描写されているもの
3. 映像表現の扇情性と暴力性が過度に直接的であり具体的に描写されているもの
4. その他特定の思想・宗教・風俗等に関する描写が具体的、主観的に表現されているもの

##### ⑤制限上映可：上映及び広告、宣伝において一定の制限が必要な映画であり、次の各号の内容及び表現技法が反国家的・反社会的・非倫理的内容であるものとして一般国民情緒に悪影響を及ぼす憂慮があるもの

1. 台詞の表現が社会的脆弱階層集団に対する軽蔑的・侮辱的用語を過度に使用し、人間の普遍的尊厳と価値を顕著に損傷するもの
2. 人間身体を道具的観点で残酷に表現又は残忍なことを美化する犯罪を助長及び犯罪に対する衝動を促し社会秩序を乱すもの
3. 猥褻・近親相姦・乱交を具体的で露骨に表現又は青少年を対象とした残虐な内容、性欲や性的刺激のみを追及し公序良俗に反するもの
4. 客観的事実に根拠がなく、友好国家を意図的に敵視するなど外国との正常な国交関係を害する憂慮があると認定されたもの
5. その他正常な人間関係等を酷く毀損するものなど反国家的、反社会性の程度が極めて酷く、芸術的・文学的・教育的・科学的・社会的価値を顕著に毀損すると認定されたもの

## 2. 社会の「タブー」と映画

### 1) 問題小説の映画化

『LISE／嘘』(2000)は、過激な性表現が問題となった。女子高校生と中年男性の関係を描いている。チャン・ジョンイルの小説を原作としており、小説は猥褻文書として摘発され、作者は逮捕された。しかし、映画は公開された。「かなり激しいセックスシーンがあり、成人映画に指定されていたが、この程度の性表現なら映画の倫理規定をクリアできると思わせたところが、この映画の効用であり、その後は別段、ポルノ映画とは名乗らなくとも、過激で濃厚なベッドシーンなどが頻出する映画が作られ、上映されるようになったとされている」<sup>156</sup>というように、年齢制限の指定はされているものの、公開される多くの映画にも、性的表現が取り入れられるようになった。

テレビ業界ではキスシーンが話題を呼ぶほどであった1990年代最後の年である1999年の映画である。映画のほうでは、テレビに先立ち性的表現がある程度許される状況であったといえる。

### 2) 性規範と性的表現

洪上旭氏の韓国女性の暮らしと地位に関する研究によると<sup>157</sup>、現在、結婚生活の不安定さは離婚率の増加となって現れており、女性の離婚率の増加は、家父長的価値から女性を解放する役割を果たしている。同氏が2003年ごろ<sup>158</sup>に行ったソウル地域の大学生400名を対象にした調査によると、「同棲についてどう思うか」という質問に対し、10人中の6人が「状況が許す限り同棲を断る理由はない」という結果を得ている。このような考えは行動に転化されやすいので、近い将来、同棲カップルの増加に加速がつくと考えられている。

同棲が速い速度で受け入れられている理由には、社会構造の変化が前提となっている。配偶者選択過程で、強い影響力を及ぼした親および親族の影響力の弱体化、知り合ってから結婚にいたるまでの複雑な段階別セレモニーの緩和、性に対する女性の価値観及び行動様式の変化と性規範の弱体化、離婚増加による結婚への不安定性、さらに結婚自体の考え方の変化などが考えられる<sup>159</sup>。

女性が経済的に男性から自立した生活を送れる基盤を持つことで、結婚に対してより自由な選択をすることができる。同棲も同様に、女性は生涯1人の人を愛すべきという固定観念や貞操観念が薄れていき、例え一度生活を共にしたからといって、一生をその人と共にしなければならないという義務もない。女性の恋愛における立場はより自由に選択でき

るところまで達していると考えられる。

韓国社会での私的な男女間の愛と性は高麗時代以前の社会では、ある程度許容されたといわれるが、朝鮮時代では父系血統中心と儒教の影響で、婚前の男女関係と恋愛は制限されることになり、女性の貞操を要求するイデオロギーが強かった。そして、男女の性別役割が分離されている近代社会では性、愛、婚姻の統合の現状は、結果的に女性にとって愛は依存の絆になっている。女性にとって男性を愛することは、女性の地位獲得と生存戦略の手段になるのである。

1970年代韓国に上陸したフェミニズムは、女性の就労先での位置、家庭内での役割、そして性役割に至るまで新しい定義がもたらされた。婚前性関係の許容、同棲の受容、同性愛などに対する社会的態度が開放的になり、実際の行動の変化も生じた<sup>160</sup>。

1960年代後半の大学生を対象にした調査を見ると4分の1くらいが婚前性関係に許容的である。この比率は1970年代の調査でも同じ傾向を示したが、1980年代に入るとかなり異なってきた。1990年代から最近に至るまでの男女関係で、愛、性、婚姻はそれぞれ別個であるという考えが多くなり、婚前性関係に反対する大学生は約15パーセントである。特に1999年の大学生を対象にした調査では、男子学生より女子学生がより開放的になっている。

このように、婚前性関係に対して開放的な考えを持つ若い女性は、男性にすべての責任を持たせる伝統的な考えを止め、性関係を持ったとしても一生を共にする人でないと思うといつでも関係を解消し、1人で独立する傾向を見せている<sup>161</sup>。

しかし、未婚の女性のセックスに関して、絶対禁忌という保守的な性観念がある程度自由になっているものの、男性に対してより寛容的である、という二重的な性規範がいまだにある。女性は純潔の価値を性的価値観として持っている傾向があり、実際の性経験比率でも男性より低いのが現状である<sup>162</sup>。

また、人間関係の個別性が求められる社会において、性規範の開放化は持続的に進められると予想されるが、男性中心的な性規範によって、女性は葛藤や矛盾を経験させられているのである。自由奔放な女性を貞淑ではない存在として決め付けるのは、性の許容性と二重規範の矛盾した共存に違いない。自由にセックスを行う女性をドラマの主人公として登場させるのは進歩的な女性意識の表現として見られる面もある。

しかしながら、主人公らが社会的偏見の壁を越えたいという結末は結局、女性視聴者に消極的な性的アイデンティティを確認させ、防衛的な態度をとらせる結果になりかねな

いだろう。最近の性風俗図は、家父長的社会における男女間の不平等関係を構造化する実際的影響力として作用しているといえる<sup>163</sup>。歌謡曲に比べ、ドラマにおいては性的表現が行われるようになっているが、女性に対して前向きではなく、むしろ女性の性的価値観を決め付ける役割を果たしていると考えられる。

別のニュース記事によると、大学新生に対して行われた実態調査で、男子学生の68.7%、女子学生の53.1%が「婚前純潔は自由に選択することができる問題」と答えた。また、結婚前の同居に対しても、男子学生の55.5%、女子学生の37.9%が「気持ちがあえば可能である」と答えている。この記事では、この結果について「若者の開放的な性意識を見せている」<sup>164</sup>としている。

実際の映画の中では、性的表現は数多くある。『情事』(1998)『ハッピーエンド』(1999)『浮気な家族』(2003)など不倫を描いた作品には必ず性的表現が入り、それ以外にも『寵愛』(2000)や『セックス・イズ・ゼロ』(2002)『ボーン・トゥ・キル』(1996)『オルガミ〜罨〜』(1997)『愛のゴースト』(1999)『春香伝』『花嫁はギャングスター』(2001)『バンジージャンプする』(2001)『オアシス』(2002)『スキャンダル』(2003)『シングلز』(2003)など、多くの作品で表現されており、『LISE/嘘』(2000)のように過激なものも存在している。『スキャンダル』(2003)では、未亡人を誘惑するという当時にとっての大きなタブーも描かれている。

対象作品ではないが、『誰にでも秘密はある』では、三姉妹全員と性的関係を持つ男性の姿が描かれている。この作品とともに、『セックス・イズ・ゼロ』(2002)『花嫁はギャングスター』(2001)『シングلز』(2003)は、性関係をコミカルに描いている。表現の上では、それほど厳しい規制がかけられなくなっており、性に関する価値観はより開放的なものになっているといえる。

### 3) シングルマザー

女性の離婚に厳しい韓国において、未婚の母はどのような状況であるか。韓国において、父親または母親のみの家庭は、1985年には84.7万であったものが、2000年には112.3万となっており、増加傾向にある(表13)。父子世帯よりも母子世帯のほうが圧倒的に多く、父子世帯は1995年に1.3%、2000年に1.5%、母子世帯は1995年に6.1%、2000年に6.3%となっている。

離婚による母子世帯は、1995年には7.2万、2000年には15.3万であり、未婚の母子世

帯は、1995年には9.0万、2000年は11.7万である。離婚、未婚ともに、母子世帯は増加傾向にあり、特に離婚によって母子世帯となった数は、2倍以上の増加を見せている。

表 13 世帯主の婚姻状態別片親世帯

		計	世帯主の婚姻状態				片親世帯比率
			有配偶者	死別	離婚	未婚	
片親世帯	1985	847,796	253,954	443,012	50,107	100,723	8.9
	1990	888,823	226,731	49,837	78,861	85,394	7.8
	1995	959,972	216,320	526,320	123,969	93,616	7.4
	2000	1,123,854	252,917	502,284	245,987	122,666	7.9
父・子	1985						
	1990						
	1995	17,398	50,666	68,022	51,080	2,630	1.3
	2000	219,997	58,227	64,058	92,810	4,902	1.5
母・子	1985						
	1990						
	1995	787,574	165,401	458,298	72,889	90,986	6.1
	2000	903,857	194,690	438,226	153,177	117,764	6.3

『2005

』80頁

映画の中で、シングルマザーを選んだ女性が描かれているものは、4作品ある。

『男の香り』(1998)の女性主人公は、血縁関係のない兄である男性主人公の子どもを1人で育てていこうとする。その子どもは、男性と別の女性の間でできた子どもである。女性主人公はシングルマザーとなり、更に自分の子どもではないが、その子を育てる決意をする。それは、兄を愛していたためであるという感情に訴えるラストになっており、シングルマザーとしてこれから生きていく彼女が、辛く苦しいかもしれないという未来は全く考慮されていない。シングルマザーを肯定的にとらえている訳ではない。

『バンジージャンプする』(2001)では、主人公である男性が同性愛の疑いにより学校を首になり、妻にも見捨てられる。その妻は、男性と離婚をするかのような表現になって

おり、娘を1人で育てていくことになると考えられる。しかし、妻のその後は不明である。

シングルマザーを前向きに捕らえている作品には『シングلز』(2003)がある。女性は、同居人の男性と成り行きで関係を持ち、子どもができたがそれを相手に言わなかった。

女性は1人で育てることを決意し、会社を辞めて独立する。父親は娘が子どもを1人で育てることを聞き、女性の事務所に来て暴れて帰ったと表現されていた。シングルマザーに対する家族からの目が厳しく表現されているが、当然社会の目も厳しい。母子家庭が数的には増加しているが、社会的に許容されているわけではない。この映画では、シングルマザーを選んだこの女性が、その後どう生きていくかは描かれていないが、シングルマザーが前向きに表現されており、肯定的である。

『浮気な家族』(2003)では、主人公の女性が不倫によって関係を持った男子高校生との子どもを妊娠する。夫が「自分の子どもでなくてもいいからやり直そう」と言ったが、女性はそれを拒絶し、1人で生きていくことを選択している。これら2つの作品では、女性が自らシングルマザーを選んで生きていこうとする前向きな姿勢が肯定的に描かれている。2つの作品は2003年の作品であり、これまでとは異なる新たな価値観の出現を物語っている。

また、男性が1人で子育てをしていく場合も描かれている。その場合、男性が結婚していたが、妻が死亡して独りになる。『ハッピーエンド』(1999)では、女性主人公を殺害した夫が、子どもを1人で育てていくところでエンディングを迎える。『ゴースト・ママ』(1996)や対象作品ではない『ドクター・ポン』(1995)では、妻に先立たれた男性が、1人で子育てをしている。その後、この2作品の男性は再婚するという方向で結末に至る。

シングルマザー以外にも、女性の妊娠に関する事柄は登場する。例えば、『パク・ボンゴンの家出事件』(1996)では「できちゃった婚」が設定されている。夫婦は妊娠がきっかけで結婚しているという設定が登場する。現実にもどの程度存在するかを知る事は困難であるが、今から約10年前の1996年にこの様な設定が出てくると言うことは、その時点においてすでに存在していたことになる。この事実が、現実社会では許されないが映画での設定では許されていたのか、それとも現実でもある程度起こっていることで容認されていることであるのかは不明であるが、この映画での取り扱いでは、肯定的でも否定的でもなく、ただ事実として述べられているだけである。

また、『セックス・イズ・ゼロ』(2002)では、女性学生の妊娠と中絶が登場する。男性は女性が妊娠したとたん女性を突き放した。女性は、中絶手術を受けることになる。映画の



中で、結婚前の性行為は堂々と描かれ、その後に続く妊娠と中絶に関しても、自然に描かれている。誰の目にも触れるテレビドラマよりも、映画のほうが先に、タブーへの挑戦が行われていたのである。

#### 4) 同性愛

ケーブルテレビでは、すでに 2004 年の時点で、女性視聴者をターゲットにした性的表現よりも、登場人物の生活を重視した男性同士の同性愛を描いた映画が数多く放送されていることがニュース記事で紹介されている<sup>165</sup>。また、放送業界で同性愛の雰囲気をも肯定的に描いていることは、同性愛への禁忌という意識が薄れていることをうかがわせる。

対象作品である『バンジージャンプする』（2001）では、同性愛が問題になった。脚本家は、同性愛か異性愛かを区別すること自体が無意味な映画を作りたいかっただけで、評論や観客を問わず、賛否両論が巻き起こった<sup>166</sup>。

映画中での同性愛者の扱いは、同性愛が噂になり、誹謗中傷がなされ、男性主人公は学校をくびになり、妻からも見放されるというものであり、マイナスイメージである。同性愛者は悪者として描かれていることは、実際世の中で同性愛者がどのように扱われるかというイメージの一端であり、社会的に差別、タブーの対象であることは否めない。この映画では、マイナスイメージとしてではあるが、同性愛者が話題になり大勢の人が観覧する恋愛映画の中で扱えるようにはなっていた。

また、2005 年末に公開された『王の男（ ）』（2005、イ・ジュニク）は、同性愛を描いていると話題を呼び、当時の歴代最高興行記録を更新するほど人気を集めた。同性愛が消費される娯楽のテーマとして定着するという、同性愛に対する価値観の変化が起こった。その他にも、同性愛をテーマにした映画が制作され、映画祭に出品されている<sup>167</sup>。

#### 5) 外国人妻

韓国では、国際結婚売買が問題となっている。事の発端は、『朝鮮日報』が 2006 年 4 月 21 日に載せた新聞広告にある。「ベトナムの娘と結婚してください。100%後払い」「ベトナムの娘は絶対に逃げません」など、道端で見られる国際結婚広告の内容であるが、ベトナムの女性を商品化し、人権を無視したこれらの広告を加速化させるかのような記事を掲載したことにより、「女性を商品化する国際結婚広告反対キャンペーン」が巻き起こった<sup>168</sup>。

その他のニュース記事では、テレビ番組で韓国国際結婚売買の実態を告発したことが紹介

されている<sup>169</sup>。ベトナム人女性が一方的に選ばれる立場であり、「処女証明書」が仲介所で韓国人男性と結婚するために必須であり、病院での発給が義務であることも記されている。

映画においては、外国人妻が田舎で結婚している様子が描かれているものがある。『ユア・マイ・サンシャイン』(2005)では、田舎の男性が結婚仲介所を利用して、外国人妻と結婚するために外国へ行ったことが描かれている。登場人物の1人は、結婚に成功しており外国人妻と暮らしている。田舎の男性が結婚しにくい場合、結婚仲介所を利用して国際結婚するという実態が自然に描かれている。

#### 6) 前科者と障害者の恋

『オアシス』(2002)では、社会的に疎外された人々の恋愛を描いている。主人公2人の家族は、日常生活において、前科者の男性主人公と脳性麻痺の女性主人公を疎外している。しかし、いざ男性と女性に問題が起こると、家族は相手のことを悪く見て、自分の家族を守っているかのように装っている。

男性と女性の家族内で起こる問題と、問題が外に表面化したときは、悪意の向く先が異なる。どちらの家族も、男性と女性を家族とみなさず疎外している雰囲気である。放置すればいいはずであるが、2人が恋をしていることは認めることができない。

#### 7) 学生同士

第3章でも述べたように、学生同士は恋愛しにくいいため、義務教育の学校が舞台になっている作品は少ない。学生が登場する作品には、『LISE／嘘』(2000)『バンジージャンプする』(2001)『同い年の家庭教師』(2003)『君に捧げる初恋』(2003)『マイ・リトル・ブライド』(2004)『オオカミの誘惑』という作品がある。

しかし、『LISE／嘘』(2000)は卒業間際の女子高校生と中年男性の恋、『バンジージャンプする』(2001)は男性教師と恋人の生まれ変わりとしての男子高校生、『同い年の家庭教師』(2003)は落第している20代の高校生と女子大学生、『君に捧げる初恋』(2003)は幼なじみの男女の幼い頃からを描くが中心は大学時代や社会人となっており、これらの作品は学生同士の恋とは言えない。

『マイ・リトル・ブライド』(2004)の場合、女子高校生と男子大学生であるが、女子高校生の主人公は、憧れの先輩と付き合うことになり舞台は高校であるため、ハッピーエンドとして扱われる本編ではないが、学生同士の付き合いを表現していると言える。

対象作品中で、唯一高校生同士の恋を描いているのは『オオカミの誘惑』（2004）である。この映画では、高校生の男子学生2人が高校生の主人公を取り合う話であり、学生同士の恋を描いていると言える。このように、高校生同士の恋を描くことはタブーとまでは表現できないが、恋愛しにくい環境である韓国では、難しかったと考えられる。しかし、夏休みなどの学生の長期休暇中を狙った作品には、上位には入っていないものの、学生同士ではないが、学生が登場する映画も制作されている。

#### 8) 教師と生徒

タブーと考えられるものの中に、教師と生徒の恋愛が挙げられる。『バンジージャンプする』（2001）では、男子クラスの担任の先生が、消えた恋人を男子生徒に重ね見る。最終的に、男子学生が前世のことを思い出すため、生徒が先生を好きになるのではなく、消えた恋人との恋愛である。男性主人公が男子生徒に昔の恋人を重ねているとはいえ、周囲から見れば同性愛と同時に、先生と生徒の関係である。

『我が心のオルガン』（1999）では、女子生徒が男性教師に恋をする様子が描かれている。この作品中では、男性教師に対する女子生徒の片想いでストーリーが流れていく。将来的には結婚していると考えられる描写が登場するが、作品中では先生への片想いで終わっている。

#### 9) 同姓同本

同本というのは本貫を同じくするという意味で、本貫とは自分の男系祖先の発祥地名を示すものである。例えば、「金」という姓の場合、本貫は「金海」「慶州」「安東」など様々存在する。姓が「金」で、祖先の発祥地が「金海」ならば「金海金氏」となる。父系中心社会であった韓国では父系血統を示すものであるため、姓は原則変わらないものであり、結婚しても姓が変わらないのはこのためである。韓国には同姓同本不婚制が存在していた。同一の「姓」と「本」を持っている場合の婚姻を禁止している。この制度は、朝鮮時代（1392～1910）に普及したものである<sup>170</sup>。

1997年に憲法裁判所は同姓同本を定める民法の条項を違憲とする決定を下し、1998年末までにこの条項を改正しなかった場合には、1999年1月1日よりその効力を失うとした。そのため、事実上この時から同姓同本であっても婚姻が認められることとなった<sup>171</sup>。

2005年3月の国会で民法改正案が可決され、この民法改正によって同姓同本の結婚を禁

じた条項が削除されることになり、完全に法律上において同姓同本の結婚を禁じるものは無くなった。この民法は2008年1月1日施行である。

同姓同本のカップルが、認められるようになっているとはいえ、映画の中で描かれることはない。同姓同本には血縁関係があり「一族」であるため、法律が改正されたとしても簡単に価値観を変化させるのは困難である。同姓同本のカップルをわざわざ描く必要が無いのと同時に、同姓同本カップルに対する無意識の拒絶反応であると考えられる。

#### 10) 韓国に暮らす朝鮮族・脱北者・在日同胞

『ダンサーの純情』(2005)では、中国から来た朝鮮族の少女が、ダンス大会に出るために偽装結婚する様子が描かれている。ダンスの練習を始め、中心ストーリーにはいると、朝鮮族であるという設定は、特に関係なくなっている。最終的に、男性との恋はハッピーエンドに終わっており、朝鮮族であっても恋愛関係は普通に描かれている。

しかし、当初姉の代わりに来た少女は、ダンスができないことがわかると、簡単に飲み屋に売られてしまう。女性であり、さらに朝鮮族の女性の立場を低いものとみなし、利用できないとわかると金に換えてしまうという描かれ方である。韓国での朝鮮族の立場は、韓国人より低いものとして描かれている。

また、最近の作品である『同い年の家庭教師 2—レッスン 2( が 2)』(2007、キム・ホジョン)では、在日の交換留学生が描かれている。どちらの作品も、朝鮮族や在日の役ではあるが、韓国人が演じている。

『ダンサーの純情』(2005)の場合は、主人公の女性が朝鮮族であってもストーリーとして成り立ち、最終的に朝鮮族であることは意識されずに描かれている。この少女は中国から来た朝鮮族であり、同様に『同い年の家庭教師 2—レッスン 2』(2007)の女性主人公は日本から来た交換留学生という「海外から来た朝鮮民族」の設定である。

韓国で暮らす朝鮮族、脱北者、在日などが対象作品のストーリーに登場することは無かった。対象外の作品には、『子猫をお願い( )』(2001、チョン・ジェウン)の中に朝鮮族の双子の女性が登場する。韓国においてこれらの立場の人々は、あまり描かれないものであり、日常生活では存在しないものとして扱われるのである。

## おわりに

本論では、メロドラマやラブコメディなどを用いて韓国人と韓国社会について社会の状況と文化的特徴の面から考察した。

韓国映画の制作は、1920年代に朝鮮総督府の依頼によって作られた劇映画から始まった。韓国映画制作は、現在までで約80年の歴史を持つ。韓国において、映画は1970年代にテレビが普及するまで、人々にとって最大の娯楽として楽しまれてきた。反面、映画は植民地、朝鮮戦争、軍事政権などにより、娯楽と共に何かを訴える手段としての役割も果たしてきた。しかし、規制の対象でもあったため、検閲、事前審議制、等級制によって、表現の自由は抑圧されてきた。

韓国映画が表現の自由を手に入れたのは、1996年に事前審議制にかわり等級制が導入されてからであり、その後、等級保留制が廃止された2002年である。韓国映画において表現の自由が許されたのは、ごく最近のことである。自由になり始めた1990年代後半から2000年前半にかけて、興行成績、観客動員数も大幅に増加している。韓国映画の市場は、この間に飛躍的に拡大しており、表現の自由を得た韓国映画界が発展した期間と言える。

まず、映画のストーリーの内容とエンディングに関する韓国人の好みについて考察した。恋愛の中で男性から思いを発信し、女性がそれを受け取るというパターンが多く、男性が恋愛の中心として描かれていたが、対象作品中2000年代の新しい作品では、お互いが徐々に思いを寄せていくようになるパターンに変化している。また、女性の場合は過去に別れた人を忘れられず、思い続けるタイプが多く、男女とも一途なキャラクターや、一途な純愛を好む傾向があると考えられる。

このような恋愛に対する価値観には、社会の環境が影響を及ぼしている。高校生までは、男女別の学校やクラスであり受験競争が厳しいため、本格的に恋愛をしやすいのは大学生になってからである。しかし、大学に入ると男子は兵役につく人が多い。受験戦争や徴兵制度などが、青年期の恋愛の大きな障害となり、恋愛しにくい社会である。そのため、初恋は貴重であり、恋愛に対して憧れが強くなる。そのため、初恋はストーリーで重視されるものの1つとなり、映画の中でも初恋に関係するものが多く存在する。

また、その他に好まれる条件として、主人公の死と病気、家族の死と不幸など、死や病気が関わる不幸な設定、時空超越、やくざコメディなどが挙げられる。不幸な設定の場合、主人公にも不幸は起こるが、主人公ではなく主人公の家族に死や病気、行方不明などが設

定されている場合が多い。家族関係に問題が存在することや家族の不在が恋愛映画を盛り上げる装置となって、恋愛の障害、主人公の心の傷にまで影響を及ぼしており、設定上家族の重要性は高い。また、家族以外の不幸な設定としては、女性がメロドラマにありがちな不幸を背負っていたが、男性が不幸な立場におかれている作品も登場している。

また、やくざコメディも人気を集めている。韓国にも暴力団は存在しているが、日本より規模は小さい。韓国におけるやくざコメディの特徴は、一般人とやくざが同じ世界で生活し、かかわりを持つところである。日本のやくざ映画は、やくざの世界だけで展開され、完結する。しかし、韓国のやくざコメディは、特殊な状況ではあるものの、やくざが一般人と同じ登場人物として描かれ、日常の社会生活に溶け込んでいるという特徴がある。

恋愛映画の中で、日常の事件や重要なこととして恋愛を捉えるものから、恋愛を明るく軽く捉える方向へ変化している。恋愛が実らない場合、主人公など主要な人物が死亡するパターンが多く、恋愛の結果は、恋が叶うか死ぬかという極端さがある。恋が叶う場合でも、死に関わるエンディングでも、対象作品の中で1990年代のものは雰囲気全体的に暗く重いものが多い。

一方、2000年代のものはハッピーエンドではないが暗い雰囲気を感じさせない。新しい作品になるほどラブコメディが目立つようになり、恋愛が明るく軽い日常生活として描かれている。1990年代は大型事故が相次ぎ、1997年にはIMF危機に直面するなど社会不安が大きかったが、1998年のキム・デジュン政権樹立後、日本の大衆文化開放政策や、ワールドカップ、アジアカップなど文化的雰囲気が明るくなり、南北首脳会議や女性部新設など社会の変化も大きかった。映画の軽さや明るさは、韓国における時代の雰囲気を象徴している。

しかし、これらの恋愛映画においてハッピーエンドの作品では、最終的に結婚まで到達するものはほとんどない。普通の結婚をハッピーエンドとすることが難しいからだと考えられる。普通の状況ではないやくざ映画においては、3作品とも結婚に結びついている。これらの特殊な状況でなければ、恋愛から結婚に至り、ハッピーエンドに展開することができないということである。

韓国の伝統社会においては、妻に対する義務が多く課せられるため、結婚は恋愛の延長線上に位置するものではなく、結婚の先には苦労が目に見えていた。結婚における家のつながりや嫁としての責任の重さなど、現実の壁にぶつかるため、結婚には恋愛のような軽さがない。結婚観が変化した現在においても、映画の中には伝統的価値観によって、結婚

に対する夢や希望を持ってない社会が描かれている。さらに、恋愛と結婚を結びつけるよりも、社会が家庭を持つことは当然であるという価値観を持つ場合、結婚に希望や夢を持つことはない。

結婚した状態からストーリーが始まるものでも、再婚の形でハッピーエンドを迎える作品はあるが、はじめの夫婦関係が継続したままハッピーエンドを迎える作品はなく、生活が破綻してしまうタイプがほとんどである。結婚した状態からストーリーが展開する状態の映画では、家族をテーマとしない場合、テーマは不倫などの特殊な状況となり、普通の夫婦愛をほとんど描かず、ハッピーエンドも少ない。恋愛から普通の結婚に向かうストーリーは幸せの連想ができないため描かれえないと言える。

新聞記事などのデータから、恋愛・結婚対象となる相手の条件として、女性は外見、男性は経済力が重視されていることが分かる。映画において、男性が女性の外見を重視している場面はいくつか描かれている。しかし、女性の場合、経済力を重視している場面は描かれていない。映画の中で描かれる女性が思う男性の理想像は、強い男であると表現されている。

また、韓国では男女ともに日本より家族関係が重視されており、家族関係が結婚の重要な要素として考えられている。結婚を愛による結びつきではなく、家としての結びつきであり、当然するべきもので、生活の手段にすぎないとする価値観が映画にも現れている。

恋愛、結婚相手の条件として年齢が挙げられる。これまで韓国では男性が年上であることが当然のものとして受け入れられてきた。しかし、近年女性が年上であるカップルが増加していることが、映画でも取り上げられるようになってきている。韓国よりも日本の方が、女性の年上夫婦が多く、現在それほど不自然には思われていないが、韓国では女性が年上であることが少数の特殊な例として騒がれている。

映画の中でも男性が年下のカップルは少数であり、男性が年上の女性と付き合うことがありえないと表現されている。しかし新しい作品では、女性が年上のカップルが自然に描かれており、先に登場した映画よりも社会的に理解されやすい状況になったと考えられる。

男性と女性の年齢が逆転しているように、映画において、強いものとして描かれてきた男性が、弱い立場で表現される場合が増えてきた。それらの作品では、女性に振り回されたり、女性に尽くしたりする男性が描かれている。男性が強く男らしくあるべきだという強い価値観がありながらも、男性が強くあり続けることに疲れたことや、社会的立場が強くなりつつある女性の登場により、これまでとは異なる形で男性が描かれている。戦争映

画に描かれるような男性社会を望む一方で、弱い男性が許容されるようになったのは確かである。

それに対して、女性の場合も強い女性が描かれるようになってきている。社会における法整備や政治的取り組みは急速に発展しており、女性を取り巻く環境も変化している。映画の中でも、女性が主導権を握り、積極的に行動するなどの強い女性が描かれるようになってきている。職業を持ち懸命に働く女性の姿も描かれ、強い女性が映画の中で表現されるようになったことは、社会の変化を物語っている。

しかし、女性が強くなった、強い女性が描かれるようになったとはいえ、状況が全て変化しているわけではない。儒教の伝統的価値観では、嫁としての女性には多くの規範が設けられ、義務を課せられた。弱い立場とは異なるが、映画の中では伝統的価値観を持つ女性が数多く表現され、嫁、母親としての振舞う女性や1人の人に尽くし続ける女性が描かれる。価値観に変化が起こっても、簡単に伝統的な価値観がなくなるわけではない。強い女性が描かれる一方で、立派な母親、立派な嫁としての伝統的価値規範に基づく行動を取っている女性も描かれるのである。

伝統的規範に従いながらも強い自分の意思を持っている場合や、強い女性として描かれるが伝統的な面を持っている場合もあり、現代的な面と伝統的な面が同時に融合して存在している。規範が弱まり、女性が社会的に強くなったといえる傾向が大きいものの、これまでのような伝統的価値観も存在しており、どちらか一方の傾向に向かって進んでいくのではなく、韓国の価値観には両極端な価値が同時に存在しながら変化していると言える。

現実の結婚、離婚、再婚などの状況も変化しつつある。晩婚化、少子化、熟年離婚、再婚などが日本と同様に起こっており、それに伴って結婚に対する価値観にも変化が現れている。ただし、その価値観は世代ごとの差が大きい。様々な価値観が変化している中でも、結婚と家族のつながりは深い。映画の中では、子どもが学生であっても、結婚を心配してお見合いをさせるという状況が自然に描かれており、家族の意思が絶対ではないにせよ、結婚に家族が積極的に関与していることが分かる。

嫁としての責任の中には、息子を産まなければならないというの也被まれる。男児を産むことは、嫁としての義務であり、長男を産むことによって家庭内での権力を得ることができるのである。この価値観により、韓国では男児選好の風潮がある。当然、母親は息子を溺愛することになり、母親と息子の関係が粘着質なものになる。母親の息子溺愛と息子のマザコンは、家父長制の家族制度による男児偏重の結果である。



映画には、母親と息子と嫁の関係が描かれており、韓国家族の人間関係を凝縮し、過激に表現している。母親と息子のスキンシップなど、日常生活において仲がよい様子を自然に描いた作品もあり、母親と息子の関係は近い物として描かれている。また、家と嫁の関係を描いたシーンも存在する。家のつながりが強い様子を表していることから、家は重要であると言える。

しかし最近では、恋人のために家業を捨てる場合、結婚している主人公の家庭が周地的に描かれ最終的に主人公が恋を選択する場合、不倫による家庭崩壊が起こる場合など、これらのパターンでは、家という集団よりも個人を重視しているストーリーもいくつか現れてきた。

特に不倫の場合は、姦通罪が存在する韓国において犯罪となる可能性もあるほど社会は厳しいにもかかわらず、不倫に関する映画は話題を集めている。現実における不倫に関する価値観も変化している。不倫に対して社会が大きく反応しており、新聞記事などで女性の浮気不倫が増加していると取り上げられる。しかし、これは女性の不倫が明るみに出やすくなったため、急増していると感じている可能性もある。また、女性の不倫や浮気は男性よりも明らかに少ないにもかかわらず、増加したと騒がれている。禁忌中の禁忌であった女性の不倫が取り上げられるようになったことに、価値観の変化が現れている。

不倫に関する映画は、流行していると言われているものの、以前から制作されていた。ただし、女性が主役となる物語が描かれることが多いのは変化していない。1980年代の作品では、不倫後も家庭崩壊を起こさずに夫婦生活に戻っており、不倫が成立するものはない。不倫に対して否定的なイメージのものが多く、伝統的規範に反抗する態度が多少はあったと考えられる。これら映画では、家庭が上手く行かないなどの理由があって仕方なく不倫をしていた。

しかし 1990年代の作品になると、自分の意思で不倫することが多くなっている。エンディングにおいても、家庭が元通りになる「ハッピーエンド」だけではない多様性が認められるようになった。不倫が物語を盛り上げるための要素として扱われるようになっており、絶対的タブーというものから、そのような関係もあると認識できる程度の存在になっている。

これらのように、家よりも恋を選択するパターンが描かれるようになっている。しかし、その中でも伝統的価値観が残っている場合がある。家族よりも個人を優先させる不倫や離婚を描くようになっているが、社会において近代化が進み、恋愛至上主義が浸透し始めた

現代においても、家族、家庭に対する重要性は高い。映画の中には、家族を崩壊させ不倫を選ぶ判断材料として、父親の言葉に従うものがある。この場合、個人の意思決定に家族の意見が反映されている。不倫に対する自分の意思を決定する時に、家族の意見を自己肯定するために使用するところは、個人の恋愛と集団である家族が絡み合っていることを表している。近代化と共に全ての面において個人主義化が進展しているわけではなく、韓国において家族と個人を分けて考えることはできないのである。

不倫のようにタブーがタブーではなくなりつつあるように、放送業界においては、同性愛、家父長制、夫婦の性、性的表現などが取り扱われ、「禁忌を壊した」と話題になっている。映画においても、様々な表現がされている。問題小説の映画化、同性愛、性的表現など、多くのタブーが変化したが、同姓同本や韓国に暮らす朝鮮族、脱北者、在日同胞など、未だに映画では、ほとんど描かれないものも存在する。

1996年から2005年の社会の変化によって、韓国が個人主義化しているのは事実であり、映画においても、それらが表現されている。しかし、韓国には個人主義と共に家族主義、近代的価値と共に伝統的価値が存在し、それらの価値観が同時に映画で表現されている。韓国人は、それら二つの価値観を同時に持っている。どちらか一方に進化していくわけではなく、両極端な価値観が混合しながら同時に存在しているのが韓国の社会なのである。

## 注

- 1 常石希望「日本における韓国論・韓国文化論—その概念と歴史—」『言語と文化』3号(通号30)、2000年、80頁
- 2 キム・チソク／編集部訳「韓国映画におけるメロドラマの過去と現在」『Cinema101』3号1996年  
この論文は、Kim Chisok “Les principaux themes dans” dans *Le cinema coreen*, Editions du Centre Pompidou, Paris, 1993をCinema101編集部が抜粋、翻訳したものである。
- 3 「  
期 (韓国映画史開化期から開花期まで)』  
「1950 < > (1950年代の時代風潮と<自由夫人>)」  
(韓国映画データベース) サイト内、  
http://www.kmdb.or.kr/2006contents/history\_view.asp?idx=73&page=1 (2007年1月取得)  
「“ (68)”  
的読解)」  
(韓国映画データベース) サイト内、  
(映画文化情報) 26号、2002年、http://www.kmdb.or.kr/2006contents/kfilm\_journal\_view.asp?ho=26&idx=212  
(2007年1月取得)
- 4 ブロックバスター映画とは、巨額な制作費・宣伝費を投入し、それに見合った観客動員を狙う映画のこと。(韓国観光公社公式サイト「韓国映画の歴史」参考)  
http://japanese.tour2korea.com/02Culture/Movies/movie\_01.asp?kosm=m2\_4&konum=1
- 5 「  
WEEK)』2007年10月9日  
http://movie.daum.net/magazine/article/cover/?mode=1&pd=&ct=2&a=0&id=1071348(2007年11月取得)
- 6 トマス・エルセサー(石田美紀・加藤幹郎訳)「響きと怒りの物語—ファミリー・メロドラマへの所見(1972)」『新映画理論集成1—歴史／人種／ジェンダー』フィルムアート社、1998年、14—41頁。渋谷哲也「メロドラマ映画についての覚書」映像ゼミナール  
http://www.info.sophia.ac.jp/g-areas/film%20seminar.htm(2007年11月取得)
- 7 この章では、文献を基に韓国映画と映画に対する規制についての歴史と現状を追い、これまでの韓国映画と現在の状況を把握する。第1節では、李英一・佐藤忠男共著『韓国映画入門』凱風社、1990年、  
『  
2006年、ト煥模「映画政策の流れ」『Cinema101』映像文化研究連絡協議会、1996年、前川道博「韓国映画の新しい流れ」『アジア映画小事典』三一書房、1995年を参考に、産業的に急速に発展したのは1990年代から2000年代にかけてであることを述べている。
- 8 李英一・佐藤忠男共著前掲、25頁
- 9 同上書、89頁
- 10 同上書、92—99頁
- 11 同上書、102頁
- 12 同上書、105—107頁
- 13 同上書、145—147頁
- 14 同上書、157—159頁
- 15 同上書、162—165頁
- 16 前掲、329頁
- 17 同上書、329頁
- 18 『  
2002年度版、2003年度版、2004年度版、2005年度版、2006年度版
- 19 21 (Cine21) http://www.cine21.com/Index/index.html
- 20 Daum http://movie.daum.net/?nil\_profile=movieTop&nil\_menu=bar\_moviehome
- 21 Film2.0 http://www.film2.co.kr/
- 22 (Movist) http://www.movist.com/
- 23 KMDb http://www.kmdb.or.kr/

- 24 シネマコリア <http://cinemakorea.org/>
- 25 輝国山人 <http://www.hf.rim.or.jp/~t-sanjin/index.html>
- 26 「カン・ジェギユ」『シネマコリア』[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/director/kangjegyu.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/director/kangjegyu.htm) (2007年12月取得)
- 27 「チャン・ヒヨンス」『シネマコリア』  
[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/director/janghyeonsu.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/director/janghyeonsu.htm) (2007年12月取得)
- 28 「キム・ソンホン」『シネマコリア』  
[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/director/kimseonghong.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/director/kimseonghong.htm) (2007年12月取得)
- 29 「ホ・ジノ」『シネマコリア』[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/director/heojinho.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/director/heojinho.htm) (2007年12月取得)
- 30 「  
映画授賞式を準備して)」 3 (女性観客が選んだ最高、最悪の (第3回女性観客映画賞)、1998年  
[http://www.femiart.or.kr/movie/audience\\_last\\_prize.html?mi=A00303&page=2&ci=3](http://www.femiart.or.kr/movie/audience_last_prize.html?mi=A00303&page=2&ci=3) (2008年2月取得)
- 31 「LISE/嘘」『シネマコリア』[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/movie/lies.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/movie/lies.htm) (2007年12月取得)
- 32 「 (笑わせてくれる若き日の肖像)」『Film2.0』2001年7月28日  
[http://www.film2.co.kr/review/review\\_final.asp?mkey=456](http://www.film2.co.kr/review/review_final.asp?mkey=456) (2007年12月取得)
- 33 『韓国語ジャーナル』17号によると、新世代は1970年代のベビーブームに生まれ、1990年代以降大学生になった世代であり、軍事政権下での学生運動を知らない世代である。それぞれの個性を重視し、自己表現欲が強く、集団的韓国社会へ反発している。また特にネットワーク、デジタル環境の中、コンピューターを自由自在に操り情報発信を行うなど、個人主義的思考によってIT革命を支えている世代をN世代と呼んでいるようだ。『韓国語ジャーナル』17号、2006年
- 34 「 (かわいいごちゃ混ぜドロップ)」『Film2.0』2001年7月19日  
[http://www.film2.co.kr/moviedb/movie\\_review.asp?mkey=3113&akey=451](http://www.film2.co.kr/moviedb/movie_review.asp?mkey=3113&akey=451) (2007年12月取得)
- 35 「 (私に猟奇を見せて)」『 (MOVIST) 』2001年7月26日  
<http://www.movist.com/article/read.asp?type=2&id=1749> (2007年12月取得)
- 36 カツヲうどん「Review『タイフーン TYPHOON』『セックス・イズ・ゼロ』『浪漫刺客』『風のファイター』』『シネマコリア』2006年4月1日、[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/column/column126.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/column/column126.htm) (2007年12月取得)
- 37 カツヲうどん「Review『カンナさん大成功です!』『頭脳遊戯プロジェクト、パズル』『秘愛-Secret Love』『同い年の家庭教師』』『シネマコリア』2007年4月22日  
[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/column/column178.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/column/column178.htm) (2007年12月取得)
- 38 カツヲうどん「Review『血の涙』『風の伝説』『君に捧げる初恋』『天国からのメッセージ』』『シネマコリア』2006年2月18日  
[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/column/column114.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/column/column114.htm) (2007年12月取得)
- 39 カツヲうどん「Review『私の頭の中の消しゴム』『甘い人生』『秘密』』『シネマコリア』2005年10月2日、[http://cinemakorea.org/korean\\_movie/column/column088.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/column/column088.htm) (2007年12月取得)
- 40 「 , < > (記憶と愛の関係『私の頭の中の消しゴム』)」『 21』2004年11月2日  
[http://www.cine21.com/Article/article\\_view.php?mm=002001001&article\\_id=26904](http://www.cine21.com/Article/article_view.php?mm=002001001&article_id=26904) (2007年12月取得)
- 41 「 가 (愛にマイレージはない)」『FILM2.0』2004年10月31日  
[http://www.film2.co.kr/moviedb/movie\\_review.asp?mkey=39368](http://www.film2.co.kr/moviedb/movie_review.asp?mkey=39368) (2007年12月取得)
- 42 カツヲうどん「Review『小さな恋のステップ』『野獣と美女』『ラブ・トーク』『僕の彼女を紹介します』』『シネマコリア』2006年1月29日 [http://cinemakorea.org/korean\\_movie/column/column110.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/column/column110.htm)
- 43 「 (2) / 5 - big5.< > (上半期公開作をつかもう。韓国映画ビッグ5『僕の彼女を紹介します』)」『 (シネソウル) 』2004年4月27日、<http://www.cineseoul.com/magazine/magazine.html?magazineID=658> (2007年12月取得)
- 44 「< > (『僕の彼女を紹介します』)

- 「チョン・ジヒョンの魅力は分かるけど」『 (朝鮮日報) 』2004年6月3日  
<http://news.media.daum.net/entertain/movie/200406/03/chosun/v6759961.html> (2007年12月取得)
- 45 カツラうどん「Review『恋愛の目的』『黄山ヶ原』『トンマッコルへようこそ』『オオカミの誘惑』『シネマコリア』2005年9月24日 [http://cinemakorea.org/korean\\_movie/column/column087.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/column/column087.htm) (2007年12月取得)
- 46 「 (念入りに作ったファンタジー) 」『FILM2.0』2004年7月19日  
[http://www.film2.co.kr/moviedb/movie\\_review.asp?mkey=38689&akey=1406](http://www.film2.co.kr/moviedb/movie_review.asp?mkey=38689&akey=1406) (2007年12月取得)
- 47 呉善花『日韓、愛の幻想』文藝春秋、2006年、37頁
- 48 『韓国語ジャーナル』17号、2006年
- 49 キム・ヨンフン(キム・ヨンエ訳)「韓国の結婚文化—現代韓国の結婚事情」『月刊韓国文化』通号268号、企画室アートプランニング、2002年、15-17頁
- 50 イ・スジャ(イ・ヨンエ訳)「韓国の結婚文化—韓国人の結婚観」『月刊韓国文化』通号268号、企画室アートプランニング、2002年、2-5頁
- 51 「アメリカが選ぶ好きな俳優No.1は…」『TSUTAYA online』2008年1月21日  
<http://lx03.www.tsutaya.co.jp/tol/news/index.pl?c=entertain&c2=movie&artid=2127> (2008年1月取得)
- 52 「長澤まさみ人気No.1!“好きな女優”ランキング」『eltha』2006年10月25日  
<http://beauty.oricon.co.jp/news/37939/> (2008年1月取得)  
 「女性が選んだ好きな女優ランキングNo.1は篠原涼子!」『ORICON STYLE』2006年4月7日  
<http://www.oricon.co.jp/news/ranking/30354/#rk> (2008年1月取得)  
 「仲間由紀恵2連覇!阿部寛も1位!」『ORICON STYLE』2006年8月4日  
<http://www.oricon.co.jp/news/ranking/17825> (2008年1月取得)  
 「“オダジョー時代”到来—好きな男優ランキング!」『ORICON STYLE』2006年4月11日  
<http://www.oricon.co.jp/news/ranking/18172/> (2008年1月取得)  
 「40代のアノ俳優が三連覇!好きな男優No.1」『eltha』2006年19月25日  
<http://beauty.oricon.co.jp/news/37943/> (2008年1月取得)  
 「ユーザーが選んだ2005年ベストムービーランキング(主演男優編)」『ORICON STYLE』2006年1月18日、[http://www.oricon.co.jp/rank/060118\\_01.html](http://www.oricon.co.jp/rank/060118_01.html) (2008年1月取得)  
 「発表!好きな女優ランキング!堂々1位はあの個性はアーティスト!」『ORICON STYLE』2006年1月26日、<http://www.oricon.co.jp/news/ranking/10208/> (2008年1月取得)
- 53 「日本人、韓国人が選ぶ好きな韓国男優、女優ランキング!」『ORICON STYLE』2006年9月11日  
<http://www.oricon.co.jp/news/ranking/33937/> (2008年1月取得)  
 「2007 , (2007ネチズンがえらんだ最高の俳優・チョ・スンウ、チェ・ジョンウオン)」『 (ニュースワイヤー) 』2007年12月17日  
<http://news.media.daum.net/press/200712/17/newswire/v19279877.html> (2008年1月取得)  
 「2008 ‘ , 5 ? (2008年前途有望な俳優ベスト5は?)」『  
 24 (ジョイニュース24)』2008年1月20日  
<http://news.media.daum.net/entertain/movie/200801/20/joynews24/v19673248.html> (2008年1月取得)  
 「 ‘ , “ ” (青少年、チョン・ウソンとムン・グニョンが一番好き)」『 (ウイルス) 』2007年9月18日  
<http://news.media.daum.net/entertain/broadcast/200709/18/virus/v18179729.html> (2008年1月取得)  
 「 ? (年齢別芸能人で好感度が高いのは?)」『OSEN』2006年10月10日 <http://news.media.daum.net/entertain/broadcast/200610/10/poetan/v14285466.html> (2008年1月取得)  
 「 ‘ . , ’ (イ・ゴニ、リュ・シファ、大学生の好み)」『YTN』2004年10月14日  
<http://news.media.daum.net/economic/industry/200410/14/YTN/v7531884.html> (2008年1月取得)  
 「 ? . 가 … (韓国人が好きなものは?バラ、パク・チョンヒ、秋…)」『 (朝鮮日報) 』2004年6月16日

- <http://news.media.daum.net/editorial/opinion/200406/16/chosun/v6840987.html> (2008年1月取得)
- 「  
ニ、イ・ムニョル、ノ・ムヒョン、ソン・ソギ、ホン・ミョンボ、ユン・ドヒョン、ソル・ギョング  
が人気一大学生の有名人人気度調査」『  
(イ・ゴ  
韓国大学新聞)』2002年10月11日  
<http://www.unn.net/News/detail.asp?nsCode=2306> (2008年1月取得)
- 「  
(人物選好度—尊敬・感動・歓呼。栄光の顔に喝  
采)」『  
(韓国大学新聞)』2001年10月13日  
<http://www.unn.net/News/detail.asp?nsCode=10068> (2008年1月取得)
- 54 リュウ・ヒジュン『日本人ではわからない韓国のジョーシキ』実業之日本社、2005年、132頁—137  
頁。石坂浩一・館野哲『現代韓国を知るための55章』明石書店、2000年、139頁—141頁。四方田犬  
彦『大好きな韓国』ポプラ社、2003年、115頁—129頁。
- 55 「  
女高男低  
? 分班  
(学力女高男低、実際は? 男女共  
学、男女別クラスの流行)」『  
(韓国日報)』2006年2月19日  
<http://news.media.daum.net/snews/society/affair/200602/19/hankooki/v11753803.html> (2007年  
12月取得)
- 56 「  
死  
(韓国映画の中の死—死の法則)」『  
(朝鮮日報)』  
2006年9月1日、<http://news.media.daum.net/entertain/movie/200609/01/chosun/v13876965.html>  
(2006年9月取得)
- 57 同上記事
- 58 『イルマーレ (THE LAKE HOUSE)』(2006年、アレハンドロ・アグレスティ) アメリカ映画。
- 59 「  
1 ... 1833  
(全国暴力団1万人…釜山1833人で最多)」『  
(朝鮮日報)』2007年10月9日  
[http://news.chosun.com/site/data/html\\_dir/2007/10/09/2007100900025.html](http://news.chosun.com/site/data/html_dir/2007/10/09/2007100900025.html) (2007年11月取得)
- 60 警察庁組織犯罪対策 <http://www.npa.go.jp/sosikihanzai/> (以下2007年11月取得)  
警察庁組織犯罪対策部「平成18年の暴力団情勢 (確定値版)」  
<http://www.npa.go.jp/sosikihanzai/bouryokudan/boutai11/20070423.pdf>  
警察庁組織犯罪対策部「平成18年の暴力団情勢」  
<http://www.npa.go.jp/sosikihanzai/bouryokudan/boutai11/20070208.pdf>  
「平成18年度末における暴力団構成員数等について」  
<http://www.npa.go.jp/sosikihanzai/kikakubunseki/bunseki12/20070427.pdf>
- 61 「2006  
(2006韓国映画「ヤクザ」が今年もスクリーンジャッ  
ク)」『  
(キョンヒョン新聞)』2006年11月30日  
<http://news.media.daum.net/entertain/movie/200611/30/khan/v14900693.html> (2007年11月取得)
- 62 「【噴水台】暴力団 (ヤクザ) 映画」『中央日報』日本版2007年2月11日  
<http://japanese.joins.com/article/article.php?aid=84505&servcode=100&sectcode=100> (2007年  
11月取得)
- 63 石坂浩一『トーキングコリアンシネマ』凱風社、2005年、175頁
- 64 石坂浩一前掲、175—176頁
- 65 川島淳子『韓国美人事情』洋泉社、2001年、75頁
- 66 四方田犬彦前掲、54、101頁
- 67 (DUO) 韓国企業。<http://www.duo.co.kr/>
- 68 「  
(にきび女、はげ男。配偶者としてマイナス)」『  
(国民日報／クッキーニュース)』2006年5月26日  
<http://news.media.daum.net/culture/life/200605/26/kukinews/v12835504.html> (2007年12月取得)
- 69 (Bien-Aller) 韓国企業。<http://www.bien.co.kr/>
- 70 「  
2000  
? (年俸2000未満、結婚の夢も見るな?)」『  
(国民日報／クッキーニュース)』2006年5月19日  
<http://tvnews.media.daum.net/part/societytv/200605/19/kukinews/v12756761.html> (2006年8月取  
得)

- 71 (韓国女性開発院) 「2005 (2005 女性統計年報)」 288、289 頁
- 72 (韓国女性開発院) 「2005 (2005 女性統計年報)」 298、299 頁
- 73 「『 (妻は教師、夫は医者が一番イイ) 』 『 (連合ニュース) 』 2006 年 6 月 27 日 <http://news.media.daum.net/culture/art/200606/27/yonhap/v13176231.html> (2006 年 7 月取得)
- 74 1970 年代のベビーブームに生まれ、1990 年代以降に大学生になった世代で、軍事政権下での学生運動を知らない世代が新世代と言われている。『韓国語ジャーナル』17 号、2006 年
- 75 「『 (配偶者にしたい職業 1 位はプロ運動選手) 』 『 (2007 年 12 月 22 日 <http://news.media.daum.net/society/others/200712/22/mk/v19354534.html> (2008 年 1 月取得)
- 76 「『 (気の会う相手を見つけるのは難しい…もう独身に慣れました。) 』 『 (毎日経済) 』 2007 年 12 月 22 日 <http://news.media.daum.net/society/others/200712/22/mk/v19354521.html> (2008 年 1 月取得)
- 77 「『 [ ]21 (21 世紀型いい男の条件) 』 『 (ilyo 新聞) 』 2007 年 7 月 27 日、<http://news.media.daum.net/entertain/broadcast/200707/27/ilyo/v17593957.html> (2008 年 1 月取得)
- 78 0-net <http://www.onet.co.jp/>
- 79 「『 [20&30] (韓日の若者、男女とも似たような結婚観) 』 『 (ソウル新聞) 』 2007 年 10 月 9 日 <http://news.media.daum.net/society/affair/200710/09/seoul/v18394082.html> (2008 年 1 月取得)
- 80 「『 [ ] (芸能界は今、年上一年下ブーム) 』 『 (スポーツソウル) 』 2006 年 7 月 26 日 <http://news.media.daum.net/entertain/broadcast/200607/26/SpoSeoul/v13495810.html> (2007 年 8 月取得)
- 「『 女 + 100 12.8 (年上女+年下男のカップル、100 組中 12.8 組) 』 『 (文化日報) 』 2007 年 3 月 27 日 <http://news.media.daum.net/economic/industry/200703/27/munhwa/v16190519.html> (2007 年 8 月取得) 上記 2006 年 7 月の記事には「年上女一年下男カップルが恐ろしい速度で流行している」という記事が掲載されている。また、2007 年 3 月の記事でも年上女と年下男について取り上げられている。
- 81 (Bien-Aller) 前掲。
- 82 「『 (年上女、年下男のカップル、「だからいい) 』 『 (スポーツカン) 』 2006 年 7 月 20 日 <http://news.media.daum.net/culture/art/200607/20/sportskhan/v13437640.html> (2007 年 7 月取得)
- 83 (統計庁) 「2006 (2006 年婚姻統計結果)」 2007 年 3 月、11 頁
- 84 趙惠貞 (春木育美訳) 『韓国社会とジェンダー』法政大学出版局、2002 年、194 頁
- 85 西村嘉夫 (ソチョン) 「花嫁はギャングスター」シネマコリア 2002 年 4 月 [http://cinemakorea.org/korean\\_movie/movie/wifeisgang.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/movie/wifeisgang.htm) (2007 年 8 月取得)
- 86 春木育美『現代韓国と女性』新幹社、2006 年、92 頁。イ・ビョンジョン「「男尊」韓国に挑む女たち」『News Week』20 (19)、2005 年、28、29 頁。田端かや「1990 年以降の韓国女性政策とその背景」『女性学研究』12 号、大阪女子大学女性学研究センター、2005 年、24-36 頁。キム・ソンウク「韓国女性政策の現状と課題」『女性学研究』12 号、大阪女子大学女性学研究センター、2005 年、1-23 頁。春木育美「90 年代以降の韓国における女性政策の展開とその背景」『女性学研究』11 号、大阪女子大学女性学研究センター、2004 年、77-88 頁。
- 87 『2005 』25 頁。統計のはじめに「この統計は『2005 女性統計年報』の主要統計を再構成して作成したものです。ただし、一部統計は『2005 女性統計年報』に収録されていないものや統計表構成が一致しないことがあります。」とある。
- 88 (韓国女性開発院) 『2005 (2005 図表で見る女性統計) 』23 頁
- 89 趙惠貞前掲、72 頁
- 90 (韓国女性開発院) 『2005 (2005 女性統計年報) 』156-162 頁
- 91 同上、180、181 頁

- 92 同上、238-241 頁
- 93 曹喜澈『現代韓国を知るキーワード 77』大修館書店、2002 年、258 頁
- 94 石坂浩一前掲、196 頁
- 95 山本かほり「第 3 章 儒教規範の中の女性—韓国女性の社会的地位に関する考察」小林孝行編『変貌する現代韓国社会』世界思想社、2000 年、44 頁
- 96 同上書、46 頁
- 97 同上書、46、47 頁
- 98 同上書、47 頁
- 99 曹喜澈前掲、202 頁
- 100 山本かほり前掲、47-48 頁
- 101 曹喜澈前掲、10-11 頁
- 102 山本かほり前掲、50 頁
- 103 同上書、52-61 頁
- 104 石坂浩一前掲、197 頁
- 105 「 (春香伝) 」 Daum (百科事典)、 : (出処:ブリタニカ)  
<http://enc.daum.net/dic100/contents.do?query1=b20c3558a> (2007 年 8 月取得)  
「< > (春香伝>の韓国映画史的意味) 」 (映画  
変遷史)、 (韓国映画データベース)  
[http://www.kmdb.or.kr/2006contents/history\\_view.asp?idx=78&page=1](http://www.kmdb.or.kr/2006contents/history_view.asp?idx=78&page=1) (2007 年 8 月取得)
- 106 四方田犬彦前掲、249-251 頁
- 107 李英一・佐藤忠男共著前掲、89-91 頁
- 108 四方田犬彦前掲、252-253 頁
- 109 同上書、246 頁
- 110 イ・スジャ前掲、5 頁
- 111 (韓国女性開発院) 『2005 (2005 統計年報) 』83 頁。ホームページによると、「韓国女性開発院は女性問題に対する総合的研究を遂行し、女性政策及び女性能力開発、女性情報提供を通して、女性の社会参与、福祉増進及び、女性と国家発展に役立つことを目的としている」と説明されており、1983 年 4 月に開院した後、2007 年 5 月に韓国女性開発院から韓国女性政策研究院に機関名称を変更している。(韓国女性政策研究院)  
<http://www.kwdi.re.kr/index.jsp>
- 112 (統計別メタ資料照会) 「 (社会統計調査) 」 DB  
(統計メタデータベース) <http://meta.nso.go.kr/metaSearch/index.jsp>
- 113 曹喜澈前掲、145 頁
- 114 同上書、145-146 頁
- 115 同上書、144 頁
- 116 国立社会保険・人口問題研究所「一般人口統計—人口統計資料集—」 「性別出生数及び出生性比:1872~2005 年」[http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P\\_Detail2007.asp?fname=T04-01.html&title1=%87W%81D%8Fo%90%B6%81E%89%C6%91%B0%8Cv%89%E6&title2=%95%5C%82S%81%7C%82P%81%40%90%AB%95%CA%8F%90%B6%90%94%82%A8%82%E6%82%D1%8Fo%90%B6%90%AB%94%E4%81F1872%81%602005%94N](http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2007.asp?fname=T04-01.html&title1=%87W%81D%8Fo%90%B6%81E%89%C6%91%B0%8Cv%89%E6&title2=%95%5C%82S%81%7C%82P%81%40%90%AB%95%CA%8F%90%B6%90%94%82%A8%82%E6%82%D1%8Fo%90%B6%90%AB%94%E4%81F1872%81%602005%94N)  
(2007 年 12 月取得)
- 117 「韓国社会を読む『姦通罪』『女性の自由への足かせ』か?」 『統一日報』 日本版 2007 年 9 月 19 日  
[http://www.onekoreanews.net/past/2007/200709/news-syakai04\\_070919.cfm](http://www.onekoreanews.net/past/2007/200709/news-syakai04_070919.cfm) (2007 年 12 月取得)
- 118 曹喜澈『現代韓国を知るキーワード 77』大修館書店、2002 年、211-212 頁
- 119 「 , 가 ? (愛人、もう 1 つの家族?) 」 『 21 (ハンギョレ 21) 』 2003 年 7 月 17 日、<http://news.media.daum.net/society/others/200307/17/hani21/v4618461.html> (2007 年 2 月取得)
- 120 同上記事
- 121 「 (満たされない愛の城) 」 『 (日刊スポーツ) 』 2003 年 8 月 4 日  
<http://news.media.daum.net/entertainment/others/200308/04/hankookis/v4727648.html> (2007 年



- 2月取得)
- 122 「 48% ‘ ’ (既婚男女 48%、不倫を考えたことがある)」 『 (連合ニュース)』 2003年8月6日  
<http://news.media.daum.net/economics/industry/200308/06/yonhap/v4740387.html> (2007年12月取得)
- 123 「 “ ” (浮気を進める社会「考えられない)」 『 (日刊スポーツ)』 2003年9月4日、<http://news.media.daum.net/society/affair/200309/04/hankookis/v4945156.html> (2007年12月取得)
- 124 記事内で紹介されているアンケート人数は、9月4日午前8時現在とされている。
- 125 「 “ ” (浮気を進める社会「考えられない)」 『 (日刊スポーツ)』 2003年9月4日  
<http://news.media.daum.net/society/affair/200309/04/hankookis/v4945156.html> (2007年12月取得)
- 126 「 47%, !! (社会人 47%、不倫も愛だ!)」 『 (データニュース)』 2005年12月1日 URL 不明 (2007年2月取得)。その他にも同じ内容の記事が掲載されている。  
「 “ ” (社会人の半分は「不倫も愛)」 『 (世界日報)』 2005年12月1日 <http://news.media.daum.net/snews/society/affair/200512/01/segye/v10961453.html> (2008年1月取得)  
「 “ ” (社会人の半分、「不倫も愛だ)」 『 (ニューシス)』 2005年12月1日  
<http://news.media.daum.net/snews/economic/industry/200512/01/newsis/v10961283.html> (2008年1月取得)
- 127 「 性 “ …” (既婚女性の恋愛と性、「これは生きてることなのか・・・)」 『 (東亜日報)』 2005年12月12日  
<http://news.media.daum.net/snews/society/affair/200512/12/donga/v11063395.html> (2007年2月取得)
- 128 同上記事
- 129 「 ‘ ’ (離婚と不倫をテーマにしたドラマ「面白いけど実際の当事者は反感)」 『 (ニュースエヌ)』 2005年12月20日  
<http://news.media.daum.net/snews/entertain/broadcast/200512/20/newsen/v11151442.html> (2007年12月取得) また、以下の記事でも同様のアンケートが紹介されている。  
「 40% ‘ ’ (離婚したシングル 40%、再婚をテーマにしたドラマに対して「不信)」 『 (ニューシス)』 2006年2月9日  
<http://news.media.daum.net/snews/society/affair/200602/09/newsis/v11646901.html> (2007年12月取得)
- 130 「 10 4 ‘ ’ , ’ (中年女性 10 人中 4 人「不倫経験」おばさん、彼女達の反乱は既に始まっている)」 『 (スポーツカン)』 2006年5月15日、<http://news.media.daum.net/culture/art/200605/15/sportskhan/v12711069.html> (2007年2月取得)
- 131 同上記事
- 132 別の記事でも、既婚者との恋愛に対するアンケートをとっている。記事の中では、「結婚情報会社 Bien-Aller が 2006 年 6 月 4~17 日に未婚男女各 288 名ずつにアンケートを実施した。回答者の 72.4% である 417 人が『既婚者に恋したことがある』と答えた。また、36%は『既婚者と実際に付き合ったことがある』とし、45%は『既婚者との結婚も考慮できる』と考えている」と紹介されている。  
「 70% (未婚 70%、既婚者に恋心を抱く)」 『 (連合ニュース)』 2006年6月20日  
<http://news.media.daum.net/culture/life/200606/20/yonhap/v13099632.html> (2006年6月取得)
- 133 「 [ ] ‘ ’ ? ([妻の危機]「危険な綱渡り」不倫じゃなくてロマンス?)」 『 (韓国日報)』 2006年9月1日  
<http://news.media.daum.net/society/affair/200609/01/hankooki/v13886567.html>

(2007年2月取得) この記事では、その他に以下の調査が紹介されている。

「1990年代は伝統的女性像が至高至純とされていた時代。現在は？」  
調査機関：再婚専門業「オンリーユー」、対象：再婚希望男女512人  
・異性交際経験ある：男性51.3%、女性48.6% 差異がない。

調査機関：韓国性科学研究所、期間：2005年、対象：5大都市に居住する成人女性1000人  
・夫以外の男性と性関係を持った：7.9%  
・年齢別：40～44歳31.6%、29歳以下7.6%  
・研究所長イ・ユンス「最近何年かで中年男性たちの浮気相手が遊興業店の女性から夫のいる女性や独身女性に急激に移っている」「既婚女性の浮気が増えているのを推算できる」

調査機関：再婚専門業オンリーユー、対象：離婚男性200人  
・離婚決心の発端になった理由：配偶者の不貞29.2%  
実際の離婚理由：性格の差異41.9%、価値観の差異21.8%、配偶者の不貞20.2%

134 同上記事

135 同上記事

136 同上記事

137 「性 “ … ” (既婚女性の恋愛と性「生きてるの  
だろうか」危険な主婦たち)」『 (東亜日報) 』2005年12月12日  
<http://news.media.daum.net/snews/society/affair/200512/12/donga/v11063395.html> (2007年2月  
取得)

138 「韓国世界最高「離婚天国」になるか」『中央日報』日本版、2003年12月28日  
<http://japanese.joins.com/article/article.php?aid=47105&servcode=400&sectcode=400> (2007年  
12月取得)

139 厚生労働省「平成18年人口動態統計の年間推計」  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai06/index.html> (2007年12月取得)

140 (韓国映画データベース) <http://www.kmdb.or.kr/> 同ホームページによると、  
「韓国映画データベースは、韓国映像資料院が構築、運営する韓国映画統合検索サイトとして、韓国  
映画作品情報、映画人名情報、イメージ、記事、評論、シナリオ、図書など韓国映画と関連する膨大  
な映像情報を1つの場所で統合検索サービスを行えるように支援する国内最大の韓国映画データベ  
ースです」と説明されている。(韓国映像資料院)  
<http://www.koreafilm.or.kr/main/main.asp>

141 シネマコリアは、「2007年現在、ボランティアベースで運営される、法人格の無い非営利団体である」  
と記されている。(代表：西村嘉夫) <http://cinemakorea.org/index.htm>

142 輝国山人 <http://www.hf.rim.or.jp/~t-sanjin/index.html>

143 2007年の放送界の禁忌について、同じような内容の記事が5つある。全て同じ日に記事がインター  
ネット上にアップされており、文章もほとんど似ている。

「2007 , (2007放送界、禁忌を壊す)」『PD (PDジャーナル) 』2007年12月  
26日10時43分、<http://pdjournal.com/////criticism/onair.php?no=51> (2007年12月取得)

「 ‘ , ‘가 ‘ , 2007 (同性愛、家父長崩壊、夫婦の性、2007禁忌  
を壊す)」『 (マイデイリー) 』2007年12月26日11時25分  
<http://news.media.daum.net/entertain/broadcast/200712/26/mydaily/v19387557.html> (2007年12  
月取得)

「2007 , (2007放送界、禁忌の壁を越える)」『 / (国民  
日報/クッキーニュース) 』2007年12月26日12時15分

<http://news.media.daum.net/entertain/broadcast/200712/26/kukinews/v19388520.html> (2007年12  
月取得)

「2007 , ! (2007放送界、禁忌の壁を越える!)」『 (世界日報) 』  
2007年12月26日15時28分、<http://news.media.daum.net/net/200712/26/segye/v19390934.html>

- (2007年12月取得)  
 「2007 , (2007放送界、禁忌の壁を越えた)」『OSEN』2007年12月26日  
 18時10分、<http://news.media.daum.net/entertain/broadcast/200712/26/poctan/v19393916.html>  
 (2007年12月取得)
- 144 (ON\*MEDIA) <http://www.onmedia.co.kr/> ケーブルテレビ、衛星放送業
- 145 「2007 , (2007放送界、禁忌を壊す)」『PD (PDジャーナル)』2007年12月26日  
<http://pdjournal.com/////criticism/onair.php?no=51> (2007年12月取得)
- 146 同上記事
- 147 同上記事
- 148 同上記事
- 149 「2007 , ! (2007放送界、禁忌の壁を越える)」『 (世界日報)』  
 2007年12月26日、<http://news.media.daum.net/net/200712/26/segye/v19390934.html> (2007年12月取得)
- 150 同記事
- 151 「朴賛郁監督『韓国映画のタブーは親北と親日』『朝鮮日報』日本版、2006年4月10日  
<http://www.chosunonline.com/article/20060410000043> (2006年12月取得)
- 152 『 (放送法)』2000年新規制定、2007年一部改定。その中の審議に関する規定は、第33条である。
- 第33条 審議規定
- ①委員会は放送の公正性及び公共性を審議するために、放送審議に関する規定（以下審議規定とする）を制定・公表しなければならない
  - ②第1項の審議規定には次の各号の事項が含まなければならない
    1. 憲法の民主的基本秩序の維持と人権尊重に関する事項
    2. 健全な家庭生活保護の冠する事項
    3. 児童及び青少年の保護と健全な人格形成に関する事項
    4. 公衆道徳と社会倫理に関する事項
    5. 両性平等に関する事項
    6. 国際的友誼増進に関する事項
    7. 障がい者など放送疎外階層の権益増進に関する事項
    8. 民族文化の暢達と民族の主体性を培うことに関する事項
    9. 報道、論評の公正性・公共性に関する事項
    10. 言語純化に関する事項
    11. 第99条及び第100条の規定による是正及び制裁措置と再審手続きに関する事項
    12. 他、法の規定による委員会の審議業務に関する事項
  - ③放送事業者は児童と青少年を保護するために放送プログラムの暴力性及び淫乱性等の有害程度、視聴者の年齢などを考慮し、放送プログラムの等級を分類し、これを放送中に表示しなければならない
  - ④委員会は第3項の放送プログラム等級分類と関連し、分類基準など必要な事項を委員会規定として定め、公表しなければならない
  - ⑤委員会は第3項の規定により放送事業者が自主的に付与する放送プログラムの等級に対して適切でないと判断した場合、該当放送事業者に対して放送プログラムの等級分類を調整するよう要求することができる
- 153 「 (映画、ビデオ輸入推薦及び等級分類基準)」  
 1999年制定、2000年改定  
<http://www.kafai.or.kr/asapro/board/show.htm?bn=law&fmlid=22&pkid=23&startTextId=0&buffer=41&categoryValue=&tthisPage=1&jk=1&mode=&srchValue=&searchTemp=&term=&stSLT=> (2008年1月取得)  
 この基準は (映画人会議 <http://www.kafai.or.kr/>) の掲示板を参照している。
- 第2章 等級分類基準  
 第3条 等級分類基準

- ①全体観覧可：全ての年齢の観覧客が観覧（利用）できる映画、ビデオ
  - 1. テーマ及び内容を全ての観客が理解できること
  - 2. 台詞及び映像において淫乱、暴力その他年少者に有害な表現が無いこと
  - 3. その他一般的に容認されていない特定の思想、宗教、風俗等年少者に精神的、肉体的に有害な表現が無いこと
- ②12歳観覧可：12歳未満の観覧客は観覧（利用）できない映画、ビデオ（但し、映画は両親又はそれに順ずる保護者同伴時は観覧可）
  - 1. テーマ及び内容は映画の場合12歳未満の者が理解できないもの、又は両親やこれに順ずる保護者の直接的指導を受けて観覧できる場合に理解することができるもの
  - 2. 台詞及び映像において12歳未満の者が正常な家族関係や学校教育家庭などを通じて接することができない水準の有害な表現があるもの、又は映画の場合保護者の直接的指導を受けて観覧できる場合理解できるもの
  - 3. その他12歳未満の者が保護者の指導なしに観覧する場合、精神的、肉体的に害を及ぼす恐れのある特定の思想、宗教、風俗等に関する事項が表現されているもの
- ③15歳観覧可：15歳未満の観覧客は観覧（利用）できない映画、ビデオ（2000年新設）
  - 1. テーマ及び内容を15歳未満のものが家族、学校及びこれに順ずる社会的集団等において得られる知識と経験を持って十分理解できないもの
  - 2. 台詞及び映像において15歳未満のものが家族学校及びこれに順ずる社会的集団等において公開的、正常的活動などを通じて経験できない水準の淫乱性、暴力性等が表現されているもの
  - 3. その他15歳未満の者が観覧する場合、精神的、肉体的に害を及ぼす恐れのある特定の思想、宗教、風俗等に関する事項が表現されているもの
- ④18歳観覧可：18歳未満の観覧客は観覧（利用）できない映画、ビデオ
  - 1. テーマ及び内容を18才未満の者の一般的知識や経験では理解できないもの
  - 2. 台詞及び映像において18歳未満のものが観覧（利用）する場合、有害な影響を及ぼす恐れのある淫乱性、暴力性が直接的、具体的に表現されているもの
  - 3. その他18歳未満のものが観覧（利用）する場合、精神的、肉体的害を及ぼす恐れのある特定の思想、宗教、風俗等に関する事項が直接的、具体的に表現されているもの

### 第3章 映画、ビデオ保留基準

#### 第4条 等級分類保留基準

等級を保留するにおいて当該映画、ビデオが次の各号の1つに該当すると認定された場合、等級分類を保留することがある

- 1. 憲法の民主的基本秩序に違背又は国家の権威を損傷する憂慮がある時
- 2. 暴力、淫乱等の過度な描写で美風良俗を害するもの、又は社会秩序を乱す恐れのある時
- 3. 国際的外交関係、民族の文化的主体性等を毀損し、国益を害する恐れのある時

#### 第5条 憲法の民主的基本秩序

憲法の民主的基本秩序の位置に背く恐れがある場合は次の通りである

- 1. 憲政秩序を明白に否定、批判するもの
- 2. 自由民主主義体制を批判、謀略、否定する内容を特に意図的に強調して描写したもの
- 3. 正当な法執行を嘲弄批判して描写したもの

#### 第6条 国家の権威

国家の権威を損傷する憂慮がある場合は次の通りである

- 1. 反国家的内容があると認定されるもの
- 2. 反国家的行動を描写し大衆を扇動するもの

#### 第7条 暴力描写

過度な暴力の描写で社会秩序を乱す恐れのある場合は次の通りである

- 1. 暴行、傷害、拷問、殺害などの犯罪行為を過度に残忍に描写したもの
- 2. 武器使用、身体損壊、動物虐待などを正当化して過度に残忍に描写したもの
- 3. 犯罪行為を美化し正当な手段として描写したもの
- 4. 尊卑、老人、児童、女性の虐待を正当化し勧奨する恐れのあるもの
- 5. 暴動、群集虐殺等の集団暴力を過度に直接的に描写したもの

6. 不良青少年又は組織暴力等の退廃的行為や残忍な行動を具体的、刺激的に描写し、正当化したもの

#### 第8条 淫乱描写

性、淫乱等の過度な描写で健全な家庭生活や美風良俗を害する恐れのある場合は次の通りである

1. 性犯罪など犯罪を正当化するもの
2. 人体の特定部分を拡大し露出させ、性行為場面が過度に淫乱で扇情的なもの
3. 奇声、奇怪な声を伴った原色的で直接的な性愛を描写したもの
4. 社会通念にそぐわない変態的性行為、同性愛、混淫、売春、強姦、輪姦、近親相姦、屍姦、獣姦等の性行為を過度に描写したもの
5. 児童及び青少年を性暴力遊戯の対象として直接描写したもの
6. 動物の特定部位又は動作を描写し、性的羞恥心を感じさせるもの

#### 第9条 美風良俗及び社会秩序

1. 尊卑の拡大を正当化するもの
2. 賭博など射幸心を美化し助長したもの
3. 麻薬の吸引、注射及び不正医療行為等を意図的に過度に詳しく描写したもの
4. 自殺行為を勧奨する憂慮があるもの
5. 障がい者、老弱者等社会の弱者を卑下又は嘲弄の対象として描写したもの
6. 未成年者の酷使、児童の誘拐を正当化したもの
7. 集団疎外行為を正当化し健全な人間関係を害する憂慮があるもの
8. 仮想現実、ビデオ、電子ゲーム等、他媒体を通じた間接形式で過度に刺激的に描写したもの
9. 社会の伝統や倫理意識及び公衆道徳を歪曲し、非難又は秩序意識を顕著に害したもの
10. ビデオの場合：健康及び医薬と関連したビデオの場合、証明されていない事実に基づくもの

#### 第10条 国際的外交関係

国際的外交関係などを毀損し、国益を害する恐れのある場合は次の通りである

1. 外国との正常的国交関係を害する恐れのあるもの
2. 国際間の友好を毀損する恐れがあるもの
3. 客観的事実ではなく、友邦国家を特に意図的に敵対視して描写したもの

#### 第11条 文化的主体性

民族の文化的主体性などを毀損し、国益を害する恐れがある場合は次の通りである

1. 国民の一般情緒に反する恐れがあると認定されるもの
2. 美風良俗を悪意的に描写し、国民の健全な情緒を害するもの
3. 歴史を歪曲し殉国先烈（国に命を捧げた烈士）等を卑下し、事実と異なる描写をしたもの

#### 第12条 題名・台詞

映画、ビデオの題名又は台詞は過度に猥褻、低俗であってはならない

154 「（映画及びビデオの振興に関する法律）」

2006年新規制定、2007年一部改定。映画の等級分類に関しては、第29、30条に定められている。

#### 第29条 映像等級分類

①映画業者は制作又は輸入した映画（予告編及び広告映画を含む）に対してその上映前までに第71条の規定による映像物等級委員会（以下映像物等級委員会とする）から上映等級の分類を受けなければならない。しかし、次の各号に該当する映画に対してはその限りではない。

1. 報酬を受けず、特定の場所で青少年が含まれない特定の人に限り上映する小型映画・短編映画
2. 映画振興委員会が推薦する映画祭で上映する映画
3. 国際的文化交流の目的で上映する映画等文化観光部長官が等級分類は必要ないと判断する映画

②第1項本文の規定により映画の上映等級は次の各号の通りである。しかし、予告編・広告映画等映画上映前に上映される映画は第1号に該当する場合に限り上映等級の分類を受けることができる

1. 全体観覧可：全年齢に該当する者が観覧できる映画
  2. 12歳以上観覧可：12歳以上の者が観覧できる映画
  3. 15歳以上観覧可：15歳以上の者が観覧できる映画
  4. 青少年観覧不可：青少年は観覧することができない映画
  5. 制限上映可：上映及び広告、宣伝において一定の制限が必要な映画
- ③誰でも第1項及び第2項の規定に違反し上映等級の分類を受けられなかった映画を上映してはならない
- ④誰でも第2項第2号又は第3号の規定による上映等級に該当する映画の場合には該当映画を観覧できる年齢に達していない者を入場させてはならない。但し、両親など保護者同伴の場合にはその限りではない
- ⑤誰でも第2項第4号又は第5号の規定による上映等級に該当する映画の場合には青少年を入場させてはならない
- ⑥誰でも第1項の規定による分類を受けた上映等級分類を偽造、上映等級分類を受けた映画の内容を変更して映画を上映してはならない

第30条 映画上映等級に関する規定

- ①映像物等級委員会は第29条の規定による上映等級分類業務の公正で客観的遂行のため映画上映等級に関する規定を制定・交付しなければならない
- ②第1項の映画上映等級に関する規定には映画上映等級の分類手続き、方法及び分類基準が含まなければならない
- ③映像物等級委員会は映画上映等級の分類基準の決定において次の各号の事項を考慮しなければならない
1. 「大韓民国憲法」の民主的基本秩序の維持と人権尊重に関する事項
  2. 健全な家庭生活と児童及び青少年保護に関する事項
  3. 公衆道徳及び社会倫理の推進に関する事項
  4. 健全な国際的外交関係の維持に関する事項
  5. 映画の主題及び内容の暴力性・淫乱性等に関する事項

155 「 (映画及びビデオ等級分類基準)」2006年施行。

(映像物等級委員会) <http://www.kmrb.or.kr/>

156 川村湊『アリラン坂のシネマ通り』集英社、2005年、216頁

157 洪上旭「価値意識の変化と韓国女性の暮らしと地位：1960年代以後を中心に」山中美由紀編『変貌するアジアの家族—比較・文化・ジェンダー—』昭和堂、2004年

158 本文中に最近としか表記がなかった。筆者が使用している資料の最新版が2003年度であったので2003年と推測した。

159 洪上旭前掲、181頁

160 洪上旭前掲、193頁

161 洪上旭前掲、195頁

162 張和卿「韓国のテレビドラマにおける「結婚物語」の分析」山中美由紀編前掲、212頁

163 張和卿前掲、218頁

164 「『 (妻は教師、夫は医者が「一番いい」) 』 (連合ニュース) 』2006年6月27日

<http://news.media.daum.net/culture/art/200606/27/yonhap/v13176231.html> (2007年12月取得)

165 「『 가 ] (同性愛、ケーブルテレビ「占領」) 』 (日刊スポーツ) 』2004年12月3日

<http://news.media.daum.net/entertain/movie/200412/03/hankookis/v7855610.html> (2008年1月取得)

166 シネマコリア [http://cinemakorea.org/korean\\_movie/movie/bungee.htm](http://cinemakorea.org/korean_movie/movie/bungee.htm) 同サイトの記事「バンジージャンプする」(2001年12月15日)では、「同性愛とも思えるコードが入っているため、韓国公開後には公式ホームページの掲示板で『この映画はゲイ映画か否か?』について論議沸騰。シナリオ作家のコ・ウンミは『私としては、同性愛映画か異性愛映画かを区別すること自体が無意味な映画を作ってみたかった』との書きこみを掲示板にアップした。また、劇中の同性愛者に対する周囲の反応につ

- いても評壇・観客を問わず賛否両論。熱狂的に受け入れる者もいれば、『同性愛を商業利用した』との  
 厳しいコメントも。」と紹介されている。
- 167 これらの映画祭に韓国からいくつかの作品が出品されている。Asian Queer Film & Video Festival  
 in Japan 2007 <http://aqff.jp/2007/index.html>、東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 2006  
<http://www.tokyo-lgff.org/2006/index.html>
- 168 「“ 가 ‘ ’ 가 ” (ベトナムの未婚女性は奴隷ですか?)」『 (オーマイニ  
 ュース)』2006年5月21日  
<http://news.media.daum.net/society/affair/200605/21/ohmynews/v12772658.html> (2006年8月取  
 得)
- 169 「 ? (処女証明書?韓国国際結婚売買実態深刻)」  
 『 (パイメディア)』2006年5月20日  
<http://news.media.daum.net/culture/art/200605/20/tvreport/v12766824.html> (2006年8月取得)
- 170 高翔龍「韓国家族法の大改革」『ジュリスト』1294号、2005年、87-88頁
- 171 同上論文、90-91頁

## 図表リスト

図

図 1	『オオカミの誘惑』(2004) 人間関係 .....	81
図 2	人気俳優の年齢 .....	94
図 3	人気女優の年齢 .....	95
図 4	中学校・高等学校数 .....	98
図 5	男女平均賃金格差 .....	108
図 6	日・韓における配偶者の重視要素(女性) .....	112
図 7	日・韓における配偶者の重視要素(男性) .....	113
図 8	年齢別経済活動参加率 .....	121
図 9	女性の就業に対する意識 .....	122
図 10	婚姻数及び離婚数 .....	144
図 11	婚姻形態別婚姻構成比 .....	145
図 12	性別再婚件数及び再婚比率 .....	146
図 13	再婚に対する意識—1998年、2002年 .....	147
図 14	再婚に対する意識—世代別(2002) .....	147
図 15	出産順別出生性比グラフ .....	158
図 16	離婚数及び離婚率(人口千対) .....	172
図 17	離婚件数及び離婚率(人口千対)—日本 .....	173
図 18	韓国と日本の離婚率推移 .....	173
図 19	同居期間別離婚構成比 .....	174
図 20	離婚に対する意識(1998、2002) .....	176
図 21	離婚に対する意識(2002)—世代別 .....	176
図 22	不倫・外道の検索結果 .....	177



表

表 1	人気俳優の年齢 .....	94
表 2	人気女優の年齢 .....	95
表 3	年齢別経済活動参加率 .....	121
表 4	女性の就業に対する意識 .....	122
表 5	分類表 .....	134
表 6	婚姻数及び離婚数 .....	144
表 7	婚姻形態別婚姻構成比 .....	145
表 8	性別再婚数及び再婚比率 .....	146
表 9	出産順別出生性比 .....	158
表 10	離婚数及び離婚率 .....	172
表 11	同居期間別離婚構成比 .....	174
表 12	離婚に対する意識 .....	175
表 13	世帯主の婚姻状態別片親世帯 .....	191

## 参考文献

### 著書

- アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会編『アジアフォーカスブックレット 4—韓国映画・新世紀』アジアフォーカス・福岡映画祭実行委員会、2004年
- アン・ヨンヒ『シナブロー若い韓国を知る本』小学館、2002年
- 石坂浩一・館野哲『現代韓国を知るための55章』明石書店、2000年
- 石坂浩一『トーキングコリアンシネマ』凱風社、2005年
- 伊藤順子『病としての韓国ナショナリズム』洋泉社、2001年
- 李効再（金学鉉監訳）『分断社会と女性・家族—韓国の社会学的考察』社会評論社、1988年
- 李分一『現代韓国と民主主義』大学教育出版、1999年
- 任栄哲『韓国の日常世界』ベストセラーズ、2004年
- 李泳采・韓興鉄『なるほど！これが韓国か—名言・流行語・造語で知る現代史』朝日新聞社、2006年
- 李英一・佐藤忠男（凱風社編集部訳）『韓国映画入門』凱風社、1990年
- ウォーレン・バックランド（前田茂・要真理子訳）『フィルムスタディーズ入門』晃洋書房、2007年
- 小倉紀蔵『韓国は一個の哲学である』講談社、1998年
- 小倉紀蔵『韓国人のしくみ』講談社、2001年
- 小倉紀蔵『韓流インパクト—ルック코리아と日本の主体化』講談社、2005年
- 小栗康平『映画を見る眼』日本放送出版協会、2005年
- 呉善花『新スカートの風—日韓=合わせ鏡の世界』三交社、1992年
- 呉善花『濃縮パック—コリアンカルチャー』三交社、2003年
- 呉善花『日韓、愛の幻想』文藝春秋、2006年
- 加藤秀一『<恋愛結婚>は何をもたらしたか—性道徳と優勢思想の百年間』筑摩書房、2004年
- 加藤幹郎編『映画学的想像力』人文書院、2006年
- 川島淳子『韓国美人事情』洋泉社、2001年
- 川西玲子『歴史を知ればもっと面白い韓国映画』ランダムハウス講談社、2006年
- 川村湊『アリラン坂のシネマ通り』集英社、2005年
- 韓流隊『ステキな韓国！愛がいっぱい！』竹書房、2005年
- 韓流隊『もっともっと韓国を知りたい』竹書房、2005年
- 韓流隊『気分は「韓ドラ」ヒロイン！』竹書房、2005年

金鐘文（村山匡一郎編）『韓国映画躍進の秘策—韓日文化交流の新時代』パンドラ、2004年

金東椿（水野邦彦訳）『近代のかげ—現代韓国社会論』青木書店、2005年

黒田勝弘『韓国人の発想』徳間書店、1993年

黒田福美『となりの韓国人—傾向と対策』講談社、2003年

小林孝行『変貌する現代韓国社会』世界思想社、2000年

小林竜雄『韓流、純愛、初恋病。喪失感を抱いて生きること』中央公論新社、2005年

在韓日本女性ユニオン『韓国女性「厚化粧」の裏側』小学館、2000年

斉藤綾子編『日本映画史叢書 6—映画と身体／性』森話者、2006年

佐藤忠男編『アジア映画小事典』三一書房、1995年

佐藤忠男『映画の真実』中央公論新社、2001年

佐藤忠男『映画から見えてくるアジア』洋泉社、2005年

島本みどり・水谷啓子・森田園子・油谷純子『韓国の働く女性たち』東方出版、2003年

城西国際大学ジェンダー・女性学研究所編『ジェンダーで読む＜韓流＞文化の現在』現代書館、2006年

舘野哲『韓国式発想法』日本放送出版協会、2003年

崔吉城（真鍋祐子訳）『恨の人類学』平河出版社、1994年

チャン・ピルファ、クォン・インスク、キム・ヒョンスク、イ・サンファ、シン・オク、シン・イルリ  
ョン、ユン・フジョン（西村裕美編訳）『韓国フェミニズムの潮流』明石書店、2006年

曹喜澈『現代韓国を知るキーワード 77』大修館書店、2002年

曹喜澈『食わず嫌いの韓国—ドラマに探る「現代韓国と韓国人」』グラフ社、2006年

趙惠貞（春木育美訳）『韓国社会とジェンダー』法政大学出版局、2002年

鄭大均『韓国のイメージ—戦後日本人の隣国観』中央公論社、1995年

鄭大均『日本（イルボン）のイメージ—韓国人の日本観』中央公論社、1998年

寺脇研『韓国映画ベスト 100—『JSA』から『グエムル』まで』朝日新聞社、2007年

土佐昌樹『変わる韓国、変わらない韓国』洋泉社、2004年

土佐昌樹・青柳寛編『越境するポピュラー文化と＜想像のアジア＞』めこん、2005年

豊田有恒『いま韓国人は何を考えているのか』青春出版社、2002年

中村隆文『男女交際進化論「情交」か「肉交」か』集英社、2006年

日韓「女性」共同歴史教材編纂委員会編『ジェンダーの視点からみる日韓近現代史』梨の木舎、2005年

野平俊水『韓国人の日本偽史』小学館、2002年

ハイパープレス『「韓国人」そこが知りたいドッキリ雑学』青春出版社 2000年

朴順愛・土屋礼子『日本大衆文化と日韓関係—韓国若者の日本イメージ』三元社、2002年

服部民夫『(東アジアの国家と社会4) 韓国—ネットワークと政治文化』東京大学出版会、1992年

春木育美『現代韓国と女性』新幹社、2006年

ビョン・ヨンジュ (田端かや監訳)『アジアで女性として生きるということ』家族社、2003年

古田博司・小倉紀藏編『韓国学のすべて』新書館、2002年

古田博司『朝鮮民族を読み解く』筑摩書房、2005年

増田幸子『アメリカ映画に現れた「日本」イメージの変遷』大阪大学出版会、2004年

水田宗子・長谷川啓・北田幸恵編『韓流サブカルチャーと女性』至文堂、2006年

水野邦彦『韓国社会意識素描—現代韓国人と社会』花伝社、2002年

水野俊平『韓国の若者を知りたい』岩波書店、2003年

山田和夫『映画で世界を読む』新日本出版社、2001年

山中美由紀編『変貌するアジアの家族—比較・文化・ジェンダー—』昭和堂、2004年

山本登志哉・伊藤哲司編『アジア映画をアジアの人々と愉しむ』北大路書房、2005年

八幡薫『韓流道』宝島社、2006年

ユ・サンチョル、アン・ヘリ、チョン・ヒョンモク、キム・ジュンスル、チョン・ガンヒョン (蓮池薫  
訳)『韓流熱風 (映画・テレビドラマ・音楽—強さの秘密)』朝日新聞社、2006年

四方田犬彦『アジア映画の大衆的想像力』青土社、2003年

四方田犬彦『大好きな韓国』ポプラ社、2003年

リュウ・ヒジュン『日本人ではわからない韓国のジョーシキ』実業之日本社、2005年

若松實『韓国の冠婚葬祭』高麗書林、1982年

渡部昌平『つきあいきれない韓国人』中央公論新社、2006年

『「映画ファンのための」韓国映画読本』ソニー・マガジンズ、2007年

『韓国 DVD 名盤カタログ』学習研究社、2006年

『韓国シネマコレクション—Korean Movie Database 1995-2006』キネマ旬報社、2006年

『韓国語ジャーナル 17号』アルク、2006年

『韓国語ジャーナル 19号』アルク、2006年

『韓流 DVD パーフェクトガイド (2007—2008年最新版)』ぴあ、2007年

『講座家族 8』弘文堂、1974年

『朝鮮を知る事典』平凡社、2000年

『	開化期	開花期	』	、2006年
『			』	、2003年
・ 『			』	、2004年
・ 『			』	、2004年
『2006			』	
『2007			』	
	『2005		』	
	『2005		』	
『	1996』			、1996年
『	1997』			、1997年
『	1998』			、1998年
『	1999』			、1999年
『	2000』			、2000年
『	2001』			、2001年
『	2002』			、2002年
『	2003』			、2003年
『	2004』			、2004年
『	2005』			、2005年
『	2006』			、2006年

## 論文

安部嘉昭「都市論的不安—韓国映画 VS 瀬々敬久」『ユリイカ』33巻13号、2001年

李銀沢「女が結婚を決意するとき」『アプロ21』2(11)、1998年

李銀沢「赦しと救いが軸の恋愛小説—「月の地平線」尹大寧著」『アプロ21』3(3)通号25号、1999年

李銀沢「改めてよみがえる家族の絆」『アプロ21』3(2)通号24号、1999年

五十嵐暁郎「韓国映画の世界から—積年の社会矛盾に悩む世代」『潮』通号410号、1993年

李璟媛「現代韓国社会の性別役割分業体制の規定要因」『季刊家計経済研究』38号、1998年

李璟媛「韓国の大学生の意識調査から見る性別役割分業の維持メカニズム」『国立女性教育会館研究紀要』第5号、2001年

李璟媛・呉貞玉「再婚に関する韓国と日本の比較研究」『家族関係学』22、2003年

李光圭（金至子訳）「婚姻制度の変遷」『月刊韓国文化』通号 268 号、2002 年

李志遠（三橋広夫訳）「分断・戦争と民主化の韓国現代史」『歴史地理教育』702（増刊）、2006 年

李芝英「韓国における女性政策のパラダイムの変化」『論叢／筑波大学人文社会学研究か現代文化・公共政策専攻』5 号、2007 年

イ・ジョンウン（井上吾郎訳）「韓国スター論—ハン・ソッキュ&シム・ウナ」『ユリイカ』33 卷 13 号、2001 年

李秀子（金榮愛訳）「韓国人の結婚観」『月刊韓国文化』通号 268 号、2002 年

市山尚三「韓国映画のルネッサンス—国際映画祭から見えてくるもの」『ユリイカ』33 卷 13 号、2001 年

李青若「韓国映画を見て考える家族「あなたが女というだけで」」『季刊女子教育もんだい』60 号 1994 年

伊藤亜人「文化人類学からみた韓国論—韓国の人間関係—」『現代コリア』275 号、1987 年

井上和枝「朝鮮新女性の「近代」受容と「近代」体験」『韓国朝鮮の文化と社会』2、2003 年

井上和枝「日韓「新女性」研究の現状—「日韓ジェンダー史研究シンポジウム」に寄せて—」『歴史論評』No.612、2001 年

李炳宗「「男尊」韓国に挑む女たち」『News Week』20（19）955 号、2005 年

李百鎬「「文化産業論」と韓国の大衆文化」『社会文化研究』第 7 号

李文雄（都知美訳）「血縁観の持続と変容—現代韓国の親族関係」『都市文化研究』3 号、2004 年

上野昂志「関係の非対称性—ホン・サンス監督作品「豚が井戸に落ちた日」」『ユリイカ』33 卷 13 号、2001 年

小倉紀藏「儒教的韓国における性愛と反・性愛」『木野評論』33、2002 年

小栗康平「生きた映画に出会うために」『ユリイカ』33 卷 13 号、2001 年

小田克也・菅沼正子・兪澄子「「アダダ」と韓国映画のヒロインたち」『キネマ旬報』1107、1993 年

小針進「躍動アジア「韓流」で変化の兆しもある韓国人の対外意識」『世界週報』85（49）、2004 年

呉英蘭「韓国の女性福祉政策におけるジェンダー規定」『仏教大学大学院紀要』33 号、2005 年

上大田光成「韓国ガイドに載らない韓国—最近の韓国映画に見る韓国社会—」『Aff』31（1）、2000 年

上別府正信「恨の社会的意味：共同幻想としての恨—映画『西便制』と『西便制』シンドロームに現れた恨を中心に—」『大学院研究年報：総合政策研究科篇』6、2002 年

川邊一外「メロドラマ研究①韓国映画『四月の雪』に観る」『シナリオ』61（11）、2005 年

川本三郎「新・都市の感受性—友情の輝きと、その終わり—韓国映画『友へチング』」『新・調査情報 passing time』2 期 34、2002 年

菊池宏義「韓国の徴兵制の現実を読む」『歴史地理教育』702（増刊）、2006年

キム・ソヨン（齋藤一訳）「宙ぶりの近代—韓国映画におけるフェティシズムの論理」『トレイシーズ』1号、2000年

金素栄「消え行く韓国人女性たち—グローバル資本主義体制下の韓国型ブロックバスター映画に見る無意識の視覚とジェンダー・ポリティクス」『ユリイカ』33巻13号、2001年

キム・ソンウク「韓国女性政策の現状と課題」『女性学研究』12号、2005年

金恵信「韓国映画が映す日常と純愛と歴史」『季刊戦争責任研究』第53号、2006年

金恵善「近年の韓国における離婚の動向」『高知女子大学紀要：社会福祉学部編』第51巻、2002年

金明洙（大塚毅彦訳）「変わりゆく若者の人生観」『月刊韓国文化』3号（通号280号）、2003年

金榮勲（金榮愛訳）「現代韓国の結婚事情」『月刊韓国文化』通号268号、2002年

鴻農映二「フレッシュな魅力を増した韓国映画—規制緩和が変貌を促す」『世界週報』70（30）、1989年

高翔龍「韓国家族法の大改革」『ジュリスト』No.1294、2005年

高翔龍「2005年春大改正された韓国家族法の現況」『東洋文化研究』8号、2006年

高星清「読み物—韓国或いは韓国人の特徴」『日韓経済協会協会報』391、2004年

小林孝行「韓国家族の変容と家族政策」『文化共生学研究』第4号、2006年

小林和美「韓国の家族と女性—家事・子育て・高齢者不要を巡る現状—」『公民論集』13、2004年

佐々木正徳「韓国における男性性」研究の意義についての一考察『九州教育学会研究紀要』31巻、2003年

佐々木正徳「男性運動団体参加者の事例から見る韓国の男性性」『日本ジェンダー研究』9、2006年

佐藤忠男「韓国映画に見る労働観—第三世界離脱へまっしぐら」『月刊総評』309、1983年

佐藤忠男「韓国映画と“恨”の精神」『月刊総評』359、1987年

佐藤忠男「映像文化とはなにか2—韓国映画の新時代」『公評』41（8）、2004年

白井京「韓国の女性関連法制—男女平等の実現に向けて—」『外国の立法』226、2005年

瀬々敬久「愚鈍と誠実」『ユリイカ』33巻13号、2001年

簗盛忠「読み物—韓国人はせっかちだ」『日韓経済協会協会報』343、2000年

武田滋樹「危機に立つ家族15—女性が変える伝統的結婚観：韓国」『世界思想』29（3）、2003年

田端かや「1990年以降の韓国女性政策とその背景」『女性学研究』12号、2005年

崔鳳永・崔俊植・咸在鳳「ROUNDTABLE 韓国人の価値観、その過去と現在」『Koreana』11(1)、1998年

チェ・ミエ（庄山則子訳）「マイノリティ映画のために—韓国前衛映画の考察」『ユリイカ』33巻13号、2001年

池東旭「ソウル・コンフィデンシャル(42) 韓国人の一生に付きまとう数々のタブー」『世界週報』78(40)、1997年

池明観「歴史文化ノート—韓国映画について」『月刊韓国文化』10号(通号287号)、2003年

張慶燮「急激に進んだ近代化と韓国の家族—家族観にみる偶発的多元性」『APC アジア太平洋研究』第9号、2001年

曹恩「「圧縮発展」した韓国社会と家族文化」『コリアフォーカス』VOL.5 (No.3)、1997年

趙孝英「個人生活を楽しむ新世代のスタイル」『月刊韓国文化』3号(通号280号)、2003年

チョ・ユンジュ(米津篤八訳)「韓国映画の<リアリズム>—近代性と抑制のメカニズム」『ユリイカ』33巻13号、2001年

千二斗「韓国的“恨”について—特にものあわれとの比較を中心に—」『朝鮮学報』131号、1989年

鄭聖一(崔盛旭訳)「なぜソンファは結局、弟と別れなければならないのか。あるいはイム・グオンテク映画の症候と韓国という現像の倫理学」『ユリイカ』33巻13号、2001年

鄭賢熙「韓国におけるフェミニズム運動と家族法の変遷」『現代社会文化研究』37号、2006年

常石希望「日本における韓国論・韓国文化論—その概念と歴史—」『言語と文化』3号(通号30)、2000年

常石希望「韓国基層文化としての人間関係性の概念」『愛知大学国際問題研究所紀要』115、2001年

中尾美知子「族譜の世界—韓国・北朝鮮の家族」『NIRA 政策研究』11(8)、1998年

中町綾子「韓国ドラマの魅力はここだ—日本にも懐かしい恋愛シーンのときめき」『GALAC』419号、2004年

長町理恵子「韓国における高学歴化とジェンダー格差」『日本経済研究センター会報』928、2005年

西岡健治「『春香伝』をよむ—途な愛を伝える磨かれた言葉」『月刊みんぱく』5号、2002年

朴貞恵(金至子訳)「伝統的な婚礼と風俗」『月刊韓国文化』通号268号、2002年

朴承寛「韓国社会の近代化過程と社会的コミュニケーション世界の変動」『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』68、2005年

朴惠蘭「現代韓国女性の生き方」『部落解放』494号、2001年

咸在鳳「儒教と世界化—特殊性と普遍性の問題—」『コリアフォーカス』Vol.5 (No.3)、1997年

春木育美「90年代以降の韓国における女性政策の展開とその背景」『女性学研究』11号、2004年

韓周希「女性労働力の活用と企業の競争力」『コリアフォーカス』Vol.5 (No.2)、1997年

韓亨九(朴洪仁訳)「韓国近代恋愛文学小史」『比較文學研究』No.82、2003年

玄基栄(愛沢革訳)「われわれはどうなっているか—韓国人の正体性」『新日本文学』54(1)、1999年



- 片智媛「韓国における最近の離婚動向研究（上）」『比較法学』30巻2号、1997年
- 片智媛「韓国における最近の離婚動向調査研究（下）」『比較法学』32巻1号、1998年
- 黄晶美（横田伸子訳）「発展国家と母性—1960～70年代の‘婦女政策’を中心に—」『東亜経済研究』62（2）、2003年
- 裴海善「韓国女子労働の構造変化と政策—1963～2003年までの40年間—」『国際文化研究所論叢』15、2004年
- ポール・ウィルマン（趙慶喜訳）「近代化および韓国映画の問題」『ユリイカ』33巻13号、2001年
- ホ・ジノ「不在の欲望、待合室の映画『春の日は過ぎ行く』」『ユリイカ』33巻13号、2001年
- 朴木佳緒留・長ヶ原誠・津田英二・松岡廣路「夫婦の日常生活行動と愛情表現の関連性に関する国際比較研究（第一報）—日本、中国、韓国、スウェーデン、オーストラリアの5カ国比較—」『神戸大学発達科学部研究紀要』第11巻（第2号）、2004年
- 洪日杓（金榮愛訳）「新しい労働世界への挑戦と希望」『月刊韓国文化』3号（通号280号）、2003年
- 増田幸子「日韓合作ドラマが描く「恋愛」」『比較文化研究』No.69、2005年
- 水野邦彦・荻原いずみ「韓国的人間関係素描」『北海学園大学学園論集』第116号、2003年
- 三橋尚子「韓国映画を通じて文化の相互理解を」『歴史地理教育』702（増刊）、2006年
- 山田和夫「韓国映画再生への軌跡をたどる」『経済』111、2004年
- 山地久美子「韓国の新人口政策—未婚率の上昇と出生奨励政策」『国際文化学』第9号、2003年
- 梁仁實「映画のなかのソウル表象—1996年以降の韓国映画を中心に—」『都市文化研究』9、2007年
- 梁善姫「定年離婚」『コリアフォーカス』VOL.5（No.6）、1997年
- 柳在喆「韓国と日本の事実婚の比較的研究」『世界平和研究』No.152、2002年
- 劉載天「十代の好みに触まれた大衆文化」『コリアフォーカス』
- 劉智娜（門間貴志訳）「映画と国家—重層的意味作用に関する考察—70年代史劇と韓国映画ルネサンス時代大衆映画を通じて」『明治学院大学藝術学研究』15、2005年
- 柳弘林「多文化主義と韓国社会」『コリアフォーカス』Vol.6（No.3）、1998年
- 四方田犬彦「自然主義者、金綺泳」『ユリイカ』33巻13号、2001年
- 四方田犬彦・石坂健治「グローバリゼーションと韓国映画」『情況』第三期4（8）、2003年
- 李東瑗・金貞任「韓国の現代家族の変動」『家族社会学研究』第13巻（第2号）、2002年
- 連城三紀彦「八月のクリスマス—韓国映画の光」『ユリイカ』33巻13号、2001年
- 「スクリーンクォーターへの所感、二編」『コリアフォーカス』Vol.7（No.1）、1999年
- 「読み物—韓国人のライフスタイル」『日韓経済協会協会報』345、2000年

「読み物—日本人が感じた韓国人の特徴 100 項目」『日韓経済協会協会報』389、2004 年

「韓国映画にオアシスな風」『Newsweek』19 (3)、2004 年

特集「韓国映画」『Cinema101』映像文化研究連絡協議会、1996 年

特集「韓国映画、浮上」『キネマ旬報』No.1300、2000 年

特集「＜韓国映画＞の新時代」『ユリイカ』33 (13)、2001 年

特集「韓国映画、転進の時」『キネマ旬報』No.1333、2001 年

特集「「ソウル」&ソウルに映画を観にいこう！」『キネマ旬報』No.1349、2002 年

特集「“韓流” 韓国映画&テレビドラマ 2003」『キネマ旬報』No.1382、2003 年

特集「KOREAN MOVIE & STAR 2004」『キネマ旬報』No.1397、2004 年

特別企画「韓国映画の女性たち」『キネマ旬報』No.1409、2004 年

特別企画「第 5 回全州国際映画祭発—韓国映画との新たなる一步」『キネマ旬報』No.1407、2004 年

特集「「ブラザーフッド」と韓国映画の熱い波」『キネマ旬報』No.1407、2004 年

特集「Cover Story 映画—韓国映画完全ガイド」『NEWSWEEK』19 (22)、2004 年

特集「最新韓国映画事情がわかる『韓流シネマ・フェスティバル 2007』」『キネマ旬報』1489、2007 年

「ワールド・ニュースアジア—07 年上半期韓国映画、国内外で収入激減」『キネマ旬報』1490、2007 年

「1950 < >」(1950 年代の時代風潮と＜自由夫人＞)

(韓国映画変遷史、韓国映画データベース)

[http://www.kmdb.or.kr/2006contents/history\\_view.asp?idx=73&page=1](http://www.kmdb.or.kr/2006contents/history_view.asp?idx=73&page=1)

「 (68) 」(憎くてももう一度(68)に対する  
女性主義的読解) 26号、 (企画焦点、韓国映画データベース) 2006年

[http://www.kmdb.or.kr/2006contents/kfilm\\_journal\\_view.asp?ho=26&idx=212](http://www.kmdb.or.kr/2006contents/kfilm_journal_view.asp?ho=26&idx=212)

インターネット

公的機関

警察庁 <http://www.npa.go.jp/index.htm>

警察庁組織犯罪対策 <http://www.npa.go.jp/sosikihanzai/>

国立社会保険・人口問題研究所 <http://www.ipss.go.jp/>

少子化統計情報 <http://www.ipss.go.jp/syoushika/site-ad/index-tj.htm>

一般人口統計—人口統計資料集

[http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P\\_Detail2007.asp?fname=T04-01.html&title1=%87W%81D%8Fo%90%B6%81E%89%C6%91%B0%8Cv%89%E6&title2=%95%5C%82S%81%7C%82P%81%40%90%AB%95%CA%8Fo%90%B6%90%94%82%A8%82%E6%82%D1%8Fo%90%B6%90%AB%94%E4%81F1872%81%602005%94N](http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/P_Detail2007.asp?fname=T04-01.html&title1=%87W%81D%8Fo%90%B6%81E%89%C6%91%B0%8Cv%89%E6&title2=%95%5C%82S%81%7C%82P%81%40%90%AB%95%CA%8Fo%90%B6%90%94%82%A8%82%E6%82%D1%8Fo%90%B6%90%AB%94%E4%81F1872%81%602005%94N)

厚生労働省 <http://www.mhlw.go.jp/index.html>

平成 18 年度人口動態統計の年間推計

<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai06/index.html>

内閣府 <http://www.cao.go.jp/>

少子化対策 <http://www8.cao.go.jp/shoushi/cyousa/cyousa.html>

「少子化社会に関する国際意識調査」

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/cyousa/cyousa17/kokusai/ishiki.pdf#search='少子化社会に関する国際意識調査'>

(文化観光部) <http://www.mct.go.kr/index.jsp>

(映像物等級委員会) <http://www.kmr.or.kr/>

(映画振興委員会) <http://www.kofic.or.kr/>

KMDB (韓国映画データベース) <http://www.kmdb.or.kr/>

(韓国映像資料院) <http://www.koreafilm.or.kr/main/main.asp>

(統計庁) <http://www.nso.go.kr/>

가 (国家統計ポータル) <http://www.kosis.kr/index.jsp>

DB (統計メタ DB) <http://meta.nso.go.kr/metaSearch/index.jsp>

## 映画

西村嘉夫 (ソチョン) シネマコリア <http://www.seochon.net/>

輝国山人の韓国映画 <http://www.hf.rim.or.jp/~t-sanjin/korea.html>

Asian Queer Film & Video Festival in Japan 2007 <http://aqff.jp/2007/index.html>

東京国際レズビアン&ゲイ映画祭 2006 <http://www.tokyo-lgff.org/2006/index.html>

Daum (Daum 映画) <http://movie.daum.net/>

21 (Cine21) <http://www.cine21.com/Index/index.html>

(Movist) <http://www.movist.com/>

Film2.0 <http://www.film2.co.kr/>

マスコミ

中央日報：日本版 <http://japanese.joins.com/>

朝鮮日報：日本版 <http://www.chosunonline.com/>

統一日報 <http://www.onekoreanews.net/>

韓国：戸主制廃止記事アーカイブ

<http://transnews.at.infoseek.co.jp/kankoku-koshu.htm>

日韓共同記者会見（ワールドカップ）

<http://www.kantei.go.jp/jp/hasimotosouri/speech/1996/kisya-0625.html> (2006年7月取得)

Daum (Daum メディアダウム) <http://media.daum.net/>

PD (PD ジャーナル) <http://pdjournal.com/>

(キョンヒャン新聞) [http://news.khan.co.kr/kh\\_world/](http://news.khan.co.kr/kh_world/)

(国民日報／クッキーニュース) <http://www.kukinews.com/news/index.asp>

(ニュースエヌ) <http://www.newsen.com/>

(ニューシス) <http://www.newsis.com/>

(ニュースワイヤ) <http://www.newswire.co.kr/>

(データニュース) <http://www.datanews.co.kr/>

(東亜日報) <http://www.donga.com/news/>

(マイデイリー) <http://www.mydaily.co.kr/>

(毎日経済) <http://www.mk.co.kr/>

(文化日報) <http://www.munhwa.com/>

(ソウル新聞) <http://www.seoul.co.kr/>

(世界日報) <http://www.segye.com/>

(スポーツソウル) <http://www.sportsseoul.com/>

(スポーツカン) <http://www.sportskhan.net/>

(連合ニュース) <http://www.yonhapnews.co.kr/>

(オーマイニュース) <http://www.ohmynews.com/>

(OSEN) <http://osen.stoo.com/>

(YTN) <http://www.ytn.co.kr/>

(日刊スポーツ) <http://www.ilgan.co.kr/>

(イリヨ新聞) <http://www.ilyo.co.kr/>

(朝鮮日報) <http://www.chosun.com/>

24 (ジョイニュース 24) <http://joynews.inews24.com/joynews/index.php>

(パイメディア) <http://www.pimedia.co.kr/>

21 (ハンギョレ 21) <http://h21.hani.co.kr/>

(韓国大学新聞) <http://www.unn.net/>

(韓国日報) <http://www.hankooki.com/>

#### その他

0-net <http://www.onet.co.jp/> 結婚情報会社

Daum (事典) [http://alldic.daum.net/dic/view\\_top.do](http://alldic.daum.net/dic/view_top.do)

(LAWnB) <http://www.lawnb.com/> 法律

(Duo) <http://www.duo.co.kr/> 結婚情報会社

(Bien-Aller) <http://www.bien.co.kr/> 結婚情報会社

(On media) <http://www.onmedia.co.kr/> ケーブルテレビ